

歴史的な探究学習を広げるための事例集
—歴史学習・総合探究・地域・クラブ・評価—

【Ver.2】

高大連携歴史教育研究会

特別部会編



歴史的な探究学習を広げるための事例集

—歴史学習・総合探究・地域・クラブ・評価—

【Ver.2】

高大連携歴史教育研究会特別部会編

2026年2月

目次

第1部 状況の把握

第1章 アンケート分析から見た、特別部会の課題について（荒井雅子）……………4

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る

【歴史地理科・公民科の授業から】

第2章 世界史/歴史探究ゼミにおける生徒の歴史探究活動

—ワークショップ・フェニキア文字を事例にして—（丸小野壮太）……………15

【教科横断的視点から】

第3章 教科横断的な取り組みについて考える

—現地研修と総合学習を活用した水俣学習を事例に—（小川輝光）……………25

【地域の視点から】

第4章 歴史観光素材を活用した地域史と地域認識の深化を図る実践をめぐって

—鞆の浦埋立て架橋計画問題を事例に—（須賀忠芳）……………30

第5章 地域史を活用した地域活性化の取組について

—観光ツアーの企画・販売を通じた探究活動を事例に—（井川六月）……………37

第6章 地域（ローカル）の課題と世界（グローバル）の課題を重ねて考える「探究」学習
（林裕文）……………44

【事例紹介：高校生の歴史探究】

戦跡から知る蓋井島の軌跡（山口県立下関西高校生徒）……………51

古代遠江の中心は磐田!?

～古墳・水運・水害からの考察～（静岡県立浜名高校史学部）……………57

【総合的な探究の時間の活用】

第 7 章 関西大学高等部の課題研究における歴史探究（矢部正明）	63
第 8 章 SDGs と歴史系の総合的探究との結合（試案）（油井大三郎）	71
第 9 章 歴史探究ゼミでの年間実践（高野 晃多）	75
第 10 章 慶應義塾高校学校の「卒業研究」における日本史の探究活動（高橋傑）	85

【クラブ活動の取り組みから】

第 11 章 歴史系クラブの新しい動向と事例について（竹田和夫）	93
第 12 章 高校生が切り拓く地域史研究—歴史研究部の実践—（桐生海正）	96

第 3 部 評価の視点から実践をつなぐ

第 13 章 高大接続と歴史系地域探究活動の関わり ： 大学選抜試験の視点で（中切正人）	106
---	-----

第 4 部 探究発表の場をひろげる

第 14 章 博学連携による歴史研究発表の場づくり ～「日本と世界が出会うまち・堺」プロジェクトの挑戦～（赤澤明）	112
第 15 章 「全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会」をご存じですか？ —生徒の発表・顕彰の機会の構築のために—（風間洋）	119
第 16 章 奈良大学「全国高校生歴史フォーラム」から考える高大連携の歴史教育（木下光生）	129
第 17 章 九州国立博物館「全国高等学校歴史学フォーラム」の歩みとこれから（地脇技）	140
第 18 章 特別部会パネル「高校生の発表の場をいかに広げるか」へのコメント —高校生と発表の場を提供する機関との有機的なつながりを目指して（香川百合子）	149
参考資料 「高大連携総合探究事例集（仮）」執筆要項	153

第1章 アンケート分析から見た、特別部会の課題について

荒井雅子（拓殖大学・前立教新座中学校・高等学校）

第1報告は、アンケート分析から見た特別部会への期待と、そこから類推出来る生徒の歴史的
研究・探究的な活動(探究的な活動の時間)の課題についてまとめます。

目次

- 1 特別部会の設立目的と 2020 年のアンケート
- 2 2021 年のアンケート
 - 2.1. アンケートの構造と分析対象の設問について
 - 2.2. アンケート分析
 - 2.2.1. 問 II
 - 2.2.2. 問 III-1
 - 2.2.3. 問 III-2
 - 2.2.4. 問 III-3
- 3 分析総括と特別部会の課題(まとめ)
 - 1 特別部会の設立目的

第7回大会を経て、生徒の自主的歴史研究活動を支援するための特別部会(以下特別部会)の新設が承認された。これは、2020年9月に発足した、高校生の自主的歴史研究活動調査ワーキンググループ(WG)を母体としている。特別部会の活動の軸は、第7回大会のパネルと2020年度に実施された実態調査(2020年のアンケート)に基づいて、策定された。また、現在、特別部会には3つのWG¹が設置されているが、それは2021年に実施されたアンケートの結果も踏まえたものである。

2020年のアンケート²は、2020年11月～2021年2月にかけて、特別部会設立以前に、生徒の探究的活動の支援の方向性を探るために実施した。ここから、今後の支援策に関して(1)「総合的学習・探究」の時間への対応、(2)全国的・地域的な発表の場の設定、(3)各地の博物館と大学・高校の間の「博学連携」、(4)高大研における特別部会の設置の4点が提言された。

¹ 生徒の発表・顕彰機会の構築WG、歴史系部活動支援WG、探究活動支援WGである。

² <https://kodairekikyo.org/wp-content/uploads/2021/05/report-on-active-research-by-high-school-students.pdf> (2022年7月26日アクセス)

第1部 状況の把握

2 2021年のアンケート

2021年の総会で設置が承認された特別部会は、最初の作業として部会員へのアンケートを実施した。

時期 2021年8月~9月

規模 36名(中高12、高校17、大学・高専7、他³/83名)

2.1. アンケートの構造と分析対象の設問について

アンケートはI~VIIIのセクションで構築され、アンケートそのものはIIから始まる。IIは単問で、特別部会への動機と特別部会に期待することを訊ねた。IIIは「総合的な学習・探究の時間」を利用した高校生の歴史研究活動支援、IVは歴史系の課外活動支援、Vは高校生の自主的歴史研究活動の発表・顕彰の場の提供、VIは博物館や文書館との連携、VII大学教員による高校生の自主的歴史研究活動支援の可能性、VIIIは自由記述という構造で、各項目にはいくつか枝番があるため、回答項目は19に及ぶ。自由記述によるところが多く、どのような回答が寄せられたかについて、量的に報告しにくいことから、代表的な記述を抽出して傾向を見ることにした。特に、探究活動支援WGとして、探究活動に関わりそうな問II、問IIIを中心に分析を試みた。対象となる質問を以下に示す。

II 全員の方に回答をお願いします。この特別部会に参加された動機およびこの特別部会に期待することは何ですか。

III 「総合的な学習・探究の時間」を利用した高校生の歴史研究活動支援に関して。

科目横断的に実施されているこの時間の現状では、環境保護・防災・SDGs など文理融合的なテーマや人権・平和、地域の経済発展など現代的なテーマで実施されていることが多く、歴史系の参加が難しい面があるという指摘があります。そこでお尋ねします。

III-1 「総合的な学習・探究活動」に携わった方全員に回答をお願いします。あなたは「総合的な学習・探究活動」を担当したことがありますか。有の場合、どのようなテーマでどのような他教科教員と協力して進めましたか。また、学校内で合意形成を図る上でどのような困難がありましたか。具体例があれば以下に書いてください。

III-2 全員の方に回答をお願いします。今後、歴史系を含めた「総合的な学習・探究活動」を実施する場合、どのような問題点があり、それをどのようにして克服すべきと考えますか。

III-3 全員の方に回答をお願いします。この特別部会が、歴史系も含めた「総合的な学習・探究活動」

³ 高校・大学両方に所属する属性があるため、総数は36を超える。

を支援する際には、どのような活動をおこなうことがよいと考えますか。

2.2. アンケート分析

方法 KH コーダ⁴による共起ネットワーク図の作成、出現数の多い単語を含む記述の比較

2.2.1 問Ⅱ

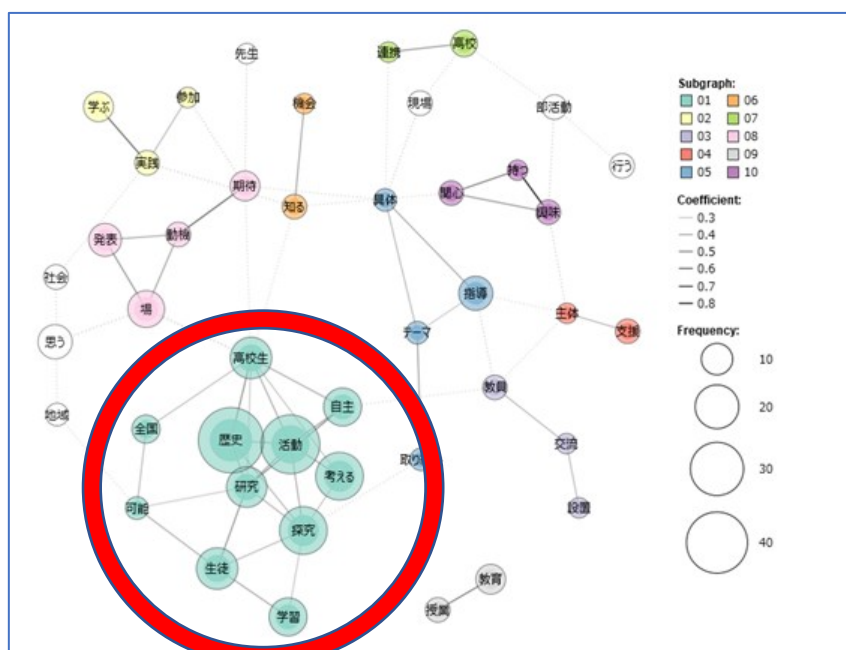


図1 問Ⅱ特別部会参加の動機/期待すること

N=36

歴史・活動、活動・探究の組み合わせで記述を拾った。「歴史授業や課外活動の実践例を学ぶ」「歴史研究および高校生への歴史研究活動支援について知る機会としたい」「全国の取り組みから学び、また自校の取り組みを発信していきたい」など、参加動機として教員の学習・「情報交換」の場としての期待と、「高校生や教職員の歴史系の研究活動を支援」するなど探究活動の支援を期待するもの、「高校間、高大間の連携」が参加動機でありかつ、活動への期待とされる。特に、「知識注入型の歴史教育から抜け出せなかったことの反省」や「探究的な活動を学生時代に経験していない」という参加動機は、旧カリキュラムと新カリキュラムの狭間にある現職の教員や教員養成課程の学生の声として、注目に値する。また、本会の特性上、探究活動の主たる課題が、歴史学習を前提にしていることも、記述から読み取れた。教員が実践例を学び、共有する場としての期待と動機の占める割合は比較的大きい。

また、属性ごとに傾向が見られるのではないかという指摘を受けて、高校、中高(以下一貫校)、大

⁴ 計量テキスト分析/テキストマイニングのためのフリーソフトウェア。 <https://kncoder.net/>

学・高専に分けて記述を確認したところ、参加の動機や期待について、高校や一貫校では実際に探究活動に携わった経験から、また、なかでも一貫校は新学習指導要領、課題学習・探究学習への興味関心などから参加しているという記述があった。一方、大学からは高大連携の一つの形として探究学習を捉え、中等教育への興味から参加をするという傾向が見られた。高校や一貫校では、既に実践している経験から特別部会の必要性を感じ、大学はそのような必要性に追われない中で、自らの興味関心・研究としてこの取組に臨んでいるということが伺えた。

2.2.2 問Ⅲ-1

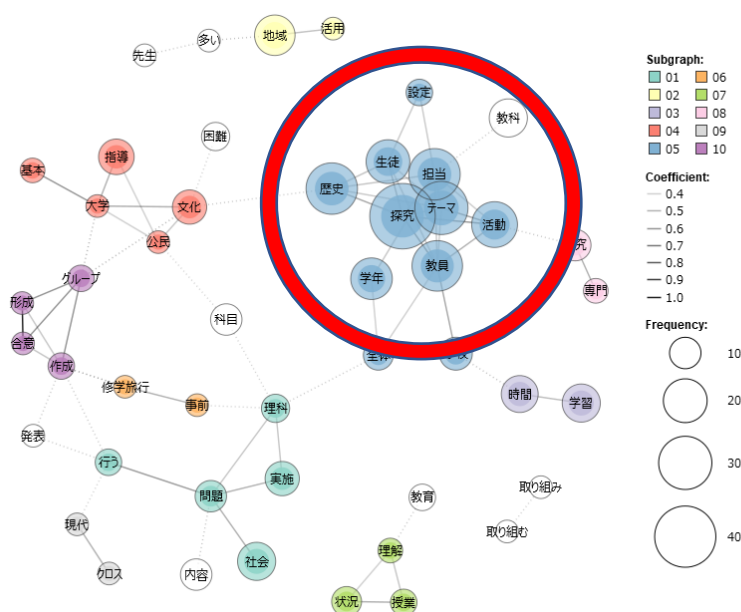


図2 問Ⅲ-1 総合的学習・探究活動での他教科連携／困難

N=29

探究・歴史、探究・テーマ、探究・担当、教科の組み合わせで記述を拾った。「総合的学習・探究活動」に携わったと回答したのは28/36であった。アンケート回答者のうち78%が何らかの形で関わっていた。また、携わっていないがコメントした回答者がいるため、総サンプル数は29であった。

「総合的学習・探究活動」のテーマとして「文系(文学・歴史・社会・経済・政治・国際など)や理系(生物・物理・化学・地学など)、また芸術系や体育系」のように、ほぼ全ての教科科目が関係していると想像される回答がある。

一方で、特定のテーマに特化して探究活動を行うという回答は多かった。個別テーマでは「地域、職業」「国際問題」「法学・政治学」「キャリア教育、SDGs」「修学旅行」などの記述が見えた。本会会員の特性も考慮しなければならないが、社会科学・地域研究に分類されるテーマが多かった。しかし地域研究などは歴史につながる可能性があるものの、社会科学系一般など、会員が担っているテーマは必ずしも歴史だけではないことが読み取れた。

他教科の教員との協力関係については、校内の協働体制が確立して「全教員で取り組んでいる」

学校がある。一方で「最後は、担当者にのみ負担がかかった。英語科と地歴公民科(それも公民分野)がほとんど担当した」という実態も報告された。「教員がそれぞれの分野を担当している」学校でも「社会・経済のジャンルを担当して、その中の歴史的なアプローチがよさそうな生徒を中心にアドバイスをおこなっている」のように、歴史を切り口に社会・経済に至る幅広い対応を期待されていることが推測できる。教員間の役割分担は均一ではなく、専門を超えた助言・指導を期待されている実態が浮かんできた。

他教科との連携としては理科、家庭、英語、国語の教科名を拾うことが出来た。また「外部人材」の協力・活用といった事例も報告された。学内の協力体制構築の困難については、「探究活動そのものへの理解を得ることが一番の困難」「打ち合わせの時間の確保が難しかった」「教科によって温度差があること。その科目間の間が埋められない。コミュニケーション=研修時間が不足したこと」「複数の教員でカリキュラムを作り上げるのは時間的・物理的にもまず難し」いために「自分が提示したものを、他の担当者に承認してもらおうという形」で探究が進められたことなど、教材を作り上げる上での協力体制に困難を感じる記述が多く見受けられた。

2.2.3 問Ⅲ-2

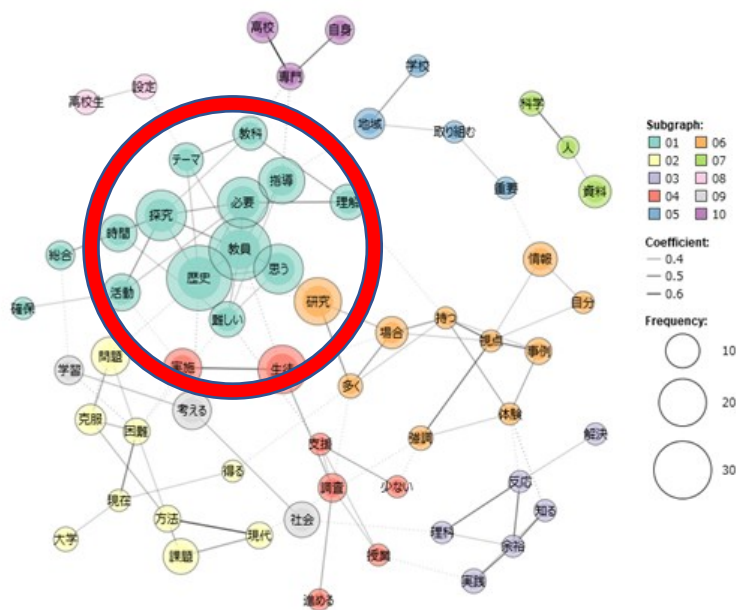


図3 問Ⅲ-2 総合的学習・探究活動の問題点／克服

N=33

歴史・教員、探究・必要の組み合わせで記述を拾った。「総合的な学習・探究活動」を実施する場合の問題点としてあがってきたのは、そもそも「探究の重要性の理解」がすすんでいないことや、「歴史の教員がメインにならざるを得ないと思いますので、人手が足りるかどうかが」という人手不足、そして歴史系の探究活動を行う際に「専門外の教員では歴史研究の指導は困難」であるという専門性の問題であった。更に、探究のガイダンスなどで示される調査手法が「調査(アンケート)や実験が強調され、歴史につながる現地調査や文献調査の方法について語られることが少ない」ことなど、専門分

野によって調査手法が異なることへの配慮が不足しており、そのことに教員が気づいていなかったり手をかけていなかったりすることの問題点が指摘された。それらを克服したとしても、そもそも歴史研究は先行研究が膨大であるため「高校生が限られた時間の中でテーマ・課題を自らが考え設定することが難しい」という問題も指摘された。教科教育でも、歴史と現代的諸課題との関係から歴史を振り返ることが期待されているが、「漠然と現代的諸課題を強調しただけでは、生徒にとって「歴史的視点」が無関係に映る傾向がみられる」という。

これら人手不足・専門性不足の問題については「教員への研修で探究活動の重要性の共通理解を深め」たり、「ガイダンスのやり方に留意」したり、「大学の歴史学教員や院生（現在の学部生では荷が重すぎる）が指導や助言にあたって高校教員（特に歴史専門の教員以外の教員）のアシスト」を求めることで対応できるのではないかという提案をいただいた。また学校内でも学外でも先駆的事例の提示をすることで、イメージを共有できるという指摘もあった。いずれも、指導できる人材の量的・質的不足が問題点としては大きく取り上げられていたようだ。

所属機関の属性をみると、大学・高専からは、人文系と社会科学系の手法の違いや資料選定の難しさが問題だとする、学問の手法についての悩みが挙げられるのに対して、高校では更に関係諸機関との連携や地域の理解不足が問題点として挙げられていた。ここでも探究を実践している中等教育と大学で、認識する問題点の差異が明らかになった。

2.2.4. 問Ⅲ3 N=33

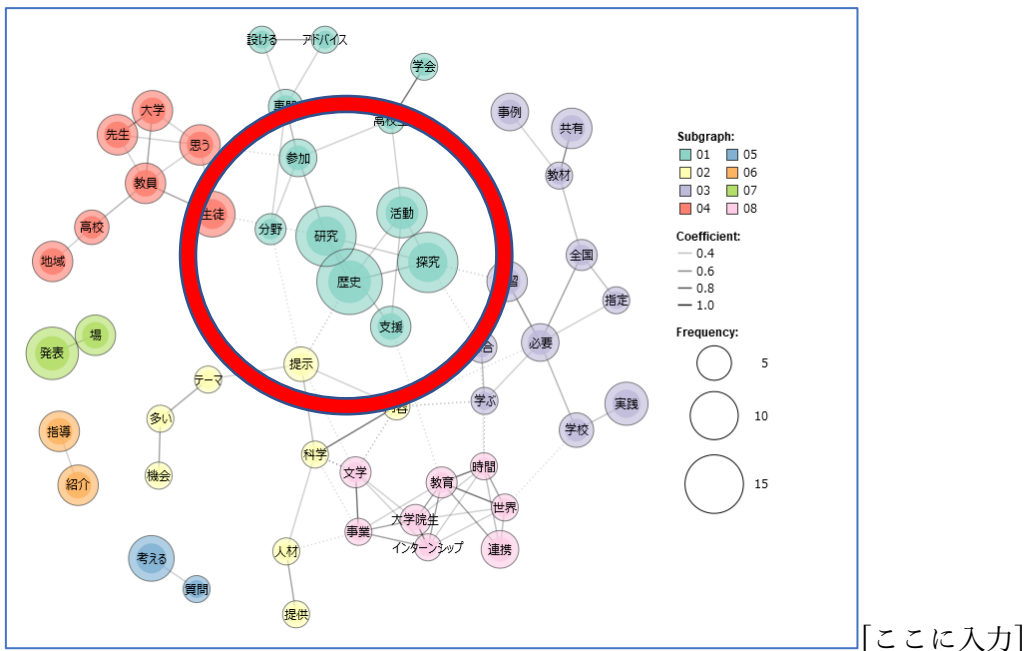


図 3 総合的な学習・探究活動支援

N=33

歴史・活動、歴史・探究の組み合わせで記述を拾った。支援については、連携の提案、教材の供

第1部 状況の把握

給、発表の場づくりとともに、人材派遣や学問方法の提示など多岐にわたった。以下に具体的な記述を示す。

・資料・教材・研究の共有

「年間計画やワークシート集…県の指定教材にする」「授業実践の映像などを…共有しやすい形で資料をストック」「実践の共有や協議、高大の連携等を通じた、全国的なカリキュラムマネジメントの推進」「実践事例のデジタルデータでの共有」「歴史系の活動につながるテーマを学生が設定できるような知識や関連する資料の提示」「現在の学校教育や、その教育内容・教育活動(他教科など)と接点をもった「歴史」の研究促進。教科科目としての「歴史(歴史総合、日本史探究、世界史探究)」と「総合的な探究の時間」をどう連携させるのかの実践的研究。」「授業という枠を超え出る可能性をもった探究的な歴史学習に焦点をあてたシンポジウムなどの企画」

・連携「博物館、地域の歴史館、郷土館などとの連携」

・学問方法の提示

「人文学(Humanities)分野の歴史系研究を明確に提示した方が良い…歴史系研究の場合、簡単なアンケートやその分析である程度探究の体裁を整えやすい社会科学分野の研究と異なる…仮説の設定は「問題意識」の表示程度でも可能として、調査の過程やそこから得られる史料の考察部分を重視してもらい、そこに研究者の支援の手を差し伸べることが大切ではないか」

・発表の場

「学生・生徒が参加できる交流活動の場づくり。」「高大連携を視野にした、高校生の発表の場(コンテストなど)づくり」「高校生によるポスター発表の機会を、歴史系の学会や大学レベルで多く設ける」

・人材派遣

「探究活動をアシスト・指導する歴史系の大学教員や大学院生を紹介」

3 分析総括と特別部会の課題(まとめ)

3.1. 参加者の問題意識

問Ⅱは特別部会全体に関わる項目だが、ここから他の学校の生徒や教員の実践を学びたい/知りたいという教員の希望が伺えた。記述から類推される参加動機として、第一は、現在総合的な学習・探究活動を実践している立場から、実践の中で感じる他教科との連携の問題やテーマ設定の難しさに直面しているということであるように思う。第二は「知識注入型の歴史教育から抜け出せなかったことの反省」や「探究的な活動を学生時代に経験していない」という記述から垣間見えた、総合的な探究の時間や〇〇探究に対する危機意識である。

3.2. 特別部会が取り組むべきこと

第1部 状況の把握

問Ⅲ-3 で列挙されていた具体的な実践案を、どれだけ実行できるだろうか。資料・教材・研究の共有について

では、既に第2部会が教材共有サイトを構築しており、ここに探究活動についての資料を加えてゆることが出来るだろう。また、共有される教材として「歴史系の活動につながるテーマを学生が設定できるような知識や関連する資料の提示」という提案もあった。これは授業案でない形での資料の提示を意味すると考える。更に問Ⅲ-2 で指摘された専門分野により調査手法が異なることへの配慮について、特に「調査の過程やそこから得られる史料の考察部分を重視」することを、もう少し丁寧な形で発信することはできるのではないか。それは、博物館、地域の歴史館、郷土館などとの連携によっても、可能なことではないか。

高大連携歴史教育研究会が、フィールドワークや歴史系諸活動の発表の場になることへの期待が寄せられている。高校生の発表の場、学生・生徒が参加できる交流活動の場、歴史系の学会や大学レベルでの高校生によるポスター発表の場など様々な形が提案された。これらは生徒の発表・顕彰機会の構築 WG で取り組める問題だろう。その際に、発表の場が、学びの場になっている仕掛けを作ることが必要になろう。アンケートには、この分野では先行する理系の学会の取組に学ぶべきという提案があった、傾聴に値する。「博物館、研究機関、フォーラムなどと連携させた、学びを支援するネットワークづくり」や人材派遣(より専門的な指導への窓口や教員研修への指導)というも広い意味で発表支援という範囲に入るであろう。

また、所属機関別の傾向として、大学・高専からは高大連携の必要性や中等教育への興味関心といった視点ある一方で、高校や一貫校の側からは指導の情報が欲しい、新指導要領への対応としてという必要性に迫られた動機が多いことが浮かびあがっている。指導的な側面への期待は高校・一貫校の教員に強くみられる。探究活動支援 WG では、まずこの問題に対応すべく、先進事例の共有を試みた。詳細は以下の報告に譲りたい。

第1部 状況の把握

添付資料1 2021年アンケート質問項目

II 全員の方に回答をお願いします。この特別部会に参加された動機およびこの特別部会に期待することは何ですか。

III 「総合的な学習・探究の時間」を利用した高校生の歴史研究活動支援に関して。

科目横断的に実施されているこの時間の現状では、環境保護・防災・SDGsなど文理融合的なテーマや人権・平和、地域の経済発展など現代的なテーマで実施されていることが多く、歴史系の参加が難しい面があるという指摘があります。そこでお尋ねします。

III-1 「総合的な学習・探究活動」に携わった方全員に回答をお願いします。あなたは「総合的な学習・探究活動」を担当したことがありますか。有の場合、どのようなテーマでどのような他教科教員と協力して進めましたか。また、学校内で合意形成を図る上でどのような困難がありましたか。具体例があれば以下に書いてください。

III-2 全員の方に回答をお願いします。今後、歴史系を含めた「総合的な学習・探究活動」を実施する場合、どのような問題点があり、それをどのようにして克服すべきと考えますか。

III-3 全員の方に回答をお願いします。この特別部会が、歴史系も含めた「総合的な学習・探究活動」を支援する際には、どのような活動をおこなうことがよいと考えますか。

IV 歴史系の課外活動支援について。中高の教員の方に回答をお願いします。歴史系のクラブ活動(部活動・同好会等)は、1960-80年代には活発でしたが、1990年代以降になると、低迷してきたといわれます。しかし、近年、学外の発表機会の充実やTVのクイズ番組の活発化などに刺激されて、復活の傾向が出始めているといわれます。そこでお尋ねします。

IV-1 あなたは高校生の歴史系の課外活動を支援されたことがありますか。有の場合、どのような名称の部活動をいつごろからいつごろまで支援されましたか。

IV-2 関係された部活動支援においてはどのような困難があり、それをどのように克服されましたか。

IV-3 この特別部会として歴史系の課外活動支援にどのように関わったらよいと思われますか。

V 高校生の自主的歴史研究活動の発表・顕彰の場の提供について。この活動に関わったご経験のある方、関わろうと考える方に回答をお願いします。高校生の自主的歴史研究活動の発表・顕彰の場としては、既に個別の大学や自治体主催のものがありますが、多くは郷土史や考古学関係のもので、高大研がめざしている世界史と日本史を架橋するテーマでの発表の場は少ないように思われます。また、文化系クラブに発表の場を提供している高等学校文化連盟には歴史系や社会科系の発表の場がなく、現在、幾つかの自治体の教員が協力して、「全国高等学校社会科研究発表大会」を開催しています。この動きが全国の過半数の自治体で成立すれば、高等学校文化連盟に社会科系の発表の場が開設できると言われています。そこでお尋ねします。

V-1 あなたは高校生による自主的研究活動の成果の学外での発表を支援したことがありますか。有の場合、いつごろどのような場で発表するのを支援しましたか。例)〇〇博物館主催の研究発表

第1部 状況の把握

会(口頭発表)での指導に顧問の立場であたった。〇〇大学・〇〇県・団体名主催の研究論文コンクールの論文執筆指導にあたった、など。

V-2 高校生の自主的歴史研究活動の学外発表を支援する上でどのような困難があり、それをどのように克服してきましたか。

V-3 全ての方に回答をお願いします。高大研としては高校生の自主的歴史研究活動の発表・顕彰の場の設定にはどのように関わるのがよいと思いますか。次の選択肢に○印をお願いします(複数選択可)。

- A. 高大研独自に発表・顕彰の場を設ける、
- B. 既存の発表の場に生徒が応募するのを支援する、
- C. 各自治体単位で始まっている社会科系の発表会の増加を支援する、
- D. 各地の博物館・文書館などと連携して発表・顕彰の場を提供する、
- E. A～Dを並行して進める。

VI 各自治体などが設置している博物館や文書館との連携について。全ての方に回答をお願いします。現在、堺市博物館や九州国立博物館などで高校生に自主的歴史研究の発表・顕彰の場を提供していますが、このような博学連携の動きが高校生の自主的研究活動を活性化する上で大きな役割を果たしていると思われます。そこでお尋ねします。

VI-1 あなたは博物館や文書館が提供している場で高校生が発表する活動を支援したことがありますか。

有の場合、いつ頃、どのような博物館・文書館が提供する発表の場で支援されたのでしょうか。

VI-2 今後、あなたが所属する自治体にある博物館や文書館と連携して、中高生や大学生の自主的歴史研究発表の場を広げてゆく可能性はあるのでしょうか。有の場合、どのような形で可能性があるのでしょうか。

VI-3 この特別部会として博学連携をどのように進めたらよいと考えますか。アイデアや具体策を書いてください。

V(VII) 大学教員による高校生の自主的歴史研究活動支援の可能性について。

近年、大学においても社会貢献の一環として高校への「出前講義」などが行われるケースが増えていきます。また、堺市博物館など高校生の自主的歴史研究活動を顕彰する場合、審査の過程に大学教員が協力しています。また、高校生の自主的歴史研究活動の成果物が大学におけるAO入試や推薦入試の判定材料になることによって高校生の自主活動への意欲が高まるケースも報告されています。そこで、大学教員にお尋ねします。

V-1 あなたは高校への「出前講義」などを行ったことはありますか。有の場合、どのような形でいづろ実施されましたか。

V-2 自治体や大学などが行っている高校生の自主的歴史研究を発表・顕彰する場で審査員などで協力されたことはありますか。有の場合、どのような場と立場(審査員・講評者など)でいづろ協力されましたか。

第1部 状況の把握

V-3 あなたが所属されている大学では AO 入試や推薦入試の判定材料として高校生の自主的歴史研究活動などの成果物の提出を求めたり、入賞結果の報告などを求めていますか。

有の場合、どのような形で提出を求め、合否判定にはどの程度影響していますか。例)受験者の志望理由書の提出や面接の際にアピールさせる、など。

V-3 この特別部会において大学教員はどのような協力が可能だと考えますか。

VI(VIII) その他、ご自由にご意見をお述べください。全ての方に回答をお願いします。

第2章 世界史/歴史探究ゼミにおける生徒の歴史探究活動

—ワークショップ・フェニキア文字を事例にして—

丸小野壮太(常磐大学高等学校)

1 はじめに

本稿では筆者が担当を務める(1)個人課題研究・世界史ゼミと(2)0限/長期休業中ゼミ・歴史探究ゼミにおける生徒の歴史探究活動、特に歴史学と歴史教育の対話¹に基づいた「開かれた²古代地中海世界史研究³」(“Open studies on the Ancient Mediterranean World History”)の一環としての高校生・高校教員・大学教員の共同研究成果であるワークショップ・フェニキア文字⁴を事例として論じる。そこで、本稿では生徒の歴史探究活動における教員による支援の在り方について提案することを目的とする。

2 常磐大学高等学校における歴史探究

本校は、茨城県水戸市にある私立高校であり、創立100年を超える⁵。本校における歴史探究は日々の授業「歴史総合」「世界史探究」「日本史探究」はじめ、筆者が担当している(1)個人課題研究・世界史ゼミと(2)0限/長期休業中・歴史探究ゼミがあり、後者に注目する。

¹ 例えば、小川幸司編著(2021)や小田中直樹(2022)参照。

² 近年の歴史学研究では「開かれた」が注目されている。例えば、前川一郎編(2023)は「だれにでもひらかれた」が主題となった歴史学入門書である。

³ はじめに、開かれた古代地中海世界史研究における「開かれた」が持つ2つの重要な意味を考える。第一に、人々の移動とネットワークの観点から、古代地中海世界史がグローバルヒストリーとしての意義を持つことである。これは、古代移民の先駆けとなったフェニキア人の活動に着目することにより、これまで顧みられることの少なかったフェニキア・カルタゴ史の視点から「古代地中海世界史研究」の枠組みを問い直すことである。第二に、近年の歴史学の潮流が明らかになっているように、「世界史に関連する国内外の議論を、専門家のみならず一般市民に「開かれた」歴史実践」という観点から考察することである。すなわち、フェニキア・カルタゴ史の視点から、現在改めて注目されている、高大連携や市民協働型の歴史実践による「古代地中海世界史研究」を構築することを本研究の目的とする。このような開かれた古代地中海世界史研究の構築については佐藤育子・丸小野壮太(2024)参照。関連して、開かれた古代地中海世界史研究の個別論文は以下の通りである。高校歴史教育におけるフェニキア・カルタゴ史については丸小野壮太(2024a)、「歴史総合」の授業実践については丸小野壮太(2024b・2024c)、ワークショップ・フェニキア文字については丸小野壮太(2024d)参照。なお、本稿の主題であるワークショップ・フェニキア文字は「開かれた古代地中海世界史研究」の一環である。

⁴ 2023年5月6日(土)、古代オリエント博物館において、「【フェニキア文字体験教室】「アルファベットの起源・フェニキア文字を使って自分の名前を書こう！」」を日本女子大学・佐藤育子氏とともに、開講した。詳細は以下のウェブサイトを参照されたい。

https://aom-tokyo.com/event/230506_workshop.html (最終閲覧 2024年2月18日)

⁵ <https://www.tokiwa.ac.jp/~tokikou/100th/> (最終閲覧 2024年2月17日)

(1)個人課題研究・世界史ゼミ

本校の特別選抜コース・2学年(約120名)ではゼミ単位⁶で各自の興味関心に基づいた探究テーマを深める「個人課題研究」(2単位)という学校設定科目が設置されている⁷。

個人課題研究・世界史ゼミでは広義の「世界史」について生徒が各自の興味関心に基づいたテーマを設定して1年間探究した成果を集大成として1万字程度の論文にまとめることによって生徒自身が主体的に世界史を考えることを目的としている。

以下の【表1】は個人課題研究・世界史ゼミの年間計画である。

【表1】個人課題研究・世界史ゼミの年間計画		
時期	主なテーマ	前期と後期の到達目標
4月	テーマ(問い)設定	前期は10月・中間発表会を目指して活動する。特に先行研究整理に基づいた研究目的を設定することを通して自らの探究の位置づけを明らかにする。
5～6月	文献講読 ⁸ +先行研究整理	
7月	テーマ(問い)再考	
8月	夏休み課題：論文序論執筆(完成)	
9～10月	夏休み課題の輪読会	
11～12月	文献講読継続+論文本論執筆	後期は2月・論文完成と3月・最終発表会を目指して活動する。特に探究の集大成として自らの探究を論文にまとめる。
1月	冬休み課題：論文本論・結論執筆(完成)	
2月	冬休み課題の輪読会	
3月	個人課題研究から進路を考える	

以下は論文題目一覧(2022年度・2023年度)である。

2022年度：4名 秦の中華統一における一考察 ONE PIECEを通して見る実在した海賊 エジプト新王国時代のファッション イギリス産業革命の影響によって国民の生活は本当に豊かになったのか

⁶ 2023年度、設置されているゼミは以下の通りである。①哲学、②心理学、③社会学、④芸術、⑤茨城地域史、⑥サイエンス、⑦経済経営、⑧言語文化、⑨生活科学、⑩異文化理解、⑪世界史、⑫保健体育、⑬情報科学。なお、「個人課題研究」では、中間発表会(10月)、論文提出(2月)、最終発表会(3月)を全てのゼミの共通軸として、各ゼミ単位での探究活動が中心になる。

⁷ <https://www.tokiwa.ac.jp/~tokikou/feature/study/index.html> (最終閲覧2024年2月17日)

⁸ 2023年度、文献講読テキストは歴史学(日本近世史)の視座・方法論に基づいた卒業論文執筆についてまとめた村上紀夫(2019)を設定している。特に前期はテーマ設定のために第2章卒業論文の題目を考える、第3章論文の集め方と読み方、第4章史料があつてこそ、後期は論文執筆のために第7章章立てを考える、第8章文章を書く、第9章注をつける、第10章「はじめに」を書く、第11章「おわりに」を書くに注目しながら、読み進める。

2023年度：8名

ねえ知っている？外国人(アメリカ人)と話すコツ

ロシア・ウクライナ戦争が与える日本への影響

第一次世界大戦はなぜ、日本では印象が薄いのか

一向宗から見る室町仏教～民衆社会と自治区～

アイドルのいる世界:今と過去のアイドルの存在

韓国語と日本語はなぜ似ているの!!～韓国併合時の日本語教育～

日本はなぜ植民地にならなかったのか～大航海時代の戦国日本～

性格は自由に作れるのか—日本人とアメリカ人の育児の面から見て—

個人課題研究・世界史ゼミ



2022年度は歴史に興味関心を持つ生徒が集まったため、歴史学の視座・方法論を主軸に進めた。一方、2023年度は多様な興味関心を持つ生徒が集まったため、歴史学の視座・方法論を主軸にしなが、言語学、哲学、宗教学、心理学、コミュニケーション学、社会学などの人文学を中心とした他の学問分野の視座・方法論も参考に、「総合学⁹」を意識した。ここで、「歴史総合」の「総合」が「総合学」¹⁰を示すように、あらゆる事柄に「歴史」は存在する、具体的には「歴史は歴史家だけに限定されるものではない¹¹」を強調したい。

このような状況下で、個人課題研究における世界史ゼミから教員の役割について以下の5点の場面ごとに考える。第一に、テーマ(問い)設定である。テーマ(問い)設定では生徒が各自の興味関心からリサーチクエスチョンを発見することを目指して哲学カフェ(対話型授業)¹²を用いて支援する。第二に、先行研究整理である。先行研究整理では生徒が設定したリサーチクエスチョンに関連した先行研究の収集・整理・分析を通して自らの研究の新規性を発見できるように支援する。第三に、文献講読である。文献講読ではリサーチクエスチョン設定と先行研究整理と同時並行で歴史学の視座・方法論を深めることができるように支援する。第四に、課題の輪読会である。課題の輪読会では世界史ゼミ所属の全生徒が生徒自身の執筆した途中経過含めた論文を対象にコメント・質問を記入していくことを支援する。第五に、個人課題研究から進路を考えるである。1年間の探究活動を通してまとめた個人課題研究の論文は生徒各自の興味関心があられているに違いないので、探究活動から将来の進路について考える。総じて、個人課題研究における世界史ゼミの運営から教員の役割については生徒と教員は対等な関係かつ生徒と教員が作り上げるゼミ、さらには授業が望ましいのではないか。

(2)0限/長期休業中ゼミ・歴史探究ゼミ

本校では、教育課程外として、生徒と教員の問題意識に基づいて開講される0限/長期休業中ゼミがある。2023年度より、0限/長期休業中ゼミにおいて、「歴史探究ゼミ」(参加者約20名)

⁹ 例えば、「総合学」についてはアッシリア学の視点からの渡辺和子(2009)p.94. 参照。

¹⁰ 「歴史総合」の特徴については丸小野壮太(2024b・2024c)参照。

¹¹ レヴィスティック、パートン著 松澤剛・武内流加・吉田新一郎訳(2020)p.104.

¹² 詳細は五十嵐沙千子(2016)参照。

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 地理歴史科・公民科の授業から

を開講している。0限/長期休業中ゼミ・歴史探究ゼミでは生徒が日常生活において歴史について探究することを支援することを目的としている。以下の表は0限/長期休業中ゼミ・歴史探究ゼミの授業計画である。2023年度は2つのテーマ(【表2】現代社会における歴史学の役割、【表3】古代文字から考える「歴史総合」¹³⁾を扱った。なお、次節では事例として【表3】古代文字から考える「歴史総合」第2回のワークショップ・フェニキア文字から生徒の歴史探究活動における教員の役割を考える。

授業数	主なテーマ	中心的な問い(MQ)
第1回	市民の歴史探究とは何か?	市民は歴史探究しているか?
第2回	身近な歴史学 ¹⁴⁾	身近に歴史学はあるか?
第3回	文献講読・小田中直樹(2022)1	歴史って、面白いですか?
第4回	文献講読・小田中直樹(2022)2	高等学校教科書を読んでみよう!
第5回	文献講読・小田中直樹(2022)3	「歴史を学ぶ」はどういうことか?
第6回	文献講読・小田中直樹(2022)4	どのような歴史のかたちがあるか?
第7回	文献講読・小田中直樹(2022)5	歴史の危機と可能性とは?
第8回	文献講読・小田中直樹(2022)6	世界がかわれば歴史もかわるのか?
第9回	文献講読・小田中直樹(2022)7	歴史学の二一世紀とは?
第10回	市民の歴史探究を再考する	あなたは市民の歴史探究をどのように考えるか?

授業数	主なテーマ	中心的な問い(MQ)
第1回	身近な古代文字	身近にどのような古代文字あるか?
第2回	ワークショップ・フェニキア文字	フェニキア文字を書いてみよう!
第3回	近現代史と古代史の越境1 古代移民フェニキア人	現代人は古代移民フェニキア人からどのようなことを学べるか?
第4回	ワークショップ・楔形文字	楔形文字文を書いてみよう!
第5回	近現代史と古代史の越境2	世界各国に所蔵される楔形文字文書は

¹³⁾ 「古代文字から考える「歴史総合」」については2024年1月20日(土)に開催された言語学フェス2024@オンラインにおいて「古代文字から考える「歴史総合」—高校生・高校教員・大学教員の共同研究—」と題して報告した。詳細は以下のウェブサイトを参照。

<https://sites.google.com/view/lingfes2024/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>

(最終閲覧2024年2月18日)

¹⁴⁾ 近年の歴史学の潮流であるパブリックヒストリーから身近な歴史学について考えた。詳細は松原宏之(2017)や岡本充弘(2020)参照。

	アッシリア学(楔形文字文書学)の誕生	誰のものか？
第6回	古代文字から考える「歴史総合」	古代文字から「歴史総合」についてどのような科目だと考えるか？

3 高校生・高校教員・大学教員の共同研究：ワークショップ・フェニキア文字

本節では前節の0限/長期休業中ゼミ・歴史探究ゼミにおける「古代文字から考える「歴史総合」」第2回目のテーマとなっているワークショップ・フェニキア文字を対象とする。ワークショップ・フェニキア文字は高校生・高校教員・大学教員の共同研究によって開発された。本節ではワークショップ・フェニキア文字の開発過程と特殊性について論じる。

(1)ワークショップ・フェニキア文字の開発過程

2022年4月～7月

当該期間では2022年度常磐大学高等学校オープンスクール「体験学習・アルファベットの起源フェニキア文字」(2022年7月22日～7月25日)開催に向けて**高校教員と大学教員の共同研究**、さらには**高校生も巻き込んだ共同研究**が始まった【写真①】。

2022年8月～12月

当該期間では2022年度常磐大学高等学校オープンスクール「体験学習・アルファベットの起源フェニキア文字」を踏まえて、第28回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会(2022年12月4日)において**高校教員と大学教員の共同発表**により、「開かれた古代地中海世界史研究」を構築した。

2023年1月～5月

当該期間では言語学フェス2023(2023年1月28日)において「高校生・高校教員・大学教員の共同研究—「ワークショップ・フェニキア文字」実践—」と題した**初の高校生・高校教員・大学教員の共同発表**を行った。さらに、古代オリエント博物館(2023年5月6日)では、言語学フェス2023を踏まえて、「【フェニキア文字体験教室】「アルファベットの起源・フェニキア文字を使って自分の名前を書こう！」」と題した**初の高校生・大学生・高校教員・大学教員の共同運営**によるワークショップを開催した【写真②】。

2023年6月～12月

当該期間では共同研究者・佐藤育子氏が日本女子大学で担当する「西洋史学論」において「近現代史と古代史を越境する授業—ポエニ戦争と20世紀の世界大戦～時空を超えた2つの世界大戦を比較し検証する～」と題した**初の高校生・高校教員・大学生・大学教員の共同授業**を実践した【写真③】。さらに、2022年度の体験学習・アルファベットの起源フェニキア文字をリニューアルして2023年度常磐大学高等学校オープンスクール：体験学習・アルファベットの起源フェニキア文字(2023年7月22日～7月24日)を開催した。

2024年1月

当該期間では言語学フェス2024(2024年1月20日)において「古代文字から考える「歴史総

合」—高校生・高校教員・大学教員の共同研究—と題した**高校生・高校教員・大学教員の共同発表**を行った。さらに、高校生は日本オリエント学会の第17回「オリエント世界」作文コンクールでワークショップ・フェニキア文字の探究活動をまとめ、入選した¹⁵。

(2)ワークショップ・フェニキア文字の特殊性

本節ではワークショップ・フェニキア文字の特殊性について論じる。上述した開かれた古代地中海世界史研究を構築する過程でアルファベットの起源フェニキア文字のワークショップを企画した¹⁶。本ワークショップの新規性は以下の3点である。第一に、高校生・大学生・高校教員・大学教員の四者の立場が共同で企画したワークショップである¹⁷。第二に、佐藤育子(2020)が論じているように、古代史におけるフェニキア文字だけでなく、近現代史と古代史を越境する中におけるフェニキア文字についてアルファベットの起源とアイデンティティに注目することを意識した¹⁸。第三に、日本初のフェニキア文字のワークショップである。具体的には先行研究としてあげられる多々良穰(2010)は高校歴史教育における古代文字を主題とした授業開発をしているが、フェニキア文字は含まれていない¹⁹。

3 おわりに

最後に、生徒の歴史探究活動における教員の役割について以下の3点にまとめる。第一に、各学問分野の視座・方法論からのフィードバックである。具体的には、生徒の興味関心に基づいたテーマによる探究活動である個人課題研究・世界史ゼミで示したように、多様な興味関心を持つ生徒の歴史探究活動について、先行研究を踏まえた専門的な支援は一部の例外を除いて不可能に近い。そこで、筆者の場合は歴史学の視座・方法論からフィードバックすることで生徒の歴史探究活動の支援をした。第二に、日常生活において生徒が主体となって歴史的に考える仕掛けをすることである。具体的には、0限/長期休暇ゼミ・歴史探究ゼミで示した小田中直樹(2022)で論じられているように、現代社会における歴史学の位置づけを明らかにする中で、日常生活において、生徒を含めた市民の歴史探究を仕掛ける必要がある。第三に、高校生・大学生・高校教員・大学教員の共同研究である。具体的にはワークショップ・フェニキア文字の開発過程・特殊性でも示したように、高校生・大学生・高校教員・大学教員が対等な関係の元

¹⁵ <https://www.j-orient.com/info/%e7%ac%ac17%e5%9b%9e%e3%80%8c%e3%82%aa%e3%83%aa%e3%82%a8%e3%83%b3%e3%83%88%e4%b8%96%e7%95%8c%e3%80%8d%e4%bd%9c%e6%96%87%e3%82%b3%e3%83%b3%e3%82%af%e3%83%bc%e3%83%ab%e9%81%b8%e8%80%83%e7%b5%90%e6%9e%9c/> (最終閲覧 2024年2月21日)

¹⁶ 詳細は丸小野壮太(2024d)参照。

¹⁷ 川合宏之(2017・2021)は、歴史学と歴史教育の事例ではないが、双方向の高大連携の事例として注目できる。

¹⁸ 佐藤育子(2020)pp. 102-103.

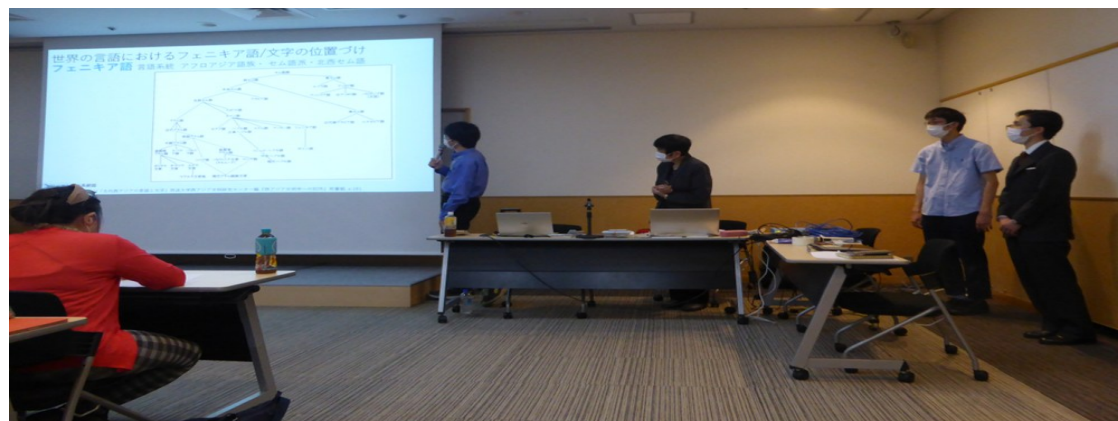
¹⁹ 多々良穰(2010)pp. 16-25.

に共同作業を行うことである。

【写真1】2022年度・常磐大学高等学校オープンスクールの体験学習・フェニキア文字



【写真2】古代オリエント博物館におけるワークショップ・フェニキア文字



【写真3】大学「西洋史学論」における高校生・高校教員・大学生・大学教員の共同授業



【写真4】

大学「西洋史学方法論」における高校生・高校教員・大学生・大学教員の共同授業



【主な参考文献】

五十嵐沙千子(2016)「中等・高等教育における対話型授業のあり方をめぐって：ソクラテス・メソッド（「哲学カフェ」）を用いた授業の可能性」『哲学・思想論集』41,pp.19-41.

岡本充弘(2020)「パブリックヒストリー研究序論」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』22, pp.67-88

小川幸司編著(2021)『岩波講座 世界歴史 第1巻 世界史とは何か』岩波書店.

小田中直樹(2022)『歴史学のトリセツ—歴史の見方が変わるとき』ちくまプリマー新書.

川合宏之(2017)「双方向で持続的な高大連携の可能性—高校生と大学生の協働学習がもたらすもの—」流通科学大学学術研究会『流通科学論集—人間・社会・自然編』30/1, pp.1-24.

川合宏之(2021)『高校生と大学生がともにつくる高大連携授業』晃洋書房.

栗田伸子・佐藤育子(2016)『通商国家カルタゴ』（興亡の世界史3巻）講談社学術文庫.

- 佐藤育子(2020)「フェニキア語とフェニキア人」鈴木董 近藤二郎 赤堀雅幸 編集代表
『中東・オリエント文化事典』丸善出版, pp.102-103.
- 佐藤育子(2023a)「序 <特集 2>古代地中海世界における人々の移動とネットワーク(1):
Identity, Ethnicity, Acculturation」『史苑』83/2, pp.148-158.
- 佐藤育子(2023b)「古代地中海世界におけるフェニキアの宗教の発展と変容」『史苑』83/2,
pp.186-212.
- 佐藤育子・丸小野壮太(2024)「歴史学と歴史教育の対話に基づいた開かれた古代地中海世界
史研究の構築」ヘレニズム~イスラーム考古学研究会(編)『ヘレニズム~イスラーム考古学研究
2023』(2024年3月出版予定)
- 多々良穰(2010)「教室レポート 古代文字を題材にした高校世界史Bの授業」
『歴史と地理』636, pp.16-25.
- 土井裕人(2022)「哲学自主研究発表会の学生・生徒による実践と探究コミュニティの創出に関
する試論」『思考と対話』4, pp.36-47.
- 前川一郎編(2023)『歴史学入門 だれにでもひらかれた14講』昭和堂.
- 松原宏之(2017)「人は「歴史する」、ゲームでもアニメでも」『史苑』77/2, pp.1-8.
- 丸小野壮太(2024a)「高校歴史教育におけるフェニキア・カルタゴ史の位置づけ—歴史的な見方・
考え方に注目して—」ヘレニズム~イスラーム考古学研究会(編)『ヘレニズム~イスラーム考古
学研究 2023』(2024年3月出版予定)
- 丸小野壮太(2024b)「歴史学と歴史教育の対話に基づいた新たな高大連携—大学「西洋史学論」
における近現代史と古代史を越境する「歴史総合」模擬授業—」高大連携歴史教育研究会編『会
報』(2024年3月出版予定)
- 丸小野壮太(2024c)「「歴史総合」と「世界史探究」をつなぐ・高校「歴史総合」における近
現代史と古代史を越境する授業-」『茨城史学』69号(2024年4月出版予定)
- 丸小野壮太(2024d)「ワークショップ紹介【フェニキア文字体験教室】「アルファベットの起源・
フェニキア文字を使って自分の名前を書こう!」」『ORIENTE』68. (2024年4月出版予定)
- レヴィスティック, リンダ・バートン, キース著 松澤剛・武内流加・吉田新一郎訳(2020)『歴
史をする 生徒をいかに教える・学び方とその評価』新評論.
- 村上紀夫(2019)『歴史学で卒業論文を書くために』創元社.
- 渡辺和子(2009)「メソポタミア宗教史」への展望」市川裕 松村一男 渡辺和子編『宗教史と
は何か』下巻 リトン, pp.83-122.

【問題の限定】

○本稿では、数ある「教科書対話」の中でも、日中韓・青少年歴史体験キャンプ(以下、キャンプと略す)での実践を考察の対象とする。… 論文の考察対象を絞り込む

→理由としては、～～が挙げられる。

○研究手法には、キャンプで行ったインタビュー調査・参与調査を用いる。… <方法>の提示

○先行研究の整理でも述べたように、今までの研究では教育学の視点から見られたものが少ない。

→本稿では、特に先行研究のない教育行政学の視点を踏まえて論ずる。… <視角>の提示

↳どのような問題意識で研究テーマに切り込むのか

<視角>は複数あるものを書き出す

→最後はひとつに絞る

【各章の概要】

第一章 日本の歴史教育が抱える問題点

○今までの日本の歴史教育は、暗記重視の傾向で知識偏重型だった。

→近年の大学入試改革を経て、状況は変わりつつある。

⇨「大学入試のための歴史学習」という風習から、教育業界がなかなか脱却できない。

○教える教員側も、国際問題に発展している歴史問題については、授業で扱わない傾向。

→2022年度に新規実施される「歴史総合」は近現代史重視なので、一定の効果は望める。

⇨教える教員側の力量が問われるカリキュラム編成なので、格差が生まれてしまう危険性。

第二章 ドイツにおける「教科書対話」の実践例

○ドイツとポーランドとの「教科書対話」における具体的実践は以下の通りである。

第三章 日本における「教科書対話」の現状とその課題

○実際に行ったアンケートの調査結果では、以下のような結果が得られた。・・・ 【補足資料①】

↳仮説の実証のために論拠を提示

【結論】

○本稿では「日本が歴史問題を抱える国と和解するためには、『教科書対話』を通じた交流が必要不可欠である」という仮説を立てた。

→調査結果は～～～だったので、～～～と結論付けられた。… 仮説の再確認

【今後の課題】… 執筆途中の中間報告などでは、完成に至るために不足しているものを列挙

(論文完成後は、今回の研究を次の研究につなげていくための見通し)

○論拠が薄いので、～～～で追加調査を実施(～～月実施予定)

【補足資料】… 仮説の実証に必要なフィールドワーク等で得られた情報を資料として提示

①キャンプでのアンケート調査結果

②ドイツにおける「教科書対話」と日本のものとの比較図

【参考文献一覧】

○岡裕人『忘却に抵抗するドイツ - 歴史教育から「記憶の文化」へ』(大月書店、2012年)

第3章 教科横断的な取り組みについて考える

ー現地研修と総合学習を活用した水俣学習を事例にー

小川輝光(都留文科大学・前神奈川学園中学高等学校)

はじめに

本稿では、2022年度から実施されている「総合的な探究の時間」において歴史学習はどのようにかかわることができるかを、先行事例から検討する。特別部会の2021年度アンケートでは、「総合的な探究の時間」のなかでの歴史系探究の可能性は低いという課題が、浮かび上がる。学校のなかで組織的な歴史探究の授業はいかに可能であろうか。この点を主に考えたい。

2001年から前勤務校の神奈川学園中学高等学校ではフィールドワーク(以下、FW)という、「総合的な学習の時間」と宿泊行事を組み合わせた授業を1年単位で実施してきた。報告者は、複数あるFW方面のひとつとして、水俣の学習活動を担当している。水俣病の研究と教育の世界では、原田正純氏が始めた「水俣学」(原田2004)というものがあるが、そのような総合学的視点が、このFWでも見られる。

1. 探究的な歴史学習としての「水俣の学び」

FWは、生徒が年度当初に5方面(沖縄・四万十川・岩手宮城・京都奈良・水俣)から選択する。水俣のテーマは「人間の尊厳を探究する」「本当の豊かさを発見する」「旅する私を知る」(小川2021)である。選択する生徒の関心を2022年度の生徒で紹介する。

○それでも利益を優先して企業活動を続けきたのか、化学物質がそういった影響を及ぼすことを知らずに活動を続けてきてしまったのか、また環境や周辺住民に影響が出ていることを把握したときどのような対応をとったのか、メチル水銀化合物が使えなく(使わなく)なったことによる影響(何かが作れなくなったり、私達の生活への有害性以外の影響)はあったのか、理想論ではなく、現実問題として知りたいと思いました。

○兄は特別支援学校に通っています。……いつ兄が死んでしまうかはわかりません。でも人間誰しもそうだと思います。死ぬとか死なないとか関係なく治らない病気との向き合い方について考えたいです。

生徒は、水俣病を教科書のなかのできごととして学んできた。過去の「四大公害病」「高度成長の影」というものである。しかし、過去と現在が接続する現場(石居2017)で水俣病を学ぶことで、固定的な理解が崩される。現場にあるヒト・モノ・空間【資料②】と出会い、人により異なる捉え方をしている「水俣病」を生徒自身の体験に基づいてつかんでいく。それは、水俣病だけを学ぶのではなく、水俣病を通じて「自分の生き方」と向き合う学びでもある(小川2022)。

このようなFWによる探究的な歴史学習は「社会のなかの歴史学習」と「教室のなかの歴史学習」の連携だともいえる。たとえば、歴史総合のなかで現在の環境問題を考えるために公害を学ぶ(小川2019)。社会のなかで、水俣病経験の歴史化(教訓化)の実際を学ぶ。その二つ

の学習が、歴史が現在へとつながる問題であることを生徒に自覚させる。

水俣にある学びの対象

対象	ヒト	モノ	空間
具体物	人びとの語り（患者、支援者、チッソ社員、生産者、表現者、継承者など）	博物館（資料館）、慰霊碑、石像、えびす神、生き物、食べ物、和紙、染物、無農薬茶葉、漁船	景観、チッソ工場、百間排水口、親水護岸、エコタウン、漁村、生活博物館、茶園、漁村、空間移動

生徒は、1年間直学びをレポートにまとめる。2011年度年間レポートの例【資料③】。レポートには、探究したい主題を設定し、現場で体験と検証を行い、事後学習でさらに考察していく過程が書かれる。現場では「振り出しに戻される」という感覚を持ち、体験からはじまる学びがある。卒業生のなかには、レポートを大切に保管し、卒業後読み直して、現在水俣に移住した人もいる。

「……〈水俣〉は私がおそらく最初に、じっくりと時間をかけて向き合った社会でした。〈水俣〉から私は、社会が私と無関係なところで動いているのではなく私と深く繋がっている影であることを実感しました。さまざまな題材（水俣病が起きた時代背景にはじまり、国・行政が目指した豊かな日本、その豊かさを疑わず企業に生きた人びとの声、自分の豊さを信じて生きた人びとの声、など）を取り上げてレポートを書きましたが、私にとってもっとも大切だったことは、そこから私はどんな声に、豊かさの価値観に、生き方に心が動いたのか、ということでした。17歳の私は、水俣市への産廃処分場の建設計画撤廃に尽力した下田さんの「生かされて、生きている」ということばに心が大きく動かされたと記してあります。……どんな環境や状況にいても、私はどうありたいのか、〈水俣のレポート〉は私を映す鏡のような存在になりました。この鏡を胸にしまい込んで、私は大学生となり社会人になりました。この鏡はあまりにくっきりと明るく物事を映し出すので、私はだんだんとそれを見ないようになっていきました。」

（森紗都子「おしゃら、水俣からはじまるものがたり」『魂うつれ』78号、2022年5月）

2. 教科横断的な取り組みの「条件」

次に、総合探究で教科横断的な取り組みを行う条件となっていることを紹介したい。

まず、学内組織についてである。2001年の「総合的な学習の時間」実施以降、宿泊行事や文化祭などの課外活動もいかしながら、6か年の総合学習カリキュラムをつくってきた。平和・環境・国際・FW・探究・進路など各学年でテーマを設定している。運営は学年担任団が担う。2022年以降、探究的な学習を強めるために、総合探究委員会というものを立ち上げ、力点を提供するテーマ（主題）から生徒の学習プロセス（問い）へシフトし、学年を超えた発表会を行うなど、6か年を見通した総合探究カリキュラムの設計を進めている。

学校教育の3つの学習活動領域

	教科活動	総合学習	特別活動
形態	各教科の授業	総合的な学習の時間 総合的な探究の時間	宿泊行事・儀式・クラブ・文 化祭 その他
学習内容	教科書あり 固定的・専門的	学校ごとに設定 総合的・横断的	活動中心
学習者	相対的に受動的	中間的	相対的に能動的
特性	学問 授業時間内の活動	生活と学問 授業時間内の活動	生活 授業時間外の活動

FW 水俣は、高校1年配当の授業だが、早い時期から教科融合カリキュラムを目指してきた。社会科教員である私と家庭科の教員で内容を検討し、他教科の学年担当者やゲスト教員を加えて年間カリキュラムを組む。その結果、いくつかの関連カリキュラムもできた。国語の授業では石牟礼道子『花帽子』を読み、社会科ではFW訪問地の地理や地域課題を学び、理科の授業では水銀と触媒を学習し、家庭科では食と安全を考えるなどである。

外部連携も必要となる。現地研修では環不知火プランニングや水俣病センター相思社に手配を担ってもらっている。首都圏で学ぶ場合、水俣フォーラムのお世話にもなってきた。また、現地で学んだことを学習者同士が意見交換することも重視し、埼玉大安藤聡彦ゼミの方々、卒業生にとっての経験の意味、水俣高校の生徒との交流など行ってきた。また実践ネットワークの構築も重要で、日本環境教育学会「公害教育」研究会、公害資料館ネットワークなどと連携し、研究・実践の情報交換などを行っている。

図書指導も重視している。『証言水俣病』（岩波新書）は、共通教材として生徒に持たせ、事前学習で年表づくりをさせている。図書室には、水俣関係の図書を集めてコーナーをつくり、レポート作成のために個別に本の紹介をしている。生徒は探究の情報源として専門書を手に取る。授業外での取り組みも多い。水俣フォーラムでの水俣展や講演会のボランティア参加、ハンセン病療養所全生園への訪問、環境省主催ユースダイアログへの参加などである。

3. 総合的な学びのなかの「歴史」と「探究」

このように、「水俣病」を「過去の公害」としてではなく、「現在の課題」として捉え、生徒のさまざまな関心と接点を持てるように総合的な授業づくりをしている。それは、私にとっては「歴史実践 (Doing history)」の一つの試みである。歴史実践とは、保苺実氏が人びとの歴史とのさまざまななかかわりを指して使用した言葉である（保苺 2004）。現在の社会に埋め込まれた歴史である水俣病を、学習者が社会参加するなかで、体験的に獲得していく過程に焦点を当てるため、この言葉を使って捉えようとしている。総合的な探究の時間で取り込まれる歴史学習には、このような歴史実践の視点が必要だろう。水俣病や災害、戦争などの教訓化、地域社会の来歴、娯楽のなかの歴史、学んだ歴史の表現活動、景観や観光、文化財の保存の問題など

は、歴史が現在のなかに表れている事例であり、学習者は総合探究を入りに歴史へと接近する。これまでの歴史教育では、1950年代の国民的歴史学運動（高田 2022）、70～80年代の地域に根ざす歴史教育、90～2000年代の吉田悟郎氏ら世界と出会う歴史教育、2010年代の徳水博志氏の「復興教育」（徳水 2018）などが先行実践として位置づくと考えている。

他方で探究的な学習といったときに、その形態は複数ある。総合的な探究の時間で想定されているのは、自然科学研究にモデルを持つ探究学習、SGH で取り組まれた社会課題解決などが多いようである。社会科教育研究のなかでは、初期社会科以来の「問題解決学習」や加藤公明氏らの「討論授業」、板倉聖宣氏らの「仮説実験授業」など、多様な探究的な学習がある。歴史総合や日本史／世界史探究など教科探究と総合探究を並行実施するなかで、歴史を探究する機会を提供していることが、各学校現場で模索する必要がある。総合的な探究の時間では、PDCA サイクルとかかわり深い探究学習のスパイラルが提示されている。これもそのまま実施というよりかは、アレンジさせてよいのではないか。FW 水俣の場合、現地研修から再出発する探究学習もあるのではないかと考えている。先行例：會田康範「博物館教育との連携」（會田 2021）

総合的な探究の時間が、総合的な人格の形成と完成もめざすと想定すると（小玉ら 2020:35-53）、「歴史」を「探究」することが、そこにどのように接続できるのかも検討したり、事例を提示したりする必要があるだろう。その際、過去のできごとを覚えることだけが「歴史」学習ではないだろうし、歴史研究者のように研究することだけが「探究」でもないだろう。たとえば「社会に開かれた教育課程」を目指し、地域活性化課題解決のなかにどのように「歴史」を位置付けられるか、生徒が「探究」していくことも、新しい歴史実践の姿を提示する一例になると思われる（地域・教育魅力化プラットフォーム 2019）。

おわりに

本事例のなかで提示したのは、生徒の生き方のなかに社会の歴史経験（水俣病）をいかに呼び込むのかである。人が歴史的な存在であることに気付ける取り組みであり、教科書だけでなく社会のなかに存在する歴史とつながる経験を生み出す取り組みである。

また、総合探究は、学校の個性と文化をつくる機会にもなっている。勤務校の場合、創立以来「生活体験」を重視している。また、特別活動との調整をすることが現在の課題となっている。個人では限界があるので組織的・持続的な取り組みが必要なのは言うまでもない。

【参考文献】

- 會田康範「歴史系博物館と歴史教育・総合的な探究の時間との親和性について」（青木豊先生古稀記念発起人会『21世紀の博物館学・考古学』雄山閣、2021年）
- 小川輝光「高校生社会認識形成に関する質的研究」『社会科教育研究』121号、2014年
- 『3・11後の水俣／MINAMATA』清水書院、2019年
- 「「公害」への旅だから学べること」（安藤聡彦ほか『公害スタディーズ』ころから、

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 教科横断的視点から

2021年)

———「地球環境問題をどう学ぶか」『同時代史研究』15号、2022年

小倉康嗣「継承とは何か」(蘭信三ほか『なぜ戦争体験を継承するのか』みずき書林、2021年)

小玉敏也・金馬国晴・岩本泰編『総合的な学習／探究の時間』学文社、2020年

高田雅士『戦後日本の文化運動と歴史叙述』小さ子社、2022年

地域・教育魅力化プラットフォーム編『地域協働による高校魅力化ガイド』岩波書店、2019年

徳水博志『震災と向き合う子どもたち』新日本出版社、2018年

原田正純編『水俣学講義』日本評論社、2004年

保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』御茶ノ水書房、2004年

FW 水俣年間スケジュール (2019年度)

1	5	15	『水俣病その20年』視聴
2	6	6	患者の闘い(講義)
3		20	患者たちの望んだものは何だったか(グループワーク)
4	7	10	水俣の学びを掘り下げ、自分の関心を持つ(夏休み課題説明)
5	9	5	自分は水俣に何をしに行くのか(夏休みレポートの報告)
6		26	現地行程概略、現地下見報告
7	10	3	コース別学習1:2日目に出会う人の学習
8		10	コース別学習2:全員で出会う人の学習
9		24	胎児性水俣病(講義)『生きてそして訴えて』
10		31	現地研修計画
11	11	14	言葉をひろう、埼玉大交流準備
12		21	埼玉大学との交流会
13		28	レポート3章に向けて掘り下げる
14	1	23	水俣の責任、公害輸出の責任
15		30	プラスチック汚染の責任
16	2	6	保護者に伝える会の準備
17		20	水俣の学びを生かせることを考えるワークショップ
18		27	1年間の経験を語る

*本事例は、前任校における取組を2022年の時点で振り返ったものである。

第4章 歴史観光素材を活用した地域史と地域認識の深化を図る実践をめぐって — 鞆の浦埋立て架橋計画問題を事例に —

須賀忠芳（東洋大学）

はじめに

歴史教育において、地域を取り上げることの意義について、福島県の小学校教師であった半澤光夫は、「地域を掘る意義」として、「子どもたちにとって地域は切り離すことのできないホンモノである。地域に根ざして考え、学習することはより本物に近づき、その歴史のわけを考えることのできる最高の学習となり得る」と述べたⁱ。須賀は、「(学習者が) 地域史認識を構築し、そのことが地域のあり方そのものの認識の深化にもつながっていく」とし、そのために、「市民教育の一環として、地域史教育を積極的に進め、地域認識を深めていく方策が求められる」と述べたⁱⁱ。地域史教育は、学習主体の歴史認識を深めさせるとともに、地域史への理解を通して、地域認識を深化させることから、学習主体の自らの地域を自覚的に捉える態度、すなわち地域アイデンティティ、シビックプライドを創出することにつながっていくものと言えるだろう。シビックプライドについて、伊藤香織は、「単なる『まち自慢』ではなく、『ここをより良い場所にするために自分自身がかかわっている、というある種の当事者意識に基づく自負心』」であるとし、また、シビックプライドは「市民一人ひとりに自ら行動する力と自尊心をもたらし、都市を未来へと動かす推進力を与える」ものとして位置づけているⁱⁱⁱ。シビックプライドと、それに連なる地域アイデンティティとは、正に、地域史の理解をふまえた地域認識の形成に密接に関連付けられていくものとなるにちがいない。

その際、筆者は、歴史観光素材を活用した地域史と地域認識の深化を図る実践について提示したい。地域史への理解を通して、地域認識を深化させるためには、地域における歴史事象を、いかに「自分ごと」として理解し、認識させていくことができるか、という観点が肝要になってくる。あわせて、地域の歴史事象を「自分ごと」として捉えることができれば、それは、自らの居住する地域のみならず、広く、地域全体に視野を広げ、その特徴や課題について、認識を深めていくことができるに違いない。地域の歴史事象を理解し、また、それが現在にどのように継承され、活用されるべきか論ずることができるのが、「観光」からの視点の効用である。須賀は、地域史の学びと観光との関連性について、「歴史的町並みなどが、歴史的経緯を経ながら、改めてその価値が再認識され、観光化された地域の状況を事例として捉えさせることで、地域に内在する可能性を実感させ、それが、歴史的経過をふまえた、より多様な地域観、地域認識を形成していくことにつながっていく」ことに、その意義を求めている^{iv}。そうした観点をふまえて、本稿では、瀬戸内海の港町として隆盛を極めてきた鞆の浦（広島県福山市鞆町）を題材に、そこで起こった、鞆の浦埋立て架橋計画問題を事例に、その歴史的景観を地域資源の維持、ならびに観光素材として保全するべきか、あるいは、地域住民の利便性を重視した地域開発を優先するべきか検討、考察に取り組みさせた授業実践について、取り上げることにする^v。

1、鞆の浦の概要と埋立て架橋計画問題をめぐって

鞆の浦は、瀬戸内海のほぼ中央に位置し、古くから潮待ち港として機能してきた。大伴旅人は、大宰帥としての帰任の途中で鞆の浦に寄港し、『万葉集』に、その地で詠んだ歌を寄せていて、奈良時代には、すでに内海航路の拠点となっていたことがうかがえる。中世では、1336年（延元1・建武3）に、京都の戦いに敗れて西走した足利尊氏が、途中この地で光厳上皇の院宣を受け取り、名分を確保した後、九州に逃れて勢力を増し、京都に攻めのぼったことでも知られる。あわせて、足利義昭が、織田信長に追放された後、この地に滞在して勢力を保持したことから、一説には「室町幕府は鞆に興り、鞆に亡ぶ」との言もある^{vi}。近世では、北前船の寄港地として繁栄したほか、朝鮮通信使も訪れ、18世紀終わりに派遣された通信使の一人は、鞆の浦の景観を高く評価し、「日東第一形勝」、すなわち、朝鮮より東で一番美しい景勝地であると称えたとされている。しかしながら、近代に入ると、山陽鉄道が福山・尾道間に敷設され、当地が主要交通路から外れたほか、機帆船、汽船就航で潮待ちの必要性もなくなったことから、当地の隆盛は過去のものとなってしまったと言える。一方で、歴史的な港湾施設や町並みが良く残され、江戸期の港湾施設と港湾部の自然景観がまとも眺望できる、貴重な歴史的文化的文化景観を今に残している地域である。

その一方で、人口減少が進み、1960年代初めには13,000人を越えていた人口は、2000年代初めには、その半分となり、2025年1月末の人口は3,210人である^{vii}。人口減少に伴い、空き家も多くなり、2007年の調査では、鞆町全体で約4分の1の家屋が空き家や空地となっている、とした報告もある^{viii}。また、当地の道路は、一部区間が拡幅整備されているのみで、古くからの地割がそのまま残されている生活道路は、三叉路やクランクが多く、幅員も狭小で、「車両は民地や家屋の軒下を利用するなどにより離合せざるを得ず、しばしば交通渋滞が生じて」いて、「これにより、歩行者は、車を路肩や民地で避けながら通行せざるを得ず、また、救急車などの緊急車両の通行にも支障を来すこと」があるとされている^{ix}。こうした交通基盤の脆弱さを解消するために、行政側が、1983年に打ち出した施策が、湾内の一部を埋め立てて、港湾部を横切る架橋道路の建設計画であった。

同計画は、一時、停滞したものの、2004年、鞆町出身で架橋計画推進派の新市長が誕生したことで、計画が再開、急進することとなった。架橋計画が推進されていく中で、鞆の浦の住民らは、架橋に対して、賛成派と反対派とに分かれて、相対立することとなった。この時の争点について、森久聡の整理^xをもとに架橋の影響に関して取り上げれば、第一に、「埋立て・架橋計画は効果的な地域再生策なのか」という事柄である。架橋賛成派は、埋立地に駐車場を整備して大型バスの運行を可能にし、多くの観光客を呼び込むことで地域再生が可能であるとした。一方で、架橋反対派は、鞆の浦の景観を重視し、架橋がなされれば、歴史的景観が壊されてその価値は失われてしまい、かえって観光客は減少するとして主張した。第二に、「生活環境およびインフラ整備の手段として合理的な政策なのか」という事柄である。架橋賛成派は、埋立て・架橋による道路敷設が町内の渋滞解消や下水道整備、緊急車両

の通路確保につながるとして地域住民の生活利便性が確保されることを挙げている。一方で、架橋反対派は、港湾近辺の住民の生活環境として、海が見える風景と港湾部の環境を保全するべきであると言い、代替案でもあった山側トンネル案の方が有用かつ合理的であると主張した。これらの動きの中で、2007年4月に、広島地裁に、架橋に反対し、歴史的景観保持を訴える一部住民から、埋立て・架橋事業に関わる行政手続きの差し止め訴訟（「鞆の浦景観訴訟」）がなされた。

この間、ユネスコの諮問機関で世界遺産の評価・調査を担当する国際記念物遺跡会議（イコモス）は、鞆の浦を「世界遺産級」として評価し、2004年から2008年の総会や専門委員会でも架橋計画の中止を求める決議や勧告を4回にわたって提示した。架橋反対派の中心ともなった、NPO法人「鞆まちづくり工房」代表の松居秀子は、「鞆の魅力というのは、決してきらびやかな寺社仏閣でも、大きな商人屋敷でもない。鞆には、『潮待ちの港町』として長く栄えてきた歴史があり、人や物の交流により独自に育んできた文化があり、海と山に囲まれ自然と共に営んできた生活があり、そしてそれらすべてを守り・慈しみ・育んできた人たちがいる。それらすべてが鞆の魅力であり、世界遺産に値するものなのではないか」と述べている^{xi}。また、長谷川博史は、「鞆の特質を体現しているのは、自然地形・自然景観のみではなく、それを基盤に形成され、受け継がれてきた、歴史的な環境・景観である」とし、「鞆へ人々を導き、町を構成する、幾筋もの海陸の導線が、さらに大きく形を変えてしまえば、それまで地域観を育む重要な手がかりであった空間全体は、線や点に断ち切られたり、全く別物になってしまう可能性が高い」として、架橋による景観の変化に危機感を表している^{xii}。あわせて、鞆の浦の風景から着想を得たともされる、スタジオジブリ製作の映画「崖の上のポニョ」が2008年に公開されたことで、当該問題は、広く注目を集めることともなった。

「鞆の浦景観訴訟」は、2009年10月に、広島地裁が、反対派原告住民の訴えを認め、工事着工を差し止める判決を出した。その判決では、鞆の景観について、「文化的、歴史的価値を有する景観として、いわば国民の財産ともいえるべき公益」であり、「その恵沢を日常的に享受している者の景観利益は、私法上の法律関係において、法律上保護に値するもの」とされた。そして、埋立て・架橋事業について、「調査、検討が不十分」で、「合理性を欠くもの」として判断された^{xiii}。2012年6月には、広島県知事が、埋立て架橋計画の撤回を表明し、それに対して、計画を推進してきた福山市長は、「腹立たしい思いでいっぱいだが、泣いて我慢せざるを得ない」として心情を吐露した^{xiv}。同計画の中止について、地域住民からは、「幼いころ泳いだ美しい海を誇りに思う一方、住みよいまちに向け架橋を望んでいた」とし、「狭い県道で車とすれ違うたびに日々味わう危険は住んでみなければ分からないだろう。まちはいまだに江戸時代のように下水道整備も防災も進まない。不便さから若い人がどんどん減っている。このままでは鞆は限界集落になってしまうのではないか」として、「複雑な心境」を述べている^{xv}。その後、2016年2月、広島高裁の控訴審で、広島県が埋立て免許の申請を取り下げ、原告の住民側が訴えを取り下げる形で、訴訟は決着した。

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 地域の視点から

鞆の浦埋立て架橋計画問題は、画期的とも言える判決で、行政側の埋立て・架橋事業が差し止められ、歴史的景観は保持されることとなったが、その一方で、利便性を重視し、架橋推進を唱えていた住民グループにとっては、わだかまりの残る結果ともなった。

2、鞆の浦埋立て架橋計画問題を主題とした授業実践の概要とその経過

鞆の浦埋立て架橋計画問題を主題に、筆者は、担当科目「歴史と観光」で、地域で形成されてきた歴史的景観を、地域資源の維持ならびに観光素材として保全するべきか、あるいは、地域住民の利便性を重視した地域開発を優先するべきか、として、受講学生の意見を問う形で、授業を展開している。

その際、三つの問いを投げかけることとしている。

第一の問いは、「港町として栄えた鞆の浦が明治時代以降、衰退していったのはなぜだろうか？」というものである。ここでは、前述した鞆の浦の歴史的な位置づけと、近代以降の変遷について理解させつつ、交通体系の歴史的経過についても、認識させることを目的としている。学習者は、近世の「北前船」や近代の「鉄道敷設」など、交通体系について、断片的に理解していても、それらの知識が体系立った認識にはつながりにくい。鞆の浦にみる、地域の交通の変遷を実感することで、断片的な知識は総合化されていくこととなる。同時に、主要交通路から取り残されたために、江戸時代以来の港町の景観が地域に残されることになったことも、認識させていくことができる。地域の歴史的景観が保持される一方で、自動車のすれ違いにも支障がある道幅の狭い道筋など生活に不便な様子が残される結果となったことで、行政側の埋立て・架橋事業が計画されたことを説明し、当該テーマの概要についても、理解させることができる。

第二の問いは、「地域住民の利便性を向上するために計画された架橋に、なぜ、反対する動きが起こったのか？」というものである。前述した埋立て架橋計画問題の経過を説明し、地域住民の利便性に寄与するものとなりうる埋立て・架橋事業は、一方で、歴史的に培われてきた鞆の浦の歴史的景観を失わせるものとして、事業計画に反対する声があがったことについて説明する。加えて、結果的に、画期的な司法判断もあり、当事業計画が撤回されるに至ったことまで説明し、それでも、その後も、住民感情にはわだかまりが残ったことも触れることとしている。そうした教員側の説明をふまえて、学習者に対して、優先すべきは、歴史的自然的状況に裏打ちされた景観の保全か、地域住民の利便性か、というテーマで、意見を問うこととする。いずれかの立場で意見表明をさせると、「景観重視派」が多数を占めることが多いが、それでも「利便性重視派」も、例年、3割程度の学生が支持表明をする。特に緊急車両の通行に支障があった点を問題視する学生が多いほか、景観にあわせて橋のデザインを工夫すべき、橋が観光資源になりうる、といった声も出てくる。それに対して、「景観重視派」からは、壊してしまった景観は二度と戻らないもの、として、景観の破壊を危惧する声や、観光資源としての景観保持の必要性を言って、開発に反対する声も多く出されてく

る。

それらの意見表出もふまえた後、第三の問いとして、「地域住民の利便性を重視して世界遺産に架橋がなされたドレスデンの事例もふまえて、鞆の浦で架橋計画が撤回されたことをどのように考えるか？」として提示し、考察を促すこととする。ドイツ・ドレスデンでは、世界遺産ともなっていたエルベ溪谷に2007年に架橋がなされ、2009年に世界遺産認定は取り消されたものの、地域住民の利便性が確保され、優先された事例がある。それをふまえて、鞆の浦において、歴史的景観の保持を理由にして、地域住民の利便性がないがしろにされたことは、果たして正当な判断だったのだろうか、と問題提起する。歴史的景観保持に前のめりであった学習者の意思は、当該事例を目の当たりにして、大いに揺らいでいくこととなる。それをふまえて、それでも、歴史的景観保持を優先したことによるどのような意義を見出せるのかという点から考察させることが重要となる。その際、ザクセン州の州都で、架橋後まもなくの2012年末の人口は約52万5,000人の大都市であったドレスデンとは異なり、鞆の浦は、前述の通り、過疎化が一気に進行していることを提示する。あわせて、観光入込者数を示せば、1998年に144万人であったものが、2015年に236万人、2016年に215万人と、近年では200万人を越える観光者を集めていることも示すことは、学習者に対して、考察の手がかりを与えていくに違いない。過疎化対策として、架橋推進派は、インフラ整備の新たなまちづくりを打開策としたわけだが、一方で架橋反対派は、歴史的な景観を保存した中での歴史と伝統を生かしたまちづくりに光明を見出したことになる。学習者には、地域の将来展望を見据えた時、いずれの判断を優先すべきか、改めて問いながら、特色をいかした地域おこしの観点から、歴史的景観を保持することの可能性について、改めて認識させていくことができる。2024年度の実践分で、全体のまとめとして、ある学生は、以下のようにコメントした（一部略）。

歴史的な自然環境に基づいた景観の保全を優先すべきだと考える。景観を守ることが、地域の歴史や文化、その土地に住む人々のアイデンティティを守ることにつながるからだ。（略）住民の便利さも重要だが、便利さを追求するあまり地域の魅力が損なわれるリスクは大きい。現代の都市計画は、歴史や文化を尊重し、持続可能な発展を目指すべきであると思う。景観を守るとは、地域の独自性を活かし、観光客を引き寄せる力にもなる。（以下略）

地域の歴史を理解し、その意味付けを通して、「その土地に住む人々のアイデンティティを守る」として地域認識を深めている。また、「歴史や文化を尊重し、持続可能な発展を目指すべき」「景観を守るとは、地域の独自性を活かし、観光客を引き寄せる力に」として、歴史的な経過をふまえて残された歴史文化資源を尊重することに価値を見出し、また、観光の位置づけからの効用もふまえて、歴史文化資源をいかに活用すべきか、思考を深めている様子が見えてくる。

おわりに

地域史への理解を通して、地域認識を深化させるためには、地域における歴史事象を、いかに「自分ごと」として理解し、認識させていくことができるか、という観点が肝要になってくる。その際、「観光」からの視点もふまえて考察することで、地域の歴史事象を理解し、また、それが現在にどのように継承され、活用されるべきか論ずることができる。鞆の浦埋立て架橋計画問題を授業化することは、地域の歴史を理解し、その意味付けを通して、地域認識を深めることができる。同時に、観光の観点から、歴史文化資源を尊重することに価値を見出し、その活用について、認識を深めることができるのである。

その一方で、依然として当地で進行する人口減と高齢化、また、観光消費額が伸び悩んでいることをふまえた観光の低迷を指摘し、「報道のイメージと裏腹に、現時点で前向きに評価できる点は乏しい」とした、歴史的な文化景観を優先したことに後ろ向きの意見や^{xvi}、観光客の増加に伴う、観光客のマナー不足を憂う見方が地元で根強く示されていることも、取り上げられている^{xvii}。地域史の理解を促し、歴史文化資源を尊重、活用することの効用は、すぐに見いだせるものではない。それらもふまえて、表層的な認識にとどまらず、地域の現状を理解し、まさに「自分ごと」として、地域の課題に向き合わせることを求められていると言えるのである。

【注】

-
- i 半澤光夫「子どもと掘りおこす地域の歴史」歴史教育者協議会編『あたらしい歴史教育』4巻、大月書店、1994年、p.13。
- ii 須賀忠芳「地域史教材を用いた歴史観の育成と地域認識の形成」谷川彰英監修、江口勇治ら編著『市民教育への改革』東京書籍、2010年、p.156。
- iii 伊藤香織「私たちの生きる都市とシビックプライド」シビックプライド研究会編著『シビックプライド2【国内編】—都市と市民のかかわりをデザインする』宣伝会議、2015年、p.176。
- iv 須賀忠芳「観光からみる地域認識と平和教育への視座—『歴史と観光』の授業実践を通して—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』152号、2024年、pp.29-43。
- v 鞆の浦を題材とした授業実践について、筆者は、既に下記の論文にまとめている。
須賀忠芳「求められる『自分ごと』の歴史観への転換—高等学校歴史学習における『問題解決的な学習』の〈現在〉—」唐木清志編著『社会科の「問題解決的な学習」とは何か』東洋館出版社、2023年、pp.126-135。
本稿は、当論文における論述をもとに、論点を焦点化しながら、まとめたものである。
- vi 福山市「歴史と鞆」<https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/site/miryoku2023/289518.html> (2025年2月28日閲覧)

- vii 福山市の統計(2025):
<https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/soshiki/johokanri/24115.html#mati>(2025年2月28日閲覧)、鞆町後地・鞆町鞆の合計人口総数(2025年1月末)。
- viii 福山市「鞆まちづくりビジョン」(2018):
<https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/uploaded/attachment/113137.pdf>(2025年2月22日閲覧)
- ix 同前。
- x 森久聡「伝統港湾都市・鞆における社会統合の編成原理と地域開発問題」日本社会学会『社会学評論』62巻3号、2011年、pp.392-410。
- xi 松居秀子「危機に瀕する『世界遺産』—歴史的港町・鞆の浦からの報告—」環境社会学会『環境社会学研究』12号、2006年、pp.77-80。
- xii 長谷川博史「埋め立て架橋計画と鞆の浦」芸備地方史研究会『芸備地方史研究』268・269号、2010年、pp.124-133。
- xiii 『朝日新聞』2009年10月2日付朝刊。
- xiv 『朝日新聞』2012年6月26日付朝刊、広島地方版。
- xv 『朝日新聞』2012年6月26日付朝刊、オピニオン。
- xvi 「生活より景観が優先された「鞆の浦」「ポニョ」の舞台も人口減と高齢化、観光も低迷(後)」『NetIB-News』2020年2月21日付
<https://www.data-max.co.jp/article/34233>(2025年2月22日閲覧)。
- xvii 『中国新聞デジタル』2024年1月19日付(最終更新:2024年3月26日)。

第5章 地域史を活用した地域活性化の取組について

—観光ツアーの企画・販売を通じた探究活動を事例に—

井川 六月(愛媛県立今治東中等教育学校)

はじめに

現在、少子化に伴う学校再編期にある愛媛県の各県立学校は、学校長のリーダーシップのもとに「学校の魅力化」に取り組んでいる。高校生が地域の一員として地域課題解決の主体者として取り組む地域貢献は、学校の魅力化の一つの大きな柱となっている。令和5年度からは、愛媛県教育委員会が「ソーシャルチャレンジ for High School 事業」を実施し、すべての県立学校が地域課題について地域社会と連携しながら解決を図る体験的な取組を行うことを通して、地域に愛着を持ち、地域社会で主体的に活躍できる生徒の育成に取り組むように求めている¹。

本校では、令和3年度より地域貢献の一環として、地域探究活動に取り組み始めた。成果発表の一環として「桜井歴史散歩～歴史ガイド、今東生が承ります～」と題した1時間程度のボランティアガイド企画を始めていたこともあり、令和6年2月11日に予讃線の伊予西条駅～今治駅間が開通して100周年を迎えることを契機に、JR四国と連携して、伊予桜井駅周辺の地域資源を深掘りする観光ツアー商品を開発することになった²。「総合的な探究の時間(地域史探究講座)」を活用して令和4年度から2年間かけて取り組んだ結果、以下の3つのコースを完成させることができた³。

文化コース「桜井漆器ができた理由～桜井商人の心意気～」⁴

歴史コース「今治に国府が置かれた理由 ～国分山から歴史を見る～」⁵

自然コース「歴史的景観“白砂青松”の桜井海岸はなぜできた？」⁶

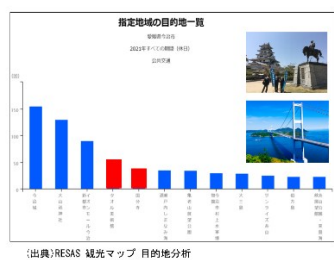
報告者は、地域史探究講座の指導者として、「地域史を活用した観光ツアーの企画・販売」を目的とした探究活動(①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現)を通して生徒の歴史的思考力の向上を試みた。本稿は、地域史学習が観光ツアーの企画・販売という条件下で行われることでどのような影響を受けるのかを、文化コース・歴史コースの学習過程から検討するものでもある。

1 「課題の設定」について

観光ツアー商品を開発するにあたり、地域経済分析システム(RESAS)を活用した。分析の結果、今治城などをはじめとする今治北部地域の定番名所を訪れる「今治観光」の実態があることが分かった。

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 地域の視点から

現状分析① 今治を訪れる観光客の目的地は今治北部地域に集中



課題解決に向けた取組 今東生が今治南部地域をPRして、南部地域へ誘客しよう!

歴史ガイド講座

私たちが南部地域のスポットとして取り上げたもの

- ★ 菴屋義助廟
- ★ 国分寺塔跡
- ★ 国分尼寺塔跡
- ★ 月原漆器店
- ★ 梶船港
- ★ 国分山
- ★ 網敷天満神社
- ★ 古国分神社
- ★ 白砂青松 (サイクリングロード)



そこで「本校のある今治南部地域（これ以後、当該地域と表現）の地域資源を観光ツアー商品としてコンテンツ化する」ことができれば地域活性に貢献できるという共通認識が生徒の間で図られた。「地域史探究講座」の開講にあたり募集定員を30名（対象学年の全生徒数は約200名）としたところ、本講座以外にも人文社会・自然科学・芸術体育の各分野から12講座が開講されているなかで定員の2倍近い50名の選択希望者が出た。このことは、高等学校の歴史の授業に取り組む生徒にとっての目的・成果—進級や進学で課されるテストに向けたもの・教師や教科書が示す「正しい歴史」の習得—とは異なる意義を生徒達を感じることで、この時点ではそれが具体的にどのようなものであるかまでは理解していないものの、地域史学習への強い動機になっていたことが伺える。

3・4年合同「総合的な探究の時間」について

- ・生徒は、学年の枠を超えて、開講講座の中から、自らの興味・関心に基づいて講座を選択する。
- ・1つの講座の探究期間は、半年（一部通年講座もある）を原則とする。
 ※前半講座（4～10月）、後半講座（11～3月）
- ・生徒は、2年間で最大4講座を選択できる。
 ※講座選択については、4年生を優先する。
 ただし、前半講座の選択において第2希望以降にまわった生徒は、後半講座の選択において最優先する。
- ・各講座の指導は、3・4学年団の教員と外部講師が行う。
 ※一部の専門性の高い講座については、他学年の教員も指導を行う。

官公庁、企業、NPO等との提携事業による専門的で体験的な学習

【開講講座の1例（R5年度）】

- ・桜井観光ガイド講座（JR四国）
- ・エネルギー講座（四国ガス）
- ・アプリ講座（LOCAL-HOOD）
- ・海洋環境調査講座（株式会社リプル）
- ・RESAS講座（LOCAL-HOOD）
- ・有機農業講座（今治市）
- ・桜井銘菓の創作講座（西洋菓子ツカサ）
- ・3Dスキャン・モデリング講座
- ・ITバスポート講座



本観光ツアーは、JR四国の旅行商品として販売され、地域史学習に取り組んだ本校生が観光ガイドを担当した。販売にあたっては、通常のJR四国の旅行商品企画と同じ扱い—価格設定をはじめ最少催行人数に達しなければツアーを実施しない等—をお願いした。JR四国の担当者からは、NHKの文化観光番組『ブラタモリ』の番組構成を参考にするようにアドバイスされた。『ブラタモリ』では、毎回番組の冒頭にタモリさんが旅のテーマを書いた「タモテバコ」を受け取る。「タモテバコ」には、旅のテーマが「〇〇が〇〇となっている理由とは？」という形で地域の特色が謎として提示される。番組は、タモリさんに旅の中で少しずつ謎解きすることで進行し、旅の最後に改めて「タモテバコ」が示され、「ご納得いただけましたでしょうか？」で締めくくられる。このアドバイスを参考に、それぞれの地域資源についての学習と並行して旅のテーマについても考えていくことになった。結果として、この「旅のテーマ＝謎解き」を

考える作業が、歴史解釈の過程となっていくのであるが、それについては後述する。

2 「情報の収集」について

J R四国の観光ツアー参加者の傾向は、高齢の方が中心で常連客が多いということであった。また、全国を周遊しているため知識が豊富で、事前に訪問地について予習して参加する方もいるようだ。そこで、一般的な教養書やインターネット上には掲載されていない情報を提供したいと考えた。桜井漆器がテーマの文化コースについては、地域在住の漆器関係者の方々からファミリーヒストリーをお聞かせいただくことにした。歴史コースについては、資料館を訪問したり、学芸員へ質問状を出したりしながら、当該地域を代表する「伊予国分寺塔跡」「国分尼寺塔跡」「脇屋義助廟」「国分古墳」「国分山城」等の史跡・文化財についての理解を深めた。生徒達は、各地域資源の略歴などについて詳しく調べて説明できるようになることが、歴史ガイドに向けた勉強であるとの時点では理解している。

3. 「整理・分析」について

「観光ツアー商品開発による地域活性への貢献」という目的を持って地域史学習を行う以上、当該地域史に「観光客が訪れたいと感じる魅力的な歴史」を発見しなければならない。情報収集の結果、当該地域の地域資源が古墳時代から明治・大正時代まで広く存在することが分かった。中でも江戸時代に当該地域が天領となったことを契機に形成されていく「漆器の町「桜井」」関連の地域資源は整理（＝コンテンツ化）されていた。しかし、長らくコンテンツの更新が行われていないため、初めて当地を訪れる人を除けば新鮮味のないものになっていた。それ以外の地域資源については、各々の地域資源単体としての紹介や解説はあるものの、地域内を周遊するモデルコース等は存在しておらず、コンテンツ化に至っていなかった。また、現在の愛媛県の県庁所在地が松山市であることもあり、「伊予国の国府は（現在の）今治市に置かれていた」という史実が、生徒はもちろん一般の方にも広く知られていなかった。そして、現在までの発掘調査の結果、国府の位置の特定には至らないものの、複数ある有力説で国府が当該地域内にあることを示していることが分かった。

このことから、かつての伊予国の国府が松山平野ではなく今治平野に、さらに今治城を中心とした城下町（現在の中心市街地）が形成された今治市北部地域ではなく、江戸時代においても寒村に過ぎなかった当該地域に置かれていたという史実には意外性があり、「観光客が訪れたいと感じる魅力的な歴史」にあてはまると判断した。そこで、「伊予国の国府が当該地域に置かれたのはなぜか」を旅のテーマに、個々の地域資源を周遊しながら謎解きを行う「ブラタモリ型観光ツアー」を行うことにした。これ以降、生徒達は時代背景や個々の地域資源が持つ歴史的意義等から、当該地域へ国府が置かれた根拠を探し始めた。根拠（仮説）の妥当性を問う態度と判別する力の修得は大学での歴史研究必須の素養である。教科書に「正解」が載っていない地域史は“謎”が作りやすいし、ナショナルヒストリーを相対化するという点でも「ブラタモリ型観光ツアー」開発を通じた探究活動は、歴史学の学び方に触れる有効なアプローチであ

ったと考えている。

4 「まとめ・表現」について

既存の「漆器の町“桜井”」のコンテンツは、当該地域での漆器生産の始まりから衰退までの経緯を、当時の道具や建物を見ながら説明するものが中心であった。学習当初は、愛媛県史や研究者の関係書籍等に記載のある「幕末から戦前戦後までの桜井漆器を巡る社会的要因の変遷」—モータリゼーションの発展による輪島等の伝統産地漆器の全国的普及やエネルギー革命を背景とした安価なプラスチック製品の普及等—という社会的要因から、漆器の町“桜井”の栄枯盛衰を説明しようと考えていた。しかし、ファミリーヒストリーを聞き取っていく中で、「別に私たちは桜井漆器を遺すことにこだわってきたわけではない」「儲けるために今何が売れるかを必死になって考えてきただけだ」という言葉が印象に残った。農閑期の漆器行商から常設店舗経営へ、更には日本初とされる月賦販売での漆器専売から百貨店経営へと巧みに業態を変化させることで時代の変化に対応してきた桜井商人たちのたぐいまれな商才・商魂という主体的要因に力点を置いて説明したいと考えた。そうすることで、「当該地域＝漆器の町“桜井”」という固定化した見方を拒もうとする関係者の意志を汲み取った歴史ガイドになるのではないかと考えた。こうした視点を持って当該地域を見ることで、従来の「漆器の町“桜井”史」を相対化することができたように思う。聞き取りを行う中で、現在は県外で生活をされている方も紹介してもらうことができ、戦前・戦後の実態を示す家族宛の手記や社史等の提供を受けた。結果として、行商期から百貨店経営までの業態変化の中で、農閑期における行商での具体的な収入額や当該地域での漆器生産がもたらした雇用の全体像についても数字として把握することができ、行商時代の商いのノウハウなども具体的に知ることができた。最終的に文化班の旅のテーマは、「桜井漆器ができた理由～桜井商人の心意気」に決まった。桜井商人に焦点を当てた謎解きを行うことで、書籍を通して確認された史実にファミリーヒストリーが加味された「顔の見える歴史ガイド」を行うことができたと考えている。

「今治に国府が置かれた理由」を旅のテーマに謎解きをすることになった歴史班では、この謎を解いていく中で新たな3つの問いができた。

1. 日本三大急潮流として知られる来島海峡を通る船の停泊地はどこか。
2. 古墳が島嶼部に数多く造営されているのはなぜか。また当該地域の前方後円墳が海に面した高所にあるのはなぜか。
3. ヤマト政権が国府選定期間に重視していたことは何か。

この3つの問いは、インターネット上に掲載されている大学研究者等の論文と愛媛県埋蔵文化財センター提供の参考文献(学術論文・専門書籍)を読み解くことで解決することができた。

1. 当該地域にある多数の川と大型ラグーン(潟湖)が津や交易・停泊地として利用されていた。
2. 航海者が安全な航路を確認する目印等の「海の古墳」としての機能を果たしていた。

3. 国府決定前のヤマト政権にとって、大陸や北部九州から鉄をはじめとする先進技術・文化を入手するために瀬戸内海上交通を掌握する必要があった。

こうした小さな謎を解決していく中で、私たちは2つの史実に注目した。1つ目は、国府選定の直前ともいえる663年の白村江の戦いで敗戦により、ヤマト王権は朝鮮式山城をはじめとする瀬戸内海航路における防衛拠点の整備に迫られていたこと。2つ目は、大陸からの入手が困難となった鉄の国産化に取り組んでいたことである。そこで、改めて愛媛県埋蔵文化財センターがまとめた当該地域に関する近年の発掘調査の成果を見直し、以下の事実を読み取った。

- ・国内で最も早い時期の鍛冶遺構が発見されており、原料（浜砂鉄や木炭）供給地でもあった。
- ・古代には、四国内唯一の官営製鉄所が置かれている。

最新の考古学の成果は、「鉄と当該地域の深いつながり」を示していた。こうして、当時の緊迫した東アジア情勢と照らし合わせると、海の難所である来島海峡を臨む当該地域を重視し、ヤマト王権が国府を置いたのは必然であったとする仮説＝謎解きを完成させることができた。副題は「国分山から歴史を見る」とした。当該地域のその後の歴史を見ていくと、古墳の造営が行われなくなる古代・中世においても山城として使用されていたからである。例えば南北朝時代には後醍醐天皇亡き後の南朝勢力が四国での勢力回復のために新田義貞の弟の脇屋義助を派遣しており、国分山のふもとには当地で亡くなったことを示す廟がある。また、豊臣政権の四国平定過程では福島正則が、関ヶ原の合戦後には藤堂高虎といった有力武将が、この国分山を任されている。その後、天下泰平の江戸時代となって藤堂高虎が現在の今治城を北部地域に築くことで、国分山の防衛拠点としての役割は終わる。

歴史班の「今治に国府が置かれた理由～国分山から歴史を見る～」と題した謎解きツアーを通して、国府選定時の国際情勢の変化が鉄生産の実績を持つ当地を国府選定へ導くと、その後も当該地域の地政学的重要性から、日本の歴史の転換点の最前線に立ち続けてきたことを参加者に伝えることができた。ツアー参加者には国分山の高台から瀬戸内海の眺望を楽しんでもらったが、その景色は、当該地域のたどってきた歴史を理解することで格別なものとなったはずである。

おわりに

歴史班の探究成果を日本考古学協会主催の高校生ポスターセッションに応募したところ、優秀賞を受賞することができた。従来の伊予国の国府選定理由に最新の考古学的見地を取り入れることで、新たな歴史解釈を加えたことが評価されたのではないかと考えている。受賞後も今治市立図書館での市民歴史講座の講師を任されたり、郷土史愛好家の方から同一テーマについての私見をまとめたレポートへ意見を求められたりするなど、大きな反響があった。高校生による地域活性を目的とした観光ツアーガイドを目指した探究活動ではあったが、「ブラタモリ型観光ツアー」の手法をとったことで学びが深まり、探究成果がツアー参加者のみならず多く

の歴史愛好家の心を掴むことができたことに喜びを感じている。

改めて、「地域史を活用した地域活性化（観光ツアーの企画・販売）」を目的とした探究学習は、歴史を学ぶ楽しさを体感する有効な方法であると感じている。実際に、本探究活動に参加した生徒の中には文学部史学科へ進学した者がいる。たとえ探究成果が新たな歴史解釈には至らなかったとしても、実証主義的なプロセスを経ることの重要性を理解することで、様々な情報を批判的に解釈することができるようになる。また、歴史研究の道に進まなくとも自分の関心のある歴史的な出来事や人物について、より妥当な歴史を構築する力を身に付けることができるようになると考えられる。日常生活におけるSNS情報のファクトチェックを行う姿勢も自然と養われるのではないか。

最後に、地域史学習が観光ツアーの企画・販売という条件下で行われることの影響について検討する。今回の本校生による「ブラタモリ型観光ツアー」はJR四国の「四国家のお宝ツアー」の商品シリーズの1つに位置付けられるものである⁷。JR四国のHPでは「四国家のお宝」を「四国に存在する地域資源・文化資源を掘り起こし、地域と協働して付加価値付けされた観光素材・文化素材に磨き上げ、観光による地域活性化を目指す取り組み」と記している。今回の本校生による観光ツアー商品開発に関していえば、「地域資源の付加価値付け」の作業が「タモテバコ」に記された謎解きテーマの設定ということになるであろうか。人口減少時代の観光戦略として、地域資源の掘り起こしによる「地域の履歴書」を題材とした旅のテーマ設定は今後ますます求められるだろう⁸。ナショナルヒストリーが、教科書を通した「日本人」としての「正しい歴史」の学びを求める一方で、身近な地域史は、対象に接近する主体のアイデンティティに応じた形で歴史を無限に構成し、解釈する余地が残されている。これまでナショナルヒストリーの観点から対象外とされてきた地域資源に注目し、観光素材に磨き上げる過程は、歴史が「暗記するものではなく「楽しむ」ものであったことに気付かせる取組としても価値があるだろう。

本校生による2年間の地域史学習の成果は、JR四国の商品となったことで付加価値を得た。今回の商品販売を通して、本校の地域史探究学習が注目されたことで、予讃線開通100周年記念ツアーの販売が終了した現在も、「総合的な探究の時間（地域史探究講座）」の活動は、所属生徒が毎年入れ替わりながら継続できている。下級生は、記念ツアーを引継ぐとともに、学習の過程の中で生まれる小さな謎を種にした新たな旅の「テーマ＝謎解き」の設定に取り組み始めている。

観光ツアーの企画・販売を通じた探究活動は、「ブラタモリ型歴史観光ツアー」の鍵である「旅のテーマ」を深掘りすることで、生徒の歴史的思考力を高める活動となることが分かった。探究活動を伴走した報告者にとっても、歴史研究の方法知についてのコーディネーター役にとどまらず、受験指導という「歴史を教える立場」から解放され、地域活性への貢献という目的を生徒と共有し、「共同探究者」として地域の歴史と向き合う時間となった。

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 地域の視点から

主な参考文献

- 今治桜井漆器協同組合『伊予桜井漆器史』原印刷株式会社、1984年
- 魚津知克『学術研究集会 海の古墳を考える I 発表要旨集』、2011年
- 愛媛県埋蔵文化センター『伊予の鍛冶』愛媛県埋蔵文化センター・愛媛県生涯学習センター共同企画展資料、2021年
- 「今治平野の弥生集落調査『伊予の弥生集落』愛媛県埋蔵文化センター・愛媛県生涯学習センター共同企画展資料、2022年
- 愛媛県『愛媛県史 原始・古代 I』、1982年
- 大成経凡『しまなみ海道の近代化遺産—足跡に咲く花を訪ねて』創風社出版、2005年
- 小田中直樹『歴史学ってなんだ?』PHP新書、2004年
- 『歴史学のトリセツ—歴史の見方が変わるとき』ちくまプリマー新書、2022年
- 川岡勉『中世の地域権力と西国社会』清文堂出版株式会社、2006年
- 河上重雄『母往き去りし道 —伊予桜井漆器異聞』加藤美津子、2016年
- 谷若倫郎『妙見山一号墳』、2008年
- 満園勇『日本型大衆消費社会への胎動—戦前期日本の通信販売と月賦販売』東京大学出版会、2014年
- 南塚信吾・小谷汪之編著『歴史的に考えるとはどういうことか』ミネルヴァ書房、2019年
- 村上恭通「今治の歴史と鉄器生産」『伊予の鍛冶』第1回 歴史考古学講座発表資料、2021年

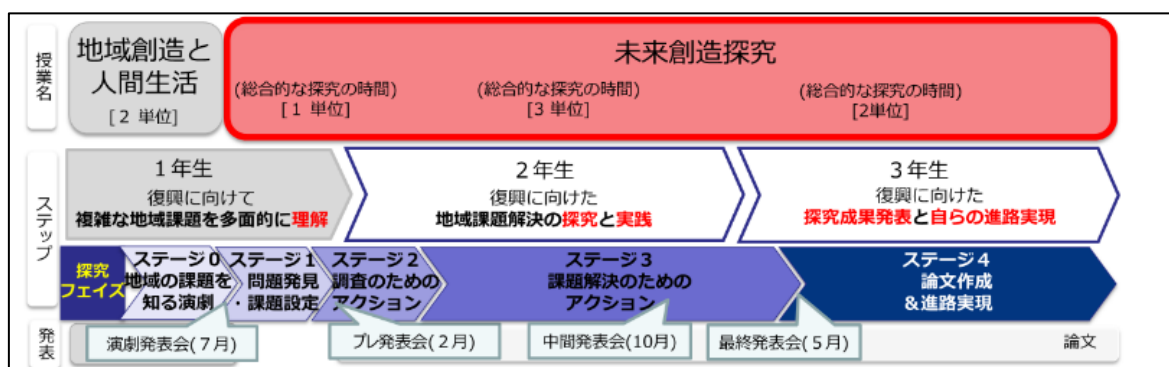
- 1 次のHPを参照。<https://ehime-c.esnet.ed.jp/koukou/index.htm>
- 2 次のHPを参照。20211126sakurairekisisanpo.pdf
- 3 次のHPを参照。https://www.jr-eki.com/data/treasures_of_shikoku/pdf/highschool.pdf
- 4 次のHPを参照。<https://imabarihigashi-s.esnet.ed.jp/plugin/blogs/show/13/32/2766#date0211>
- 5 次のHPを参照。https://www.jamp.gr.jp/wp-content/uploads/2019/12/123_07.pdf
- 6 次のHPを参照。<https://imabarihigashi-s.esnet.ed.jp/plugin/blogs/show/13/32/2901#date0310>
- 7 次のHPを参照。<https://www.jr-eki.com/zipang/>
- 8 次のHPを参照。https://www.jamp.gr.jp/wp-content/uploads/2019/12/123_07.pdf

地域(ローカル)の課題と世界(グローバル)の課題を重ねて考える「探究」学習

林 裕文 (福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校)

はじめに：問題の所在

著者の勤務校である福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校は2011年3月11日に発生した東日本大震災後の2015年に創設された学校である。生徒たちは「未来創造探究」(総合的な探究の時間(以下、総探))で東日本大震災とそれに伴う原発事故という人類が経験したことのない前例なき複合災害を乗り越えて新たな地域社会を創るために各自が取り組むべき課題を設定し、日々探究アクションに取り組んでいる。現在震災から14年が経過したが、被災直後の原子力発電所への対応から被災者の生活環境の整備、風評被害、処理水・汚染土の問題など現在でも形を変えながら課題は山積している。この学校で生徒たちは自分たちの興味関心(Will)と社会課題(Need)の接点を探ることに試行錯誤しながら学んでいる。ふたば未来学園では探究学習をカリキュラムのコアに据え、開校から10年間にわたり文部科学省の指定事業を受けながら探究学習の効果的な指導方法について研究開発してきた。なお、3年間の探究学習のスケジュールは以下の表の通りである。(総合学科の必修教科「産業社会と人間」は学校設定科目「地域創造と人間生活」(通称：人生)で代替している。)



探究学習は全教員が担当するが、私は探究学習を統括する部署の主任として、また地理歴史・公民科の教員として、どのようにして地域課題解決型の学習を進めるかやどのように指導体制を整えるかという課題を持って自らも探究している。探究学習において、生徒が最も困難に感じるのは生徒自ら課題設定をする場面である¹。しかし、他者には課題と認識しなくても、自身が課題と感じるテーマこそが最良の探究テーマとなりうる。地理歴史・公民科の教員にとっては普段の授業から地理的な視点(空間軸)や歴史的な視点(時間軸)を駆使しながら多角的な視点から課題をとらえるため、それを現代的な課題と重ねて課題設定をさせることは教員の中で最も得意とする教科である。そのため、地理歴史・公民科の教員は生徒の探究学習においても授業内の知的好奇心の喚起においても課題設定の段階に積極的に関わ

¹ リクルート進学総研「高校教育改革に関する調査 2024」報告書,
https://souken.shingakunet.com/research/pdf/2024_kaikaku_houkoku.pdf (最終閲覧日 2025. 2. 28)

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 地域の視点から

っていく必要がある。そのような課題意識で、いくつかの実践事例を取り上げ、現状においてさらに探究的な学びにつなげるための課題も検討する。

1 地域を見るうえでの視点（「地域」をどのように設定するか）

全国の高校における地域探究学習の実践事例として、地域振興や少子高齢化・過疎化対策、地元の特産品を活用した商品開発などの地域の課題解決型学習と関連している場合が多い。学校のスクールポリシーや総探のカリキュラムコンセプトが地域と協働することに偏りすぎると、生徒の興味・関心と地域の課題解決に関する地域からの要請がミスマッチとなることもあり、総探の趣旨を歪めてしまうこともある。高校生から「総探では必ず「地域」のことを探究しなければならないのか？」という質問も数年前から様々な学校で聞く。探究に取り組む高校生と指導する教員との間で「地域」のとらえ方が異なる場合もあり、高校生は「地域」を自分が住んでいる「地元」ととらえがちである。そのため、「地域」の定義を明確にする必要である。地域は1. 自分たちが暮らす地域（ローカル）、2. 日本を含む国（ナショナル）、3. 複数の国を含む地域（リージョナル）、4. 世界（グローバル）の4つからなる重層的な空間²として捉えられる。福島の場合、テーマ設定によって多様な他地域との比較が可能だ。その他地域の固有性を学びつつ自分たちが暮らす地域との比較を通じて共通点・相違点を確認しながら他地域の抱える課題に取り組む人たちと連帯していくことで「当事者」を超えた「共事者」³になれる。生徒が探究に取り組む「地域」とはどの層にあるのかを意識させながら、「地域」は固定的なものではなくテーマ設定によって拡張・収縮するものであり、他地域のことを学びながらそこで得た視点で自分の地域に還流させるなど、4つの「地域」を往還しながら探究に取り組みせることが重要である。このような学びから自らの生き方・在り方が徐々に明らかになり、自分が将来どの地域を活動フィールドにするのかを定めたり、総探を通じて地域の住んでいる地域に対する愛着が高まることが期待できる。

2 実践事例

（1）総探の授業内（「未来創造探究」）での取り組み

1) 地域の偉人の足跡を明らかにして顕彰する

【概要】生徒Aは中学生の探究学習で、地域の魅力の掘り起こしに挑み、富岡町の夜ノ森桜並木に興味を持った。夜ノ森桜並木は福島県の桜の名所であり、震災前から毎年春に桜祭りが実施されていた。この桜並木のルーツは明治末期～昭和初期の事業家・政治家だった半谷清寿（はんが いせいじゅ）が夜ノ森原野を開拓し、入植記念として宅地周辺にソメイヨシノを植樹したことであった。半谷清寿は事業家だった1906（明治39）年に『将来之東北』を刊

² この四層の整理は小川幸司・成田龍一編『世界史の考え方 シリーズ歴史総合を学ぶ①』岩波新書、2022年の「世界史」認識によるものである。

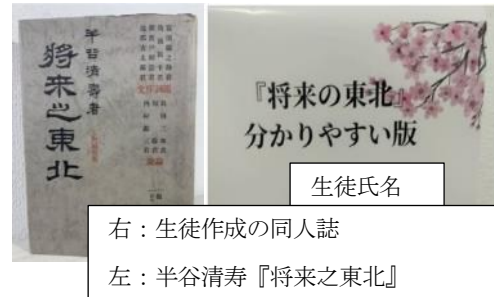
³ 小松理虔『新復興論 増補版』ゲンロン、2021年

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 地域の視点から

行し、窮乏する東北地区について、現在の東北地区の展望について述べた。刊行当時の東北地区は凶饑や磐梯山の噴火、三陸地域の津波など自然災害が頻発する時期であった。生徒Aは東北の今後の展望について述べたこの本を読むことは、東日本大震災を乗り越えるヒントになるのではないかとこの本に興味を持ち、この本を手に入れて地域住民との読書会を行った。この読書会を経て、明治末期の東北地区の窮乏と、東日本大震災後の東北の課題感が重なり、今こそ半谷清寿の思想を現代の人も読むべきだと考えるようになった。

【学びの成果】 具体的な探究アクションとしては

①年表作成、②地域住民との読書会を開催、③『将来之東北』を精読し、要約版を出版（同人誌として作成）④読者との意見交流、⑤半谷清寿の思想史研究者とのオンライン意見交換会、⑥外部発表会（マイプロジェクト福島県 SUMMIT）に出場などを行った。



【課題】 生徒Aは半谷清寿の『将来之東北』の内容を広く双葉郡の住民に共有し、住民と協働しながら震災復に向けた対話のきっかけにしたいと考えていた。しかし、探究活動を通じて自身の進路希望が心理学を学ぶことであると明確にし、探究テーマと進路希望のギャップに悩んでいる。そして、新たな課題設定に向けて試行錯誤を重ねている。

2) 地域の資源（神社・仏閣など）を活かした地域活性化への取り組み

【概要】 生徒Bは双葉郡双葉町（福島第一原子力発電所立地町）出身の生徒である。2023（令和4）年8月30日に避難区域が一部解除され、町民が戻ってきた。しかし、町の居住人口は2024年10月現在で170人程であり、震災前には約7000人いた住民はほとんど戻らず、双葉町に新たに移住してくる住民の方が多いのが現状である。生徒Bは演劇部に所属し、高校1年次には双葉郡葛尾村で受け継がれてきた「宝財踊り」を演劇部の生徒18名が劇「宝宝宝（ほーほーほー）」を通じて踊りを披露し、伝統芸能を守っていくことの大切さを劇で表現した。この経験を通じて、生徒Bはもともと「神社」と「交流」に興味があり、自分の探究でも伝統芸能を活用して街を活性化するための交流の在り方について探究テーマを設定し、探究アクションを開始した。東日本大震災・原子力災害伝承館で地域芸能について研究をしている方との話で、自分の出身の双葉町でかつて踊られていた「前沢の女宝財踊り」を知り、この踊りを体験するイベントを企画した。



葛尾村の宝財踊の様子(本校演劇部)

【学びの成果】 イベントでは前沢の女宝財踊保存会の方にサポートいただき、約60名の参加者が宝財踊体験会に参加した。また、この活動は毎日新聞全国版で取り上げられ、このことがきっかけとなり保存会が東京で公演

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 地域の視点から

を行うことになることとなった。高校生の探究学習が結果として双葉町の伝統芸能を町外に広く発信する機会を創出することとなった。

【課題】生徒Bは高校卒業後情報系の大学への進学を決めた。この生徒も生徒A同様に高校時代に取り組んだ探究学習と進学先の学校で学びたい学問領域がかけ離れていることがでは課題として考えられている。

(2) 部活動（社会起業部）での取り組み

【概要】本校では社会起業部という部活動があり、本部・カフェ・製造の3つのチームに分かれて活動している。その中で、本部チームは「地域社会を知る、伝える、盛り上げる」を目標に活動を続けており、ホープツーリズムとして福島県双葉郡にきた他県の高校生と交流会を通じて「福島の今」を発信したり、他地域での発信活動を続けている。本校では双葉郡の地域課題解決を目指した探究学習に取り組んでいるが、「福島の課題」を地域固有の課題としすぎると、その地域だけが取り組むべき課題となりがちである。そのため、幅広い方々と課題感を共有していくためには、他地域と課題感を連帯しながら学びあう関係を作っていくことが必要である。そのような視点で取り組んだ栃木研修と沖縄研修について紹介する。

1) 栃木研修 (2024. 7. 25-26)

日本公害史の原点とされる足尾銅山鉍毒事件を学ぶために日光市足尾地区を訪問した。下野新聞「アカガネの声」（足尾銅山閉山50年に合わせて2023年1~6月に連載）がきっかけとなり、本校の社会科教員の『足尾から福島を見つめる』という視点をもって福島の課題と向き合ってほしいという願いから、この研修が企画された。事前学習として、「アカガネの声」の連載を読み、研修に臨んだ。研修では、足尾地区のフィールドワークや震災当時大学生だった双葉郡出身の女性からお話を伺っ



「いろんなものが事故で変わったけど、友達に会うとほっとしたし、浪江を改めて大事なものととらえられた。事故があってから家を直接見に行けていない。もうすぐ取り壊しになるから、見に行こうかなと。人がいなくなって、ガランとなった双葉高校を見ると原発事故がなかったらな、と思うことがある。風景を見ると、何気ない、どうでもいいことを思い出す。地元に戻らないと思いだせないこういうことを、私はいくつこれから思い出せるんだろうな、と思う。せめて事故が意味のないことにならないように、私たちがしなくちゃいけないことはあるしできるときにできる人が学んだり知ったりして共有したり、そういうことの積み重ねでしか、よりよい未来は生み出せないのかな、って。

日々あふれる理不尽なことの背後には、たくさんの当事者がいて、傷つく方もいる。社会問題に広く関心を持ち続けられること、学び続けること、伝えることをぜひみんなですていただければと思う。

小さな犠牲を容認する社会は、いずれ大きな犠牲も許してしまうのではないかな。
人々の故郷が奪われないことを考えていきたい、考えていってほしい。」

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 地域の視点から

た。生徒たちは女性の以下の言葉が印象に残ったと述べている。

2) 沖縄研修 (2024. 12. 21-23)

【概要】2泊3日の沖縄研修では普天間基地のフィールドワークや嘉数高台公園（沖縄戦の激戦地区）、摩文仁の丘・ひめゆり平和祈念資料館等を見学した。福島と沖縄の共通項は「犠牲のシステム」⁴である。福島と沖縄は、原発事故と米軍基地問題という異なった状況に置かれているが、経済成長と安全保障という日本国民全体の利益のために特定の地域や人々が不利益を被る「犠牲のシステム」言わば「課題の相似形の構造」という共通の構造を持っている。以下は沖縄研修に参加した生徒の感想である。

生徒A：沖縄本島の南／北問題、東／西問題（＝南／西が経済的に繁栄）は本土の縮小版のようだな、と。戊辰戦争で敗れて劣位に置かれている福島＝東北と似ている。沖縄も琉球王国だったが併合されている。両者ともNIMBY 施設を押し付けられているのは偶然？負けた側がそれを引き受けるのは仕事のメリット（自然な帰着？）があるかもしれないけど、やり方としては違うなと思う。

生徒C：普天間、オスプレイ墜落とか小学校にヘリの窓が、という話は知っていたけど大学に落ちたことは知らなかった。そんな危険なところに、それでも住むというつらさ、すごさ、決意を垣間見た。辺野古、沖縄でサンゴ復活プロジェクトなどを行っている一方、環境に悪い影響を与えられているのが残念。

経済的恩恵とリスク、安全をとるかリスクをとるかという問題は資本主義の問題や水俣の環境問題ともつながるのかな、と。PFAS（有機フッ素化合物）もそうだけど、住んでいる人が決断を迫られる。うーん、苦しいな、と。

【学びの成果】栃木研修・沖縄研修双方ともに福島と他地域の共通点や相違点をまとめつつも、より自分の暮らす地域（ローカル）についての理解を深めることができた。また、足尾や沖縄で自分たちの地域のことを語る人たちの戦いの歴史を知ること、福島の課題がこれからも続く「現在進行形の歴史」であり、この成果を記録に残し語り継ぐこと自体が次の世代のための貴重な歴史資料となることを知ることができた。

【課題】本校の探究学習は生徒個人の興味や関心を重視した個人探究がメインであり、部活動全体で取り組んだ学習活動がチーム探究をなりにくいのがもったいないところである。ただし、部活動として福島と他地域を比較しながら「福島の今」を発信するというコンセプトは継続した活動となっているのだが、ここでの学びの成果を発表する場が設定しにくいことも次世代に歴史資料を残す難しさを抱えている点である。

⁴ 高橋哲哉『犠牲のシステム 福島・沖縄』集英社新書、2012年

(3) 生徒会活動から探究学習に繋げる

【概要】2022年2月にロシアによるウクライナ侵攻が発生し、ニュース等で戦闘の状況が毎日報道される中、1年後に生徒会メンバーだった生徒Dから「ウクライナの方々のために何かできないか」という声が上がリ、生徒会メンバーが議論を重ねてウクライナの子どもたちにメ



生徒会行事の記念撮影

ッセージを届ける企画を立ち上げた。生徒会長Eは2011年の東日本大震災の直後に避難する原体験があり、避難先で台湾の学生からもらった手紙に勇気をもらい、今も支えとして持ち歩いていた。小さなカードが誰かの支えになることを本気で願い、全生徒で数百枚の手紙を書き、ウクライナ支援に入るNPO法人の代表を通じてウクライナに届けるプロジェクトを進めた。また、代表からウクライナについて学ぶ生徒会行事を企画した。

生徒会企画書 (2023年2月) (一部抜粋)

ウクライナ侵攻から間もなく一年が経とうとしています。私たちは日本という紛争のない国に生まれ平和な生活を送ることが当たり前ではないということを日常的に感じる場面があまりないと思います。しかし、普段学校でこうして勉強をしている間にも死を間近に感じ苦しんでいる人たちがいるのです。そこで、全校生でウクライナの現状について伺う機会を設け、自分たちにできることを考え現地の子どもたちにメッセージを届ける企画を実施したいと考えています。この企画では、私たち同世代が行動を起こし手紙を届けることで、現地の子どもたちに勇気や希望の光に繋がってほしいという願いを込めています。また、日本という平和な国に生まれ、他人事として捉えがちな「戦争」という問題を身近に感じ、私達自身が自分事として学生という立場だからこそできることを考え、世界に目を向け行動していくきっかけとします。

し、エンパシーを高めるための高校生ワークショップの実践を繰り返した。戦争というグローバルで壮大なテーマであるが、福島原発事故とウクライナの戦争という人類が引き起こした厄災で自分の住んでいた身近な地域から移住せざるを得ない現状をエンパシーというキーワードで結び、「高校生の私にできること」という具体的なアクションに落としこんだ。

おわりに：地域（ローカル）と世界（グローバル）をつなぐ「グローカル探究」

紙面の関係で3つの事例紹介となったが、ふたば未来学園高校での探究実践の事例をご覧になりたい方は、WWL事業研究開発報告書⁵を参照されたい。この報告は生徒の自主的歴史研究活動支援のための特別部会向けの論稿だが、総探の授業時間だけでは探究学習の完結は難しい。生徒が十分に探究学習を行うには、総探の時間だけに限らず、普段の教科の授業（歴史総合や日本史・世界史探究）や部活動、生徒会活動や課外活動など、学校のあらゆる教育

⁵ ふたば未来学園 HP より令和5年度指定 WWL コンソーシアム構築支援事業 研究開発報告書 第1年次
<https://futabamiraigakuen-h.fcs.ed.jp/file/15764> (最終閲覧日 2025.2.28)

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 地域の視点から

活動で生徒が探究的な学びを実現できる学校の環境整備が必要である。総探のテーマ設定を支援するために、地理歴史・公民科の教員は地理的な視点（空間軸）や歴史的な視点（時間軸）を活用し、身近な地域（ローカル）な課題と世界（グローバル）な課題を往還させながら、多角的な視点から課題把握（グローカル探究）を促すことができる。我々教員が探究学習を支援するためにできることはまだまだたくさんある。生徒が史実を理解するだけでなく、歴史的な文脈の中で「地域」を理解することも重要な歴史的思考力の育成につながる。

【事例紹介：高校生の探究成果】

戦跡から知る蓋井島の軌跡

山口県立下関西高等学校 人文社会科学科 2年

【要旨】

下関市の戦跡について調べたところ、かつて蓋井島に要塞が建設されたことがわかった。戦時中、蓋井島は、戦場にならなかったため、当時の施設が比較的よい状態で残っている。そこで現地調査や文献調査により、なぜ蓋井島に要塞が建設されたのか探った。調査の結果、物資を輸送するために使用された関釜連絡船や関門海峡に掘削された関門トンネルを防衛する必要があったことがわかった。蓋井島の戦跡は、これらを防衛するためのものであった。そこで、蓋井島に残された貴重な戦跡を、後世に伝えるため、保存し残していくための方策について研究した。

1 研究の目的

下関の戦跡について調べたところ、蓋井島の存在を知った。蓋井島は戦場になっておらず、当時の状態をおおむね残している。そこで、実際に足を運んで調査し、なぜ軍事要塞が設置されたかや、どのように活用しようと考えていたのかを調べた。そして、蓋井島の戦跡を後世に伝えることにより、戦争の必要性を訴えることを今回の活動の目的とする。

2 基礎

(1) 関釜連絡船

1905年から1945年にかけて下関から朝鮮半島南端の釜山の間を運行していた鉄道連絡船である。論文内で撃沈された関釜連絡船とは、崑倫丸(こんろんまる)である。

(2) 関門海峡

日本の本州(山口県下関市)と九州(福岡県北九州市)を隔てる海峡である。

(3) 関門トンネル

関門海峡をくぐって本州と九州を結ぶ鉄道用の海底トンネルで、第二次世界大戦中の1942年開通した。

(4) 八幡製鉄所

現在の福岡県北九州市に設置され、1901年に操業を開始した製鉄所である。第二次大戦前には日本の鉄鋼生産量の過半を占める国内随一の製鉄所だった。現在は世界文化遺産に指定されている。

(5) 勝山御殿

山口県下関市の勝山に位置する日本の城である(図10)。本論文においては、蓋井島の史跡指定を目指しており、史跡指定を受けた例として紹介している。

3 研究方法

次に示した四つの手順によって研究を行った。

(1) 島内にある様々な戦跡について、それらが建設された時期や施設の内容、性能などを資料で調査する。

(2) 戦跡が建設された時期と、その当時に起こった歴史的な事象を照らし合わせ、関連性について考察する。

(3) 実際に蓋井島に行って、戦跡の現状を調査し、保存に向けてどのような管理が必要かを考察する。

(4) 島民の年齢層を調べ、蓋井島の戦跡を保存するうえで島民がどのように関わることができるかを考察する。

4 結果

蓋井島のおもな戦跡として、次の三つが残っていることがわかった。

(1) 砲台の跡

壁が迷彩柄で塗装されていた。電線が張り巡らされていて、5人で一つの大砲を操作した。

(2) 大隊本部

山に囲まれており、敵から見つかりにくくなっている三階建ての建物である。大隊本部の中から、近づいてくる船を監視できるようになっている。

(3) ダミー砲台

およそ1か月かけて、島の女性と学生が制作した。全国的にも珍しい戦跡であるが、老朽化によって壊れかけている。



図1 蓋井島の砲台の跡（現地で撮影）



図2 大隊本部（現地で撮影）



図3 ダミー砲台『下関空襲の全貌』より

蓋井島の軍備について調べたところ、第一砲台は戦艦攻撃、第二砲台は航空機攻撃用の大砲として設置されたことがわかった。しかし、蓋井島に設置された高射砲の性能は十分ではなく、防空としての機能を果たすことは難しかったと考える。そこで、このたびは、海上の防衛に絞って、要塞を設置した目的を考察することにした。

島内の遺跡を調べたところ、建設されたのは1935年から1940年であることがわかった。この頃の国内外および下関付近の出来事として、関門トンネルの開通や、関釜連絡船の撃沈などがあり、この二つが蓋井島に要塞を建設したことと関連があると考えた。

また、現地調査で、保存が行き届いてない戦跡を確認することができた。特にダミー砲台については、全国的にも珍しい施設にもかかわらず、関心が向けられないがため、適切な保存がされていないことがわかった。

蓋井島の住民の方々の年齢層を調べたところ図5のようになっていることがわかった。図5より、蓋井島は高齢化が進んでいることが確認され、このままでは要塞の過去を知る人がいなくなり、蓋井島の情報が正しく伝わらないことが予想される。しかし、若者も一定数在住しており、これらの人々が語り部となることが期待される。

5 考察

日本は、1894年(明治27年)に起こった日清戦争に勝利し、朝鮮に対する支配を強め、1910年に朝鮮を植民地化した。また、1904年に起こった日露戦争に勝利した日本は、満州に勢力を拡大し、1932年に満州国を建国した。さらに、1914年から始まる第一次世界大戦で、中国進出を進めた日本は、イギリスやアメリカから非常に警戒されるようになった。

そのような中、日本は日露戦争終了後の1905年に関釜連絡船を就航させた(図7)。これにより、下関から朝鮮や満州への物資や人員の輸送が可能になった。下関西高等学校の百年史によると、1934年から1939年の6年間、関中(現在の下関西高等学校)の生徒が関釜連絡船を利用し



図4 実地調査を行ったメンバー

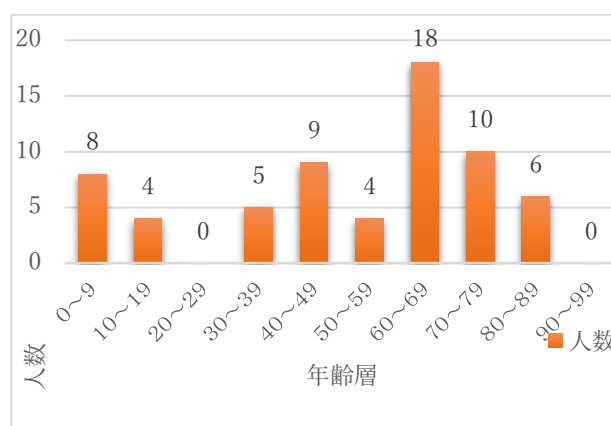
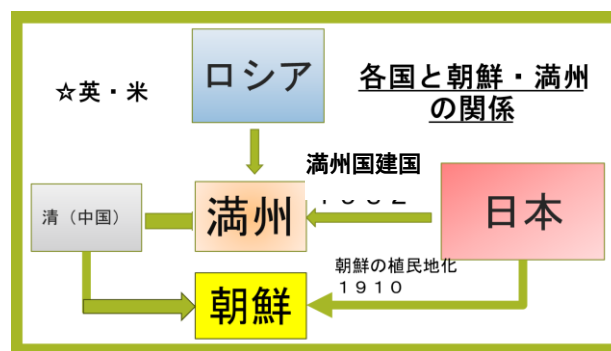


図5 蓋井島の年齢層別人数



て朝鮮・満州へ修学旅行に行き、見聞を広めたという記述がある。このことから、民間人も関釜連絡船を使用していたことが伺える。蓋井島の要塞は、日本にとって重要な役割を担う関釜連絡船を他国の攻撃から守り、釜山への輸送経路の確保と派遣していた満州開拓員の保護などを主な目的として設置されたと考えられる。しかし、1943年10月5日に関釜連絡船はアメリカの潜水艦に攻撃を受け、沈没した。こうした関釜連絡船の沈没を受け、日本は関釜連絡船を保護するため、響灘の防衛をより一層強化しなければならなくなったことが伺える。

同様に、蓋井島に要塞が設置されたころの出来事として、関門トンネルの開通が挙げられる。従来下関は、関門海峡を利用した海上輸送が盛んにおこなわれていた。当時の下関は、本州と九州を結ぶ都市として機能していたと考えられる。海上輸送に加え、関門トンネルによる鉄道輸送が行われるようになり、関門海峡の防衛は重要となった。

また、九州には、図8に示した八幡製鉄所が、設置された。八幡製鉄所は、鉄を生産する重要拠点であり、生産された鉄をはじめとする物資を本州に運ぶ経路としても、関門海峡の海上輸送や関門トンネルの鉄道輸送が利用されていたと考えられる。日本の国力を維持するための一翼を担っていた、関門海峡の輸送を維持するため、関門海峡の防衛は急務であったと考えられる。そして、先ほども述べた通り、蓋井島の軍備は航空機より戦艦への攻撃に向いていたと考えられるため、要塞の主要目的は輸送経路となる関門海峡・関門トンネル等の防衛や関釜連絡船および乗客の保護を担当していたと考える。

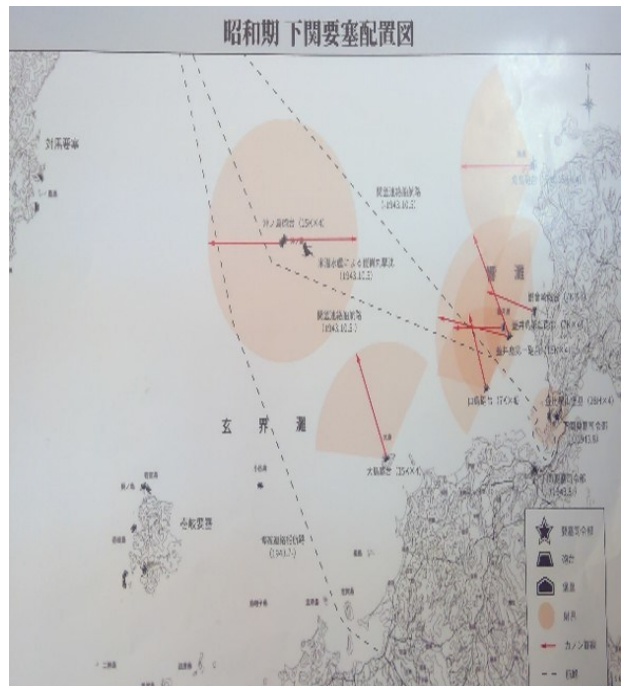


図7 関釜連絡船の航路（『下関要塞2021』より）



図8 1900年の八幡製鉄所（『東田ミュージアムパーク』より）

6 結論

蓋井島の軍事要塞は、日清戦争や日露戦争によって日本との関係が悪化した国々から、日本と植民地である朝鮮・満州との移動手段である関釜連絡船およびその航路を守るために、また、日本の重要施設である八幡製鉄所からの物資の輸送など陸と海の交通の要衝である下関(関門海峡・トンネル)を守るために設置されたと考えられる。本土決戦が想定される中、要塞を建設した目的は、こうした時代背景によるものと考えた。しかし、実際に蓋井島の要塞が攻撃されたという事例はなく、いまでも当時の姿を残している。一方、図10のように、下関市街はアメリカ軍の空襲により多くが焼失し、当時の名残は少ない。したがって、蓋井島に残された施設は、戦時中の下関の様子を知るうえで重要な戦跡であり、その保存価値は高いと考えた。そこで、蓋井島の戦跡を保存するための有効な手段として、史跡指定を目指すと考えた。史跡指定とは、適切な処置がされていない遺跡に対して保護を行い、復元を支援する活動の一つである。この史跡指定を承認されれば、該当する遺跡に資金が提供され、保存に向けた保全工事等を行うことができる。また、史跡指定されるための条件として、遺跡が設置された時代背景を含め、遺跡の全容を把握する必要がある。そしてなによりも遺跡保護に対する住民からの理解が求められる。今のところ、蓋井島の戦跡について、調査や研究は進んでいるが、住民の意向については、まだ確認ができていない。図11に示した勝山御殿は、下関市勝山地区の住民のみなさんの意向により、史跡指定を受けた例である。今後、こうした例を参考にしながら、住民へのインタビューを行い、島民の総意による史跡指定を目指して研究を深める必要がある。

蓋井島に残された戦跡は、戦争の悲惨さを伝える遺跡の一つとして、保存価値は高いものであると考えた。戦跡の情報を正しく伝え、私たちの世代で共有することにより、今後、国家同



図9 戦時中の関門海峡(『西日本新聞フォトライブラリー』より)



図10 下関空襲の様子(『長周新聞』より)



図11 史跡指定を受けた勝山御殿(『日本の城写真集』より)

士との関係を戦争により解決するという選択は、この世から無くなるのではないだろうかと考えている。

7 謝辞

今回の研究にあたり、多くの方々にご指導ご鞭撻を賜った。

蓋井島の实地調査においては、下関歴史探究倶楽部会長の大濱博之氏に同行していただき、島に関する多くの情報を私たちに与えてくださった。また、その後の活動においては、下関市教育委員会教育部文化財保護課主任の中原周一氏のご協力により、島に関する様々な資料をお借りすることができた。さらに、蓋井島の年齢別人数など蓋井島に関する情報は、山口県漁協蓋井島支店の松本武範氏、栄永英貴氏からご提供いただいた。それぞれの方々のご支援に厚く御礼申し上げる。

最後に、これまでの研究課程を見守り、いつもそばでご助言をくださった大井卓也先生に感謝の意を表す。

8 参考文献

- ・ 大濱博之(2019年)『下関空襲の全貌』下関歴史探究倶楽部

【事例紹介・高校生の探究成果】

古代遠江の中心は磐田!? ～古墳・水運・水害からの考察～

浜名高等学校 史学部

高橋守生、須藤悠月、内田八重、影山疾風、嶋田祐篤

藤原知央、澤木彩菜、坪井美紀、法月奏空、川増和志

1 はじめに（研究の目的と動機）

本研究の目的は、古代の地方に置かれた国の中心である国府がなぜ磐田に置かれたのかを古墳・水運・水害の視点から明らかにすることである。国府とは、律令制で国ごとに置かれた地方行政であり、現在の県庁のようなものである。このような重要な機関が政令指定都市の浜松ではなく磐田に置かれていたのだが、その知名度は低く、浜名高校の生徒にアンケートをとったところ90%以上が知らなかったという結果となった。このことより、調査を行うことで古代の研究対象地域の重要性や磐田に国府が置かれた新たな理由を発見できるのではないかと考えた。

2 研究対象地域 研究対象地域

（図1）は静岡県西部に位置する古代遠江国である。遠江国府は、磐田市中泉の御殿・二之宮遺跡に置かれたとされている。現在では政令指定都市であり、磐田より人口が多い浜松が遠江の中心とされている。しかし、私たちの調査では古代の中心は磐田であったという結論に至った。



図1 研究対象地域

3 国府は磐田にあったといえる根拠

磐田市中泉が国府の置かれた有力地である根拠は静岡県史、磐田市史、図説磐田市史では主に5つ挙げられている。

- ① 遠江各地の木簡が御殿・二之宮遺跡で見ついている点。→遠江各地の木簡が磐田に集約されていると考えることができる。
- ② 二彩陶器、墨書土器が見ついている点。→これらは、他地域の重要な遺跡でも発見されている。
- ③ 大宝院廃寺が付近に存在する点。→この特徴は、能登国府や伊豆国府にも見られる。
- ④ 国分寺をつなぐ南北線の南延長線上に位置している点。

- ⑤ 東海道が当地を経由する形をとっている点。→この特徴によって、陸路による物資の運搬が便利であったと考えられる。

上述に加え、我々の見解では古代遠江国府の推定地と同じ場所に、江戸時代の幕府直轄地である中泉代官所が置かれたことが関係していると考えた。この地は江戸時代においても、重要な役割を果たしていたのである。

以上を踏まえると、国府が置かれたのは磐田 市中泉である。

4 考察～なぜ磐田に国府が置かれたのか～

高校生なりの調査・考察で、なぜ磐田市中泉に国府が置かれたのかを考えた。

考察の視点は、古墳から見る有力者による影響力、水運に適していた地理的な条件、水害を避ける防災的要因の3点である。

①古墳から見る有力者による影響力

遠江国の有力な古墳がどこに位置するのか、古墳の大きさ・出土品を時期別に比較した。前期・中期は遠江国の80m以上の古墳を調査対象とし、後期は遠江国で最も有力とされている甕塚古墳の調査をした。甕塚古墳とは、後期に磐田で最初に横穴式石室を採用し、全国的にも珍しい出土品も出土したことから、最も有力な首長の墓とされている古墳である。

はじめに、古墳の大きさを比較した。

その際、作成した三河・遠江・駿河の三

国の古墳規模ランキングである。

(図2) ランキングを見ると遠江の古墳は三国間において大規模なものが多いことが確認できた。このことから、遠江国の大型古墳の多くは磐田に置かれていたことが分かる。

順位	古墳・規模	場所	時期
1	甲山古墳・120m	岡崎市	前期
2	堂山古墳・110m	磐田市	中期
2	谷津山古墳(袖木山神古墳)・110m	静岡市	前期
4	銚子塚古墳・108m	磐田市	前期
5	松林山古墳・107m	磐田市	前期
6	浅間古墳・103m	富士市	前期

図2 三河・遠江・駿河の古墳規模ランキング

磐田に存在した古墳がどれほどの地位であったか、独自に出土品の点数化を行った。点数化の際に高得点にした出土品について

畿内の古墳で主体とされているもの、時期別に重要視されたものを高得点とした。図3は、点数化を行った結果である。円で囲んだ古墳が磐田の古墳である。磐田の古墳は、出土品の点数が隣国と比較しても同程度の古墳が集中していることがわかった。磐田の古墳は畿内とのつながりをもつ有力者の古墳であると考えられる。

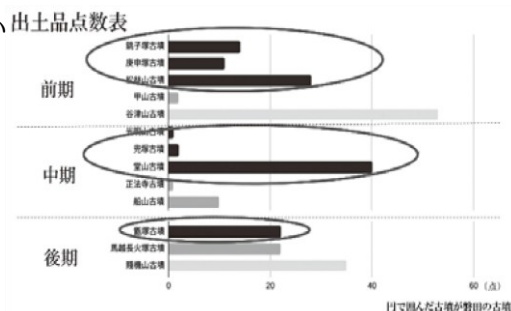


図3 三河・駿河・遠江の古墳出土品点数表

古墳の大きさ、出土品調査より遠江の有力者の古墳が集中する磐田に国府が置かれたと考えられる。

②水運に適していた地理的条件

研究する過程で、大之浦という潟湖があったことを見つけた。大之浦は磐田市南部から掛川市にかけて存在し、国府推定値まで迫っていた。(図4)

当時の大之浦に関して、出土品や古典文学の記述、フィールドワークを基に研究を進めた。まずは、出土品からわかる大之浦である。御殿・二之宮遺跡の出土品から、「舟形木製品」が発見された。これは、航海の安全を祈願するために使われていたものであり、大之浦で交易を行っていたと推測できる。次に古典文学の記述である。

万葉集、東関紀行には大之浦に関して、以下の記述がある。

A 万葉集

「大の浦のその長浜に寄する波寛けく君を思うこの頃」 聖武天皇

B 東関紀行

小舟に棹をさして～橋本の宿場によく似ている (一部抜粋)

これらの記述から、大之浦のゆったりとした景観が感じられた。橋本の宿場とは、現在の湖西市新居町にあった東海道の宿場である。北に浜名湖、南に遠州灘があり、浜名湖での貿易の拠点となっていたが、明応の巨大地震・大津波により壊滅した。

現在、大之浦は残っていないが、その名残とされる場所がいくつか存在している。フィールドワークを通して大之浦の名残とされる、磐田駅の南に位置する大池を調査した。大池はとても穏やかな水面だったことから、交易を行いやすい場所であると感じた。

舟形木製品の存在、万葉集や東関紀行といった古典文学の記述、フィールドワークを通して分かった大之浦の現在の名残より、水運に適した磐田に国府が置かれたと考えられる。

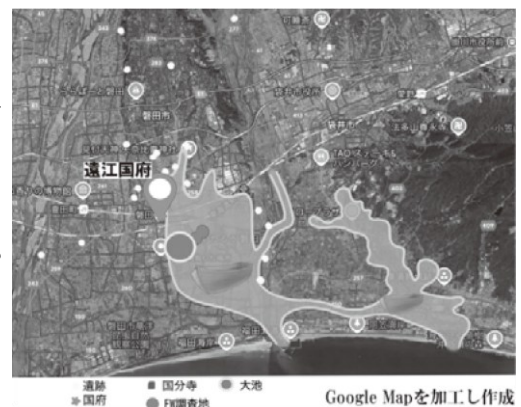


図4 大之浦推定域

③水害を避ける防災的要因

国府は磐田原台地南端で、西側に天竜川が

流れている地に置かれた。このことから天竜川の水害を避ける立地であったのか調査を行った。古代天竜川(亀玉河)は現在の流路より大きく西側を流れており、国府から離れていたことが分かる。また、浜名高校の近くには天宝堤という奈良時代に築かれた古代天竜川の堤防の名残があり、当時の川の流路を示す重要な遺跡となっている。奈良時代に水害の被害を受けて水没した地域はいずれも遠江国府から距離があることが想定される。(図5)

以上の事例より、水没区域は国府から離れていたと考えられる。

他地域の事例を見ると、宮城県の多賀城を挙げることができる。多賀城は通常の河川氾濫や東日本大震災の津波で、被害を受けない場所に位置している。また、多賀城と遠江国府が置かれた地形は、どちらも微高地であるという共通点があった。

古代天竜川は現在の流路よりも西側を流れている、水没区域は国府から離れている、多賀城が建設された地形と類似することから、天竜川の水害を避けることが可能な位置に国府が置かれたと考えられる。



図5 奈良時代に水害を受けた地域(推定)

5 おわりに(まとめ)

①古墳から見る有力者による影響力より、遠江の有力者の古墳は磐田に集中していた

②水運に適していた地理的条件より、物資を運ぶ水運に適した場所であった

③水害を避ける防災的要因より、水害を避けることが可能な位置であった

以上より、古墳時代には畿内からの文化が流入し、磐田には水運の拠点となる港があり、水害も避けられる台地の端の微高地があったため、繁栄したと考えられる。

磐田は国府を置くにふさわしい場所であったといえる。

(参考文献)

- ・小野正敏・藤澤良祐『中世の伊豆・駿河・遠江出土遺物が語る社会』2005年 高志書店
- ・加藤理文『古地図で楽しむ駿河・遠江』2018年 風媒社
- ・山中俊史・佐藤興治『古代の役所古代日本を発掘する5』1985年 岩波書店
- ・原秀三郎『地域と王権の古代史学』2002年 塙書房

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 地域の視点から

- ・『静岡県ふるさとの歴史と文化財』1985年 静岡県文化財保存協会
- ・白石太一郎『古墳の知識Ⅰ墳丘と内部構造』1985年 東京美術
- ・村井崑雄・望月幹雄・松尾昌彦『古墳の知識Ⅱ 出土品』1988年 東京美術
- ・館野和己・出田和久『日本古代の交通・交流・情報1 制度と実態』2016年 吉川弘文館
- ・藤岡謙二郎「古代東海三国の地域中心と国府の調査—参河、遠江、駿河の場合—」1964年立命館大学人文科学研究所
- ・「東海の古代官衙・寺院と窯業生産」2023年 地域と考古学の会
- ・『見付のお蔵—磐田市見付地区「蔵」悉皆調査報告書—』2020年 見付宿を考える会・静岡県磐田市教育委員会
- ・『遠江国分寺天平からの風そよぐ』2009年 磐田市教育委員会教育部文化財課
- ・本多隆成・荒木敏夫・杉橋隆夫・山本義彦『静岡県の歴史』2015年 山川出版社
- ・『静岡県と周辺地域の官衙出土文字資料と手工業生産』2018年 地域と考古学の会
- ・『はままつの渡来文化と埴輪群像』2015年 浜松市市民部文化課
- ・玉井幸助『東関紀行・海道記』1935年 岩波書店
- ・武田孝『東関紀行全釈』1993年 有限会社笠間書院
- ・『天竜川』1982年建設省浜松工事事務所
- ・『天竜川治水と利水』1990年 建設省中部地方建設局浜松工事事務所
- ・小林達『天竜川の流路の変換と中瀬』2022年 中瀬協働センター（中瀬郷土の会・歴史講座）
- ・『天竜川物語「暴レ天竜ヲ恵ミノ川ニ変エテキタ人々ノ知恵ヲ辿ル旅」』2018年 浜松河川国道事務所
- 所
- ・矢田俊文『中世の巨大地震』2009年 吉川弘文館
- ・大橋泰夫『古代国府の成立と国郡制』2018年 吉川弘文館
- ・網野善彦・平野和男・峰岸純『中世都市と一の谷中世墳墓群』1997年 名著出版
- ・鈴木靖民・荒木敏夫・川尻秋生『古代日本の道路と景観—駅家・官衙・寺—』2017年 八木書店
- ・伊場木簡から古代史を探る会 「伊場木簡と古代日本史」2010年六一書房
- ・『静岡県の前方後円墳—総括編—』2001年 静岡県教育委員会
- ・『静岡県の前方後円墳—資料編—』2001年 静岡県教育委員会
- ・『静岡県の前方後円墳—個別報告編—』2001年 静岡県教育委員会
- ・『磐田市史通史編上巻』1993年静岡県
- ・『図説静岡県史静岡県史別編3』1998年 静岡県
- ・『静岡県史通史編1 原始・古代』1994年 静岡県
- ・『静岡県史資料編2 考古2』1990年 静岡県

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 地域の視点から

- ・『静岡県史資料編3 考古三』1992年 静岡県
- ・『静岡県史資料編4 古代』1989年 静岡県
- ・『浜北市史通史上巻』1989年 浜北市長足立誠一
- ・『愛知県史資料編3』2005年 愛知県
- ・久保田稔「天竜川とともにその地形・地質と激流に挑んだ人々」2001年 中日新聞社出版開発部
- ・高木恵「律令期の役所・寺院の立地に関する一考察—歴史地震から見る陸奥国府・多賀城—」2023年
- ・鈴木一有「7世紀における地域拠点の形成過程東海地方を中心として」2013年 国立歴史民俗博物館研究報告第179集
- ・「掛川考古展古代東海道と佐野郡」2003年、掛川市教育委員会（引用Webサイト）
- ・GoogleMap <https://maps.google.com/?authuser=0>
- ・GoogleEarth <https://earth.google.com/web/?authuser=0>
- ・全国Q地図全国Q地図 | 各種地形図・地図情報の統合閲覧サイト

（お世話になった方々）

- ・磐田市埋蔵文化財センター 森本様
- ・浜松市地域遺産センター 井口様
- ・浜松市文化財課埋蔵文化財調査事務所 川西様
- ・浜松市中央図書館館長 久野様
- ・浜松河川国道事務所流域治水課 中根様
- ・豊橋市文化財センター 村上様
- ・豊川市役所教育委員会生涯学習課 天野様
- ・岡崎市役所教育委員会 事務局社会教育課 山内様
- ・静岡市文化財課文化財保護担当 黒澤様

（指導助言）

- ・鹿児島大学准教授 伴野様 （史学部外部講師）

第7章 関西大学高等部の課題研究における歴史探究

矢部正明（関西大学中等部・高等部）

はじめに～本校の紹介と課題研究取り組みの概要

大阪府高槻市に2010年完成の関西大学高槻ミューズキャンパスに大学・大学院(社会安全学部)と併設して初等部・中等部・高等部が開校された。開校に当たり中高ともに生徒による「探究活動」を重視し、中等部においては「考える科」という独自科目と総合の時間において、単に「調べ学習」を行うだけでなく、思考を重視した探究活動を実施してきた。高等部においては中等部の思考を重視した探究活動を引き継いで、旧課程の「総合的な学習の時間」を読み替えて「プロジェクト科目」と称して本格的に課題研究に取り組ませてきた。これは、開校の2010年当時としては全国的にも先駆けた取り組みであり、新課程における「総合的な探究学習の時間」を先取りしたものであった。開校当初において高等部は「安全科学科」という専門学科であったため、防災・災害事故・危機管理といったテーマを中心に設定された「ゼミ活動」を行ってきたが、2016年に全日制普通科になって、ほぼ現在のプログラムとゼミの設定(後に詳述)になっていった。また、2015年度から5年間、文部科学省のスーパーグローバル・ハイスクール(SGH)の指定を受けて、課題研究における指導法や指導体制に関する環境整備を行ってきたのである。

本稿では、主に高等部における現在の課題研究における探究活動全体の取り組みについて、次いで全体的な課題を述べ、さらには歴史探究の取り組みませるに当たっての課題と展望について、開校以来課題研究に携わってきた筆者の目線でのべていきたい。

1 本校の課題研究における系列とゼミの構成

課題研究のため高1の6月～高3の5月まで生徒全員がゼミに分かれて活動することになる。その構成は以下の通り4系列10ゼミである。1つのゼミに15名前後の生徒が希望に応じて所属するようになっている。

①社会系列(社会科学的ゼミ群)

経済産業ゼミ 地域創生ゼミ 政治ゼミ 以上3ゼミ

②人間系列(人文科学的ゼミ群)

国際協力ゼミ 文化・歴史ゼミ 教育ゼミ 以上3ゼミ

③自然系列(自然科学的ゼミ群)

都市環境ゼミ 自然環境ゼミ 以上2ゼミ

④安全系列(学際型・文理融合型ゼミ群)

危機管理ゼミ 災害事故ゼミ 以上2ゼミ

概ねではあるが、上記のとおり大学における学問体系に基づくとともに、関西大学の各学部に対応する形をとる。なお、④安全系列は、本校高等部が安全科学科の専門学科から

スタートし、同じキャンパスに社会安全学部もあることから系列として存続させている。

2. 課題研究における探究活動の概要

現在、本校高等部では総合的探究学習の時間を読み替え、課題研究を行わせる「プロジェクト学習の時間」として探究活動をさせている。活動の概要は以下である。

1年次に50分の2限連続で「プロジェクト基礎」として、4～5月の間に研究活動のノウハウや作法、思考の整理法を学ばせ、6月からは希望のゼミに分かれ、各ゼミにおいて3～4名のグループ課題研究を行わせる。各ゼミには1名の本校教員が付き、ゼミのテーマに応じた関西大学の教員(文系・理系・学際型の学部より)や企業から外部講師として迎え、年に5～6回にわたり生徒への助言・指導を仰いでいる。研究テーマについては、マインド・マップなどを用いて、興味のあるキーワードを導かせ、ブレインストーミングを行い、ゼミ担当の教員と相談しながら決定し、文献(ネット掲載の論文や官公庁のHP・書籍)による調査、10月実施の研究関連の施設や有識者・関西大学の研究室を訪ねるフィールドワークを経て、その成果を2月にポスター発表会で発表させる。そしてポスターの内容についてルーブリックによる評価(書式・研究作法・考察の妥当性・ポスターのレイアウトなど)を行い、4系列より1点ずつを優秀ポスター賞として校内表彰を行う。

高1から高2への春季休業中、2年次からの課題研究に向けて、テーマ探しとリサーチクエスチョンを課題として準備をさせる。

2年次においては、「プロジェクト・ゼミ」(1年次同様に50分の2限連続)個人による課題研究を行わせる。4～5月にゼミ担当教員・外部講師が個別面談を重ねて研究テーマとリサーチ・クエスチョンを設定させる。6月から11月まで生徒個人による文献調査による先行研究のまとめ、夏期休業中にフィールドワークを実施させる。その間、ゼミの時間に進捗状況についてゼミ担当教員や外部講師が生徒個別に面接を適宜実施してアドバイスを加える。11月には中間報告としてポスター発表を全員に行わせる。その後は、卒業論文としてまとめるためにゼミの時間を費やし、1月末に提出させる。分量としては7000～10000字程度を要求している。これをゼミ担当教員が点検し修正提案を行い、年度内に本文の修正を行わせ、年度末に再度提出させる。

3年次には、論文のアブストラクトを作成させ(希望者は英文アブストラクトも作成)、口頭発表の準備を進める。2年次に完成させた卒業論文本文にアブストラクトを付して製本し、本校の中高ライブラリーで展示・閲覧できるようにする。そして、5月にスライドを使用して口頭発表(卒業研究発表会予選)を全員に行わせる(聴衆と運営に高2生が関わる)。4系列の中で優秀発表者それぞれ1名を担当教員による協議で選出し予選通過として、卒業研究発表会本選で発表にのぞませる。この時に聴衆(関西大学の教員と高3・高2の生徒)による質疑応答が行われ、関西大学教員から講評を受ける。以上の活動をもって本校での課題研究は修了ということになる。

3. 本校における課題研究の課題

①ゼミ指導にあたる教員の課題

探究活動を直接指導するゼミ担当教員は、校内の諸事情により様々な教科の教員が配当される。ゼミのテーマに見合った教科の教員が必ずしも担当するとは限らない。そのためテーマに沿った概説書や基本文献の紹介や研究の方向性をうまくアドバイスができないという声も多く聞かれる。文系の内容であれば、筆者を含む地歴・公民科(社会科系)の教員は人文科学分野・社会科学分野および学際的な比較的広い分野でのアドバイスができる。理科の教員も自然科学分野であれば理系的作法を含め探究の進め方を指導できる。しかし人員には限りがあり、全学年に担当者が行き渡るわけではない。

この課題を補うべく、本校では大学の併設校である利点を活かして、前述の通り関西大学から教員に外部指導員として要所要所に来校してもらい指導を仰いでいる。ゼミ担当の本校教員と外部指導の教員がコミュニケーションを密にすればこの課題は本校の場合かなり克服されていると考える。

しかし、全国の高校を視野に入れた場合、外部から専門性を持った指導ができる人材を迎えることは費用・地域的な事情など難しいことも多いのではないか。この課題は全国の高校において探究活動・課題研究における普遍的なものであると考えられる。

②評価における課題

探究活動の評価として、活動の計画・プロセスにおいて提出させるワークシート、ポスター発表のポスターや口頭発表のスライドや発表内容をルーブリック評価し、これらを積み上げて100点満点の評価を行っている。その中で多くの得点を占めるのは、ワークシート等の提出物の必要項目が埋められているか、提出が期限内にできているか、ポスターや論文の項目の過不足・参考文献等の記載が作法に合っているか、決められた字数が守られているかといったことである。つまり、「作業」の量的な評価、「ルール遵守」の度合いが評価の大部分を占めている。一方で、探究プロセスの妥当性、先行研究の掘り下げなど探究の深さ、導いた結論の妥当性といった「探究の質」を問う評価の占める割合が少ない。本来、探究活動は、生徒による自主的・自発的な疑問や探究心をはじめとして、先行研究を渉猟し、調査したことを論理的に考察し新しい視点を見つけたり、発見したことをまとめ表現させることを重視する。こういった「探究の質」こそが課題研究の評価の主体になって然るべきだと筆者は考えている。しかし、「探究の質」を問う評価の仕組みは構築できても、実際の運用は難しい。ルーブリックは作成されていても評価する教員の主観がどうしても入ることで評価にブレが生じるからである。また、評価する教員が生徒の探究の質を正しく評価できる専門性を備えている必要があるが、①のような事情の下、評価の客観性・公平性を重視して、作業量的・ルールの遵守的な側面が評価基準の多くを占めることになっているのが実情だ。今後は「探究の質」をいかに客観的にかつ公平性を担保した形

で評価するか、議論の焦点となるべきであろう。

③外部顕彰への挑戦の少なさ

前述の通り、探究活動の成果を本校内部において表彰することは述べた。しかし、外部のコンクールや顕彰への挑戦は決して多くはない。その原因の1つとしては、本校全体の探究活動を担う研究開発部の教員によると系列が文系学問につながるものが多い中、人文科学分野・社会科学分野の顕彰が少ないことが挙げられる。校内的な原因としては、課題研究の質の担保が不十分で、外部へ評価を求めてコンクールに応募するだけの水準に達している生徒の研究が少ないことも挙げられる。実際に過去の生徒が提出した卒業論文やアブストラクトを読み返してみても、先行研究の検証が不十分であったり、自論だけを展開しているもの、筋道を立てた論証に至らず論理に飛躍の見られるものも散見される。校内において優秀発表賞を受けた生徒の課題研究であっても、論文になると論拠の薄さが目立ち、詰め甘さを感じるものが見られる。これらは自戒すべきことでもあるが、指導が不十分であることによるものだ。

④課題の克服に向けて

上記の①②③に挙げた課題を解決するために、ゼミを担当する教員の研修を充実させることが必要だと考える。特に各分野に特有の研究の作法、適切な基本書や概説書・リファレンス図書(工具書)の知識を持つこと、研究の進め方を指導する方法など、教員に必要なスキルである。

生徒は情報源としてネットに頼り、玉石混交な情報の中で正確な情報の見極めが不十分なケースが課題研究において多く見受けられる。これに対しても単に通り返りの注意を促すだけでなく、教員が知識を持って情報の信憑性を見極め指導できることが必要だ。また、課題研究を始めさせるにあたっては基本的書籍にじっくり向かわせることが必要だ。そのためにまずは教員が基本となる概説書を紹介し、テーマに沿った書籍や論文などの文献を検索する方法も指導できるようになることが必要であろう。

4. 本校における歴史に関する課題研究～実態と課題

本校の課題研究において、前述の通り人間系列の中に文化・歴史ゼミがあり、毎年15名前後の生徒が所属して課題研究に取り組んでいる。このゼミは生徒の希望で過不足なく所定の人数が埋まるので、一定の人気はあると見てよい。その中で歴史上の人物、歴史事象、地域史などを探究したい生徒の割合は極めて少なく、年に複数人いれば多い方で、年によってはゼロということも珍しくない。ポップ・カルチャーやサブカルチャーというモダンカルチャーに興味を持ち掘り下げてみたいと考えてこのゼミを希望したものが大半なのである。中には南宋末から元初の画家・牧谿の水墨画が日本の水墨画に与えた影響について膨大な数の研究書や画集を用いて研究した硬派の生徒もいたが(この生徒は絵画の修復師を目指して芸術大学へ進学した)、これは「例外中の例外」の事例で、「クール・ジャパン

について」「日本や諸外国のアニメの比較」など漫画・アニメ・ゲーム・ライトノベル・ポップラー音楽・ファッションといったことをテーマにして卒業研究にあたった生徒が大半である。これは生徒をめぐる生活環境においてネットの情報・SNS・動画配信サイトを目にすることが日常であり、これらを情報源として文化に触れてきたことが原因であると考えられる。

歴史を課題研究テーマに生徒が選ばないことが、世間で言われている中・高校生の「歴史離れ」という傾向が影響しているのかということもそうとも言えないと考えている。筆者は中等部の「社会・歴史」、高等部の「歴史総合」「世界史探究」の授業を担当しているが、歴史が嫌い・苦手という生徒がいる(手を挙げさせると半数ぐらい)一方で、授業が終わると生徒たちは歴史に関していろいろと質問して来たり、自分の身近な歴史のことや訪問した史跡の話しにやってくることが多い。歴史好きや興味を持つ生徒は一定数いることを実感している。

では、その生徒たちが高等部の課題研究では、なぜ歴史をテーマとしないのか。幾人かの生徒に聞いてみると、歴史には興味はあるが、課題研究では現代的なテーマや社会に役立ち活用できるテーマ(SDGs関係など)に取り組みたいという。つまり、歴史を探究することは社会実装に合わないと考えているようだ。この生徒たちの考えの一端には、筆者を含む歴史を担当する教員にも責任があると感じている。歴史は過ぎ去った時代を学ぶ中で現代的課題の淵源を知り、課題解決の糸口を掴むために必要な学問であること、学んだことが社会実装を考える上でも欠かせない学問であることを生徒たちに伝えきれていないという忸怩たる思いを持っている。

他にも、歴史を探究課題とする時に指導にあたる教員にも「壁」となることがあると考えている。それは、歴史事象や人物に対して膨大な先行研究をたどることの困難さである。歴史の研究には、各時代・各地域や国の様々な分野において概説書から専門論文までを紐解き、その研究史をたどって現代において定説とされていること、それに至る過程を知ること、論争になっている事象、定説の変遷なども視野に入れる必要がある。また最近の歴史学における研究の細分化の傾向が顕著で、近年に出現した歴史観についても多様化している。この研究の動向を踏まえた先行研究を生徒に把握させるは、時間的制約のある中で困難さを実感している。もちろん大学において行う歴史学研究ではないので、精緻かつ厳密な論証を求めるものではないが、最低限のこととして史実を踏まえた研究を行わせることは必要だ。そのためには指導する教員が高校生の読むべき基本文献の知識を持って導かねばならない。本校では以前に文化・歴史ゼミに英語の教員があたり、歴史上の人物を探究したいという生徒にどのような文献を読ませたらよいか、具体的にどのように指導したらよいか、と筆者のところに相談に来られた。以上に述べたように研究史を踏まえた歴史の探究の指導に歴史教員であったとしてもなかなかハードルが高く、ましてや歴史教員以外がゼミ担当になった場合はなおさら難しさを感じるであろう。

また、生徒たちが歴史に興味を抱くきっかけとして歴史小説・漫画・アニメあるいは動画サイトの歴史関連の動画などであることが多い。最近の動画サイトでは偏った歴史の見方で歴史事象や現代の社会を解説したものが結構多い。明らかな事実誤認・偏向した捉え方、小説や漫画に見受けられるフィクションの部分を修正させつつ探究させなければ、誤った歴史観を持たせてしまったり、史実とかけ離れた「歴史研究」になりかねない。史実を抽出させていく作業は探究活動である以上必須なのである。これらの指導を行うことは、限られたゼミの時間と文献の制約の中で困難をきたしていることは否めない。

それから、高校生の歴史の探究活動において、何を持って「ゴール」とさせるのかという課題もある。つまり、小中生の「調べ学習」から「研究」へのステップアップを図ることが高校生の探究活動に求められるとするならば、生徒たちが見つけてきた歴史のテーマで、史実に基づいた何らかの新しい視点や見解を持たせるのが理想である。しかし、歴史課題研究に取り組ませている教員の多くは、研究史をたどらせる困難さと時間的制約のある中、新視点・見解を持たせることを「ゴール」にすることの難しさに悩んでいるのではないだろうか。

終わりに ～中高生への歴史探究の展望

中高生が歴史研究の探究活動を行う際の困難や課題について、本校での実践を踏まえて述べてきた。しかし、これらの困難や課題を乗り越えて、歴史研究の面白さに触れ、生徒たち自身に歴史探究の意義を持たせるように指導することが我々歴史教員に課せられた使命であると筆者は考える。これらの課題を乗り越えて成果を上げてきた事例を最後に示したい。

筆者は部活動(フィールドワーク部の歴史班)で歴史の探究活動を指導してきた経験から、中高校生であっても、十分な成果をあげさせることはできると確信している。指導していく中で、鋭い感性や中・高校生らしいユニークな視点で歴史を見つめる研究成果があったからである。先行研究を踏まえ史実をしっかり追わせた上で、仮説を立てさせる作業を積み重ねてきたことが成果につながったと実感している。これは本校の部活動の事例にとどまらない。本校の部活動の生徒たちが参加してきた堺市博物館・大阪大学歴史教育研究会主催の研究発表大会では、大阪府や兵庫県の中学・高校のグループが毎年優秀な研究を発表している³⁾。この発表会には、部活動だけではなく、歴史の教員が授業で有志を募ったり、学校での総合的探究の時間で歴史研究活動に取り組む生徒たちが、1つのテーマを探究し成果を発表して高い評価を得たものが毎年のようにある。また、この『事例集』掲載の「全国社会科学・郷土史研究発表大会」にて「総合的探究の時間」での取り組みを発表した優秀な成果の事例もある⁴⁾。教員が生徒たちの興味を喚起し、探究心に火を灯し、そして研究作法に則った研究へと導くことができれば、歴史研究の探究活動においても十分な成果があげられるのである。

それから、時間的制約のある探究活動の一助として、積極的に chatGTP など生成 AI の活用を今後は考慮すべきであろう。例えば、膨大な歴史学研究の研究史を調べさせるのに活用するなどである。「デジタル・ネイティブ」である生徒たちには、使用を禁止することよりも、積極的に活用させていく方向で考えるべきというのが筆者の意見である。一方で、教員が生成 AI の持つ機能や課題をよく理解し、中高生に使わせるためのルール作りは必要不可欠だ。しかも生成 AI は日々進化していくものなので、情報のアップデートをしていくことも必要だ。まずは指導にあたる教員が生成 AI 利用における研究倫理について研修を行い、中高生の探究活動にどこまでを使わせるか議論をしていかなければならない。

最後に、高大研の研究者の方々、ひいては全国の研究者の方々へお願いしたいことがある。それは「総合的な探究の時間」における歴史の探究活動に1回限りの講演などだけではなく、継続的な支援をいただくことである。その支援内容とは、中高の教員だけでは十分な指導の及ばなかった中高生が読むべき文献、研究の進め方へのアドバイス、そして論文や研究発表に際しての評価への関わりである。この支援をいただければ、中高生は歴史研究の奥深さを知り興味が喚起され、まさに「深い学び」を得ることができると考えている。そして、取り組んだ成果が優れていれば、惜しみなく褒めてあげて欲しい。研究者の方々から評価されることは生徒たちに取りこの上ない励みになるからだ。その生徒たちの中より、きっと研究者を志望するものや中高の歴史教員を志望するものが出現することになるだろう。将来の歴史学研究や歴史教育を担う人材を育成することにつながるのである。そのため、この特別部会が支援を必要とする学校と研究者の仲介ができればと筆者は考えている。

注

¹⁾ 関西大学には、人文科学系の文学部・外国語学部、社会科学系の法学部・経済学部・商学部・社会学部・政策創造学部、自然科学系のシステム工学部・環境都市工学部・科学生命工学部、文理融合学際系の総合情報学部・社会安全学部、ビジネス・データサイエンス学部、文系学際型の人間健康学部の14学部がある。これまで、文学部・経済学部・商学部・社会学部・政策創造学部・環境都市工学部・科学生命工学部・社会安全学部・総合情報学部から外部講師として迎えている。

²⁾ フィールドワーク先については、ゼミ担当教員・外部講師と各班生徒が相談の上、基本的に生徒が連絡先を調べ、アポイントを取ることになっている。事前には、アポイントを取る際のメールや電話の礼儀作法についてレクチャーを行う。関西大学や大阪大学などの研究室、企業、公共施設等へ直接訪問することが基本だが、遠方の場合や先方の都合でオンラインでのインタビューを実施した班も多い。

³⁾ この大会については、毎年全参加チームの研究発表について詳細な講評が審査に当たった大学教員からなされている。堺市博物館 HP「日本と世界が出会うまち 堺プロジェクト」の各年の最終事業報告に講評が掲載されているのでご覧いただきたい。

<https://www.city.sakai.lg.jp/kanko/hakubutsukan/play/sakaiproject/index.html>

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 総合的な探究の時間の活用

⁴⁾「全国社会科学・郷土史研究発表大会」については、高大研 HP に掲載している 2023 年 8 月に実施された静岡大会の「令和 5 (2023) 年度全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会報告書」を参照いただきたい。

https://kodairekikyo.org/wp-content/uploads/2024/01/r5_report.pdf

第8章 SDGsと歴史系の総合的探究との結合（試案）

油井大三郎（元東京大学）

はじめに

全国の高等学校における総合的探究の時間でSDGs関連のテーマを取り上げる事例が多いと聞くが、それを歴史学習とつなげるケースは稀だという。しかし、地球温暖化にしても、自然災害にしても、自然と人類社会の関連の中で発生しているし、貧困問題のような社会現象の場合は一層明確に特定の時代から顕著になるという特徴をもつ。それ故、SDGsで掲げられた諸課題は、歴史的なアプローチを取り入れることで原因把握が容易となり、解決策の展望も見えやすくなると考える。そこで、本稿では、まずSDGsのゴール1で掲げられた「あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる」というテーマを取り上げて、歴史学習との結合例を紹介したい。ただし、筆者は高等学校の現場での教育経験はないので、この事例は教育実践に裏づけられたものではなく、文献調査による事例案の提案にとどまる点を予めお断りしておきたい。

事例としての「こども食堂」

- 1) 調査の目的と方法・・・こどもの貧困問題の事例として「こども食堂」を取り上げる。一般に貧困問題というと、サハラ以南のアフリカなど途上国の問題と考えられることが多いが、日本のような先進国でも近年日々の食事に事欠く例が見られる。その状況を少しでも改善しようと発足したのが、こども食堂であり、2016年ごろから始まり、2020年12月現在、日本全国に4960カ所のこども食堂があり、4年間で16倍の勢いで増えているという（湯浅、p.3）。なお2023年現在では9132カ所。

なぜ日本のような先進国でもこども食堂がこのような勢いで増えているのだろうか。その原因を考えるため、まず、生徒が住んでいる場所の近くにあるこども食堂を訪ねるところから始めよう。インターネット検索で所在を確かめ、調査の許可を取って、実際にこども食堂を訪ねてみよう。どのような子供たちがきているのか、どのようなスタッフがいるのか、活動にはどのような意義と問題点があるのか、尋ねてみよう。

- 2) 訪問調査の印象・・・実際にこども食堂を訪ねてみると、多くのこども食堂では月に2-3回、貧困家庭のこどもに限定せず、誰でも参加自由な形で小中高のこどもに無料で食事を提供していることが分かるだろう。また、スタッフのひとは様々な年齢の大人から大学生のボランティアまで多種多様であること、親にも低価格で食事が提供されており、親同士の交流の場にもなっていること、こども食堂の運営に関わる大人にとっては、地域住民同士の交流の場になっていて、都市化などで弱まった地域のつながりを再生させる効果ももっていること等を発見するだろう。

その結果、訪問した生徒たちは、次のような疑問を抱くことになるだろう。①なぜこど

も食堂は 2010 年代半ばごろから急増してきたのか、②なぜ貧困家庭のこどもに限定した支援をしないのか、③月 2－3 回くらいの食事提供で、こどもの貧困問題の解決になるのか、④なぜ運営に関わる大人たちがその活動に生きがいを見出し、地域の活性化に役立つと考えるようになっているのか、これらの疑問については文献調査で解明してゆくことにしよう。

- 3) 文献調査・・・インターネットでこどもの貧困やこども食堂関係の文献を調査しよう。その結果、全国のこども食堂の支援をしている NPO 法人として「全国こども食堂支援センターむすびえ」という組織があり、その理事長である湯浅誠という人が『つながり続ける こども食堂』（中央公論新社 2021 年）という本を書いていることが分かる。他にも大阪市立大学准教授の五石敬路という人が編集した『子ども支援と SDGs—現場からの実証分液と提言』（明石書店、2020 年）を刊行していることも分かった。

これらの本によると、日本でこどもの貧困に関心をもたれたのは、2008 年秋に発生した世界的な金融危機であるリーマン・ショックで、多くの銀行や企業が倒産する中で、親の失業などによりこども達にも影響が及び、2008 年に「こどもの貧困」がマスコミでも取り上げられるようになったこと、こども食堂はこどもの貧困の救済策としてまず 2012 年に東京都で始まり、全国に広がっていったこと（五石、pp.20,132）などが分かり、①の疑問への回答がある程度わかった。

②の疑問に関しては、始めから貧困家庭のこどもに限定して運営すると、こども食堂に通う子供＝貧困者という色眼鏡で見られようになるので、貧困家庭のこどもへの差別を避けるために、誰でも自由に参加できる形態にしたこと（湯浅、p.31）が分かった。むしろ、新型コロナウイルスの感染で、こども食堂が対面で開催することができなくなり、弁当や食材の配達活動に切り替えざるを得なくなってから、貧困家庭に限定した活動をするようになったという（湯浅、p.158）。

③の疑問に関しては、ボランティア活動としては月 2－3 回開催が限度であるが、それでも開催することで孤立しがちな貧困家庭の親子が地域の人々に支えられていることを実感し、「心の貧困」が緩和されるという。また、母子家庭の場合は、母親が他の母親と交流し、悩みを打ち明けられるようになる中で、こどもへの虐待が防止される効果もあるという（湯浅、pp.81,87）。さらに、地方自治体の担当者と連絡をつけることにより、公的な補助が行き届く効果もあるという。

④の疑問に関しては、こども食堂の予想外の効果として指摘されている点である。湯浅さんはこども食堂を「こどもを中心とした多世代交流の地域拠点」と表現している（p.5）。1960 年代ごろから日本でも核家族化が進行し、都会では近所付き合いも希薄になっていった。21 世紀に入ると、そこに不況の長期化が加わり、2010 年代になると、孤独死をとげる老人などが目立つようになり「無縁社会」の到来に警鐘が鳴らされるようになった。このような血縁・地縁の希薄化に抗して、こども食堂は、地域のつながりを再生する効果

を發揮しているという。

- 4) 歴史学習との繋がり・・・①そもそも子どもが貧困状態にならないように保護されるようになったのは何時ごろからであろうか。1947年に日本で制定された児童福祉法の1条2項では「すべての児童は、ひとしくその生活を保障され、愛護されなければならない」と規定されている。また、1989年に国連総会で決議された「子どもの権利条約」の6条2項では「締約国は、児童の生存及び発達を可能な最大限の範囲において確保する」と明記されている。つまり、第二次世界大戦後に進展した福祉国家化の中で子どもの生活保障も定着していったのである。

しかし、②前近代の社会においては子どもが家業等の手伝いをするのは当然であり、工業化が進展すると、危険な工場や炭鉱の労働にも子どもが従事させられるようになり、死亡する者もでた。そこで、イギリスでは工場法が制定され、9歳以下の児童労働が禁止され、18歳未満の夜業も禁止されるようになった。また、③近代的な義務教育制度が導入されるようになると、児童の就学を可能にするように児童労働が禁止されるようになった。その上、④20世紀に入り、先進国を中心に社会保障制度が導入されるようになると、児童の貧困救済も社会全体の責任と認識されるようになった。しかし、⑤21世紀に入り、先進国でも児童も含め貧困問題が目立つようになったのは、冷戦が終結した1990年代ごろから世界中で「小さな政府」を良しとする「新自由主義」的な政策が採用され、福祉関係の予算が削減されたり、労働市場の規制が緩和され、非正規の労働者が増加するようになった結果、国の内外で貧富の格差が拡大したからであった。

子ども食堂の成長も、このような貧富の格差拡大という歴史的動向への一つの抵抗として考えることもできるのであり、歴史的な要因の考察が大切になるといえるだろう。

- 5) 教科横断的なバックアップ体制の構築

このような子ども食堂をテーマとした総合的探究の学習には、政治経済、公民だけでなく、歴史総合や世界史探究・日本史探究を担当する教員の教科横断的な協力体制の構築が不可欠である。それは、身近な子ども食堂の紹介、インタビュー方法の手引き、関連文献の紹介などの面で複数の分野にまたがる教員の協力が必要になるからである。

以上、机上のプランとして子ども食堂を手がかりとした、SDGsのゴール1「あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる」の学習案を提示したが、願わくば、このプランを高等学校の教育現場で実践し、より効果的な案に練り上げてくださることを期待している。

参考文献

深川光耀『私発協働のまちづくり一私からはいまる子どもを育む地域活動』晃洋書房、2024年。
小室文昭編『地域と連携して拓く子ども食堂の可能性と協同組合への期待』JA共済総合研究所、2021年。

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る 総合的な探究の時間の活用

湯浅誠編『むすびえのこども食堂白書—地域インフラとしての定着をめざして』本の種出版、2020年。

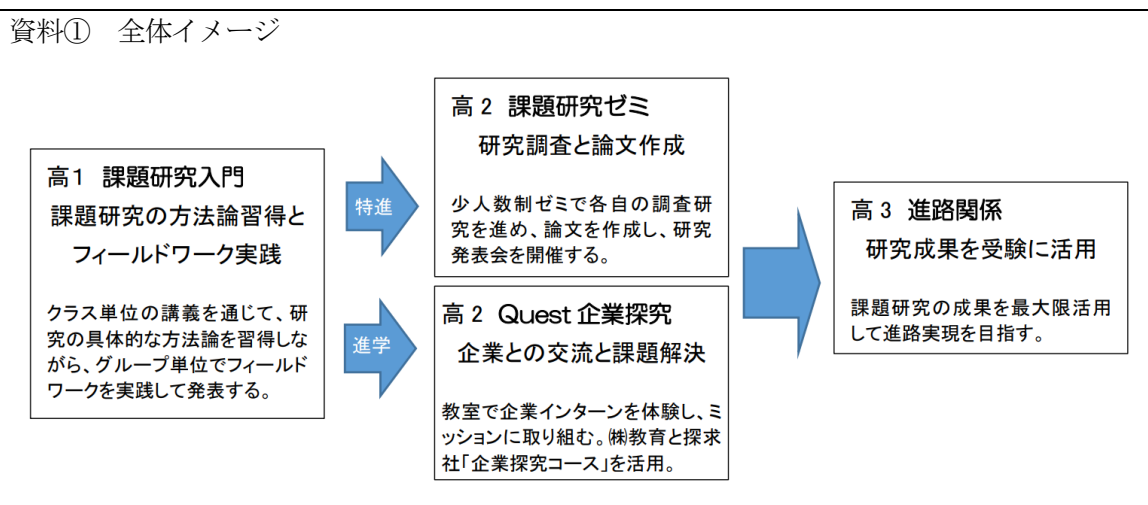
小林じゅうたろう『だから、こども食堂』水山産業、2017年。

第9章 歴史探究ゼミでの年間実践

高野 晃多（佼成学園女子中学高等学校）

1, 初めに

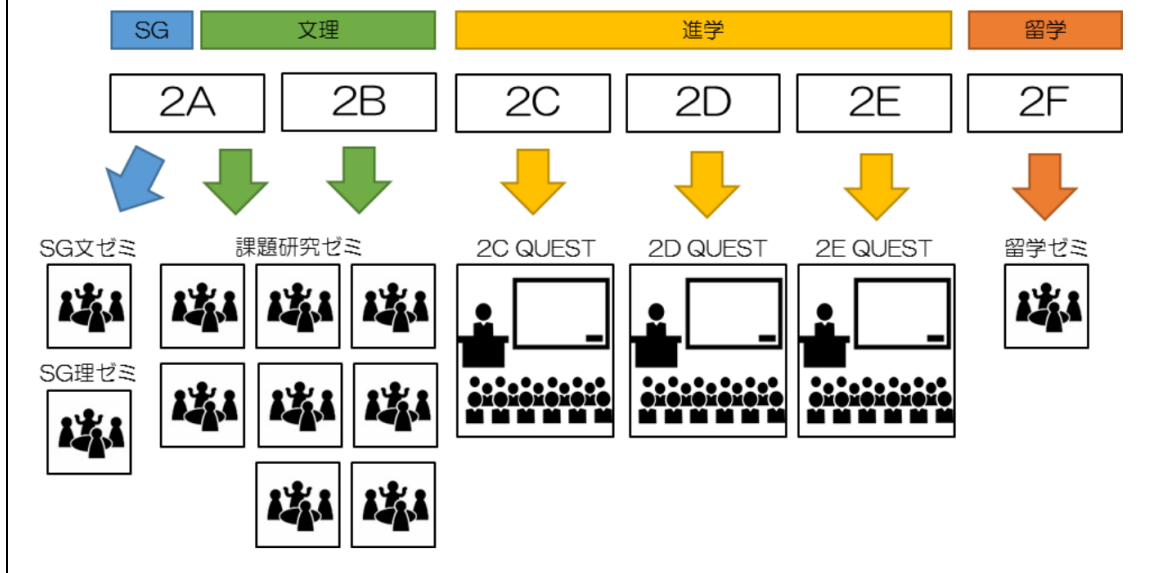
本事例は、2022年度高校2年生特進コースで行った「総合的な探究の時間」（以下、「総合探究」）の授業実践である。まずは、本校での「総合探究」のカリキュラム全体像を概観していきたい¹。本校では、高校3年間の学校生活と進路実現を見通して、次の資料①のようなカリキュラムデザインとなっている。



高校1年生では全クラス共通カリキュラムとして、副教材に岡本尚也『課題研究メソッド スタートブック』（啓林館）を使用しながら課題研究の基礎や調査手法などを学んでいく。そのうえで高校2年生からは、上記表の通りコースごとに課題研究の内容が分化していく。主に一般入試・総合型選抜などで大学進学を目指していく生徒が多い特進コースでは、各自の問題意識に合わせた少人数ゼミナールを実施している。一方、主に指定校推薦・総合型選抜などで大学進学を目指していく生徒が多い進学コースでは、企業から出された Mission を解決する Quest エデュケーション（企業探究コース「コーポレートアクセス」）を活用した課題探究を行っている²。進学コースの全生徒は Quest Cup 全国大会予選にエントリーし、日ごろの成果を社会に向けて発信していく。

他にも SG クラスと留学コースでは、高校1年生の頃からゼミのような少人数授業を行っている。そして高校2年に進級後はそれぞれ引き続きゼミを行い、SG クラスではタイの少数民族カレン族の村に訪れるなど、北タイ・バンコクでフィールドワークを行い、留学コースではクラス丸ごと1年間ニュージーランドに語学留学に行くなかでフィールドワークを行っている。ここまで述べてきた高校2年生各「総合探究」は、次ページの資料②のように図式化されよう。

資料② 高校2年生各「総合探究」概要



こうした高校2年生をはじめとする中学・高校の各「総合探究」では、3月に行われる全校研究発表会で発表を行う。これまではコロナ禍のため、元のような形でのフィールドワークや対面形式での研究発表会が実施できなかったが、現在担当している2023年度高校1年生「総合探究」では全校で対面形式での全校研究発表会を予定している。こうした年間スケジュールの概観は次の資料③の通りである。

資料③ 高校2年生各「総合探究」年間予定

	課題研究ゼミ	QUEST 企業探究	SGゼミ	留学ゼミ
3月	ゼミ一覧配信と希望調査。所属ゼミの確定。			
4・6月	ゼミ開講。オリエンテーション。研究テーマの検討と確定。各自の調査研究活動。	学級ごとに「企業探究コース」を進める。インタープログラムやアンケート調査を実施。	ゼミ開講。タイに向けた準備。	
夏	調査研究活動。		タイ・フィールドワーク	NZでフィールドワーク。
9・10月	中間評価用ポスター作成・提出。文化祭で展示。	企業から与えられるミッションについて企画案やプレゼン資料を作成。	ポスター提出。文化祭で展示。	
10・11月	論文等作成。一次提出。	クエストエントリー。	論文作成。一次提出。	プレゼン作成。
1・2月	ゼミ内で批評会。論文等最終提出。プレゼン作成。	学級ごとにプレゼン大会。クエストカップ。	批評会。論文最終提出。プレゼン作成。	論文作成・提出。
3月	研究発表会 ※2023年度は対面で実施予定			

今回は、以上の中でも高校2年生特進コースで実施している少人数ゼミナールについて、

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る クラブ活動・自主活動の取り組みから

2022年度に行った実践を報告する³⁾。特進ゼミは、①ゼミ担当教員が決定後、教員ごとにテーマを設定し、第5希望まで生徒にアンケートを実施。②アンケートに沿って、各ゼミ生徒7人を基準に振り分け。③週1コマの授業を実施するほか、放課後などに個別指導を実施といった流れで実施される。それでは、次に高野ゼミの概要を述べていきたい。

2, 2022年度高2特進「高野ゼミ」テーマ・年間の流れ

高野ゼミでは、歴史は現代社会に生きるものだと生徒に実感してもらいたいという思いから、年間テーマに「さあ、『Doing History』をはじめよう！」を掲げた。そのため、「歴史を現代社会に活かす」というコンセプトで生徒に研究テーマを設定してもらい、次の年間予定表(資料④)のように課題研究を行った。まず1学期は、小田中直樹『歴史学ってなんだ?』(PHP新書、2004年)を使用してテキスト講読を行い⁴⁾、夏休み~2学期から研究を本格的に開始し、3学期は課題研究プレゼン・論文作成に当たさせた。

資料④ 高野ゼミ年間予定表

	授業日	実施内容	備考	
1学期	1	4月20日	オリエンテーション・プレゼン&報告の仕方&形式	1学期報告順決定
	2	4月27日	テキスト講読①p.24~39【 】	
	3	5月11日	テキスト講読②p.40~60【 】	
	4	5月25日	テキスト講読③p.61~82【 】	「研究計画書」提出要綱配布
	5	6月1日	テキスト講読④p.84~105【 】	
	6	6月8日	テキスト講読⑤p.106~130【 】	
	7	6月15日	テキスト講読⑥p.132~152【 】	
	8	6月22日	テキスト講読⑦p.163~180【 】	
	9	6月29日	テキスト講読⑧p.182~194【 】	「研究計画書」提出
夏休み		【各自研究実施】		
2学期	10	9月14日	研究計画報告①	
	11	9月21日	研究計画報告②	
	12	9月28日	研究計画報告③	「研究計画書」再提出
	13	10月5日	乙女祭コーナー準備①	
	14	10月12日	乙女祭コーナー準備②	
	15	10月19日	乙女祭コーナー準備③	
	*	10月22-23日	乙女祭	スター展示 予定
	16	10月26日	研究中間報告①	
	17	11月2日	研究中間報告②	
	18	11月9日	研究中間報告③	
	19	11月16日	研究中間報告④	
20	11月30日	研究中間報告⑤	作成指示	
冬休み		【各自論文執筆】		
3学期	21	1月11日	各自研究論文作成①	
	22	1月18日	各自研究論文作成②	
	23	1月25日	各自研究論文作成③	
	24	2月8日	各自研究論文作成④	
	25	2月15日	各自研究論文作成⑤・提出	
	26	2月22日	「課題研究論文」(推敲)完成	提出
	*	3月11日(土)	Presentation Day	ゼミ代表プレゼン予定



【1学期】

1学期は、初回授業で「本(論文)の読み方・報告レジュメの作り方」について指導を行い、さらに前述の新書をページごとに担当者に割り振った。続くテキスト講読では、生徒は担当するページの内容を要約し、その中から疑問点・論点を出してもらった形で報告してもらったが、歴史学と歴史教育の役割の違いなど、興味深い議論が行われた。

そして、1学期の最終課題として、その後の課題研究を進めるための研究計画書を一人一人に提出してもらった。この研究計画書の項目は、【巻末資料】として付した2学期以降の提出物と項目がリンクするように作っており、初めは項目を埋められない生徒も、3学期の論文作成の頃には内容を充実させることができた生徒が多かった。

なお、こうした提出物は高野ゼミでは、Google Classroom を活用してデータの配信&提出を行った。SG クラスを指導した2019年度は、論文作成指導の際にはWord データを生徒から送ってもらい、そのデータを添削し、生徒に送り返すという作業を繰り返していた。しかし、作業が煩雑だったため添削方法を模索していたが、本校では一人一人にGoogle アカウントが付与されているので、そのアカウントを活用する形で生徒とリアルタイムで同時編集が可能なGoogle ドキュメント・スライドを用いて指導した。

こうした研究計画書を提出するなかで、生徒は自分の研究に必要な書籍等に出会い、それぞれが夏休みに必要な文献を読み進めていた様子だった。しかし、生徒によっては研究テーマが定まらず、研究を進めることができていなかったもので、今後の課題としては、1学期のテキスト講読の回数を減らして、研究テーマ決めに時間を割いた方が良く考える。

【2学期】

2学期は、まずは研究計画書をもとに乙女祭（文化祭）でのポスター発表を行った。この発表は中間研究発表と位置付けられており、各生徒が自分の研究を初めて形にする機会でもある。生徒にはGoogle Classroom で記入例と内容が空欄になったフォーマットを配信し、文字や図表を入力してもらった【記入例：巻末資料A・ゼミ優秀生徒ポスター：巻末資料B】。

乙女祭当日は、大会議室にパーティションを立て、全ゼミの生徒作成ポスターを展示した。加えて、ゼミ紹介動画を流した。また、その後の研究に活かすために、来場者にはコメントシートを記入してもらった。当日は、生徒同士でコメントシートを記入し合ったり、教員がコメントシートを記入したりする様子が見られ、コメントシートを受け取ったゼミ生はとても嬉しそうだった。

乙女祭が終わると、本格的に論文執筆へ舵を切っていく。高野ゼミでは改めて研究中間報告と題して、生徒にレジメを作成してもらった。ここでも記入例【巻末資料C】と内容が空欄になったフォーマットを配信して、論文の骨子になるリサーチクエスチョンや仮説、章立てなどの妥当性について議論した。そして、レジメの各項目をそれと対応している論文フォーマットデータに書き写しながら、論文作成をスタートさせていった。

【3学期】

そして、いよいよ課題研究論文・プレゼンを完成させる3学期を迎える。2学期までのゼミ活動を踏まえて、冬休み中に研究を進めた生徒もいたが、大半が3学期に入ってから執筆と

なった。また、その後も思うように研究を進められた生徒は少なかったが、3月の全校研究発表大会に向けてゼミ代表生徒セレクションを2月の初回授業で実施する予定を示した上で、1月中に論文をおおよそ完成させ、その内容に沿って課題研究スライドを2月の中学入試による自宅学習期間中に作成してもらった。

ゼミ代表生徒セレクションでは、ルーブリック評価シート【p.6 補足資料①】を生徒に配り、生徒による評価点の平均値に指導教員（高野）の評価点を合計して、一番得点の高かった生徒が代表に選出されるようにした。こうしてゼミ代表に選ばれた生徒が、最終的に提出された論文のなかから指導教員が選ぶゼミ優秀論文【p.6 補足資料②】にも選ばれた。なお、提出された論文のタイトル一覧は以下の通りである。

- | | |
|--------------------------------------|--------------------|
| 生徒①：新疆ウイグル自治区と中国の変遷 | ※番号は生徒振り返りアンケートと対応 |
| 生徒②：戦時中から現代までの女性視点で見るジェンダー問題【ゼミ優秀論文】 | |
| ～女性の結婚・労働と政界進出を中心に～ | |
| 生徒③：ギリシャ神話と日本神話の比較 | |
| 生徒④：政治と音楽 ～政治的目的のある音楽に責任はあるのだろうか～ | |
| 生徒⑤：『不思議の国のアリス』から読み解ける現実と理想の世界 | |
| ～19世紀のファンタジー文学とシュルレアリスト～ | |
| 生徒⑥：『グリム童話』から読み解く 19世紀ドイツ児童文学の特徴 | |

3. 終わりに～生徒の感想に基づいた年間振り返り～

それでは1年間のゼミ活動を振り返りたい。まずは生徒振り返りアンケート【p.6 補足資料③】を参照していただきたい。次に、生徒の感想を踏まえて、個人的な反省を述べていく。

はじめにゼミ運営に関する課題を述べていく。まずは、テキスト講読の難易度設定だ。課題図書 요약を行う段階で躓く生徒が多く、その内容に付随する論点や補足資料を提示するまでには至らない者がほとんどだった。そのため、右図のような、ちくまプリマー新書や岩波ジュニア新書といった、より中高生でも理解しやすいシリーズを選択すべきだろう。



次に挙げられるのは、「歴史を現代社会に活かす」というコンセプトがかえって生徒が研究テーマを設定する際の難しさにつながってしまったことだ。現代的な諸課題とつながるようにテーマを設定させようと思ったが、生徒の興味関心に沿えないことが多かった。そこで、可能な限り生徒の研究テーマが現代社会どのように繋がるのかを論文に盛り込んでもらおうとしたが、その接続よりも、そもそもの研究テーマへの研究調査を充実させるだけで手一杯になってしまっていた。

ここからは、実際に生徒が研究を進めていくに当たって直面した課題について述べていきたい。はじめに強調したいことは、高校生が課題研究を行う際は、フィールドワークやアンケー

ト調査をさせる方向に促した方が完成度は高くなるのではないかということだ。特に理系研究に比べて「派手さの少ない」歴史系課題研究の弱みだともいえるが、高校生による文献調査に頼った研究調査になると内容に深みが増さない傾向が見て取れた。私がゼミを実施した2022年度時点では、コロナ禍の影響で図書館などの利用に制限があったため先行研究や史資料へのアクセスが大学生より難しい現状にあった。また、課題や小テストに追われる生徒の時間的な制約と相まって、内容を深める「研究」活動というより、史資料や参考文献探しの「調査」活動になってしまいがちだった。そのため、史資料や参考文献・先行研究へのアクセスが限られる中でどれだけ探究できるのかが大きな課題であった。そのため、アジア歴史資料センターなどインターネット上で史資料を収集できるウェブサイトの更なる活用といった改善策を模索していきたい⁵。

次に、実際に研究を指導する中で感じた課題についてである。まずは生徒の文章を添削する際に、どこまで指導教員が自分の意見を反映してよいのかが難しかったことが挙げられる。あくまでも生徒の研究なので、いかに指導教員が自分の主張を抑えつつ、生徒の研究の軌道修正を図るのかは、その塩梅が難しかった。

そして、日常の業務に忙殺される教員の時間的制約のなかで、一人一人への指導のきめ細やかさを求められることが最も大きな課題だと考える。今回の実践では「脚注の付け方」「論文の書き方」についての参考資料や、ポスター・論文などの定型を教員が用意したため、そこに文字などを入れ込ませれば形にすることができた。生徒の振り返りにあるように、こうした工夫で課題研究への取り組みやすさは確保できたと考えられるが、それ以上に質を追求すると、どうしても定期試験や講習などとの日程的な兼ね合いが難しく、論文執筆に際して時間が足りない生徒が多かった。

そのため、今回は課題研究論文の完成を3月上旬に設定したが、1月中に完成させて2月中に推敲&添削の方が、教員・生徒ともに余裕をもって取り組めたのではないかと考える。今回提出された論文の完成度にバラつきがあったという反省を踏まえると、ゼミでのフィールドワーク実施や基礎文献の読み込みなど、比較的時間がとれる夏休みを有効活用できるように、まずは1学期のゼミスケジュールを見直し、年間のスケジュールを前倒す必要があるのではないだろうか。

【参考文献】

小田中直樹『歴史学ってなんだ?』(PHP新書、2004年)

【補足資料】

- ①ループリック評価シート ②ゼミ代表生徒・ゼミ優秀論文 ③生徒振り返りアンケート



- 1 各カリキュラムの詳細は本校 HP を参照。 https://www.girls.kosei.ac.jp/inquiry_learning
- 2 詳細は教育と探求社 HP を参照。 https://eduq.jp/for-school/quest_education/#pos-ca
- 3 2022 年度に開かれた他の特進ゼミの詳細については、次の HP を参照。
https://www.schoolnetwork.jp/jhs/shingaku_tsushin/tsushin-202211/school-26.php
- 4 各ゼミには予算が付いているので、こうした副教材も教材費から充当される。
- 5 詳細については HP を参照。 <https://www.jacar.go.jp/>

【巻末資料】

A

未来を切り開く「教科書対話」の可能性

～日本と「アジア」の和解のために～

各項目1行ずつだけでも良いので、まずはとにかく書き進めていきましょう。

総合的な探究の時間（指導教員：高野晃多先生） 2年 組 番名前

概要【研究の流れ「①何を」「②なぜ」「③どのように問題とし」「④どのような結論に至っているのか」がわかるようにまとめる】
 Good! 「～を検討した」「～を考察した」という報告のみ
 Very Good!!! 先行研究と比較して、どのような研究・分析を行ったのか。

研究背景(動機)・研究目的

①近年話題になった日韓間での徴用工問題など、日本には歴史問題が国際問題に発展しているケースが多い。
 →政府レベルの話し合いでは、なかなか解決の糸口が見えない
【研究テーマの背景(このテーマを研究しようと考えたきっかけ)を述べる】。
 ②これまでにも関係改善の糸口を探るために、日本では近隣諸国との民間交流が行われてきた。
 →私は、民間交流の中でも最も効果的な手段が「教科書対話」であると考える
【仮説(リサーチクエストに対する仮の答え)を述べる<具体的解答>】。
 ③岡裕人(2012)によると、ドイツとポーランドでは～～。しかし、日本では～～なので、まだその効果を研究したものは少ない。
【先行研究との違い・研究意義(このテーマを研究する意味)を述べる】。
 →そのため日本での「教科書対話」の効果がどれだけのものなのかを研究する
【研究目的(この研究で何を明らかにしたいのか)を必ず述べる】。

調査結果②

調査結果①と同じ

調査結果①が多い場合、こちらの枠にも書いて大丈夫です。

リサーチクエスト

日本が歴史問題を抱える国と和解するためには、どのような解決策があるのか？
【研究の中核部分となる調査を行う上での「問い」を必ず疑問文で書くこと<抽象的設問>】

考察②

考察①と同じ

考察①が多い場合、こちらの枠にも書いて大丈夫です。

研究手法

○文献調査では、AとBを比較した。
 →Aは～～で、Bは△△だった。
 ○「教科書対話」の中でも、日中韓・青少年歴史体験キャンプ(以下、キャンプと略す)での実践を考察の対象とする。
 →キャンプ参加者へのインタビュー調査を用いる。

※ **【どのような手法を取ったのかを記入】(可能であれば下記内容まで詳細に)**

- ①文献調査の場合
- ・どのような文献を読んだのか、文献同士を比較したポイントなどを書く。
 - 例) 筆者の立場がどのように異なるのか？
 - 書かれた時代によってどのように異なるのか？
 - ・紹介した先行研究は選んだテーマとどのように関係するのかを書く。
- ②オンラインインタビュー・オンラインアンケート調査の場合
- ・調査方法、調査対象の説明、分析方法などを書く。

現状報告

- ①調査結果①②を踏まえて、どのようなことが明らかになったのかを簡単にまとめる。
 ②リサーチクエストに対して、どのような答えが導き出せそうかを簡潔にまとめる。
 ③リサーチクエストに対して、導き出せる答えが出なかった場合も、そのことを正直に書く。その場合は「なぜ答えが出なかったのか」という原因も必ず自分たちで推測して書くこと。
 ※ **【「研究背景(動機)・研究目的」で述べた仮説が正しかったのか再確認】**

調査結果①

- ①具体的なデータ(グラフや表など)を示す。
 ②表にはタイトルを付ける「表1△△の数の移り変わり」
 ※タイトルの位置：表の場合は上に、図の場合は下につける。

考察①

- ①データをどのように解釈したのかをまとめる。
 特に強調したい点や重要となる論点を示す。
 ②考察は「調査結果」→「考察」→「調査結果」→「考察」と書き始める。
 例) 「調査結果の要約①」→「これは～と言える」→「調査結果の要約②」
 →「これは～と考えられる」⇒「以上のことから～と言える」

今後の展望

- ①今回の中間発表の意義「仮説を踏まえて到達できた点」と限界「わからなかった点」を併記する。
 例) 「～という点は明らかになった。しかし、△△は〇〇のため明らかにならなかった。」「今後は、▲▲を調べることでこの点について明らかにしていきたい。」

参考文献

例) 岡裕人(2012)『忘却に抵抗するドイツ?歴史教育から「記憶の文化」へ』大月書店。
 ★引用の仕方・参考文献の書き方は「本(論文)の読み方・報告レジュメの作り方」や『課題研究メソッド』p.174を参照。

B

戦時中から現代までの女性視点で見るジェンダー問題

～女性の参政権獲得・社会進出を中心に～

総合的な探究の時間（指導教員：高野晃多）

概要

戦時中にあった結婚に対する価値観などの問題、今にも引き継がれてしまっている女性の社会進出の問題に着目し、これから先どのようにこれらのジェンダー問題を解決していけばいいのかを考える。

研究背景(動機)・研究目的

- ①『少女たちの戦争』や『歴史を読み替える ジェンダーから見る日本史』など戦時中の女性がテーマの本を読むと、「男子普通選挙」で女性は選挙に参加できないことや政府が良妻賢母を掲げたことなど参政権や結婚に関することで今よりも深刻なジェンダー問題があった。また、現代ではニュースなどを見ると社会進出や女性への固定概念といった新たな問題が挙げられている。
- ②『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』や新聞、最近のニュースから戦時中のジェンダー問題と現代のジェンダー問題を比べると女性の社会進出の面で形は違えど、問題を抱えていることがわかる。
→解決には多くの人がジェンダー問題を正しく・共通の問題として認識する必要がある。
- ③戦時中の女性の本・ジェンダー問題の本は多く見かけるが戦時中と現代の女性を比較したものは私が知る限りない。
→この研究では戦時中から現代に至るまでのジェンダー問題の種類・解決の度合いを見て解決するためにはどうしたら良いかを考えることが目的。

リサーチクエスト

戦時中と比べて現代のジェンダー問題はどれほど解決できているのか？
また、未だに解決されていない問題はどのように解決していくべきなのか？

研究手法

- ・文献調査①
戦時中の女性の扱いについて調べる。
- ・文献調査②
現代のジェンダー問題にはどのようなものがあるのかを調べる。



現状報告

- ①これまでの調査から、戦時中は「結婚」への価値が高かったこと、既婚の女性はある種の立場を獲得しているが、未婚の女性は既婚女性よりも政府の方針や周りの環境に縛られたり、守られていなかったりすることがわかった。
- ②戦時中と比べて現代は既婚の女性も働きやすいように改革がなされており、既婚女性への扱いが改善されてきていることがわかる。
- ③結婚という点で戦時中と今で大きく価値がかわり、問題解決に進んでいっていることはわかったが、未だに解決されていないジェンダー問題については詳しくは調べきれなかった。

今後の展望

これまでの研究で戦時中のジェンダー問題にはどのようなものがあったのか、という点が研究できた。
一方で、現代まで引き継がれてしまっているジェンダー問題を調べることで、解決策を考察することができなかった。今後は現代に引き継がれてしまっているジェンダー問題を調べ、これから先、どのように解決していけばいいのかを明らかにしていきたい。
また、戦時中は「ジェンダー問題」という言葉がなかったため、調べきれない戦時中のジェンダー問題を調べるには、女性が関わった事柄を少しずつ見ていく必要があると考える。

調査結果

「昭和十九年〔一九九四〕年の夏休み、学徒動員により、『立川飛行機』へ、同級の友達と配属されることになった。」（青木、2015）や『『自発的』奉仕活動として未婚の女性を大量に軍令工場で働かせた』（加納、2015）とあるように、学生を含む未婚の女性に対しては出兵による工場の人手不足を補う為、労働を強いていたことがわかる。
また、「典型とされた職種の多くは若年独身女性を想定したため、保護者や被扶養者を前提とする保養であり構造的な低賃金にとどめられた。」（長野、2015）とあるように、既婚の女性は未婚の女性と同様には働いていなかったことがわかる。
また、「ソ連兵に差し出された娘たち」では黒川開拓団でロシア兵への性接待をしていた人たちは「元団員から得た情報によると、「接待」役にされたのは、数えて一八歳以上、未婚の女性ということだった。」（平井、2022）とあるように未婚の女性たちに限られていた。

考察

- ・既婚者には性接待させないことから「結婚しているか否か」が女性の価値・立場を決める大きなポイントの一つになっていたのだと考えられる。
- ・既婚の女性の労働は未婚の女性よりも低賃金であり、今でいうフルタイムの働き方でなかったことから「既婚の女性は家にいるもの」という考えが伺える。
- ・一方で未婚であれば半強制的に重労働を強いていたことから女性を「男性に都合の言いように」使っていたとわかる。
- ・また、「性接待」は未婚の女性のみを対象にしていたことから未婚の女性に対する価値観を伺うことができる。

参考文献

- ・久留島典子、長野ひろ子、長志珠絵編（2015）『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』大月書店
- ・スヴェトラーナ・アレクシエーヴィッチ著、三浦みどり訳（2016）『戦争は女の顔をしていない』岩波現代文庫
- ・川恵実（2020）『告白』かもがわ出版
- ・中央公論新社編（2021）『少女たちの戦争』中央公論新社
- ・平井美穂（2022）『ソ連兵に差し出された娘たち』集英社

C	平成 10 月 26 日(火)【報告日】
研究中間報告（見本）	
【名前】高野晃多	

【仮タイトル】… 体言止めであると好ましい(副題を必ず付ける必要はない)
未来を切り開く「教科書対話」の可能性 ～日本と「アジア」の和解のために～

【リサーチエスチョン】… フィールドワークを行う上での「問い」・論文の中核部分＝＜抽象的設問＞
日本が歴史問題を抱える国と和解するためには、どのような教育的解決策があるのか？

【仮説】… リサーチエスチョンに対する仮の答え＝＜具体的解答＞
日本が歴史問題を抱える国と和解するためには、「教科書対話」を通じた交流が必要不可欠である。

【章立て】

序章（初めに）

課題設定の理由 … ① ＜目的＞の提示
→リサーチエスチョン・仮説を提示し、論文全体を貫く＜問い＞を明確化する

先行研究の整理 … ② 自分の研究の研究史上での位置づけを行う
→研究意義を見出す

問題の限定 … ③ 研究の＜方法＞・＜視角＞を提示
→「先行研究の整理」を踏まえて、論文の考察対象・研究手法を絞り込む

第一章 日本の歴史教育が抱える問題点

第二章 ドイツにおける「教科書対話」の実践例

第三章 日本における「教科書対話」の現状とその課題

… ④ 仮説の実証(必要に応じて章→節→項に細分化)

終章（終わりに）

結論 … ⑤ 仮説の再確認と研究結果

論じ残した問題についての見通し、書き終えての感想など

脚注一覧 … ⑥ 「自分が論拠にした情報を第三者も見ることができ、再現可能な状態にする」ことが論文には必須
参考文献一覧

【課題設定の理由】（論文本文では、リサーチエスチョン&仮説もここに記載）

○ 昨今話題になっている徴用工問題など、日本には歴史問題が国際問題に発展しているケースが多い。

→ 政府レベルの協議では、なかなか解決の糸口が見えない。… 研究背景に言及

○ これまでにも、歴史問題を解決するために、日本では近隣諸国との民間交流が行われてきた。

→ 私は、民間交流の中でも最も効果的な手段が「教科書対話」であると考えている。（理由とともに）

→（理由の具体例）ドイツの事例では～

→ 本稿では、日本での「教科書対話」の効果がどれだけのものなのかを明らかにする。

… ＜目的＞の提示(→リサーチエスチョン・仮説と対応)

【先行研究の整理】

① 歴史学の視点から論じたもの

② 教育学の立場から論じたもの

リサーチエスチョン・仮説と
＜目的＞が同じパターンも有り
→ 初めから具体的な研究調査をした場合

第10章 慶應義塾高等学校の「卒業研究」における日本史の探究活動

高橋傑（慶應義塾普通部教諭・前慶應義塾高等学校教諭）

はじめに 本校の紹介と卒業研究の紹介

慶應義塾高等学校（以下塾高）は、大学の教養課程が設置されている日吉キャンパス内に所在する男子校で、慶應義塾の一貫教育校を構成する高等学校国内4校（高等学校・志木高等学校・湘南藤沢高等部・女子高等学校）の一つである。生徒数は各学年700名程度、3学年で2000名を超え、教職員も専任100名・非常勤50名程度在籍する大規模校である。

学校自体は戦後誕生した新制高校であるが、1934年に竣工し、大学予科が使用していた校舎を現在も利用していることからわかるように、学校の気風としてはいわゆる旧制高校の気風を残している。

塾高における卒業研究は、総合学習の一環として位置づけられ、高校3年生が週2コマ、連続した時間で設置されている。生徒は、それぞれの関心に近い、教員が開講するゼミ形式の講座に所属して、論文を執筆することが求められる。卒業必修単位として位置づけられているため、論文を執筆し、合格せずに卒業することはできない。

1 本校の卒業研究履修システムと構成

まずは、卒業研究の履修の仕組みについて説明したい。先述の通り、塾高には100を超える専任教員がおり、各自の専門性を生かした約100の講座が生徒に提示される。教員が提示するテーマは、必ずしもその教員が属する教科の内容に関連したものとは限らず、例えば、数学の教員が言語学や哲学を研究する講座を立てることもある。その中から、生徒は希望するテーマに近い講座を選択する。結果、講座の希望人数が少数の場合は成立しないこともあり、最終的には講座は約50程度となる。一つの講座に多くの生徒が集まった場合や、少数のため講座が成立しなかった場合には、生徒は第二希望以下の卒業研究を履修する。この講座選択の過程では、担当教員と対面で話すことが必須となる。

このように、必ずしも教科の枠に捕らわれず、教員の興味関心と生徒の興味関心が響き合って成立するところが、塾高の卒業研究の特徴である。教員がテーマを与えるわけでもなく、生徒の全くの自由研究でもないということである。

筆者は3年間の人事交流制度を利用して塾高に異動する中で、日本史関連の卒業研究を2年間担当した。2022年度の履修者は6名、2023年度の履修者は21名であった。いずれの年も第一希望で私の講座を履修した生徒は多くなかった。大学につながる実践的なテーマが並ぶ中で、小学校以来科目として学習し続けている日本史を、改めて高校の卒業研究のテーマとして選ぶ必要性をあまり感じなかった、というニュアンスの言葉を、年度の初めの生徒との会話の中から受け取った。

2 日本史の卒業研究における探究活動の概要

筆者が担当した卒業研究では、プリント等は原則配布せず、web ページを作成して生徒に情報を提供した。スマホやタブレットに慣れ親しんだ生徒にとって、便利なデータベースや参考文献など、リンクを貼って紹介した方が利便性が高く、また学校の往復の際にも参照してもらえると考えたからである。先述の通り、卒業研究の最終目的は論文の執筆であるため、小笠原喜康・片岡則夫『中高生からの論文入門』（講談社現代新書 2511、2019年）を参考文献として挙げ、20,000字の論文執筆を最終目標とした。

1年間のおおよその流れとしては、生徒それぞれが自分の興味関心を、論文のテーマとしてふさわしい問いに鍛え、参考文献の調べ方、先行研究の整理の仕方を学び、章立てを行った上で、資料読解のスキルを学び、個別報告をして論文を執筆する、というものであった。以下、学期ごとにもう少し細かく見ていきたい。

1 学期

まずは問いを立てることから始める。4月の一回目の授業では、5W1Hと自ら選んだキーワードを組み合わせて、とりあえず6通りの問いを立てる。立てた問いはGoogle フォーム経由で提出し、受講生全員で共有してお互いに意見を述べ合った。こうして、とりあえずの問いは立つが、なんとなく自分のイメージとずれているか、最初から自分の中の問いのイメージに、5W1Hを当てはめてしまうことが多い。いずれにせよ、問いを自分自身で立てるきっかけを作りつつ、生徒間の関係構築の機会と考えている。

このキーワード選びの際、国立国会図書館リサーチナビ¹のテーマグラフ機能を利用して、キーワードの階層的構造を図示してきたが、残念ながら2024年のリニューアルでこの機能はなくなってしまった。このテーマグラフ機能は、例えば、福澤諭吉と検索すると、その上位概念として、「明治時代の思想家」「明治時代の教育者」などのキーワード

¹ 国立国会図書館サーチ リサーチナビ (<https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi>)

を、ツリー構造で表示する機能であった。思い付いたキーワードを蔵書検索 web で検索し、「情報なし」という結論を導き出しがちな生徒達に、検索のコツをつかんでもらう機会だったのだが、この機能の廃止は悔やまれる。こうして4月は、自分の問いを鍛えることに費やす。また、学校図書館と連携した資料探しのレクチャーも組み込んだ。

5月には、鍛えた問いをどのように論証するか見通しを立て、その結果得られるであろう仮説を表現し、受講生相互に批判しあった。例えば、関ヶ原合戦に興味を持った生徒は、以下の様に表現した。

自分なりの問い

畿内に拠点を置く政治勢力にとって、どのような場合に関が原が防衛地点となるのか。また、どのような場合に関が原は防衛地点に選ばれないのか。

論証する方法

畿内が侵攻された事例を比較して、時代背景や採用していた兵法などに共通するものを見出す。

問いに対する仮説

防衛の際に、展開できる味方の兵力と、敵の兵力の差によってえられる場所が変わってくるのではないかと。

このような経験を経て、論文執筆の際の着想がどのようにして生み出されるのか、ということを経験してもらうことを目指した。

こうして自分なりに思考し、ある程度のテーマが固まったところで、先行研究との向きあい方について伝えた。とりわけ、AI の利用が当たり前の生徒達に、「巨人の肩の上にいる」というメタファーを噛みしめてもらうことは重要である。

まず、参考文献の探し方について、様々な検索 web サイトを紹介した。学校の所在地が神奈川県横浜市であることから、学校の図書室、新書マップ²、横浜市立図書館、東京都立図書館、神奈川県立図書館、慶應義塾大学 KOSMOS、国立国会図書館リサーチナビ、Cinii Research³などを紹介した。このうち新書マップのテーマリウム機能は、知れた

² 新書マップ 4D テーマリウム (<https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi>)

³ 国立情報学研究所 CiNii Research (<https://cir.nii.ac.jp/>)



[卒業研究について](#)

[論文制作のたまかな構造](#)

[論文作成のベース](#)

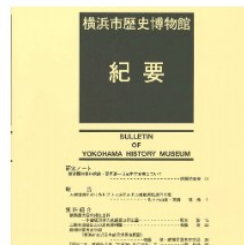
[参考文献](#)



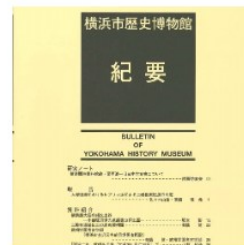
[まずは問いをつくらう](#)



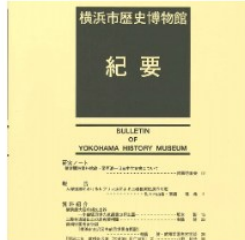
[問いを鍛え
参考文献を探そう](#)



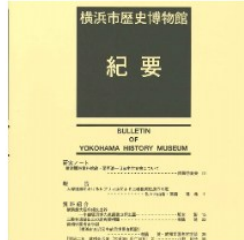
[章立てを考えよう
参考文献紹介をしよう](#)



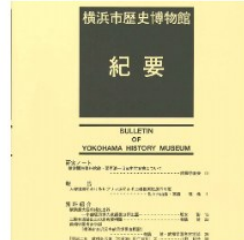
[資料を読もう](#)



[フィールドに出よう](#)



[本論の組み立て方](#)



[はじめにを書こう](#)

卒業研究について

卒業研究では、みなさんそれぞれの興味や問題関心に基づいて論文を執筆してもらいます。提出は来年の1月17日。その手前で論文として成り立っているかどうか、みなさんと何往復かしたいと思っていますので、実質年内に書き上げるというつもりでいきましょう。一応掲出したシラバスの文章を載せておきます。

本講座では日本の歴史について研究をおこなっていきます。「歴史学」という学問の世界では、日本の歴史は原始・古代・中世・近世・近代・現代の六つの時代に区分されています。そこで、諸君はこれらの時代に存在する様々な事象（政治・経済・外交・社会・文化・思想・信仰・人物・事件・モノ...etc.）をテーマに選び、研究に取り組んでもらうことになります。

歴史を研究する上で最も重要なことは「史資料」の活用です。史資料とは、『日本書紀』や『吾妻鏡』、豊臣秀吉や伊達政宗の「書簡」、『時事新報』などの新聞や『文明論之概略』など「過去に執筆された書物」を指す「史料」と、矢じりや礫といった石器などの「遺物」、三内丸山遺跡などの「遺跡」といった「モノ・場所」を指す「資料」を合わせた学術用語です。そしてこの史資料こそが、現在に生きる我々が過去を知るための唯一の手がかりとなります。そのため、日本史の卒業研究では、自分自身が史資料に触れ、対話し、歴史の復元を実践していくことが重要です。

卒業研究（日本史）のweb ページ

いことを入力すると、いくつかのキーワードが自動的に生成され、それに基づいた新書の

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る クラブ活動・自主活動の取り組みから

リストを紹介するもので、研究の入口としての新書を紹介できるとともに、先に挙げたりサーチナビのテーマグラフ機能と同様の説明を行うことができる。

また、生徒が慣れ親しんだ検索エンジンの利用についても、Google 検索を例に、以下の情報方法を伝えた。

AND 検索 「A B」 A と B が両方あるものを探す

OR 検索 「A or B」 A か B かどちらかがあるものを探す

NOT 検索 「A B -C」 A と B の組み合わせから C を省く

完全一致検索 「” ***”」 ***の語が完全に一致するものを探す

ファイル限定検索 * .pdf PDF ファイルで公開されているもののみを探す

ドメイン限定検索 * .ac ドメインが.ac (大学) のサーバで公開されているものを探す

この方法を伝えたことによって、リポジトリの論文を挙げる生徒が増えた。検索エンジンを主体的に使う経験があまりない生徒にとって、情報は、与えられるものではなく、こちらから働きかけ、取りに行くものだという経験になったと考える。

こうした方法で先行研究を10点見つけ出すことを求めるとともに、引用の方法について、自分の言葉（自分なりの意見・コメント）と他者の言葉（資料・webからの引用、インタビュー等）をしっかりと分けることを確認した。

6月には、書評と章立てを行い、暫定「はじめに」の執筆を行った。先に挙げた参考文献の中から1冊を選んで書評を行うのだが、ここでAIを使った生徒がおそらく2名現れた。書評の中に、「～と評価されている」という表現があったり、箇条書きの部分があったりしたので、その事について質問したところ、1名はすぐに認め、1名は認めなかった。結局どちらも卒業研究ではAIは使っていないと思われるので、この段階でこのような経験をしたことは、意味があったのかもしれない。章立ては、暫定的に3章立て、各章は3節立てで作成し、10冊の参考文献をそれぞれに割り当ててもらった。

次に、夏休みの各自の資料読みの練習を兼ねて、近世の地誌の読解練習を行った。班別に分け、それぞれに一定の文章を割り当て、現代語訳をつけてもらった。テキストは、『新編武蔵風土記稿』である。雄山閣から出版された書籍や、国立国会図書館のデジタルコレクションで、内務省地理局版を閲覧することができる。南関東の学校であれば、なじみの場所の江戸時代を簡単に知る事ができる。班別活動にしたのは、生徒同士の教え合い

に期待したのと、別の班の読みに対しての批判が行いやすいと考えたからだ。個人の見解に対する批判は、躊躇する生徒が多い。健全な批判を、まずはハードルを下げるところから始めたかった。また、筆者の論文⁴を現代語訳の参考として例示し、これを批判的に読むことも必要である事を伝えた。

こうして一応の目的意識と、最低限の資料読解のスキルを持って、生徒達は夏休み中に各自の研究活動を行うこととなる。

2 学期

2 学期になると、毎週各自の個別報告が続いた。生徒各自がテーマとした時代ごとに班をつくり、それぞれの班員が報告する際には、司会をすることと質問をすることを班員に課した。最後に教員としてコメントしたが、生徒達に言い尽くされてコメントに困ったこともあった。一方で、生徒達からすると、教員のコメントは、緊張を持って受け止められた様で、教員としてコメントには気をつけなければならないことを痛感した。

2023 年度は履修者が少なかったため、各自 2 回ずつ行う事ができたが、2024 年度は 1 人 1 回しか行うことができなかった。それでも、予定の時間を超過して報告したり、コメントしたりする回が何回もあった。自分で議論を組み立てたからこそ、他者の議論を健全に批判することができているように感じた。

冬休みは、前半で論文を書き上げることを求め、年明けからは教員が校正し、返却して再提出を求めた。校正では、字句だけでなく、先行研究の引用方法や、資料と論証の因果関係に関するコメントもつけた。多い生徒では、3 往復程度、原稿のやりとりをした。こうして、1 月中旬の提出を迎えることになる。2 年間の卒業研究のタイトルを次項に掲げる。

このうち、2022 年度は 1 名（「近世北陸の人口増加要因の研究」）、2023 年度は 2 名（「將軍不在期における北条政子の実態」「イギリスの与えた明治維新への影響について」）が、全校生徒の中から優秀論文に選ばれた。

⁴ 高橋傑「新編武蔵風土記稿の現代語訳と景観－矢上村編－」『慶應義塾高等学校紀要』（55）1-22 2024 年

2022 年度

近世北陸の人口増加要因の研究
言語学的知見に基づく古代日本の「異民族」 言語学的知見に基づく古代日本の「異民族」
上杉謙信の財政と領国経営
諏訪地域における御柱信仰についての研究
川中島合戦における地理的な考察
日本橋の老舗と発展の関係

2023 年度

白村江の戦い敗戦後の日本の防衛策と山城
幕府と朝廷の関係性の変化
鎌倉時代における朝廷の対武士観
武蔵国足立郡の近世資料から見る中世郷土史
将軍不在期における北条政子の実態
今川かな目録の展開について
楽市の変遷と戦国期における経済政策
なぜ家康は秀吉の下につく決断したのか
北条氏は名胡桃城事件をきっかけに滅びたのか
家督と文化の継承：日本における後継者教育の変遷
潜伏・隠れキリシタン
歌舞伎の客層・需要と時代変化
岩瀬忠震と横浜開港
多摩川中・下流域右岸における多摩川梨栽培の変遷
禁令と局中法度 新撰組の統制を保つもの
イギリスの与えた明治維新への影響について
伊庭八郎の脚色
内地雑居問題から見る条約改正交渉
大日本帝国が空軍独立を果たさなかった理由の考察
大戦期の国民思想と国家神道
石原莞爾の最終戦争論と満州占領

優秀論文は、担当教員が推薦し、関連する分野（筆者の場合は社会科関連の教員及び社会科に関わる講座を持った教員）の教員全員の投票を経て、教員によって構成された学校全体の委員会で選ばれるもので、700名程度の中から10名程度選出される。優秀論文

に選ばれた研究は、それぞれ先行研究を分析し、多くの資料を集め、読みこなし、そしてそこから自分なりの論を立てることに成功した。日本史の論文を書くということを通じて、自ら考えること、他人の論を尊重することを学んだと感じさせる論文だった。ちなみに、このうち1名は文学部に進学し、日本史を専攻している。それは大変うれしいことである一方で、それだけがゴールではないとも感じている。

おわりに 一 中高における日本史探究活動の実態と課題

以上、塾高における卒業研究の実践を紹介した。あくまで2年間の経験に基づいた報告であることはご容赦いただきたい。

やはり気になっていることは、日本史を探究活動のテーマとする生徒が少ないことである。塾高では、高校3年生の選択科目の中にいわゆる日本史探究が含まれている。旧カリキュラムでは、文系学部に進学する者のほとんどが日本史Bを履修していたのだが、新カリキュラムになり、完全に自由選択の科目になると、履修者はかなり減少した。受験のない学校では、たとえ探究といっても、高校3年生であえて日本史を履修することに魅力を感じないのかもしれない。

現在の筆者の職場は中学校であるが、ここでは夏休み明けに労作展⁵とよばれる芸術作品や論文を発表する文化祭がある。近年、近代日本政治思想史の研究者である原武史氏が自身の経験を紹介した学校行事で⁶、生徒は自由にテーマを選んで作品を発表する。

このうち、歴史をテーマに選ぶ生徒は、中1～中3にかけて、少しずつ減少していく。これは、中学受験という経験を経て、歴史に得意意識をもって中学に入学し、その延長で歴史をテーマに選んだ中1が、読んでまとめるだけではだめで、自分なりの考えを表明する、という論文執筆に魅力を感じなくなっていく様を表しているのかもしれない。中学生にせよ、高校生にせよ、歴史を探究する中で、どのようにその経験を一般化できるのか、といったことを実感できるような探究学習が求められているように感じている。塾高における2年間の取り組みは、そのような問題意識の中で行ったものだが、果たして考えていた課題に答えうるようなものとはならなかったと感じている。取り組みの成否について、今一度生徒達が大学で卒論を書き、卒業する頃に、感想を聞いてみたいと思う。

⁵ 慶應義塾普通部 労作展 (<https://www.kf.keio.ac.jp/rousakuten/>)

⁶ 原武史『日吉アカデミア一九七六』（講談社、2025年）

第11章 歴史系クラブの新しい動向と事例について

竹田和夫(新潟大学・高校非常勤講師)

かつての歴史系クラブ活動は、教員の専門分野での力量と生徒の旺盛な探究心と主体性により成果をあげてきた。当時の教員には研究者が多かった。かつては自治体史編さんがさかんでもあり教員は参画する機会が多く、地域の人々や時代や専門をこえた地域知とつながり、史料の読み方や感性を鍛えられた。しかし自治体史編さんも終息し、このような地域における異世代・異分野の知的交流は衰退した。

校内でも教員や生徒がともに地域に目を向け、その歴史を語る場面が激減した。特に近隣の遺跡や考古資料の活用は壊滅状態に等しい。収集保管していた学校所有の考古資料も顧みられず、それを解説できるスキルを持った教員もいない状態である。

その後創設された総合的な学習とは歴史の学びが重なることは稀であった。そして歴史系の学びはSSHなどの理数系、SGH等国際的感性重視の大きなうねりにのみこまれていく。

しかし、近年は逆に自然科学では学際的視野が拡大している。日本科学史学会2018年度大会はシンポジウム「歴史教育における科学史・技術史の教育的意義」を開いた。報告に接し、かつ「科学史・技術史関連科目の開講状況に関する調査」最終報告書を見て愕然とした。自然科学分野の大学研究者が人文科学特に歴史学とも重なる科学史に大いなる関心を抱いていたことである。また近年の日本考古学協会や棚田学会での活動では高校生の報告が増えている。母体は従来のような人文系ではなく自然系のクラブ活動であることが多い。

しかし歴史系クラブ活動が衰退の一途をたどっているかというところでもない。神奈川県足柄高校歴史研究同好会は桐生海正教諭を先頭に積極的に地域史研究に取りくんでいる。ただし昔の歴史部活動に比して、関心や調査研究活動が広範なテーマに広がり深みをましていることを特筆したい。

また本来は近世史を研究していた桐生教諭も個人研究の域をこえ、広く地域の歴史・文化の課題に取り組む。例えば山城を題材に町民との橋渡し役もつとめている。同校の活動記録を読むと、こうした教師の姿勢が生徒たちにも刺激を与えて教師も生徒の提起に刺激される双方向

知的発信がなされている。教師と生徒が互いに「問い」を立て対話する現行の新しい教育とクロスする。

高校では近年①科学技術振興法改正に起因する普通高校の普通科から文理融合・地域協働の科への転換、②STEAM教育の浸透、③総合的な探究の実施、地域協働の推進④SSH等の国指定事業における地域学への視座による教育実践、⑤ボランティア部など文系でも理系でもないクラブ活動、社会とつながる活動が歴史を素材とする事業、⑥大学と高校がつながる歴史系の学び、⑦文化施設と高校がタイアップした歴史関連企画、などが展開されるようになったきた。

上記①②の動きの成果としては古市秀治「現代に生きる歴史教育と文化財」『歴史地理教育』688号、2004年、である。工業高校の現代社会の授業で考古学の活用を行っているのであるが、「環境権などの理論的学習」「発掘体験という体感で学ぶ学習」「都市再開発など現実的課題との学習」「地元という身近な問題としての学習」をリンクさせている。こうした歴史事象と現代の課題を重ね課題解決をはかる授業がクラブ活動に昇華されることを切望する。③の実践例では、岡山県立図書館主催高校生ビジネスグランプリ「日食が勝敗を分けた！？プラネタリウムで体感する源平探訪ツアー」（二つの学校の合同チームによる）がある。これは、「地域協働」「学際的探究」がクロスした新しいタイプのクラブ活動である。岡山県立和気閑谷学校の「閑谷学」（地域に根差し、将来と社会に「足場」をかける）の地域学の深さには驚嘆する。これは県教育委員会が主導した「グローバル型-地域学」教育が「総合的な学習（探究）の時間」「学校設定教科・科目」「課題研究」等において、「キャリア教育」「主権者教育」等と関連付け、地域の課題等を自らの課題として捉え、地域の人と関わりながら、主体的にそれらの解決に取り組んだ学習である。

④のSSHと歴史の学びを架橋した実践例を紹介したい。沖縄県立向陽高校における考古学的な地域素材を対象にした研究。奈良学園中学校・高等学校では博物館で考古学に利用される化学技術への理解を深め、同高校での放射線と考古学・文化財の講義を実施した。岐阜県立関高校のSGH事業では地域探究部による考古学や歴史学の研究を推進し、ここから大学の考古学専攻進学者が輩出している。

⑤では、群馬県立高崎北高校歴史研究班はJRC部を母体としている。活動成果を日本考古学協会ポスターセッションで報告した。

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る クラブ活動・自主活動の取り組みから

⑥の大学と高校の接続では、関西学院大学と関西学院千里国際中等部・高等部の「探究」連携と文化施設企画がタイアップした高校生の歴史関連の活動がある。

⑦では、京都市考古資料館・龍谷大学附属平安高等学校・中学校合同企画展「HEIAN 掘る！」がある。また新潟市歴史博物館では、一昨年から高校生ボランティア活動を創始している。二十名の高校生(県立高校二校 私立高校三校)が登録し昨年夏には自分たちが企画した体験講座を実現し百名以上の参加者があった。これらの高校は歴史系クラブを母体としているわけではない。授業やクラブをこえた関心の高まりが背景にある。このように博物館サイドから、学校教育特に高校への接近を図り、従来にない発想の事業をたちあげていることに心から敬意を表す。

①～⑦の動向は、今後の高大連携歴史教育研究会特別部会活動に参考にすべき傾向と思われる。

第12章 高校生が切り拓く地域史研究—歴史研究部の実践—

桐生海正（神奈川県立足柄高等学校）

はじめに

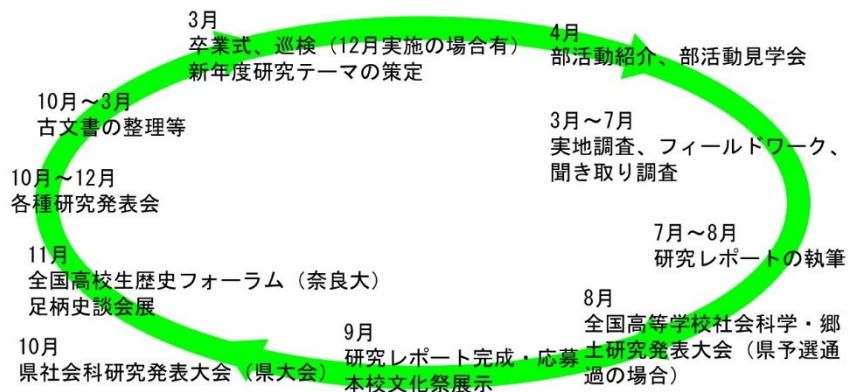
本稿は、筆者が顧問として携わっている神奈川県立足柄高等学校（以下、本校）歴史研究部の2022～2023年度にかけての活動を紹介するものである¹。筆者は、別稿にて、本校歴史研究部の前身である歴史研究同好会の活動をまとめたことがある²。本稿はその後、2022年4月から部へと昇格した歴史研究部の軌跡を追うものである³。

現在（2025年1月1日時点）、歴史研究部では2年生1名、1年生5名が活動している。2024年度から新たに取り組んでいることもあるが、成果がまだまとまっていないため、本稿では2023年度までの活動を紹介する。

高校生が地域の歴史を研究する取り組みは全国各地で魅力的な実践がなされている⁴。なかでも部活動では、岐阜県立関高等学校地域研究部⁵や福岡県立朝倉高等学校史学部⁶などの活動は特筆される。本校歴史研究部の活動もこうした活動と軌を一にするものである。大学や博物館等が開催するコンテストやフォーラムにも後押しされ、高校生による研究活動が全国で展開されている。

本校歴史研究部の活動の流れ（単年度）を示したものが【図】である（年度によって若干の変更もある）。まずは、本校歴史研究部の特色である地域史研究レポートの作成について紹介していきたい。

【図】 1年間の大まかな流れ



1. 地域史研究レポートの作成

2022年度～2023年度にかけて生徒が作成した地域史研究レポートのタイトル、作成者、各種コンテストへの応募状況等及び成果をまとめたものが、【表】である。以下、特徴的なレポートをいくつかみてみよう。

第2部 歴史的アプローチの可能性を探る クラブ活動・自主活動の取り組みから

【表】2022～2023年度におけるレポートのタイトル他一覧				
年度	通番	タイトル	作成者	コンテストへの応募状況等及び成果
2022	①	明治期における赤痢流行への対応 —「伝染病赤痢仮離隔病舎日誌」から—	3年生2名	第16回全国高校生歴史フォーラム応募・発表→優秀賞・知事賞、『第16回(2022年)全国高校生歴史フォーラム発表集』所収(WEB公開)
	②	日記から解き明かす関東大震災と地域の人びと —生沼良蔵日記の分析を中心に—●	3年生・2年生各1名	令和4年度鳥居龍蔵記念全国高校生歴史文化フォーラム応募・発表→優秀賞・最優秀賞、『歴史研究』第709号(戎光祥出版、2023年)所収、第29回神奈川県高等学校社会科研究発表会で発表→部会長賞
	③	班目人形芝居から足柄座へ☆	2年生1名	第18回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト地域文化研究部門(個人)応募→優秀賞、第28回神奈川県高等学校社会科研究発表会で発表→県私立中学高等学校協会理事長賞(2位相当)、令和5年度全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会で発表、『第18回(2022年度)「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト入賞作品集』所収
	④	湯山家文書からみる山畑の開発と金融	2年生1名	第21回櫻井徳太郎賞「高校生の部」応募→佳作、『歴史民俗研究 第21回櫻井徳太郎賞受賞論文・作文集』(板橋区教育委員会、2023年)所収(WEB公開)
2023	⑤	現代に伝わった人形芝居 —班目人形芝居の歴史—	3年生1名	第17回全国高校生歴史フォーラム応募・発表→優秀賞・知事賞、『第17回(2023年)全国高校生歴史フォーラム発表集』所収(WEB公開)、「タウンニュース足柄版」2023年12月23日号・2024年1月27日号・同2月10日号に掲載、第16回小田原・足柄の卒業論文に学ぶ会(2024年2月25日)で発表、『かながわの民俗芸能』第88号(神奈川県民俗芸能保存会、2024年)所収
	⑥	関東大震災下の箱根地域の被害と復旧 —残された史料と石碑から読み解く—●	3年生1名	第17回全国高校生歴史フォーラム応募・発表→優秀賞、『第17回(2023年)全国高校生歴史フォーラム発表集』所収(WEB公開)、『歴史研究』第727号(戎光祥出版、2025年)所収
	⑦	コレラ流行と牛頭天王社	3年生1名	第17回全国高校生歴史フォーラム応募
	⑧	横浜外国人居留地と競馬—競馬による国際交流—	3年生1名	第17回全国高校生歴史フォーラム応募
	⑨	上原重雄の生涯—手紙から読む—兵士の思い—	3年生2名	第1回開智国際大学懸賞論文「大村智賞」探究部門高校生の部応募→準優秀賞

☆のついたレポートは、まなづる鉄道研究発表会(2022年12月11日)で発表。
●のついたレポートは、シンポジウム「足柄・秦野の関東大震災をあるく」(2023年9月30日)で発表。

(1) 2022年度作成レポート

まずは2022年度に作成したレポートを紹介する。一つ目は、通番①「明治期における赤痢流行への対応—「伝染病赤痢仮離隔病舎日誌」から—」である。レポート作成時はちょうど新型コロナウイルス感染症が流行しており、コロナ禍を経験した生徒が過去の感染症への対応について調査した研究である。生徒たちは、地元自治体の『南足柄市史』を通読し、過去にどのような感染症がこの地域を襲ったのか、概容をまとめた。次に、『南足柄市史資料所在目録第1集—岡本・福沢・北足柄地区・市外—』(南足柄市、1987年)から、感染症に関する資料を隈なく探し、一つの資料にたどり着いた。それが^{まだらめ}班目衛生委員作成の「伝染病赤痢仮離隔病舎日誌」(南足柄市班目自治会所蔵、南足柄市郷土資料館寄託)である。生徒は南足



【写真1】南足柄市郷土資料館での資料撮影(2022年6月4日)

柄市郷土資料館に赴き、資料を撮影して、一字一字丁寧に翻刻し、内容を読解していった（【写真1】）。そして、一度は廃止された衛生委員が地域の感染症対策に大きな役割を果たしていたこと、警察が当時の感染症対策に深く関わっていたことなど、感染症まん延時の地域の動向を明らかにした。また、周辺住民へ聞き取り調査を実施し、当時を知る方から離隔病舎の位置や様子を明らかにした。

研究成果は、第16回全国高校生歴史フォーラムで発表を行い⁷、『第16回(2022年)全国高校生歴史フォーラム発表集』（第16回全国高校生歴史フォーラム実行委員会、2022年）へ掲載することができた。フォーラム出場は、歴史研究部初の快挙であった⁸。ただし、発表及び掲載にあたっては、赤痢罹患者への配慮から個人情報特定できないよう名前を伏せ字にするなど、審査委員の大学教授から懇切丁寧なアドバイスをいただいた。近現代資料を扱う際の繊細さを生徒・顧問ともに学ぶことができたできごとだった。



【写真2】生沼家での調査の様子（2022年6月12日）

二つ目は、通番②「日記から解き明かす関東大震災と地域の人びと—生沼良蔵日記の分析を中心に—」である。このレポートは、関東大震災の発生から2023年9月1日で100年を迎えることから、地元南足柄市では震災でどのような被害があったのかを調査したものである。生徒は『南足柄市史』の記述をもとに、関東大震災当時の様子を書き留めた日記が南足柄市生駒地区の^{おいぬま}生沼家に所蔵されてい

ることを知った。そこで、所蔵者の生沼啓治氏を訪ね、日記の撮影を行うとともに、現地調査を重ね、生駒地区における震災当時の様子に迫っていった（【写真2】）。また、生駒地区の熊野神社が倒壊した際、梁の下敷きとなって亡くなられた高橋フミ、和田辰五郎の遺族のもとを訪問し、新たな資料を発見した。高橋家で見せていただいた資料は「観世音普門品」（観音経）という遺族へ配られた巻物、和田家で見せていただいた資料は和田辰五郎の葬儀の際の大判写真で、ともに『南足柄市史』作成時には把握されていない資料であった⁹。

新たに発見した資料は、後日再訪問し、詳細に記録をとり、中性紙封筒に入れ保管していただくこととした。生徒の調査活動が資料保存にも生かされたことは特筆される。また、このレポートは『歴史研究』第709号（戎光祥出版、2023年）の「学生招待席」に掲載された。歴史研究部で初めて市販の書籍にレポートが掲載されたことになる。同コーナーは、高校生の研究成果を発表する場が少ない中、貴重な企画であり、今後益々の発展が期待される。募集要項¹⁰には「論文として体裁が整っていることも望ましいですが、それ以上に熱意溢れる論文を期待します」とあり、初学者にとって手厚い編集サポートが受けられることも魅力である。

(2) 2023年度作成レポート

次に2023年度に作成したレポートである。一つ目は、2022年度の通番③「班目人形芝居から足柄座へ」を発展させた通番⑤「現代に伝わった人形芝居―班目人形芝居の歴史―」である。班目人形芝居とは、享保期頃に班目村（現南足柄市班目地区）に伝わった人形芝居で、同レポートでは江戸期から現在までの変遷を追った。研究のきっかけは、生徒が祖母の家で高祖父が掲載された新聞を発見し、高祖父が班目人形芝居の座長格であったことに



【写真3】足柄座での体験の様子（2022年6月4日）

興味を持ったことであった。生徒は、2022年度は主に班目人形芝居の基礎文献を集め、現在も地元で活動する足柄座へ聞き取り調査を行った（【写真3】）。2023年度は南足柄市郷土資料館に保管される班目人形芝居の道具に書かれた銘や裏張りを調査した（【写真4】）。また、班目人形芝居の道具には、近隣の山北町岸地区で使われていた人形芝居の道具も含まれていたことから、



【写真4】人形芝居の道具に書かれた文字（2022年6月4日）

岸地区の人家を一軒ずつ回り、聞き取り調査をおこなった。一軒一軒の訪問調査にも関わらず何の手がかりも得られず、時には話すら聞いていただけず玄関先で門前払いを受けたこともあった。しかし、道具に銘が記された人名の内「相原富次郎」については、調査の最後にみた墓誌にその名前が記されており、しかもちょうどお墓の掃除に来ていた子孫の方にお話を聞くことができたという何ともドラマチックな展開もあった。

歴史研究部としては、地元の民俗芸能に取り組んだ初めてのレポートとなり、人形芝居で使われた道具の検討は、いままでの文献調査やフィールドワークでは見られなかった手法で研究の幅を広げてくれるレポートとなった。同レポートをもとに、令和5年度全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会（2023年8月10日～11日）で発表し（【写真5】）¹¹、第17回全国高校生歴史フォーラムに出場し知事賞を受賞したこともあり¹²、『タウンニュース足柄版』で連載することとなった。また、民俗芸能を研究する学術誌¹³にも掲載することができた点も大きな収穫であった。生徒の調査活動が民俗芸能の活性化へとつながることを予見させる成果となった。



【写真5】全国大会での発表の様子（2023年8月10日）

二つ目は、通番⑥「関東大震災下の箱根地域の被害と復旧―残された史料と石碑から読み解く―」である。このレポートは、通番②のレポートに学び、自身の曾祖父が箱根町宮ノ下で被災した時の様子に迫ったものである。とくに資料の収集には力を入れ、箱根登山鉄道や富士屋ホテルなど地元企業へも資料調査に出かけた。さらに、自身の菩提寺である箱根町宮ノ下の常泉寺を調査した際、曾祖父の兄（震災後の土砂災害で死亡）の名前が刻まれた「大正十二年九月一日震災火災横死者供養塔」があることを突き止めた（【写真6】）。この石碑は、関東大震災の



【写真6】「大正十二年九月一日震災火災横死者供養塔」（中央）（2023年7月28日）

慰霊碑等をまとめた武村雅之・都築充雄・虎谷健司著『神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構』（名古屋大学減災連携研究センター、2015年）にも掲載されていない慰霊碑で、この発見は新聞でも大きく報じられた¹⁴。歴史研究部でも石碑を本格的に検討したレポートはこれが初めてであった。

この研究は地域史研究における企業アーカイブの可能性を示した点が評価できる。また、綿密な資料調査により、さまざまな「点」をつなげて一本のレポートにまとめた

ことから、第17回全国高校生歴史フォーラムで審査員から「まるでミステリー小説を読んでいるかのようなようだった」と講評いただいた。生徒は自家の墓石も調べ、曾祖父の兄の死亡日が本来であれば「九月一日」となるべきところ、「六月一日」になっていることに疑問を持ち、戸籍簿なども調査して墓石が「誤記」であったことも突き止めた。緻密な調査により、通常では気づかないような誤りに気付いた点も驚かされた。石に刻まれた内容が必ずしも正しい内容を反映しているとは言えず、石碑等にも「史料批判」が有効であることを生徒に教えられたできごとであった。

このようにおおよそ3月～9月にかけて調査・研究し執筆したレポートは、毎年9月に開催される足高祭（文化祭）で展示し、在校生や教員・保護者・地域の方々にも調査結果を還元することができた。

また、2022年12月11日（日）に「まなづる鉄道研究発表会」（小田原鉄道研究会主催）で発表、2023年9月30日（土）にシンポジウム「足柄・秦野の関東大震災をあるく」（足柄の歴史再発見クラブ主催）で発表¹⁵、2023年11月4日（土）～5日（日）に令和5年度足柄史談会展「関東大震災から100年～歴史に学ぶ防災の知恵」（足柄史談会主催）で展示発表をすることができた（【写真7】）。地域の研究会とのコラボ企画も単発ではあるが、断続的に行っている。



【写真7】足柄史談会での展示（市長への説明）（2023年11月4日）

さらに、2023年は充実したレポートが揃ったことから、歴史研究部史上初めて『2023年度

研究レポート集』(神奈川県立足柄高等学校歴史研究部、2023年)を足高祭(文化祭)に併せて刊行した¹⁶。

2. 地域史研究レポート作成以外の活動

(1) 巡検・研究交流会・ボランティア

歴史研究部では、知見を広めるため継続的に巡検を実施している。コロナ禍では、学校周辺地域での巡検が主であったが、コロナ禍が一段落した2021年12月からは鎌倉(報国寺、鶴岡八幡宮など)への巡検を開催した。2023年3月には浅草方面(浅草寺、すみだ郷土文化資料館など)への巡検を実施することができた。

この他に、2022年12月27日(火)には、明治大学附属明治高校・中学校歴史研究部と研究交流会を実施した。当日は午前中神奈川県立歴史博物館において互いに部活動紹介を行った後、それぞれ研究発表を行い、活発な質疑応答がなされた。同館武田周一郎学芸員にもコメントをいただき、学術的な観点から研究をブラッシュアップするヒントをいただいた。午後は横浜開港資料館・横浜都市発展記念館へ訪問し、吉田律人学芸員にご案内いただき、その後、ニュースパーク(日本新聞博物館)を見学した。生徒は普段他校の生徒と研究交流をする機会が少ない中、生徒同士での事前打ち合わせ(オンラインで実施)を含め、充実した研究交流会となったようである。単年度での事業となったが、今後継続開催に向けて模索していきたい。

また、2021年度に松田町の学校資料整理ボランティアに参加した縁から、2023年度は、その学校資料室で保管されていた瓦(からさわ古窯跡から出土)の洗浄・整理作業にボランティアで参加した(【写真8】)¹⁷。整理作業への参加は現在も継続しており、そこから新たなレポート作成の着想を生徒は得ているようである。私が今まで指導した中で古代史分野でのレポート執筆者はいなかったが、考古学分野の知見も借りて生徒の新たな挑戦が始まっている。



【写真8】瓦の洗浄ボランティア(2023年8月5日)

(2) 資料保存活動

歴史研究部では、資料保存活動にも取り組んでいる。

一つが相模国足柄上郡旧猿山村(現南足柄市広町)湯山家文書の整理である。湯山家に残された近世～近現代の資料を整理し、神奈川県立足柄高等学校歴史研究部「湯山みはる氏所蔵資料について」(『史談足柄』第61号、2023年)、同「湯山みはる氏所蔵資料について(2)」(『同』第62号、2024年)をまとめた。研究発表会などで、資料整理には専門家の指導を仰ぐよう指摘されたこともあったが、顧問の指導のもと、高校生でも資料保存活動に従事することができることを証明した取り組みとなった。

もう一つが、上原重雄関係資料の整理である¹⁸。この資料は、小田原市沼代にあるプロペラの慰霊碑（上原重雄を祀る）を調査した経緯で、ご息女の上原 順子^{よりのこ}氏（鹿児島県在住）に聞き取り調査を行い、その結果、手元にあった資料を郵送してもらったことから、資料整理が始まった。整理した資料をもとに2021年度に「偉勲の戦士」上原重雄」、2023年度に通番⑨「上原重雄の生涯—手紙から読む一兵士の思い—」を作成した。この資料は、上原重雄が出撃した相模陸軍飛行場のあった愛川町郷土資料館でも展示された。歴史研究部では、2024年1月14日（日）に愛川町郷土資料館を訪問し、「戦争の記憶—戦後78年—」を見学し、学芸員の山口研一氏より説明を受けた。この展示期間中、上原順子氏も鹿児島から遠路はるばる上京され、ご尊父の慰霊碑にお参りされて、歴史研究部員（卒業生を含む）と初対面できたことも印象深いできごとであった（【写真9】）。資料の概要については、卒業生の力を借りてまとめた、神奈川県立足柄高等学校歴史研究部「新たに発見された上原重雄関係資料について」（『小田原市郷土文化館研究報告』第61号、2025年）を参照いただきたい。同資料は、現在展示を開催した縁から愛川町郷土資料館に寄贈されることになり、資料の永年保存にも貢献することができた。



【写真9】プロペラの慰霊碑前での集合写真（碑のすぐ横の女性が上原順子氏）（2024年1月14日）

以上のような特色ある活動が評価されて、歴史研究部では令和5年度「かながわ部活ドリーム大賞」（神奈川県教育委員会主催）で、学校の特色に繋がる顕著な取り組みやその他表彰に値すると認められる部などにおくられる「かながわ部活アクティブ賞（文化部）」を受賞した。

おわりに

以上、本校歴史研究部の地域史研究活動を紹介した。2022年度～2023年度の活動では、従来の文献・資料（古文書を含む）読解、聞き取り調査、フィールドワークに留まらず、民俗資料や石碑の分析など、従来見られなかった研究手法も取り入れながらレポートの執筆が行われた。いずれの研究も、地域密着型で、地道な調査活動に徹したものである。また、生徒の調査活動が新たな資料の発見・保存につながったことも大切である。とくに近現代史資料は、自治体史でもすべてを把握できているわけではないため、比較的新たな資料に遭遇する確率が高かった。代替わりや家の建て替え等により、資料が散逸したり、破棄されたりするケースも全国で問題となっているため¹⁹、こうした生徒の調査活動が資料保存にも有効であることを提起しておきたい。

最後に顧問（教員）の関わり方についても述べておきたい。筆者は、顧問は生徒の「最良の伴走者」たるべきだと思い指導にあたっている。生徒の資料調査には極力同行し、生徒の調査

研究をアシストしながらレポートの執筆を支えられるよう心掛けています。生徒に資料調査を任せられたこともあったが、資料館で適切な資料が見せてもらえないなど、研究活動の妨げになることもあったため、レポートの内容をより一層深めていくためには「大人の付き添い」が必要だと感じている。生徒が主体的に作成したレポートに「磨き」をかけ、生徒が独り立ちすることを助けることこそ顧問の役割だと思っている。そのためには、顧問自身もあらゆる時代に精通した知見を持つ必要があり、筆者自身も専門の時代以外の研究にも取り組んでいる²⁰。

以前拙稿²¹において、部活動運営における課題として①古代・中世史研究の指導、②研究成果の記録化（学校HPでの公開等）を挙げた。①の内、中世史研究は、2021年度のレポートに地域に残された伝承から源頼朝に迫ったレポートがあり、古代史研究は、現在瓦の整理ボランティアの経験から、古代の瓦について研究をしている生徒がいる。古代・中世の地域史研究も不可能ではないことを生徒が証明してくれている。一方、戦争史を研究するレポートも増えつつある。中には、米軍の動向がもう少しわかるとよいレポートもあり、海外資料の活用については課題が残った。今後、海外の博物館等のデジタルアーカイブ活用も視野に入れて指導にあたる必要もあるだろう。②は、コンテスト入選レポート集への掲載、研究レポート集の発行、定期的な学校HPでの活動報告等で課題は解決できつつある。今後、著作権などの問題がクリアできれば、岐阜県立関高等学校地域研究部のようにインターネット上での部誌掲載も検討されてよいだろう。他方、ここ数年全国の大会やフォーラムに参加して新たに課題に感じたことは、顧問間ネットワークの構築である。今後、各地で行われている魅力的・精力的な活動や指導法が密に共有されれば、高校生が取り組む地域史研究のボトムアップ・活性化にもつながっていくだろう。

最後に、筆者の実践が「なぜ部活動なのか」についても私見を述べておきたい。それは、授業では校外へ生徒を引率する手続きなどが煩雑である一方、部活動であれば生徒引率が簡便で生徒に寄り添いやすいからである。加えて、やはり40名を相手にする通常の授業とは異なり、生徒一人一人の研究に教員の支援が行き届き、生徒を手厚くサポートできるからである。そうした支援により、生徒のレポートも内容が一層充実したものになると考えている。これが、通常の授業で40名の生徒全員に同じような支援ができるかといえば、安易に首を縦に振ることはできない。指導教員数や時間数、引率等諸般の手続きをどうクリアしていけるかが、今後日常の授業でも探究活動をより実り多いものにできるかにつながってくるだろう。筆者自身の課題としても捉えておきたい。

歴史研究部では、2023年9月に3年生6名が引退し、一時部員が0名になった時期もあった。しかし、その後、1年生（当時）1名が入部し、2024年度は彼の熱心な活動もあり新入生5名が入部して、現在6名でにぎやかに活動している。今後も生徒の熱意に寄り添いながら丁寧な指導を心がけていきたい。

-
- 1 前任校である神奈川県立秦野曾屋高等学校における実践は、拙稿「高等学校における地域史研究の実践—日本史研究部の活動を事例に一」（『日本史攷究』第43号、2019年）を参照。また、本稿で取り上げるコンテストやフォーラムの概要についてもこちらを参照いただきたい。
 - 2 拙稿「高校生が取り組む地域史研究—歴史研究部の試み—」（『地方史研究』第415号、2022年）。
 - 3 設立の経緯等については、註（2）参照。
 - 4 例えば、個人での取り組みとして、関口雄拓『上堀田ものがたり』（私家版、2024年）は著者が地域の民族芸能に関わった経験から、地域の歴史をまとめたもので、注目される。また、学校の特色あるカリキュラムで、長崎県立壱岐高等学校の東アジア歴史・中国語コースの生徒も埋蔵文化財センターなどと連携とって、熱心な地域史研究を継続している〔長岡康孝「長崎県立壱岐高等学校東アジア歴史・中国語コースにおける地方の歴史との関わり方」（『地方史研究』第428号、2024年）〕。
 - 5 林直樹・岩田拓弥「日本史授業及び部活動における郷土史資料の活用—岐阜県立関高等学校の実践事例—」（『地方史研究』第428号、2024年）、林直樹「岐阜県立関高等学校地域研究部—地域とともに郷土史を学ぶ—」（『考古学ジャーナル』第781号、2023年）他。
『岐阜県立関高等学校地域研究部報告』創刊号（2020年）～第6号（2022年）には、作成したレポートが掲載されており、生徒が作成したレポートの成果発表の形態としても大変参考になる（WEB掲載も行っている）。
 - 6 福岡県立朝倉高等学校史学部「『秋月の乱』と天岩戸伝説～一枚の大絵馬が新事実をもたらす～」（『第19回（2023年度）「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト入賞作品集』、2024年）、同「幻の「八郎様祭」～知られざる伝承の謎を解く～」（『第17回（2021年度）「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト入賞作品集』、2022年）他。また、同校HPには、地元和菓子店との共同商品開発や調査した石橋が文化財指定されたことなど、興味深い活動が紹介されている。
 - 7 このフォーラムの様子は、2022年11月13日（日）の『奈良新聞』『毎日新聞』『読売新聞』、同年11月26日（土）の『朝日新聞』、同年12月3日（土）の『全私学新聞』、2022年12月25日（日）の『神奈川新聞』など、多くのメディアに掲載された。
 - 8 フォーラムでは優秀賞・知事賞を受賞した。
 - 9 詳細は、森山元陽・藤井彩夏「日記から解き明かす関東大震災と地域の人びと—一生沼良蔵日記の分析を中心に—」（『歴史研究』第709号（戎光祥出版、2023年））、拙稿「足柄上郡の関東大震災」（鈴木晶・小川輝光・藤田賀久編著『神奈川の関東大震災』えにし書房、2023年）参照。
 - 10 例えば『歴史研究』第727号（戎光祥出版、2025年）。
 - 11 「足柄高校歴史研究部 2年連続で全国の舞台へ」（『タウンニュース足柄版』2023年8月5日号）参照。

-
- ¹² 「足柄高校 全国で2人が優秀賞 歴史研究の発表大会で」(『タウンニュース足柄版』2023年12月9日号) 参照。
- ¹³ 『かながわの民俗芸能』第88号(神奈川県民俗芸能保存会、2024年)。
- ¹⁴ 「箱根の寺院に犠牲者刻む石碑 高校生が調査中に発見 埋もれた歴史に光」(『神奈川新聞』2023年10月1日)。
- ¹⁵ 発表内容は『関東大震災のあとをめぐる～足柄・小田原・秦野～』(足柄の歴史再発見クラブ、2024年)に所収。
- ¹⁶ レイアウトなどを含めまだまだ課題が残るが、後述明治大学付属明治高校・中学校歴史研究部『歴研通信』などに刺激を受けて作成したものである。
- ¹⁷ 瓦の整理事業については、『広報まつだ』第700号(2023年)参照。
- ¹⁸ 註(2)参照。
- ¹⁹ 例えば、「代替わりや建て替え時に廃棄…地域の歴史伝える古文書、危機的状況」(『朝日新聞』2025年1月20日)。
- ²⁰ 例えば註(9)参照。こうした認識は、山崎久登が述べる教師自身の探究活動の重要性とも共通する考えである〔山崎久登「『日本史探究』と教師自身の探究活動」(『歴史評論』第897号、2025年)〕。
- ²¹ 註(1)。

第13章 高大接続と歴史系地域探究活動の関わり：大学選抜試験の視点で

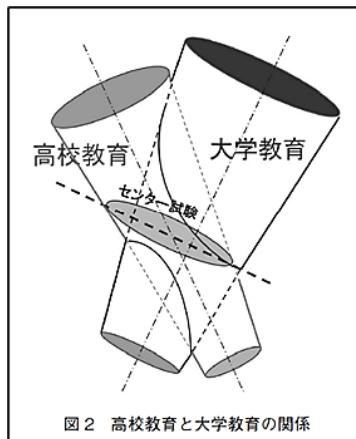
中切正人（元福井大学・名古屋大学非常勤講師・岐阜県立吉城高等学校非常勤講師）

はじめに

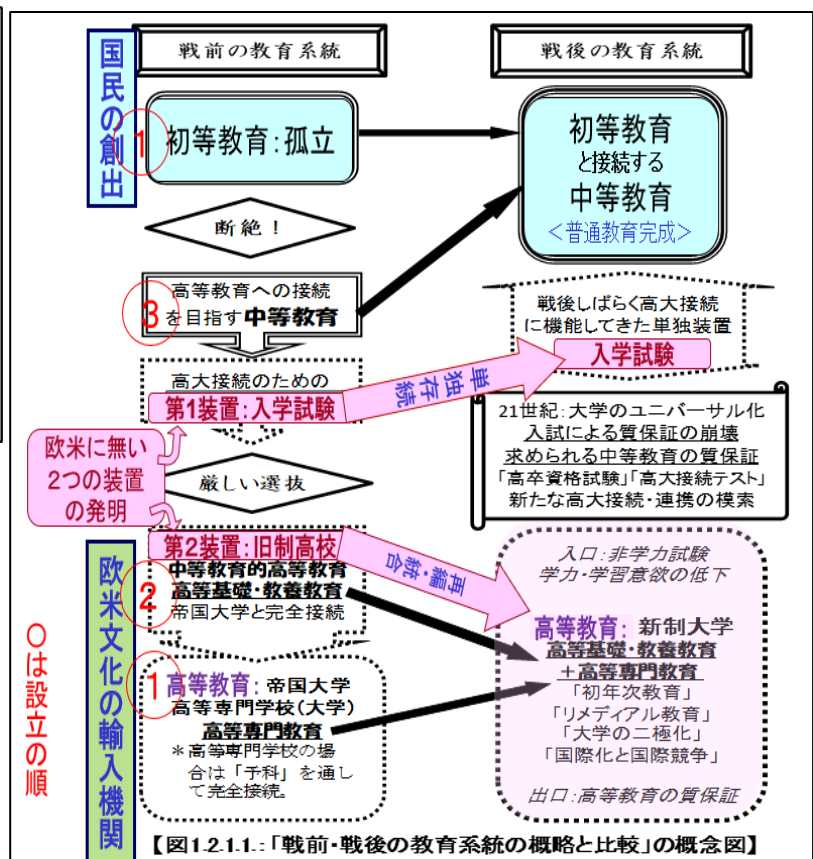
本稿の目的は、歴史系地域探究活動を高大接続(連携)にどのように位置付けるか、そして、大学入試(選抜試験)においてどのように活用することができるか考察することである。分析対象は、福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校(以後、ふたば未来学園)と愛媛県立今治東中等教育学校(以後、今治東校)の歴史系地域探究活動である。両校の活動は全国的に高い評価を得ていることは衆目の一致するところである。

なお、本稿では「探究」とは「研究」への入り口であり、それは「探索行動を通じて得た情報を記憶・分析し、新たな知見を生み出す学習プロセス」であると定義する。「探索」searchの「連続」relは「研究」researchになることにも留意したい。

さらに、「高大連携(個別)⇔高大接続(システム)」とは、2つの学校系統(「初等教育:小学校」・「中等教育:前期は中学、後期は高校」と「高等教育:大学」)を「connect or transit」するのではなく「articulate:関節で接合する」することであると定義する【図2】(荒井克弘(2012)。「高大接続改革・再考」『名古屋高等教育研究』18. 5-21)。この接続は、わが国が戦前のヨーロッパ型の分岐型学校体系から戦後のアメリカ型の単線型学校体系に中途半端に移行したところに問題の根源があり、わが国独特の接続問題を引き起こしている。戦前と戦後の高大接続比較と、選抜試験(入学試験)の位置づけを【図1.2.1.1】に示す(中切正人:2014;博士学位論文)。



(荒井, 2018: 7)



1. わが国の高大接続と選抜試験の現在地

昨今の高大接続論議とそれに関わる選抜試験の論議においては、その内部に「多様な学生と生徒」が集う「高等教育側(大学)と中等教育側(高校)」の思惑が交錯し、そこに教育関連産業(予備校など)や経済界や行政側が参入することによって錯綜の度合いが高まっている。

この錯綜化の一因をなしているのは「高等教育の大衆化と多様化」であると考えられる。つまり、1960年代前半までの高等教育進学者が15%以前のエリート段階(マーチン・トロウ)の時代には高大接続と選抜試験については国民の主たる関心事ではなかった。しかし、この2つのテーマ「高大接続と選抜試験」は1980年代後半のマス段階後半(進学率が40%超)から盛んに取りざたされるようになった。そして、21世紀に入って進学率は50%を超えるユニバーサル段階になり、旧先進国内では日米のみがこの段階にある。余談ながら筆者は、今後の少子化フェーズが、「高等教育の大衆化と多様化」を、「大学の二極化と高校の二極化」および「地方国公立大学と公立高校の崩壊」に移行させるのではないかと危惧している。

このように、大学進学率がエリート段階の時代、高大接続と選抜試験が人口に膾炙されることは無かったが、今世紀の変わり目あたりから、高大接続問題とそれに付随する選抜試験のあり方について、教育関係者の外からあからさまな介入が見られるようになった。特に、経済的・政治的観点(コスパ、タイパ)からの論理が立ち上がるようになったことが注目される。これまで教育の水面下で論じられてきた経済的利害と政治的利害が前面に出て展開されるようになったのである。その結果、大学の研究と高校の教育環境に新自由主義的競争原理が介入し、「公教育の本質論」や「長期にわたるスパンで考察する教育論」を論じる機会が著しく損なわれるようになった。こうして、高大接続と選抜試験をテーマとする論議は公教育の本質論と長期的視点から遠ざかり、多様な価値観の入り乱れる場となり、その交通整理が著しく困難になってきている。少なくとも今日では、歴史系「地域」探究活動を論じる際には、「地域」と密接に関わる経済的・政治的な視点が不可欠であることは論を待たない。しかしながら、それは筆者には荷の重すぎる課題である。そこで、高大接続・地域探究活動に対する経済的・政治的視点は今後の最重要課題であることを十分認識した上で、本稿では「教育と研究」の視点から論点整理を試みたい。

まず論点収束にあたり、本稿では大学と高校を3つのカテゴリーに分類した上で、それぞれの両端をカットする手法を取りたい。具体的には、旧帝大・早慶クラスの超難関大学とそこに進学する生徒が大半を占める超難関進学校を第1カテゴリーとし、高大接続と選抜試験の分析対象から外す。そして同時に、残念ながら一部のいわゆる全入型の非学力型選抜試験に依存する大学と高校を第3カテゴリーとして分析対象から外すことにしたい。よって、本稿では両方のカテゴリーに属さない大多数の大学と高校に分析対象を絞って考察を試みる。なお、本稿の分析対象校は普通科や総合学科などの大学進学者の多い高校(中等教育学校)である。

(補足)第1カテゴリー(超難関大学と高校)では選抜試験に占める探究活動の比率が低い。あるいは、合格者の探究活動の成果と一般選抜(学力試験)との親和性が高い。すなわち、高大間の接続がスムーズにアーティキュレート(接続・連携)しており、その事例は東北大学を筆頭に確認されている(倉元直樹, 大津起夫(2011)). 「追跡調査に基づく東北大学A0入試の評価」『大学入試研究ジャーナル』21.39—48. 倉元直樹

(2018)。「大学入試の諸原則から見た東北大学の入試改革」『大学入試研究ジャーナル』28.119—125.サンデー毎日(2023年3月5日)。「難関8国立大学推薦型・総合型選抜結果」『サンデー毎日』.108—113.その他、選抜試験関係を論じた文献を参照されたい。

一方、第3カテゴリーの大学・高校では高大間で選抜試験が機能していない。その穴埋めとして本来は、リメディアル教育や初年次教育や入学前教育等の充実による高大接続が求められるはずである。

2. 対象校の探究活動に見る高大接続と選抜試験の現在地

2.1 ふたば未来学園と今治東校の取組の原点

ふたば未来学園の取り組みは同校が立地する地域特有の課題にチャレンジするところにあった。それは、2011年の東日本大震災に伴う「地域の分断:家族の分断」後に生じた「分断と対立」に対し、「演劇を通して互いの立場を理解し合う」という、大変意欲的な試行実践である。綺麗ごとでは語ることが難しいテーマに対して「演劇活動」を援用する試みは、一般的な講義式やアクティブラーニング式の教育方法の枠組みを超える先進的な取り組みとして高く評価できる。

一方、今治東校は小規模校の存続課題に対し、飛び込み営業で企業・自治体の協賛を受け、協働して社会課題の解決を目指した(JR四国とコラボしたツアー商品)。その成果として「生徒自ら問いを立てる」ことができるようになったことも高く評価できる。一般的な地域探究はフィールドワークや聞き取り調査が中心で、政策提案や啓発活動にとどまることが多い。これに対し、今治東校の「学校周辺の身近な歴史遺産を生徒が一般人に紹介する」という目標設定が秀逸である。

2.2 歴史系地域探究活動で育まれる能力

両校の取り組みを「歴史系」の地域探究学習として見ると、2つの特徴が浮かび上がる。

(1)大学の歴史研究やゼミ活動のシミュレーションであり、大学の先取り学習であること。

地元の地域であるからこそ「実物(モノ)や一次史料」が探究対象となり、それが「一次史料を解釈」する立場の歴史学・歴史研究の入口となっている。地域の専門家との交流もあり、野外調査(遺跡調査や地域住民への聞き取り調査等)も実施されている。これらは、多くの高校の歴史教育の現場で見られるような、教科書の記述を元にして「歴史を解釈」する立場を超えるものである。すなわち、大学の歴史学(地理学も)の先取り学習となる。

ただし、大学の主体的学びは論理・批判・実証を軸とする科学的思考に基づく主体的学びである。また、大学らしい場はゼミという知的生産のコミュニティにあるが、高校の探究活動でどこまでゼミ活動をシミュレートできるか難しい。さらに、大学と高校を問わず単純に「講義式(受動)vs.アクティブL(能動)」という二項対立的なかたちで探究活動を美化することも危険である。この危険性はリベラルアーツとしての知識の重要性という課題も内包している。

(2)選抜試験において求められている「方法知:形式陶冶」が獲得されること。

選抜試験において受験生が面接官に話したり小論文に記述しがちな、探究活動を通して獲得された地域愛と地域の「内容知:実質陶冶」は脇役である。大学側は、大学での研究に不可欠な「方法知:形式陶冶」の習得度合いを図ろうとしている。この観点には、共通テストに顕著な二次史料で記述された「正解ありき」を解毒する作用が期待される。そのため、総合型選抜で測定される能力は、具体的に以下のような生徒の変化である。①探究前後の問題意識・関心の変

化, ②探究活動の契機, ③探究活動の継続・維持, ④探究活動の拡大(外部連携等)。

2.3 歴史系地域探究活動の意義

両校の取り組みに共通する意義を2点に整理する。

(1)生徒が主体的に、地域の専門家と交流したり、地域の野外調査を実施したりする過程で、探究の方法論の習得と同時に、地域の過去を「知る」こと。そのプロセスは、【①「地域」探究活動⇒地域の肯定⇒地域の「過去」の肯定⇒その地域に生まれて成長してきた「自己」肯定感の高揚⇒「郷土愛」の醸成】として現れると考えられる。その結果、高等教育への進学意欲の高揚や、将来的に地元へ貢献したいというモチベーションの発揚に繋がるのではないかと。

(2)地域で活躍する外部組織との連携活動自体が、広く日本全体や世界を俯瞰する視野の中で地域の魅力を発掘・発信することに貢献すること。同時に、この活動自体が資料を元にする「歴史総合」と親和的である。

以上の2つの意義は、日本と世界の歴史の流れの中に自分という存在を位置付け、日本地理と世界地理の空間の中に自己の存在を位置付けることになる。これは生徒の今後の成長に寄与するところ大であり、郷土愛の醸成の大切な基盤となるであろう。

3. 探究活動の今後の課題

今世紀初めの「総合的な学習の時間」から始まる探究活動は、その導入段階において、従来型学力の定着の問題が議論されてきた。全国的に探究活動が広まった現在でもこの問題が解決されたとは言い難い。いわゆる探究学習における学力の課題の本質には、「内容知」

の重視か「方法知」の重視かというテーマが横たわっている。この問題自体はわが国特有の問題ではない。しかし、この問題にはわが国のならでの事情がある。その淵源は第二次大戦前後の学校体系の断絶にあると考えられる(「はじめに」で紹介した戦前・戦後の学校体系の比較を参照されたい)。

【表2】(荒井, 2018: 13)を援用して、先進国の高大接続のあり方を比較する中で、「内容知」に深く関わる「教養教育:リベラルアーツ」の位置づけを考えてみたい。分岐型学校体系をとるイギリス・ドイツ・フランスでは、教養教育をそれぞれシックスフォーム・ギムナジウム・リセが担当している。つまり、わが国にたとえると教養教育を中等教育(高等学校)が担当し、大学は専門教育に特化している。そして、これらの中等教育学校は普段の授業も高大接続に直結しており、大学入試(GCE, アビ

表2 諸外国の高大接続

		中等教育				大学教育		
		10歳	11歳	12歳	16歳	18歳	学士課程	大学院課程
英国	その他の中等教育機関				シックスフォーム	GCE	専門教育	大学院
	進学型中等教育機関							
米国	ハイスクール				SAT・ACT	一般教育	専門教育	
フランス	コレージュ	職業リセ		1)	バカロレア	専門教育	大学院	
ドイツ	ハウプトシューレ等	職業学校				アビトゥーア	専門教育	大学院
	ギムナジウム				予備課程			
日本	中等教育学校				大学入試	学士課程教育	大学院	
	中学校	高等学校						

1) 職業バカロレア取得課程(2年間) / 職業バカロレア

トゥーア、バカロレア)がその一部をなしている。そのため、上級学校への進学は選抜試験のみに依存しない。これに対し、アメリカでは言葉の壁を持つ移民の存在から、ハイスクールでは教養教育が期待できなかった(ハイスクール内の学力の多様性が高い)。そのため、大学学士課程がそれを担当し、専門課程は大学院が担当している。その結果、アメリカの大学入学の門戸は広い代わりに、どの大学も入学後の選別は厳しく卒業も難しい。

これに対しわが国は、戦後の新教育制度において旧制高校の教養課程が新制大学に移行して教養教育を担当することになった。ただし、今日では多くの大学で教養課程の存在はうやむやになっている。つまり、東大(駒場と本郷)などの少数大学を除き、学部の中に教養教育課程と専門教育課程が混在し、両者の位置づけが不明瞭になっている。その背景には、戦後新制高校が中等教育に位置付けられて教養教育担当から外され、同時に専門教育進学を保障する装置が「大学入試のみに特化」されてきたという歴史が存在する(過度に入試に依存するカラクリ)。

ただし、本稿では英独仏型の分岐型学校体系とアメリカ型の単線型学校体系の優劣を比較しようとしているわけではない(いずれの制度にもメリットとデメリットが見られる)。以上より、本節ではわが国の「大学入試の特殊な位置づけ」を紹介するにとどめたい。

いずれにしても、ここで大切なことは、わが国特有の事情、すなわち大学専門教育に不可欠の前提となる「教養教育の所在の不明確さ」である。つまり、中等教育の普通教科が一般教養の基礎を形成し、大学の教養科目はそれを発展・深化させるとともに、新たな視点や学問領域を開く役割を担っている。その一方で、高校の普通教科はヨーロッパ型の教養教育とは言い難いが、教養教育の基盤となっていることは間違いない。よって、共通テストなどの選抜試験では、高校の普通教科と大学の教養教育を高大接続する基礎学力が測定されていると考えられる。

ここに、従来型学力試験を伴わない選抜試験に対する危惧が想定される。学力不問の選抜試験には「方法知」に関わる探究学習が用いられることが多い。これに対し、一般選抜の学力型試験では「内容知」が主として測定される。この「内容知」には教養教育としての「内容知」が期待されているため、それが不十分なまま大学進学がなされて良いのかという問題である。また、「学力型試験は単なる知識の測定に偏重している」と簡単に言い切れるのか、という教育評価や学力・能力観に関わる大きな問題も存在する。いわゆる学力の三要素の「知識」は、他の要素(思考力など)と深く関連し合うものであることに留意すべきである。以下の引用を参照されたい。

1つめの要素とされている「知識・技能」の中の「知識」については、最終報告などを読むと、「知識の暗記・再生」という表現に含意されるような断片的な知識が主にイメージされているようです。しかし、実際にはいろいろな問題について「思考」し、それを通して「発見」があって、「理解」が深まり、「知識」が再構築されるという側面が重要であり、1つめの要素にある「知識」は、2つめの要素にある「思考」の材料となるだけでなく、その成果でもあります。「知識偏重」という言葉で知識が矮小化されることがありますが、深い思考によって相互に関連づけられ、構造化され、本質的な理解を伴った知識は、「偏重」される価値のある

ものです。南風原朝和（2016：15）

南風原朝和（2016）。「基調講演1：共通試験と個別試験に求められるもの—測定論の観点から—」『第24回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [13]）大学入試における共通試験の役割—センター試験の評価と新制度の課題—』東北大学高度教養教育・学生支援機構。7-23.

4. おわりに：歴史系地域探究活動への期待（「内容知」と「方法知」のバランス）

今後、探究活動を重視する高校と大学の間では「内容知」と「方法知」のバランスをどのようにとるか、そしてそれを選抜試験でどのように測定するのか、が今まで以上に問われる。そこに確固たるヴィジョンが無ければ、両者共倒れになり、地域の衰退が加速する可能性が高い。また、そもそも内容知とは具体的にどのようなものか、ということ自体も大学側で明らかにする必要がある。

この点、歴史系地域探究活動は地域経済・地域行政との連携を通して習得された「方法知」と、郷土愛を伴う「内容知」がバランスよく育成されている点が注目される。ここに、高大接続の新たな地平を切り開く可能性が見て取れる。その地平とは、「地域の高等教育機関との強固な連携姿勢」である。一過性やテーマに縛られた連携ではなく、長期的視野に立った「高校・地域・大学」体制の構築である。その中にこそ、地域人材に必要なリベラルアーツ（教養教育）の「方法知」と「内容知」が存在する。この体制は第2カテゴリー内の特に「地方の大学と高校」の存続に関わる重要事項である。ここに高大接続と選抜試験の肝を見出すことができるのではなかろうか。

最後に、今後このような論稿を記す機会がなくなることを見越して、以下、忌憚なく記すことをお許し願いたい。それは、先に述べた第1カテゴリーと第3カテゴリーの学校に関わることである。

超進学校では、探究活動を「学問的探究」として学術的な研究能力を重視する傾向があり、他の進学校では探究活動を「社会課題」に目を向けて社会貢献型の実践的な課題を重視する傾向がある。一見両者の開きは大きいようだが、歴史系地域探究活動の中では将来互いに補完し合う活動が期待される。第2カテゴリーでは、地域課題を国際的な集団と共に解決する探究活動や、オンラインを活用した国際的な探究が可能であることは論を待たない。しかし、その将来を俯瞰すると、両カテゴリーが共創する未来が想定される。それは、近未来において地域に根を下ろした第2カテゴリーの人たちが、一旦は地域の外に出て行った第1カテゴリーの仲間と手を携えて、世界的な視野で地に足をつけた「新たな地域の創成」に寄与する可能性である。

その一方で、第3カテゴリーの場合、共通テストの負担をオミットしたり、早めに内定をもらう道を選んだりした人たちの多くが、その将来に地域の魅力を発信できないのではなかろうかと危惧する。ここでも、その危惧を払拭する切り札は歴史系地域探究活動である。この活動に参加することを通して、地域に逃げ込むのではなく、地域に足場を据える姿勢を養うことが大いに期待される。同時に、その姿勢を評価する選抜システムの構築が必要とされているのではなかろうか。

以上をもって、現時点での「高大接続と歴史系地域探究活動の関わり」の分析と考察のまとめとしたい。

第14章 博学連携による歴史研究発表の場づくり

～「日本と世界が社会うまち・堺」プロジェクトの挑戦～

赤澤 明（堺市博物館ボランティア・元堺市事務職員）



2013年（平成25年）8月、
第1回の研究発表会の様子

1. はじめに ～「博学連携」としての

「日本と世界が社会うまち・堺」プロジェクト～

☆多始まりは、2012年（平成24年）6月、大阪大学・桃木教授からの提案

➡大阪大学では、「高大連携」「歴史教育刷新」に力を入れていて、大阪府内外の高校の先生とともに、来年の夏ごろに「世界史の中の堺」をテーマに高校生向けセミナーを開催したいと計画しているので、堺市博物館にも協力してほしい。

① 大阪大学との連携の要因 その1 桃木教授との共同研究

2007年（平成19年）～2009年（平成21年）、堺がアジア海上交易で栄えた中近世の時代からゆかりのあるアジア諸都市とともに、堺市の国際事業として、アジア海上交易の歴史をテーマとした共同研究を実施。桃木座長から「グローバルヒストリー」「ヨーロッパ中心の歴史観ではない世界史の中の日本史（そして堺史）」という歴史観を学ぶ。

② 大阪大学との連携の要因 その2 堺市と大阪大学との連携協定

2007年（平成19年）2月、堺市と大阪大学（当時鷲田学長）とは、経済・産業・文化・教育・医療・環境・人権など、多様な分野での連携協力協定を締結。前述の共同研究に続き、今回のプロジェクトも市政への位置付けが可能。

☆多堺市博物館の挑戦➡堺発の「博学連携」へ

大学や中学高校の生徒や先生方に館の展示を見てもらい、堺の歴史文化を調査研究する過程で学芸員や職員と意見交換してもらい、「市民目線を重視した常設展示のリニューアルや企画展などの充実」といった館の課題を解決するひとつの手がかりとしても、このプロジェクトを館として進めることにした。

2. 世界とつながる「堺の歴史文化の魅力」を共有できる機会を創る

☆多堺の特性「世界とつながることで発展してきた国際的歴史文化都市」

堺市は、2019年（令和元年）7月にユネスコ世界遺産に登録された百舌鳥古墳群が造営された古代以来、多彩な国際交流の歴史がある都市。とりわけ15世紀～17世紀に、日明貿易、琉球貿易、南蛮貿易、朱印船貿易によって栄え、イエズス会の宣教師から「日本のベニス」と呼ばれる。千利休に代表される茶の湯文化も、この時代に大きく花開いた。さらに、明治維新以後の近代化の時代、文明開化と殖産興業の時代には、紡績・煉瓦・鉄道などの新しい近代技術をいち早く取り入れた都市のひとつとなる。

☆多「歴史総合」の創設は、素材にあふれる堺にある博物館にとってのチャンス

①堺の歴史にとって

日本の歴史の枠内だけで見るのではなく世界の歴史と関連付けて見ることで、その特性がより深く理解できる。世界と堺とを「つなげて」「比べて」考えるという視点で、中学・高校生が調査研究を進める素材に満ち溢れた都市なので、堺の魅力とそれを紹介する博物館への理解を深めてもらえるチャンス。

③ 堺市博物館にとって

1980年（昭和55年）、日本初の都市の通史を紹介する歴史系総合博物館として、市民や地元企業から多くの寄附をいただき開館し、堺の「シビックプライド」を育む拠点として長い歴史がある。このプロジェクトを通じて、学芸員による調査研究の蓄積の成果である堺の歴史文化の魅力を広く共有し発信するチャンス。さらに、少し縁遠い存在だった中学・高校生が堺の歴史文化を体感することで、館の支援者になってもらえるチャンス。

3. 中学・高校生の取り組み～フィールドワーク、体験学習、調査研究～

☆多「日本と世界が出会うまち・堺」2013年プロジェクト

★桃木先生や高校の先生方との議論できめた「かたち」

※事業名称⇒日本史と世界史の融合を示唆するものにした。

※事業目的⇒中学・高校生グループが研究した成果を発表する能動的な場の創設。

※事業予算⇒堺市博物館と大阪大学歴史教育研究会で確保⇒毎年約50万円ほぼ折半で。会場費、副賞図書カード、表彰状印刷費、

※助言⇒大阪大学の教授や院生、高校の先生方、堺市博物館の学芸員が実施。

※発表形式⇒パワーポイントによる発表だけでなく劇や演奏など多彩な形式も参加可能。

★4月～5月⇒大阪府内の中学校・高等学校を中心に研究発表の公募ポスターを配布。ホームページでの公募呼びかけも実施。大阪府立堺東高等学校、帝塚山学院泉ヶ丘高等学校をはじめ大阪府と兵庫県の7つの中学・高等学校から12グループが応募。

★6月⇒調査研究の中間発表会を実施。「この点をもう少し充実したいので研究資料を貸して

第4部 探究発表の場をひろげる

ほしい」といった問い合わせには、学芸員が相談に乗ったり館の資料を貸し出したりといった対応を幾度も重ねながら調査研究を支援。応募グループのメンバーは、梅雨の時期から猛暑の時期まで、堺をフィールドワークしたり図書館や博物館で調査したりしながら、堺の歴史文化、堺とアジア・世界の歴史とのつながりを体感。

4. 歴史研究発表の場の創出へ多彩なテーマ、ユニークな発表へ

☆ 8月11日（日）2013年研究発表会

- ★堺市内文化会館ホールに約150人の来場者を集めて開催。参加グループは15分間で工夫を凝らして発表。
- ★発表テーマ➡「百舌鳥古墳群」「巨大古墳」「須恵器」「南蛮貿易」「茶の文化」「茶菓子」「南蛮菓子」「食文化」「キリシタン音楽」「与謝野晶子とパリ現代音楽」「晶子とパリ」「堺のスポーツ」と多彩な分野。
- ★発表形式➡パワーポイントだけでなく、南蛮衣装を身にまとい16世紀の堺の南蛮貿易をテーマにした劇や古楽の弦楽合奏、与謝野晶子を題材にした漫画冊子の作成、来場者も巻き込んだクイズなどユニークな形式が揃う。
- ★審査結果➡【高校生の部 最優秀賞（フランシスコ・ザビエル賞）】16世紀の堺の南蛮貿易についてクイズや劇も交えて研究発表した大阪府教育センター附属高等学校のグループ
【中学生の部 最優秀賞（ルソン助左衛門賞）】日本と世界の茶の文化をテーマに大学生も顔負けの研究発表をした四天王寺中学校の社会科同好会のグループ。
- ★来場した方々からは「中学生・高校生のグループがこれだけ深く歴史を研究したことは素晴らしいと思う」「中近世の堺の国際的な繁栄がとても分かりやすく理解できた」という評価を多くいただく。

5. 「継続は力」を合言葉に

☆ 博物館活動におけるアウトリーチの重要な取り組み

堺市博物館として、このプロジェクトの成果を展示や事業企画にフィードバックしていかなければならないと認識。若い世代の彼ら彼女らが示してくれた堺の歴史文化に対する斬新な視点や切り口をさらに深めていくことが必要。

☆ 連続開催へ

★ 実行メンバーの思い

「このプロジェクトを継続していくことが、地域から日本の歴史と世界の歴史を結び付けて考えていくという研究・学習方法を発展させていく力になる」「堺の歴史文化や堺および日本と世界とのつながりに対する関心を深めてもらうことができ、国際的な視野を持った人材の育成が図ることができる」

★ 継続実施のための検討会議

第4部 探究発表の場をひろげる

事業の充実を図るため、次の二点の変更を加えて実施へ。

- ①「堺の国際交流の歴史」だけでなく「堺やあなたの町の（ユネスコ）世界遺産、無形文化遺産、記憶遺産」についても対象とすること。
- ②研究発表会の開催は、夏休み期間を調査研究に十分に充てられるようにするため、9月に変更すること。

☆彡 2014年プロジェクト

★4月⇒公募。

★5月⇒中学・高等学校6校から7グループの応募。インターネット公募により、山口県立豊浦高等学校の郷土研究のクラブに所属しているグループがエントリー。研究テーマは、「九州・山口の近代化産業遺産群」として、ユネスコ世界遺産の暫定リストに記載された萩反射炉。このグループをはじめ「宣教師が見た中近世・堺の繁栄」「堺のものづくりの歴史（鉄砲と打刃物）」「千利休」「阪堺電車」「大阪国際空港」「インスタントラーメン」など幅広いテーマが出揃った。さらに、発表形式も、パワーポイントによる発表のみならず劇やクイズなど、2013年同様、学生らしい思い切った研究発表を期待した私たち主催団体の思いに応じてくれるものが集まる。

★9月15日（祝）2014年研究発表会

※堺市内文化会館ホールで開催。

※【高校生の部 最優秀賞（フランシスコ・ザビエル賞）】山口県立豊浦高等学校のグループ 【中学生の部 最優秀賞（ルソン助左衛門賞）】インスタントラーメンを研究テーマとした兵庫県の雲雀丘学園中学校女子グループが受賞。

☆彡 2015年プロジェクト

★これまでの方向性を堅持しながら学校行事に支障の少ない11月に移して開催。

★中学校・高等学校7校から13グループが応募。

★11月22日（日）研究発表会

※堺市内文化会館ホールで、約200の来場者を集めて開催。

※【高校生の部 最優秀賞（フランシスコ・ザビエル賞）】大阪・茨木の隠れキリシタンを研究テーマとした関西大学高等部フィールドワーク部・歴史班のグループ 【中学生の部 最優秀賞（ルソン助左衛門賞）】堺の食文化であるお茶と和菓子を研究テーマとした雲雀丘学園中学校H・B・Rのグループ。

※いずれの研究発表も丹念なフィールドワークで、日本の歴史と世界の歴史をつないだり比べたりして考える姿勢がよく発表に現れていた。

☆彡以降、春に公募、夏に相談会、秋に研究発表会という「2015年型」でプロジェクトが進む。

☆彡 2013年～2024年までの堺プロジェクトの軌跡は、参考資料として掲載



2024年（令和6年）11月、
研究発表会の様子

6. 継続したい学生の自主的な歴史研究発表の場の提供

☆多主体的で対話的な深い学びの「場」を提供

生徒が自分たちでグループをつくり、自らが主体的にテーマを設定し、資料を調べ、フィールドワークに出かけたり博物館を見学したりして、歴史というものを体感しながら研究を進めていき、グループで意見をまとめて多くの人たちの前で発表していく。

➡「グループ研究」（個人研究ではない協働研究）という場をつくることができ良かったと考えており、これを継続できるような努力を続けていきたいと思っている。

☆多素晴らしい研究発表の共通点

フィールドワーク、現地調査、博物館学芸員などのキーパーソンへのヒアリング、和菓子づくりなどの体験学習などをしっかりと行ったうえで、メンバーが着実に議論を積み重ねた発表をしていること。

7. 地域から日本と世界の歴史を結ぶ

☆多 2022年を見つめて⇒「歴史総合」「日本史探求」「世界史探求」

- ★高等学校での歴史教育の再構築。学生たちにどのような歴史の見方を身に付けてもらうか。「暗記科目としての日本史・世界史」からの脱却は、学校での授業だけではなく、学生たちの身近な地域の歴史について、博物館や図書館などの地域の社会共通資本を活用しながらワークショップやフィールドワークの手法も取り入れることが重要。
- ★その時に大切な視点は、歴史をタテヨコナメから多角的に考察していくこと、堺プロジェクトの趣旨では、地域の歴史を日本の歴史だけではなく世界の歴史と結び付けながら考えていくことであり、地域の歴史や日本の歴史を世界の歴史と比べながら考えること。
- ★このような視点で歴史を学ぶ中から、「過去から学び、現在を知り、未来を創る」叡智が育まれていくためにも堺プロジェクトは、次世代の叡智の源流になると確信。

8. おわりに 持続的発展に向けた課題

☆多堺市博物館の担い手・・・

★歴代館長はいつも背中を押してくれた

※先々代 角山榮館長（グローバル・ヒストリーの先駆者）

「脱西洋中心史観のグローバルヒストリーをこの堺プロジェクトで発信してほしい」

※先代 中西進館長（文化勲章受章。日本・東アジア古代・比較文学の第一人者）

「開かれた博物館をめざして、どんどんアウトリーチを進めていきなさい」

※当代 須藤健一館長（前みんぱく館長。オセアニア文化人類学の第一人者）

「若い世代の『グローバル』な活動を応援する取り組みは堺市博物館だからできる」

★学芸員は「ドメスティック」?! ➡受け身的応援からどう積極的に関わっていただくか。

★事務職員は事務・雑務に「悩殺」?! ➡博物館ではどうしても脇役に。

★「市立」博物館の長所と短所 ➡地元・堺市の中学校・高等学校（市立高校は1校だけ）からの参加が少なく「ウインブルドン化」への懸念。

☆多大阪大学歴史教育研究会の担い手・・・

★毎年度、科研費が取れて潤沢な資金があるとは限らない。

★毎年度、事務局体制が整備されているとは限らない。

★草創期に事務局に協力していただいた先生方の引退で、現在は事務局体制が手薄に。

☆多主人公は生徒・・・

★先生方は毎年参加に意欲的でも、生徒がその気にならなければ参加は叶わない。

★歴史系部活動の衰退＋「探究」における歴史分野が少ない現状。

★漢方薬としての歴史学習 ➡遅効性だが有意義なこの研究発表の成果をどう広めるか。

【参 考】堺プロジェクト2013～2024の軌跡

☆多 2013年 8月11日（日）堺市内文化ホールで開催

★参加グループ数 7校12グループ 観覧者総数148人

★高校生の部 最優秀賞（フランシスコ・ザビエル賞）

大阪府教育センター附属高等学校 OPEC8

◆中近世の堺の貿易を糸口に世界との関わりを考える

★中学生の部 最優秀賞（ルソン助左衛門賞）

四天王寺中学校 社会科同好会

◆日本と世界のTea Culture ～茶でつながる世界の文化～

☆多 2014年 9月15日（祝）堺市内ホールで開催

★参加グループ数 6校7グループ 観覧者総数108人

★高校生の部 最優秀賞（フランシスコ・ザビエル賞）

山口県立豊浦高等学校 総合文化部郷土研究班

◆萩反射炉と近代化

★中学生の部 最優秀賞（ルソン助左衛門賞）

雲雀丘学園中学校 中学校3年女子グループ

◆インスタントラーメンは世界を結ぶ

☆多 2015年 11月22日（日）堺市内ホールで開催

★参加グループ数 7校13グループ 観覧者総数199人

★高校生の部 最優秀賞（フランシスコ・ザビエル賞）

関西大学高等部 フィールドワーク部歴史班

◆茨木の隠れキリシタンの謎に迫る

★中学生の部 最優秀賞（ルソン助左衛門賞）

雲雀丘学園中学校 H・B・R

◆堺の食文化～茶道・茶菓子を中心に～

☆多 2016年 11月20日（日）堺市内ホールで開催

★参加グループ数 13校17グループ 観覧者総数201人

★高校生の部 最優秀賞（フランシスコ・ザビエル賞）

帝塚山学院泉ヶ丘高等学校 TGI5・R（リターンズ）

◆呂栄助左衛門～黄金の日々～

★中学生の部 最優秀賞（ルソン助左衛門賞）

関西大学中等部 フィールドワーク部 YDKF

第4部 探究発表の場をひろげる

- ◆茨木の隠れキリシタンの謎に迫る part2
☆◇ 2017年 11月19日(日) 堺市内ホールで開催
★参加グループ数 11校16グループ 観覧者総数 205人
★高校生の部 最優秀賞(フランシスコ・ザビエル賞)
大阪府立堺工科高等学校 エコデザイン部
◆いたすけ古墳濠の水質浄化活動
★中学生の部 最優秀賞(ルソン助左衛門賞)
金蘭千里中学校 1年生
◆戦国のクリスマスパーティー
☆◇ 2018年 11月18日(日) 堺市内ホールで開催
★参加グループ数 9校11グループ 観覧者総数 140人
★高校生の部 最優秀賞(フランシスコ・ザビエル賞)
帝塚山学院泉ヶ丘高等学校 ウンともスンとも言わせない!!
◆ウンスンカルタ
★中学生の部 最優秀賞(ルソン助左衛門賞)
関西大学中等部 フィールドワーク部幕末探究班
◆堺事件の実像に迫る
☆◇ 2019年 11月17日(日) 堺市内ホールで開催
★参加グループ数 11校12グループ 観覧者総数 153人
★高校生の部 最優秀賞(フランシスコ・ザビエル賞)
帝塚山学院高等学校 歴史研究部チーム三味線
◆三味線がつなぐ堺と世界
★中学生の部 最優秀賞(ルソン助左衛門賞)
関西大学中等部 フィールドワーク部鳥井駒吉探究班
◆酒造業界の革命家鳥井駒吉～駒吉の目に映った世界市場～
☆◇ 2020年 11月15日(日) 新型コロナウイルス感染症の拡大により本大会は中止。希望グループを対象に大阪大学歴史教育研究会特別例会として開催。各賞は高校生・中学生一括して実施
★参加グループ数 7校7グループ 観覧者総数 不明
★最優秀賞
関西大学中等部 フィールドワーク部歴史班中等部チーム
◆河口慧海
☆◇ 2021年 11月21日(日) ZOOM開催
★参加グループ数 9校13グループ 観覧者総数 100人
★高校生の部 最優秀賞(フランシスコ・ザビエル賞)
帝塚山学院高等学校 歴史研究部「ポイに掬/救われた金魚姉妹
◆金魚

- ★中学生の部 最優秀賞(ルソン助左衛門賞)
雲雀丘学園中学校 3年「もっていー」
◆堺と漢方
☆◇ 2022年 11月13日(日) ZOOM開催
★参加グループ数 9校13グループ 観覧者総数 92人
★高校生の部 最優秀賞(フランシスコ・ザビエル賞)
関西大学高等部 フィールドワーク部中世鍛造探究班
◆河内鋳物師
★中学生の部 最優秀賞(ルソン助左衛門賞)
雲雀丘学園中学校 減数分裂
◆泉北ニュータウン
☆◇ 2023年 11月19日(日) 大阪大学南部陽一郎ホール・ZOOM開催
★参加グループ数 9校10グループ 観覧者総数 124人
★高校生の部 最優秀賞(フランシスコ・ザビエル賞)
金蘭千里高等学校 君知りたまえ
◆与謝野晶子の満蒙旅行
★中学生の部 最優秀賞(ルソン助左衛門賞)
雲雀丘学園中学校 竹岡丸
◆堺打刃物
☆◇ 2024年 11月17日(日) 大阪大学南部陽一郎ホール・ZOOM開催
★参加グループ数 7校13グループ 観覧者総数 148人
★高校生の部 最優秀賞(フランシスコ・ザビエル賞)
帝塚山学院高等学校 歴史研究部 行基ッズ!
◆堺の土塔と行基
★中学生の部 最優秀賞(ルソン助左衛門賞)
関西大学中等部 フィールドワーク部歴史班
◆カナダに渡った人々その2

【参考文献・資料】

- ☆◇堺市博物館ホームページ 日本と世界が出会うまち・堺プロジェクト
<https://www.city.sakai.lg.jp/kanko/hakubutsuka/play/sakaiproject/index.html>
☆◇第一学習社ホームページ 2022年 第29号 地歴最新資料 PDF版
特集② 「生徒の主体的な「探究」活動の報告 ～歴史研究部 研究発表での活躍を通じて～」 帝塚山学院中学校高等学校教諭 香川 百合子
https://www.daiichi-g.co.jp/chireki/info/siryu/29/ch22_29.pdf
☆◇大阪大学歴史教育研究会ホームページ
<https://sites.google.com/site/ourekikyo/>
☆◇『地域から考える世界史 日本と世界を結ぶ』 桃木至朗監修・藤村泰夫・岩下哲典編 2017年 勉誠出版株式会社

第15章 「全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会」をご存じですか？

—生徒の発表・顕彰の機会の構築のために—

風間 洋（鎌倉学園中学・高等学校）

はじめに

全国の社会科学系クラブ(1)は、現在風前の灯火の状況となっている。1970～80年代までは、郷土研究、考古学や民俗学を称するクラブが、大抵どの学校にも存在していた。そこでは熱心な顧問の指導の下、高校生による史料調査や遺跡の発掘作業などが実施され、地域の新たな史実を掘り起こし、その活躍は歴史学や考古学会など学術的にも大きな役割を果たしていたという(2)。しかし、やがて生徒による調査や発掘の機会は失われ、また顧問教員の転勤・多忙化などによって、全国の社会科学系クラブは急速に休部・廃部が進み、現在に至っている……。

さて、みなさんは「全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会」(以下、「全国大会」と略)をご存じだろうか。この厳しい状況の中でも頑張って活動する全国の社会科学系クラブの生徒に研究発表・顕彰の機会を与えようと教員が手弁当で運営している大会である。毎年開催が危ぶまれながら、なんとか現在も継続している【資料1】。本稿は、社会科学系クラブにとって貴重な発表の場となっている「全国大会」の意味・意義を考えると同時に、ご理解・ご支援のお願いをするのが目的である。

1.全国高文連と各県の社会科学系組織の現状

「高校生の芸術文化活動を広く支援する全国組織」として、全国高等学校文化連盟(略称:「全国高文連」)がある。この「全国高文連」には、演劇・合唱・将棋・弁論や自然科学など19の専門部が存在し、毎年夏には各県の予選や審査を経た代表生徒が開催県(毎年各県が持回り)に集い、その成果を発表する「全国高等学校総合文化祭(以下、「総文祭」と略)」が行われている。これが文化部に所属する高校生にとって最大規模の祭典である。しかし、この「全国高文連」には、社会科学系の専門部は組織されておらず、残念ながら社会科学系クラブの高校生は、この総文祭に出場して自身の研究成果を報告する機会が、常時与えられていないのが現状である(3)。こうした全国高文連に社会科学系専門部がない事態を憂慮した各県の高文連組織の中には、独自で社会科学系の専門部を設けている県がある。現時点では9県程度が確認できるが、休止や廃止の専門部もあるようで(4)、厳しい現状も報告されている。

・島根県の場合

島根県では、1951年に県下の社会科学系クラブ相互の連携や研鑽を深めるために社会科学系専門部会が設立され、毎年県内の文化部の祭典「オリンピアド」の中で社会科学系クラブも発表の場があり、1960～70年代の県内の加盟校は20校・400～500人の生徒が活動していた。しかし、1990年代には加盟校は5～6校・生徒30人、2012年には2校・9人となり、2021年では1校・1人という厳しい現状が報告されている。これは、県内の高校生人口の急激な減少やそれに伴う高校の統廃合も原因であるが、1951年以来続いていた「オリンピアド」が1978年に廃止され、社会科学系クラブの発表の場が奪われていったことも要因の一つとして指摘されている(5)。

・神奈川県社会科専門部の場合

筆者の所属する神奈川県では、1996年に県内5校の社会科系クラブが集い、社会科専門部が設立された。現在は10～12校が加盟し、毎年11月にその年のクラブの研究成果を発表する研究発表大会を実施し、今年(2025年)で31回を迎える。その他に相互の親睦や研鑽のために合同史跡見学会や県内大学と連携した歴史講座や研修会、「部会報ニュース」や「部会年報」の発行などの年間事業がある(6)。私立校中心の運営であり、公立校の参加が少ないのが現在の課題だが、イベントの参加率も良く、顧問間の連携も円滑で安定した運営が出来ていると自負している。

2. 高校生の発表・顕彰の場の「全国大会」創設を目指して

現在大学や博物館、学会などいくつかの団体が、高校生の人文・社会科学系の研究成果の発表の場を設けているが(7)、決して多くはない。そして前述のように社会科部門でも総文祭に相当する全国規模の生徒の研究発表・顕彰の場を恒常的に設けてあげたい、相互の交流を深めたい、という思いは顧問教員の中にくすぶり続けていた。2007年の顧問会議の中で、「全国大会」の創設が提案され、静岡・岐阜両県社会科専門部の教員を中心に「全国高文連」の中に「社会科専門部」が組織されるまでは、独自の大会を開催することが承認された。これを受けて翌2008年に静岡・岐阜両専門部会主催の「全国大会」が、初めて開催されたのである(第1回は2県5校参加)。以後、以下のような要領で大会が現在まで継続している。

- ・時期 大会は7月下旬～8月上旬 2日制(初日は研究発表、二日目は史跡巡検や生徒間交流)
- ・参加資格 各県の研究発表大会で上位、または相当の評価を受けた学校が県代表。
- ・発表形式 10～15分で審査員(地元の大学教員や博物館学芸員など)・聴衆の前で口頭発表。最優秀賞(1位相当)、優秀賞(2位相当)などを表彰する。
- ・運営 会場は公共施設や地元大学を借用し、主催運営は、開催県の顧問教員や生徒による自主運営。
- ・大会参加校は、宿泊費や旅費は、自己負担にて参加する。

しばらくは静岡・岐阜両県が参加・運営の中心であったが、2012年の第4回大会(岐阜開催・参加4県12校)から神奈川県にも参加のお誘いをいただき、まずは視察も兼ねて筆者と本学のクラブ(考古学部)が参加することとなった。本学の生徒たちは、他校の研究発表内容のレベルの高さや自身の未熟さを痛感するとともに、翌日の巡検での他校生との交流に大変感銘を受けたようで、「来年も参加したい」との継続参加の声が大きかった。また、筆者個人も大会運営のノウハウや他県との情報交換、全国大会開催による教育効果など、大変刺激となる点が多かった。以後神奈川県からも「全国大会」へ継続参加している。2015年の第6回大会では、参加校も8県17校と増加したこともあり、次回より参加各県の持ち回りの開催が提案され、翌2016年の第7回大会は神奈川県が引き受けることとなった。筆者も本学クラブの指導だけではなく、大会運営の立場としても携わったのである。

3. 第7回「全国大会」神奈川大会について

① 要綱【資料2】

- ・主催 神奈川県高校文化連盟社会科専門部、後援 横浜市ふるさと歴史財団、鶴見大学
- ・日時 2016年8月8日～9日 初日研究発表 2日目史跡巡検
- ・会場 横浜開港記念館ホール(神奈川県横浜市みなとみらい)
- ・審査員 大学教員、県内博物館学芸員、神奈川県高文連社会科部会長ら5名
- ・発表形式 15分口頭発表 5人の審査員による総合得点(独創性・論理性・説得性・表現力)
最優秀賞 石川県小松高校、優秀賞 神奈川県鎌倉学園高校、優良賞 島根県浜田高校
- ・2日目 横浜開港資料館にて学芸員による事前解説、生徒交流を兼ねた横浜みなとみらい地区の近代遺跡を巡検

② 所感

全国大会の運営は筆者自身、初めてであり、不安もあったが、大きなトラブルなく全国から10県17校・生徒101人・教員18名の参加を得ることが出来た。400人定員の会場は一般観覧者も多く来場し、満員となる盛況ぶりであった。前年に神奈川県開催が決まって以来、県内の顧問間では会場や巡検コースの下見、各県参加校との打ち合わせなどを繰り返してきたが、その苦勞が報われた思いであった。県内の顧問・所属クラブの生徒には、スタッフとして2日間運営に関わってもらった。受付や司会進行、巡検の誘導など、できるだけ生徒が前面に出てもらうことを意識した。大会出場はできなかったものの、運営に携わった生徒は、発表とは別の貴重な機会を得ることが出来たのではないだろうか。また、審査員の派遣や会場提供、巡検の調整の面では、横浜市ふるさと歴史財団や鶴見大学の物心両面から支援を得られたこと、さらに神奈川県高校文化連盟からは総文祭のない社会科専門部に対し、発表・顕彰の機会を与えたいという配慮から、予算面の支援を得られたことが大きかった。これらは本県の社会科部会が財団や大学と信頼関係を構築してきたこと、他の専門部同様、これまでの活発な事業活動を評価されたことが大きな要因であろう。

③ 生徒間の交流

この大会の特徴として、参加校相互の交流・批評の場を揚げておきたい。社会科系クラブの普段の活動は、文献調査や史跡踏査など、地道な活動が多く、部員内で親睦が深まることはあっても、他校との交流の機会は限られている。全国各地で同じ社会科を研究している仲間を意識してもらうことで、研究への刺激を受けると同時に親交を温めることも、大きな狙いの一つと考えている。

・**批評シートの配布** 大会は、他校の発表を真摯に聴いて研究やプレゼンの手法などを学び、そして適切な批判・批評をする大切な機会でもある。こうした観点から、参加各校には批評シートを配布し、他校の発表へのコメント・観点別評価を記入してもらい、今後の研究・発表に活かすために最後にそれぞれのシートを相互に交換してもらった【資料3】。

・**生徒交流会** 発表後の審査時間を利用して、生徒交流会の時間も設けられた。各参加校が自身の地元や学校を紹介し、相互の親睦を深める時間である。緊張した発表の時とは違い、生徒間の談笑の声が会場内で聞かれ、「来年の全国栃木大会でもまた会おう！」というエールも交わされていたが、手作りの大会ならではの微笑ましい場面であった。

4. 「全国大会」開催の意味・意義

・「研究の成果を発表する場を社会科系クラブの高校生は渴望している」自身が大会運営に携わったことで、確信を得ることが出来た。仲間と調査・分析した研究成果を「多くの人々に知ってもらいたい」、「専門家から高い評価を得たい」という欲求は、当然のことであろう。かつて本学の生徒も初めて全国大会を視察・参加したことで、他校のレベルの高い報告に学んで奮起し、モチベーションはもちろん、テーマ設定や研究方法のレベルが一段上がったことを覚えている。

・「すべての参加校が発表する」という形式を大切に 他の媒体の大会やコンテストには、論文のみの提出で審査・顕彰が行われたり、事前審査で優秀と認められた団体のみ招待され、発表の機会を与えられるという形式もある。しかし、この大会は参加校すべてに発表の機会を与えられている。登壇して報告する人数も特に制限はない。聴衆の前で発表する緊張感・達成感、仲間との一体感は、個々の生徒にとって代えがたい経験となるであろう。「来年もこの場に立ちたい」「悔しい、また頑張ろう」など、先輩から後輩へその想いや研究テーマが継続することにも大きな意義を見出したい(8)。一方で、大会のレベルの向上や一定の水準の維持のためには、その前段階として各地域(県単位)で予選大会や審査が行われ、代表校が選出されることが望ましいと考えている。

・交流の場の貴重さ 前述のような生徒間の交流の場とともにクラブ顧問間で情報を共有できる会議も設けられている。社会科系クラブが激減している地域では、孤軍奮闘、試行錯誤しながら指導をしている顧問も多いのではないだろうか。各地域の社会科系クラブの状況を共有すると同時に激励や指導上の助言を相互に受けることで、「この大会が縁で合同の見学会を催した」、「個人や有志で参加していた学校に社会科系クラブが創設された」(9)という朗報も聞き及んでいる。

・参加生徒の進路選択の契機に 周知のように現在各大学では、歴史や考古学など人文系学部が統廃合され、その先に進むべき研究者や教員、文化財行政に携わる人材が枯渇している。この大会を通じて評価される感動や喜びを味わった生徒たちが、将来人文・社会科学系の分野を専攻し、研究・教育・文化財保護などの道へ進んでもらえれば……という密かな想いがある。実際、史学科に進学し、地域博物館の学芸員に就職した本学の生徒もいる。この大会は小さな試みに過ぎないが、進路選択において、その「苗床」ともなれば幸いである(10)。

5. おわりに 課題と展望

以上、自身の経験を踏まえて、この手作りの「全国大会」について述べてきた。コロナ禍の中で生徒が一堂に会する機会が一時失われながらも、有志の教員・生徒の尽力によって、2025年現在も継続している。しかし、毎年大会開催の継続も危ぶまれる状況であり、課題は山積している。

・開催県の偏向と負担 全国規模の発表・顕彰の場を設ける大会の必要性は、顧問間でも賛同は得られるのであるが、「では来年はどの県で開催をしますか？」という具体的な議案になると、引き受ける県がなかなか決まらない。総文祭のように参加県が持ち回りで開催されるのが理想的であるが、現在社会科専門部会事務局が設置され、県内の加盟校の顧問や生徒の協力が得られる地域となると、静岡や岐阜、神奈川での開催に偏らざるを得ないのが現状である。

・**安定した物的・人的な支援** 前項とも関連するが、会場や審査員の手配、その他開催にかかる諸費用は、開催県の部会の年会費では足りない。また、運営スタッフとなる教員には、勤務校の校務を返上して無償でお手伝いしてもらっている。各県から参加する代表校も、顧問・生徒ともに交通費・宿泊費などは、自費での参加をお願いしている状況である。経済的な支援がないという理由で、参加を断念する学校も多いのが現状である。しかし、近年高大連携歴史教育研究会特別部会の支援のもと、人文系の研究助成を行っている高梨財団の学術奨励基金をこの大会開催のために獲得できたことは、大会の安定的な開催・発展のための一つの光明である(11)。

・**参加地域の拡大を** 全国と銘打っている以上、多くの県の予選や審査を通過した参加校を招きたいと考えているが、近年は10県程度15校程度の参加にとどまっている。しかも、関東や東海地域に偏っており、西日本や東北・北海道、首都圏などからの参加が少ないのが現状である。不参加地域には、県単位の社会科部会がなく、地域を取りまとめる事務局がないという問題がある。今後は、こうした地域で活動している学校の顧問などに呼び掛け、各県の拠点となってもらい働きかけが早急に求められている。

・**研究分野の多様化・審査の問題** 発足当初は、地域の歴史・民俗、考古学分野における史実の解明や分析が報告内容として多かったが、近年は地域振興や環境・自然地理の分野などのテーマで解決提案型の報告も増えてきた。このため、近年審査員から多様化する研究テーマを一律に比較して顕彰する難しさが指摘されている。多様化するテーマに対する審査基準や顕彰の在り方を再検討することが求められている(12)。

このように様々な課題を抱え、慢性的な存続の危機にさらされている本大会であるが、根本的な解決策としては、全国高文連の組織の中に社会科専門部が正式に設置されることであろう。他の専門部会のように総文祭の中で開催されれば、公的な支援を受けた安定的な運営もできる。当面の課題は、未設置の各県に社会科系の専門部を創設することである。2019年の顧問会議で全国大会設置準備委員会も発足し、各県への働きかけがようやく始まった。その道のりは厳しいが、近年高校現場に「探究」科目が導入された今こそ、社会科系クラブの研究活動を全国に注目してもらい好機ととらえたい。「生徒自ら主体性をもって問いかけ、課題解決の答えを探究していくこと」を目指した「探究」や「総合的な探求」は、これまでクラブで行ってきた研究活動の実践そのものではないだろうか(13)。大学の研究者や学会、そして探究活動の生徒指導に日々葛藤している高校教員などにも是非注目して欲しい。社会科系クラブの活動や発表の機会を設けてきたこの手作り「全国大会」が、近い将来大きな脚光を浴びることを信じ、今後もその継続に微力を尽くしたい。

第4部 探究発表の場をひろげる

注

- (1) 歴史部・郷土研究部・社会科部など学校ごとにクラブ名称は多様であるが、本稿では歴史や民俗・考古学など人文・社会科学系のクラブを総じて「社会科系クラブ」と称する。
- (2) 風間洋「地方史研究協議会と歴史教育一会誌『地方史研究』のあゆみと共に―『地方史研究』428 2024年
- (3) 総文祭を開催する県の判断により、協賛部門という形式で開催される場合もある。【資料1】参照。
- (4) 各県の高文連組織のwebサイトなどを閲覧すると、北海道・栃木・神奈川・山梨・石川・静岡・岐阜・鳥取・島根などが社会科系の専門部の存在が確認できるが、長期間更新されず、事務局と連絡が取れない休止状態の県もある。
- (5) 阿部志朗 「平成24年度全国高等学校文化連盟研究大会発表資料」 2012年
- (6) 近年の神奈川県社会科専門部の活動に関しては、中西崇「コロナ禍における社会科系部活動」『地方史研究』426号2023年を参照されたい。
- (7) 管見に入った主な高校生対象の人文・社会科学分野の大会やコンテスト
- ・旺文社「全国学芸サイエンスコンクール人文社会科学研究部門」1957年より実施 内閣府や文部科学省後援
 - ・大学主催…奈良大学「高校生歴史フォーラム」、國學院大學・高校生新聞共催「地域の伝統文化に学ぶコンテスト」
 - ・博物館・自治体…九州国立歴史博物館「高校生歴史フォーラム」、東京都板橋区「桜井徳太郎賞」、徳島県立鳥居龍蔵記念館「徳島歴史文化フォーラム」、大阪府堺市立博物館「日本と世界が会えるまち・堺プロジェクト」など
 - ・学会…日本考古学協会「高校生ポスターセッション」
- 他分野の大会・コンクールに比して決して多数とは言えない。また、大会時期の重複や参加数の停滞等、各大会・コンテストは共通した課題を抱えている。相互の発展のためには、連携や相互協力の視点も必要となろう。
- (8) 本大会に参加した青山学院横浜英和高校Yさんの回想より
- 「わたしは毎年社会科研究発表大会に参加しました。中学生の頃は陰で先輩方を支える立場でしたが、それでも中学3年生の頃に2位の成績を残せたときは本当にうれしかったことを覚えています。先輩たちから教わったことを基に高校に入ってからは実際に壇上で発表し、高校2年生の時の発表では賞を頂くことができました。他学校の研究発表は勿論のこと、発表大会で行われた討論会などの他学校の生徒との交流も、自身の見解を広げた貴重な体験でした。」
- (9) 授業の一環として探究学習をしているうちにテーマに興味を持った有志が集まって研究成果を報告したことが契機となり、それが同好会・クラブに昇格した事例も報告されている。
- (10) 近年の総合選抜型入試等の中には、注(7)で掲げた大会コンテストに加え、この「全国大会」での成果も選考基準の中に加える大学も見られるようになってきた。
- (11), (13) 高梨財団の支援には、成果報告が義務付けられている。その助成を受け、参加校が研究成果をまとめた報告書が2023年の静岡大会より刊行された。2023、2024年度の報告書は高大研webサイト上でも閲覧することが出来る。その優れた事例は、探究学習の実践としても有益である。<https://kodairekikyoo.org/2024/10/26/post-0156/>
- (12) テーマの多様化を受けて2024年の総文祭の「全国大会」では、歴史・考古／地理・産業／公共・政策の三部門に分けて発表・審査・顕彰が行われるようになった。2025年以後の大会でもこの方式が採用される見込みである。

第4部 探究発表の場をひろげる

〈主な参考文献〉

- 風間洋 「一歴史系クラブのささやかな活動紹介」『地方史研究』358 2012年
- 同 「クラブ活動で教わった『歴史総合』の可能性」『地歴最新資料』19 2017年
- 神奈川県高等学校文化連盟編 『神奈川県高校文化連盟30周年記念誌』 2018年
- 赤澤明 「堺発の博学連携の試み～博物館と歴史研究・教育をつなぐ～」高大連携パネル発表資料 2020年
- 高大連携歴史教育研究会「高校生の自主的歴史研究活動実態調査」2021年
- 公益社団法人 全国高等学校文化連盟ホームページ <http://www.kobunren.or.jp/>

第4部 探究発表の場をひろげる

【資料1】全国総文祭と全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会との関係年表

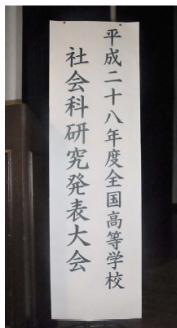
回	開催年	全国総合文化祭開催県	社会科学・郷土研究発表大会開催県	会場	規模	備考
1	1977 (昭52)	千葉	-			
18	1994 (平6)	[愛媛]	-			
20	1996 (平8)	[北海道]	-			
22	1998 (平10)	[鳥取]	-			
24	2000 (平12)	[静岡]	-			
26	2002 (平14)	[神奈川]	-			
31	2007 (平19)	[島根]	-			顧問会で全国組織の創設を提案
32	2008 (平20)	群馬	第1回 静岡	静岡芸術文化大学	2県5校	岐阜・静岡両県の独自大会として開催
33	2009 (平21)	[三重]	-			展示のみ
34	2010 (平22)	宮崎	第2回 岐阜	岐阜大学	2県7校	
35	2011 (平23)	福島	第3回 静岡	静岡芸術文化大学	2県6校	
36	2012 (平24)	富山	第4回 岐阜	岐阜女子大学	4県12校	本学が神奈川県として初参加・初視察
37	2013 (平25)	[長崎]	-	壱岐市文化ホール	10県22校	研究発表の他、パネル発表9校参加
38	2014 (平26)	茨城	第5回 静岡	三島市生涯学習センター	7県16校	神奈川県も代表校が継続参加
39	2015 (平27)	滋賀	第6回 岐阜	岐阜市南部 コミュニティセンター	8県17校	県単位で持ち回り開催が提案される 翌年の神奈川大会の準備開始
40	2016 (平28)	広島	第7回 神奈川	横浜市開港会館	10県17校	佐賀の総文祭大会役員視察 本学園 優秀賞受賞
41	2017 (平29)	宮城	第8回 栃木	足利市商工会議所	8県15校	本学園 優秀賞2年連続受賞
42	2018 (平30)	長野	第9回 山梨	富士吉田市市民会館	10県17校	
43	2019 (令1)	[佐賀]	-	有田町焔の博記念堂	13県25校	
44	2020 (令2)	高知	第10回 岐阜			大会中止・動画提出による審査会
45	2021 (令3)	和歌山	第11回 鳥取			大会中止・動画提出による審査会
46	2022 (令4)	東京	第12回 神奈川	横浜市戸塚区公会堂	6県12校	
47	2023 (令5)	鹿児島	第13回 静岡	静岡県男女共同 参画センター	8県15校	大会報告書が助成を受けて以後発行
48	2024 (令6)	[岐阜]	-	関ヶ原ふれあいセンター	14県31校	地理・歴史・公共の3部門で開催
49	2025 (令7)	香川	第14回 栃木	ライトキューブ宇都宮	11県24校	地理・歴史・公共の3部門で開催

[] は、全国総文祭開催県で社会科学系部門が協賛部門として開催されたことを示す

第4部 探究発表の場をひろげる

【資料2】神奈川大会の様子（写真）

◆1日目：研究発表



横浜開港記念館



審査委員長による講評



最優秀賞：石川県立小松高校



優秀賞：神奈川県鎌倉学園高校

◆2日目：史跡巡見



巡見前ガイダンス



【資料3】生徒同士の批評（“あなたも審査員”）

【コメント】 良かった点 残念だったところ 聞きたいこと何でもOK

① 「鎖国」下においても行われていた「交流」が、
便所目を与えた影響を矢張りたい

② その後に派遣された便所目での
関連性を矢張りたい。

【コメント】 良かった点 残念だったところ 聞きたいこと何でもOK

- ・ 研究から学んだことが多く、わかっているのがよかった。
- ・ 自分たちが資料を調べてほしい。研究に熱心に行っていたのはすごいと思いたい。
- ・ パワポも矢張り早真が、多くてわかりやすかった。
- ・ おもしろかった。

【コメント】 良かった点 残念だったところ 聞きたいこと何でもOK

幅広く資料を集めて、良く整理されていました。
歴史の関心を持って取り組まれていることもよく分かりました。

「幕末の留学生」の中で、そのまゝ、消えていった人は、
いますか？ また、その理由は分かりますか？

【コメント】 良かった点 残念だったところ 聞きたいこと何でもOK

- ・ いくつもの場所に行き資料をかき集める行動力、紙料にすごいと思いました。
- ・ とてモマイターで教科書や資料集に載っていないことを自力でまとめ資料を作ったこと、とても大変だと思うし、難しいと思うが、説得力があり興味を湧かしました。
- ・ もう一つの薩長同盟という表現がとてもおもしろいと思いました。次の高文

あなたも審査員 (各5点)

独創性	論理性	説得力	表現力
5	4	4	4

とても楽しんでいます。

第16章 奈良大学「全国高校生歴史フォーラム」から考える高大連携の歴史教育

木下光生（奈良大学文学部史学科）

はじめに

奈良大学では2007年より「全国高校生歴史フォーラム」を開催し、2025年で19回目を迎えた。筆者は、2011年4月に奈良大学文学部史学科教員として着任して以来、2011～13年、23年、25年に審査委員を担当し、2023年には審査委員会の実行委員長も務めた。

本稿では、全国高校生歴史フォーラムの応募・審査体制を紹介するとともに、2007～24年における応募・受賞内容の推移と特徴を整理・分析し、それをふまえて、高校生（高専含む）による歴史研究を可能とする条件・環境とは何であり、大学側がそこに寄与し得る部面とは何であるのかを検討したい。なお、毎回作成される『発表集』のうち、2017年の第11回以降については、奈良大学ホームページでPDF版が公開されているので参照されたい。

1. 全国高校生歴史フォーラムの応募・審査体制

全国高校生歴史フォーラムは、『全国高校生歴史フォーラム2007発表資料集』所収の第1回審査委員長・奈良大学長鎌田道隆（史学科）「ごあいさつ」に、「奈良大学では本年度が最初の試みとなりますが、全国高校生歴史フォーラム2007を企画して、歴史（文化財や地理分野を含む）への関心を軸とする真の高大連携に取り組むことといたしました。ねらいのひとつは、一人でも多くの高校生が真の意味での歴史への関心を深めてほしいとの願いであり、もうひとつは高校生たちの歴史研究への取り組みのまなざしやエネルギーを、大学における研究と教育のなかに汲みあげることで、大学生の研究活動の活性化にもつなげたいという思いです」とあるように、高校生が歴史への関心を深め、その営為を大学教育にも活かすことで高大連携を深化させるという目的のもと、2007年に立ち上げられた（2016年からは「地歴甲子園」とも銘打つようになった）。主催は一貫して奈良大学であり、2014年から奈良県も共催者となったが、2025年より県は共催からはずれ、「後援」という立場に回った。直近の2025年では、奈良県のほか、文部科学省、奈良県教育委員会、NHK奈良放送局、奈良新聞社、朝日新聞奈良総局、産経新聞社、毎日新聞社奈良支局、読売新聞奈良支局、が後援者となっている。

審査委員は、学長を含む2学部・6学科（文学部国文学科・史学科・地理学科・文化財学科、社会学部心理学科・総合社会学科）の教員で構成され、毎回、実行委員会方式にて

半分程度の教員が入れ替わっている。2007～13年は、史学科・文化財学科教員を中心に15～17名体制で臨んでいたが（最大の17名となった2013年では、文化財学科6名、史学科5名、地理学科4名、国文学科・総合社会学科各1名）、2014年以降は、旧教養部の共通教育教員（語学など）も含めて、全学科へ担当教員数を均すようにし（2014～24年は共催の奈良県からも1名参加）、総員も2018～24年は12名、奈良県が共催からはずれた2025年は11名（文化財学科3名〔学長含む〕、国文学科・史学科・地理学科各2名、心理学科・総合社会学科各1名）、と推移している。担当の均等化には、審査目線を多様化させるという積極的な意味合いもあったが、総数の減員含め、より現実的には、開始当初の2007年段階とは比べものにならないほど激増した教員の業務負担（入試、広報、学生対応など）を、少しでも和らげるところに眼目があった。そこには審査業務が、担当教員にとっては手当無しの単なるサービス残業となってしまうという深刻な問題も横たわっている。

審査手順は、回ごとに微妙に変化しているものの、直近の2025年では、①1次審査で、実行委員長があらかたの仕分けをおこない（箸にも棒にもかからない作品〔生徒たちが授業の一環で「強制的」に書かされたと思しきものが多い〕は、この段階で振り落とされる）、3班に分かれた審査委員に、各班二十数点の作品を割り振り、②2次審査で、審査委員ごとに上位4点ほどを選び出し、③3次審査で、2次審査を通過した20点ほどについて、全審査委員で5段階評価の投票をおこなったうえで（3次審査までは非対面方式）、④3次審査の投票結果にもとづき、対面会議による本審査で優秀賞5点と佳作約5点を最終決定する、という審査方式をとっている。フォーラム本番は、11月下旬の土日に設定し、初日土曜の午後に、優秀賞受賞者による個別発表と質疑応答、佳作受賞者のうち希望者による個別発表（ポスター、録画、対面）、優秀賞のうち学長賞と奈良県知事賞（県が共催からはずれたあとも知事賞は残った）の表彰、懇親会をおこない、翌日の日曜午前に、奈良大学教員による案内のもと、東大寺大仏殿（東大寺側のご厚意で、一般観光客は立ち入ることのできない空間にて、大仏を間近で見ることができる）と奈良町の見学会をおこなっている。

審査基準は、もちろん内容が第一であるが（テーマの面白さや問いの立て方の独自性、調査方法の妥当性と汗かきぶり、結論とそこから広がる新たな課題）、同時に、基本的に一人でおこなった研究なのか、あるいは部活動や学校のコース・授業（「総合的な学習の時間」など）といった、団体ないし複数人数による研究なのか、という研究体制にも配慮している。なぜなら、たとえば部活動であれば、世代をこえた継続研究による「先輩たちの遺産」があり、かつ、人数的にも広範な調査ができるわけで、そうした優位性のある団体／複数人数作品と、たった一人でおこなった個人研究を同列視できないからである。ただ実際には、内容面と研究体制面のバランスをどうとるのは、大変悩ましい問題ではある。

優秀賞を5点としているのは、もっぱら奈良大学の予算事情（優秀賞受賞者の招待費）によるものであるが、佳作については招待費が発生しないので（本番当日への参加は自由だが、奈良までの交通・宿泊費は自腹）、5点を基準としつつも、臨機応変に受賞数を決めている（2025年では佳作6点）。優秀賞5点のなかから選ばれる学長賞（高校生としての研究水準の高さが認められた内容に授与）と知事賞（地域の歴史や文化を大切にする機運を醸成するにふさわしい内容に授与）は、優秀賞受賞者による発表と質疑応答をふまえて、本番当日に選定される。なお、優秀賞と佳作の差はわずかであり、また優秀賞5点の差も僅差であって、優秀賞と佳作の選定、および学長賞と知事賞の選出は、いつも大変悩ましい。

2. 応募・受賞内容の推移と特徴

表1は、2007～24年の各回における応募校数と応募総数（1校から複数応募がある）、授業の一環で「強制的」に書かされたと思しき作品数とそれを差し引いた推計応募実数、および都道府県別の各回応募校数を掲げるとともに、各都道府県の、2007～24年における延べ応募校数、2024年段階の学校数、学校数に占める延べ応募校数の割合、を示している。応募校数は、直近5年では62～80校で推移しており（2025年の69校を含む直近4年では60校台）、延べ校数の上位5都道府県は東京、神奈川、大阪、兵庫、福岡、学校数比では、奈良（ただし直近5年は低調）、愛媛、徳島、岐阜、鳥取、となる。全回応募を果たしているのは東京、神奈川、兵庫（第1回を除けば大阪も）、ほかに直近5年では秋田、茨城、埼玉、岐阜、静岡、愛知、愛媛、長崎も毎年応募がある。応募総数は、直近4年では80点台であるが（2025年も86点）、実数で見れば60～70点台となる。2019年までは応募総数と実数の開きが極端に大きい回がたびたびあったが、この4年ほどは両者の懸隔は小さい。

表2は、各回における優秀賞（学長賞・知事賞含む）と佳作受賞者の在籍校、高校偏差値、研究体制の形態、男女の人数、研究タイトルを示したものである。高校偏差値は、「みんなの高校情報」などで公開されている2025年段階のもので、学校内のコースで差がある場合はその中央値、中高一貫校は中学校偏差値を便宜的に用いている。言うまでもなく、学校偏差値は、当該校や生徒個人の「質」そのものをあらわすものではなく、後段の分析のためにあくまで参考程度に掲げている。また男女数についても、フォーラムの応募時には性別記入を要件としていないため、「名前の雰囲気」だけから判断するという、極めて「差別的」な数値となっている。性自認の多様性を尊重すべき時代にあっては、そもそも「男女」という区分自体「差別的」であるが、これまた後段の分析のために便宜的に掲げたものである。このほか、研究体制については、A：部活動などの団体研究（特定コースや「総合的な学習の時間」などの特定授業にともなう一時的なグループ研究と思し

きものは斜体 A、男女の区分が不明でグループの総人数しかわからない場合は「A6」

「A4」などと表記)、B：個人研究だが部活動などの団体調査を背景としたもの、C：完全なる個人研究、としている。表2をふまえて、以下、受賞作品の特徴を概観してみよう。

手法としては、文献史学と考古学を主軸としつつも、そこに聞き取りや実地調査を複合させたり、自ら実験する、という研究もある。時代的には、人類誕生以前（2020年鶴翔高校）や旧石器時代（2008年石川高校）、縄文時代（2020年関高校など）など「古い」時代から、現代（2013年輝翔館中等教育学校、2018年開智高校など）まで、幅広い。領域的には日本史が中心となるが、戦争やキリシタンの問題を入り口として、世界史とのつながりを見せる研究もある（2008年愛光高校、2011年神奈川総合高校、2019年鴨沂高校など）。また、アジア・太平洋戦争における中国人の強制労働（2023年関高校）など、

「負」の歴史に真摯に向き合おうとする研究や、LGBTQ+（2022年多治見高校）など、現代の社会問題を意識しながら歴史研究に取り組む作品もある。歴史学という学問の根幹に関わる研究姿勢であり、大変に頼もしい。

受賞者の属性でみるならば、延べ受賞数が10点以上となる都道府県は、神奈川（26点）、東京（17点）、埼玉（13点）、長崎（11点）、千葉（10点）、となる。高校偏差値では、いわゆる「高偏差値」校が上位を席卷して、「低偏差値」校を押しよけるわけでもない点が見えてくる。学長賞には、偏差値70台高校もしばしば見えるが、上述したように、優秀賞内の差も、優秀賞と佳作の差も、僅差であり、また世間に名の知れた「超難関校」からの作品が、佳作にすらたどり着かない場合も珍しくない。歴史研究とは、一定の基礎学力を前提としつつも、偏差値などという「表面的」な数字では測りきれない力量が発揮され、試される場だ、ということであろう。同じく男女比についても、データの不備にて厳密な統計がとれるわけではないが、概観する限りは、審査過程でジェンダーバランスを考慮していないにもかかわらず、「男性受賞者が多い」という「構造的偏重」はさほど明確ではない。これは、従来も現在も歴史学界（とりわけ日本史）が明らかに「男性研究者偏重」にあることをふまえると、意外な結果でもあり、何が歴史学者のジェンダーバランスを崩しているのかを考えるうえでも、有益な情報となる。

研究体制でみると、調査の継続性や広範性といった団体研究の強みを十二分に活かしたものとしては（AないしA）、2010～12年の大分東明高校による輪中研究や、受賞が複数回におよぶ長崎県立壱岐高校や岐阜県立関高校の努力があげられる。団体活動の強みは、個人研究でも活かされることがあり（B）、2023年知事賞の「現代に伝わった人形芝居」（足柄高校）は、個人応募作品であるものの、聞き取り調査は複数人で実施されている。一方、完全なる個人研究（C）でも、粘り腰による個性的なものがあり、2013～14年の「シデ法」研究（武蔵高校）や、2023年の泥炭土器研究（川口北高校）はその象徴である（2024～25年学長賞の駒場東邦中高中生による城郭研究も然り）。なお、コースや授業で研究を実践し、受賞に至った例としては、長崎県立壱岐高校の東アジア歴史・中国語コー

ス、2009～10年の桐蔭学園高校・理数科課題研究「戦争遺跡研究班」や女子部理数コース課題研究「歴史研究班」、2013年の福岡県立大牟田北高校・2年生「総合的な学習の時間」歴史研究グループ、2021～23年の鳥取県立青谷高校・課題探究／青谷学（文学歴史コース）、2024年の京都府立鴨沂高校・京都文化コース、などがある。さらに、2011年の神戸市立楠高校や、2012年の栃木県立学悠館高校・岐阜県立益田清風高校といった単位制／定時制／通信制の高校、あるいは2011年の松江工業高等専門学校のような高専の生徒が良質な研究をつくりあげているところも、歴史研究の基盤を広げ、強固にするうえで極めて重要である。

3. 高校生の歴史研究を可能とする条件と環境—おわりにかえて—

一人でも多くの高校生たちが、自覚的に、伸び伸びと歴史研究に取り組める環境をつくるうえで、おそらくもっとも重要となるのは、歴史学の作法と研究状況に通暁した高校教員の存在であろう。そのことを象徴しているのが、神奈川県高校教員・桐生海正氏の活動で、同氏が教鞭をとっていた神奈川県立秦野曾屋高校は、2016～18年と連年で受賞を果たし、その後、桐生氏が足柄高校に異動すると、今度は同校が2022～23年に受賞作を生み出している。桐生氏は、大学院を修了した近世日本史研究者でもあり（筆者とも研究交流あり）、歴史学の素養と研究実践を身につけた高校教員が、参考文献・文献史料の調査方法や史料の読解方法などを、高校生たちに直接アドバイスできる環境が整っているかは、いくら「プロ研究者でもある高校教員」が絶滅危惧種になっているとはいえ、高校生たちが深みのある歴史研究を進めるうえで、やはり決定的に重要であるといえよう。

学校図書館や公共（大規模）図書館、博物館、資料館、文書館といった調査施設、そしてそこに常駐する司書や学芸員などの専門職員が身近にある／いるかどうか、高校生がそもそも研究に取り組めるか否かを相当に左右するであろう。たとえば、2010年の「尾張名古屋、文化年間の挑戦」（名古屋高校）は、学校図書館所蔵の近世和本から研究をスタートさせているし、2016年の「明治から現代に残された18歳の日記」（市原中央高校）も、千葉県文書館所蔵の石川家文書を利用している。地元博物館・資料館の学芸員にアドバイスを乞うている研究も、枚挙にいとまがない。プロの歴史学者だけでなく、歴史研究に取り組む高校生たちにとっても、結局のところ、研究環境整備に対する公金注入（学校図書館を含む公共施設の充実と、専門職員の十全な配置）が決定的に重要だということであろう。このほか、文献史料や絵地図のデジタル公開も、史料へのアクセスを「公平」にするという点で重要となろう。そして、ここでもまた、公金注入に対する社会合意が肝となる（史料のデジタル撮影と公開には、膨大なカネと労力がかかる）。

これらをふまえたうえで、高校生たちの研究活動に対して、大学側が寄与し得る部面とは一大学教員が、研究者として公表する研究成果は別として一、ありきたりではあるが、

高校生の研究活動を支える「人」（プロ研究者でもある高校教員のほか、学芸員、司書、学校司書）の養成と、研究発表の「場」の提供—ただし、ただでさえ研究時間が削られている大学教員の「やりがい搾取」にならない範囲での—、といったところに尽きるのかもしれない。

第4部 探究発表の場をひろげる

表1 全国高校生歴史フォーラム 応募校数・総数の推移

	第1回 2007	第2回 2008	第3回 2009	第4回 2010	第5回 2011	第6回 2012	第7回 2013	第8回 2014	第9回 2015	第10回 2016	第11回 2017	第12回 2018	第13回 2019	第14回 2020	第15回 2021	第16回 2022	第17回 2023	第18回 2024	2007 -24	学 校 数	割 合
応募校数	22	31	39	46	38	41	46	52	62	43	57	45	54	80	70	62	67	68	16	271	5.9%
応募総数	72	46	72	91	60	75	169	269	165	88	116	73	143	114	88	78	89	86	0	63	15.9%
強制?	51	10	22	37	16	30	92	189	70	34	40	0	64	23	0	16	11	13	0	78	12.8%
応募実数	21	36	50	54	44	45	77	80	95	64	76	73	79	91	88	62	78	73	0	96	12.5%
北海道	1	2	0	1	1	3	1	0	0	0	0	0	0	1	3	0	1	1	0	16	2.7%
青森県	0	1	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2	0	1	2	0	10	1.6%
岩手県	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	2	2	1	1	1	0	0	0	10	1.6%
宮城県	0	0	1	2	0	0	0	0	0	1	1	3	1	0	1	0	2	0	0	12	1.9%
秋田県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	6	1.0%	
山形県	0	0	1	1	1	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	1	8	1.3%	
福島県	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	2	0	2	0	9	1.4%	
茨城県	0	1	0	0	0	2	2	2	4	1	2	2	3	5	7	5	3	3	39	6.0%	
栃木県	0	0	0	1	2	2	1	2	2	1	2	1	1	1	1	0	1	0	17	2.7%	
群馬県	0	2	2	1	1	0	1	1	0	0	1	1	0	3	0	1	2	1	17	2.7%	
埼玉県	0	0	1	0	1	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	6	3	33	5.2%	
千葉県	1	1	3	0	2	0	1	3	2	1	1	1	1	3	1	3	0	0	24	3.8%	
東京都	1	4	2	2	5	7	5	8	6	6	5	7	2	10	17	7	11	12	119	18.3%	
神奈川県	1	3	2	4	3	2	3	5	6	3	6	2	6	2	7	2	6	4	67	10.3%	
新潟県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2	0.3%	
富山県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.1%	
石川県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.1%	
福井県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0.6%	
山梨県	2	1	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	3	0.5%	
長野県	0	0	0	3	0	1	1	1	1	1	0	1	0	2	0	1	1	2	13	2.0%	
岐阜県	1	0	2	0	0	1	2	2	2	0	1	2	1	1	1	7	2	4	29	4.5%	
静岡県	0	0	0	0	1	2	2	1	2	2	5	3	2	2	2	3	1	2	30	4.7%	
愛知県	1	1	1	3	1	2	0	1	2	1	1	0	1	3	2	2	1	4	27	4.1%	
三重県	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	1	0	1	0	0	1	7	1.1%	
滋賀県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.1%	
京都府	0	0	0	0	0	1	0	1	2	3	3	2	1	0	1	2	0	2	18	2.8%	
大阪府	0	1	4	2	4	4	3	4	3	2	1	2	3	4	2	4	6	2	51	7.7%	
兵庫県	4	1	2	3	3	2	3	2	2	1	3	3	6	3	4	3	3	3	51	7.7%	
奈良県	1	1	2	2	0	2	2	4	6	4	3	0	0	5	0	1	2	0	35	5.3%	
和歌山県	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	2	0	0	1	8	1.2%	
鳥取県	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	2	1	3	1	11	1.6%	
島根県	0	2	0	0	2	0	2	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	9	1.4%	
岡山県	1	2	2	1	0	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	2	2	1	18	2.7%	
広島県	1	1	2	1	1	1	0	1	2	0	3	1	1	1	2	2	1	0	21	3.1%	
山口県	0	0	1	1	0	1	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	7	1.1%	
徳島県	0	0	1	1	0	1	0	1	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0.1%	
香川県	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	13	2.0%	
愛媛県	1	2	2	1	3	1	1	0	5	0	1	1	4	4	3	3	1	3	36	5.5%	
高知県	0	0	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	7	1.1%	
福岡県	1	2	2	4	3	2	3	2	3	4	4	3	5	0	0	2	1	1	42	6.4%	
佐賀県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.1%	
長崎県	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	2	2	6	19	2.9%	
熊本県	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	7	1.1%	
大分県	0	0	0	2	1	2	1	1	1	1	0	0	2	1	1	0	0	1	13	2.0%	
宮崎県	1	0	0	2	1	1	2	1	2	0	0	0	0	0	2	0	1	0	6	0.9%	
鹿児島県	1	0	2	1	1	2	1	2	0	0	0	0	1	4	0	0	1	1	17	2.6%	
沖縄県	1	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8	1.2%	

第4部 探究発表の場をひろげる

表2 全国高校生歴史フォーラム 受賞者一覧

	区分	都道府県	学校名	偏差値	形態	男性	女性	研究タイトル
第1回 2007年	優秀賞	山梨県	県立富士河口湖高校	46	B	1	0	日本武尊拝嶽古蹟大塚丘について—その築造と存在意義の謎を初解明—
		福島県	県立磐城桜が丘高校	62	A	n.a.	n.a.	地域性を活かしたクラインガルテン
		千葉県	県立長生高校	68	C	1	0	江戸時代から近代教育へつなぐもの—千葉県夷隅郡御宿町を調査対象として—
		福岡県	県立大牟田北高校	50	A	4	0	「大牟田市域における中心商業地区の形成と課題」—新栄町商店街を中心に—
		神奈川県	洗足学園高校(女子校)	74	A	0	14	「鬼」の登場
第2回 2008年	優秀賞	奈良県	奈良育英高校	56	—	—	—	(団体として受賞)
		沖縄県	県立向陽高校	55	C	1	0	沖縄の伝統的民家に関する考察
		島根県	県立浜田水産高校	39	A	0	2	古田氏はなぜ浜田に城を築いたか?—「風水」の視点から、その理由に迫る!—
		愛媛県	愛光高校	74	A	3	1	「ロシア人墓地」に関する研究
		青森県	八戸聖ウルスラ学院高校	49	C	0	1	是川遺跡の漆文化
第3回 2009年	優秀賞	東京都	武蔵高校(男子校)	69	A	3	0	宮崎県椎葉村における焼畑農耕の衰退
		福島県	石川高校	51	A	3	6	猪苗代湖畔に消えた後期旧石器時代終末期の人々—福島県会津若松市・笹山原No.27遺跡の研究—
		神奈川県	三浦学苑高校	47	A	n.a.	n.a.	海南神社面神楽についての研究
		岡山県	県立新見高校	41	A	n.a.	n.a.	「汗がたらたら、たら製鉄」
		岡山県	山陽女子高校(現山陽学園高校、共学)	50	A	0	n.a.	海ゴミから地球環境問題に迫る—文化祭の研究展示への取り組み—
第4回 2010年	優秀賞	高知県	県立高知東高校	46	C	1	0	幕末土佐の私年号—「天晴」を検証する!—
		千葉県	県立長生高校	68	A	n.a.	n.a.	七夕まつりを追って!—七夕行事の移り変わり—
		鹿児島県	県立志布志高校	49	C	0	1	じいちゃんたちの「拓魂」—鹿児島県錦江町代「盤山地区」の研究—
		千葉県	県立千葉商業高校	51	C	0	1	初富を中心とする東京窮民救済開墾事業と死亡者数—死亡者数と死亡原因に関する研究—
		岡山県	山陽女子高校(現山陽学園高校、共学)	50	A	0	11	海ゴミ問題解決にむけての取り組み—回収活動から啓発活動へ—
第5回 2011年	優秀賞	愛媛県	愛光高校	74	A	n.a.	n.a.	明治期愛媛県におけるキリスト教布教—プロテスタント組合派松山ステーションの活動を中心に—
		群馬県	県立前橋高校	71	B	1	0	女塚の謎を探る—未完成の理由とその背景—
		神奈川県	桐蔭学園高校	66	A	n.a.	n.a.	「こどもの国」の真実
		高知県	県立高知東高校	46	A	2	0	新田村の祠にすむ神々—土佐国長岡郡西野地村三島・陣山地区の場合—
		神奈川県	三浦学苑高校	47	A	1	2	浦賀造船所研究—4つの疑問点からの考察—
第6回 2012年	優秀賞	愛知県	名古屋高校(男子校)	65	B	1	0	尾張名古屋、文化年間の挑戦—名古屋高校蔵本『茶湯早指南』の分析より—
		神奈川県	桐蔭学園高校	66	A	0	n.a.	「日露戦役記念碑」の研究
		鹿児島県	県立志布志高校	49	C	0	1	「志布志は日向か大隅か?」—国境・県境の変遷に関する研究—
		大分県	大分東明高校	54	A	n.a.	n.a.	輪中集落の歴史・くらし・文化—大分市高田輪中を中心に—
		大阪府	府立天王寺高校	74	A	n.a.	n.a.	河内高屋城の研究—古墳の城郭利用—
第5回 2011年	佳作	神奈川県	県立神奈川総合高校	63	A	n.a.	n.a.	戦没者の慰霊・供養から見た戦争—神奈川県綾瀬市の調査事例から—
		千葉県	県立長生高校	68	A4	n.a.	n.a.	学校が軍需工場になったとき
		高知県	県立高知東高校	46	A	2	1	土佐国土佐郡—宮庄を往く—変わりゆく地名を追いかけて—
		大分県	大分東明高校	54	A6	n.a.	n.a.	つながる高田輪中—輪中集落の歴史・くらし・文化2—
		島根県	松江工業高等専門学校	60	A	3	3	患雲の行商
第6回 2012年	佳作	徳島県	県立川島高校	46	C	0	1	わがふるさと、忌部の郷を探る徳島県吉野川市(旧麻植郡)に継承されている忌部氏族と「あらたえ」について
		兵庫県	神戸市立楠高校(定時制)	—	A3	n.a.	n.a.	豊郷小学校旧校舎(「けいおん!」のモデルになった小学校)と東近江地方の風土—なぜこの地にこのような立派な校舎が建てられたのか—
		鹿児島県	県立志布志高校	49	A	0	2	「オリンピック作戦」の研究—先輩に聞く志布志の市民と戦争—
		神奈川県	県立神奈川総合高校	63	A8	n.a.	n.a.	重慶爆撃とは何だったのか—比留川金治特務中尉の中国都市爆撃関係資料の分析を通して—
		神奈川県	桐蔭学園高校	66	A	0	2	日本のモスクは見た『イスラームの柔軟性』
第6回 2012年	優秀賞	神奈川県	桐蔭学園高校	66	A	0	2	「リトル沖繩」の研究
		栃木県	県立学悠館高校(定時制・通信制)	—	A4	n.a.	n.a.	若き日の円仁が学んだ岩舟—1200年の時を越えた寺と窯跡—
		神奈川県	桐蔭学園高校	66	A	0	2	横浜の富士塚研究
		岐阜県	県立益田清風高校(単位制)	47	C	1	0	「がんどうち」—文化の街、萩原町。今なお続く伝統行事—
		京都府	府立洛東高校	44	A3	n.a.	n.a.	安祥寺下寺の所在地
第6回 2012年	優秀賞	大分県	大分東明高校	54	A6	n.a.	n.a.	高田輪中の野鍛冶・入鎌師と水害—輪中集落の歴史・くらし・文化3—
		鹿児島県	県立出水高校	54	A	4	2	大野原台地における植木産業の発展の歴史とその土地利用について

第4部 探究発表の場をひろげる

第7回 2013年	佳作	東京都	普連土学園高校(女子校)	64	A	0	2	港区田町の今昔物語—浮世絵から見る江戸・写真から見る現在—	
		山梨県	県立富士河口湖高校	46	A3	n.a.	n.a.	近世後期郡内領における年貢納入の実体—現富士吉田市域を中心として—	
		静岡県	日本大学三島高校	53	A9	n.a.	n.a.	古の三島ブランド三嶋磨—我が国最古の仮名文字曆に隠された秘密—	
		奈良県	西大和学園高校	72	A5	n.a.	n.a.	大和郡山城下町の歴史と変遷	
	鳥取県	県立鳥取西高校	63	A14	n.a.	n.a.	鳥取藩主池田家墓所の亀跡の変遷		
	優秀賞	千葉県	県立長生高校	68	A	3	2	『学校工場を追いかけて!』—学校が重需工場になったときPart2—	
		東京都	武蔵高校(男子校)	69	C	1	0	400余件の全国郵送アンケート調査とフィールド調査に基づく雨水集水方法「シデ法」の日本における分布とその水事情	
		神奈川県	桐蔭学園高校	66	A	0	2	多摩の農兵隊研究「もうひとつの新選組」を追って	
		島根県	県立浜田高校	53	A	0	7	ブイ人形の研究	
		徳島県	県立城南高校	61	C	0	1	木工の町と阿波水軍の関連について—「安宅」とその周辺—	
佳作		栃木県	県立学悠館高校(定時制・通信制)	—	A	3	0	明治18年の皆川城内村へタイムトラベル—『地誌編輯材料取調書』から分かること—	
		埼玉県	県立越ヶ谷高校	64	A	2	0	『越谷の中世—市内の板碑調査から—』	
		埼玉県	開智高校	71	A	0	2	『岩槻藩領南京船漂着事件を考える—試論—』幕府・岩槻藩・現地民の対応を中心に—	
		長野県	県立南高校	34	C	0	1	北陸・東海道巡幸と長野県	
		福岡県	県立大牟田北高校	50	A4	n.a.	n.a.	大牟田風お好み焼き「ダゴ」にまつわる誤解の背景	
		福岡県	県立輝翔館中等教育学校	50	A	0	6	八女茶と人々のつながり、そして茶の可能性	
		鹿児島県	県立志布志高校	49	C	1	0	隠れ念仏を追って—禁制下での志布志の一向宗—	
		第8回 2014年	学長賞	大阪府	樟蔭高校(女子校)	52	C	0	1
知事賞		徳島県	徳島文理高校	67	A	0	2	徳島市の高地蔵	
優秀賞		鹿児島県	県立出水高校	54	A	5	6	長島地区における医療実態の変化と交通事情との関連について	
		鹿児島県	県立志布志高校	49	A	0	2	「まぼろしの夜戦隊」を追って—特攻拒否の芙蓉部隊と秘密基地岩川—	
佳作	岐阜県	県立益田清風高校(単位制)	47	A	2	7	柳田國男の朴葉寿司		
	静岡県	県立磐田西高校	48	C	0	1	袋井に伝わる子供念仏—静岡県・中遠地方の「かさんぼこ」		
	東京都	武蔵高校(男子校)	69	C	1	0	西太平洋における「シデ様雨水集水法」による雨水利用		
	宮城県	尚綱学院高校	57	C	1	0	山城の変遷と防災—避難タワーとしての遺跡保存—		
	神奈川県	法政大学第二中・高校	69	A	12	0	東京オリンピックと神奈川—50年の節目で振り返り、トーチをつなぐ—		
	東京都	女子聖学院高校(女子校)	48	C	0	1	キリスト教女学校における戦時下の文化への対応—昭和戦前期の東京府・神奈川県のプロテスタント系キリスト教女学校を中心として—		
	神奈川県	桐蔭学園高校	66	C	0	1	幻の「戦車道路」—軍都相模原と戦車開発—		
	沖縄県	県立向陽高校	55	C	0	1	沖縄における土帝君信仰について		
	第9回 2015年	学長賞	東京都	麻布高校(男子校)	76	C	1	0	地方文書に見る「御一新」—武蔵国多摩郡布田五宿を中心に—
	知事賞	岡山県	就実高校	57	A	n.a.	n.a.	プレートが教えてくれたこと—昭和9年岡山山大洪水の痕跡の調査・保存活動—	
優秀賞	埼玉県	開智高校	71	C	1	0	版籍奉還前にあった関東諸藩「地方改革」の活動—明治二年「関東諸藩の連合会議」に関する史料『関東諸藩日誌』による考察—		
	神奈川県	桐蔭学園高校	66	A	n.a.	n.a.	戦争捕虜へのメッセージ		
佳作	愛知県	県立刈谷高校	68	C	0	1	鉄塔が見つめた85年時代に翻新された依佐美送信所		
	千葉県	市原中央高校	59	A	n.a.	n.a.	知られざる空襲1945年5月8日千葉を襲った機銃掃射		
	鳥取県	県立八頭高校	50	A	2	2	戦国期の城址に建設された模擬天守閣の研究羽衣石城の建設の経緯とその意義		
	徳島県	県立海部高校	46	A	n.a.	n.a.	徳島の蘭学者美馬順三・高良齋の足跡を追って—シーボルトとの「知の交流」—		
	福岡県	県立糸島高校	47	A	n.a.	n.a.	イトシマ地域における狛犬の導入と展開		
	大分県	大分東明高校	54	A	n.a.	n.a.	家船と「シェア」と瓢箪冠—大分県臼杵市津留の家船・行商・祭—		
第10回 2016年	学長賞	千葉県	市原中央高校	59	A	2	5	明治から現代に残された18歳の日記—日本点字の父、石川倉次の若き日に迫る—	
知事賞	埼玉県	開智高校	71	A	4	0	「史跡保存」にみる地域と行政—「石田堤」保存に関するフィールドワーク—		
審査委員特別賞	京都府	府立宮津高校(現宮津天橋高校)	49	B	1	0	与謝郡与謝野町山田の小学研究		
優秀賞	茨城県	茨城高校	69	A	3	0	鉱山産鉱物輸送・運搬の近代化—常磐炭田磐城地区と足尾銅山を中心に—		
	静岡県	県立磐田西高校	48	A	2	1	里山崩壊が獣害(サル害)を招いたのか—磐田市の民話「シッペイ太郎」を例に歴史的に検証する—		
佳作	埼玉県	早稲田大学本庄高等学院	75	B	1	0	ベイズ確率論からみた戦国武将の意思決定の分析—数学は歴史研究に貢献し得るのか?—		
	神奈川県	県立秦野曾屋高校	49	A	2	0	唐子神社の由来に迫る		
	神奈川県	法政大学第二中・高校	69	A	3	0	学徒勤労動員の記録—神奈川県における援農を事例として—		
	静岡県	聖隷クリストファー高校	49	C	0	1	浜松の城—水城から山城まで多彩な城跡を探る—		
第11回 2017年	学長賞	奈良県	西大和学園高校	72	A	3	0	地籍図による大輪田城の研究	
	福島県	県立新地高校(現相馬総合高校)	45	A	2	4	東日本大震災津波被災地福島県新地町の大津波伝承について		
知事賞	京都府	府立宮津高校(現宮津天橋高校)	49	A	1	1	与謝郡与謝野町石川の歴史地理的特質—巡検と石刻文字から読み解く—		

第4部 探究発表の場をひろげる

第12回 2018年	優秀賞	京都府	府立須知高校	39	A	2	2	日本近代農業教育の先駆け—ウィードと京都府農牧学校の奮闘—	
		長崎県	県立杵岐高校	40	C	1	0	大村家墓所の研究—大村家16代当主純伊及び19代当主喜前の没年と石塔造立年の不一致について—	
	佳作	長崎県	県立杵岐高校	40	A	2	2	長崎県杵岐市馬立(もうたる)海岸遺跡の研究	
		埼玉県	昌平高校	60	B	0	1	慰霊のかたち—慰霊行事を通して戦争を考える—	
	第13回 2019年	学長賞	埼玉県	開智高校	71	A	5	0	地域史料の保存・活用とファミリー—本郷寄託史料「山田家文書」をてがかりとして
			神奈川県	県立秦野曾屋高校	49	A	0	2	霧社事件と原勝治
		京都府	府立鴨沂高校	50	A	0	2	京都からフランスの空へ—忘れられた飛行家小林祝之助—	
		鳥取県	県立八頭高校	50	A	0	10	因幡の傘踊りの普及について	
		知事賞	岐阜県	県立関高校	64	A	7	2	渡辺三三の撫順史研究—植民地支配と歴史学—
			岩手県	県立釜石高校	52	A	1	3	南部藩の虎舞の起源を探る—虎舞はどこで生まれ、どのように広まっていったのか—
優秀賞		埼玉県	開智高校	71	A	2	0	草加松原団地と現代地域資料保存の研究「高校生草の根アーカイブズ」としての取り組みと課題	
		長野県	県須坂高校	60	C	1	0	長野電鉄絵地図における幻の社名から探る小林一三・神津藤平の先見的鉄道経営構想	
佳作	大分県	大分東明高校	54	A	2	2	「1918」暴動・戦争・疫病—100年前に大分でおきた3つの事件—		
	群馬県	県立桐生高校	61	A	4	0	形式と戒名から探る地域信仰の形態—安中市自性寺の墓石を中心に—		
第14回 2020年	学長賞	埼玉県	開智高校	71	A	3	0	「忠魂碑」への“眼差し” 過去・現在・未来—埼玉県岩槻区「忠魂碑」群の史資料の“可能性” 保存と課題—	
		神奈川県	県立秦野曾屋高校	49	B	1	0	奥津家文書から見る御旗奉行の役割	
	京都府	府立宮津高校(現宮津天橋高校)	49	B	1	0	与謝郡与謝野町加悦谷の歴史社会—石造物の基数と銘文に着目して—		
	長崎県	県立杵岐高校	40	A	4	1	長崎県杵岐市大久保遺跡の研究—縄文時代晩期貝殻粉混和土器に関する一考察—		
	知事賞	福岡県	県立修猷館高校	73	C	1	0	キリシタン信仰と地域コミュニティー—長崎県海外・平戸地区を中心に—	
		鹿児島県	県立種子島中央高校	38	C	1	0	三島停車場誕生までの歴史—鉄道誘致運動の全貌を探る—	
	50周年特別賞	長崎県	県立杵岐高校	40	A	7	1	小地名「ホノケ」の研究—福岡県糸島市王丸集落—	
	優秀賞	神奈川県	関東学院高校	61	B	1	0	未解明の古墳時代の集落に迫る—杵岐・車出遺跡とその遺物から見た巨石古墳との関係—	
静岡県		県立三島北高校	62	B	1	0	明治期の種子島における異文化交流—ドラメルタン号漂着事件を中心に—		
第15回 2021年	学長賞	千葉県	市原中央高校	59	A	5	4	「和戦一如」の地、東金城—本土決戦の要と「文化の礎」	
		大分県	大分東明高校	54	A	1	2	高島海洋少年共和国—無人島に強制収容された戦争孤児たち—	
	岐阜県	県立関高校	64	A	5	3	撫順東方における歴史観光構想とその挫折—まぼろしに終わった歴史ツアーズを読み解く—		
	佳作	京都府	府立鴨沂高校	50	C	0	1	近世箏曲とキリシタン音楽八橋検校の《六段》とラテン語聖歌《クレド》の関わり	
		神奈川県	立花学園高校	49	C	1	0	相模鉄道と神中鉄道の大山ケーブルカー敷設計画—大山をめぐる様々な思惑と2人の社長—	
	栃木県	県立学悠館高校(定時制・通信制)	—	A	2	0	享保期幕府代官池田喜八郎による忘れられた水利改良		
	神奈川県	武相高校(男子校)	47	C	1	0	文化を運んだ軍用鉄道—横須賀線が運んだのは“もの”だけではなかった—		
	知事賞	岐阜県	県立関高校	64	A	8	8	ナツツ割りから考える700万年の人類史—チンパンジー、現代の子ども、飛騨の縄文人を比較する—	
長崎県		県立杵岐高校	40	A	5	0	定光寺前遺跡出土の貿易陶磁器からみた中世杵岐の研究		
優秀賞	埼玉県	昌平高校	60	B	1	0	戦時下の海南島—海南海軍警察訓練所と二枚の絵—		
	岐阜県	県立関高校	64	A	6	6	応永年間、関鍛冶に何が起きたのか—関鍛冶成立期に関する探究—		
第15回 2021年	学長賞	兵庫県	県立加古川東高校	69	A	2	4	天満大池築造と喜瀬川形成に関する地理学的検討	
		群馬県	伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校	53	C	1	0	上毛野地域の発展と交通路の関係—地域内全域の包括的考察—	
	佳作	千葉県	千葉敬愛高校	59	C	1	0	安土城天主の平面復元の試案に基づく「天守指図」の史料価値の検討	
		福井県	福井南高校(定時制)	—	A	0	2	福井県の軽部氏と「講」及び伝統文化の存続	
	愛知県	南山国際高校	58	C	1	0	讃岐高松藩「塩硝製法並びに簡菜調合方」未解読古文書から考察する幕末高松藩の火薬製造		
	鹿児島県	県立鶴翔高校	38	A	2	2	2億年前からのたからもの—光礁と五色浜—		
	知事賞	東京都	本郷高校(男子校)	71	C	1	0	柳沢吉保時代における六義園の変遷	
		鳥取県	県立青谷高校	40	A	4	3	青谷上寺地遺跡出土土器の黒斑分析—土器づくり体験からのアプローチ—	
優秀賞	東京都	豊島岡女子学園高校(女子校)	75	C	0	1	東京を舞台とした異性装が犯罪と結びつく近代小説と当時の異性装に対する認識		
	鳥取県	県立八頭高校	50	A	4	2	鳥取池田家の家老墓について		
佳作	長崎県	県立杵岐高校	40	A	2	2	定光寺前遺跡出土の土師器からみた中世杵岐の研究		
	茨城県	江戸川学園取手中・高校	70	C	1	0	下総の鉄道路線と水運の関わり—利根町から活気が消えた本当の原因とは—		
	茨城県	江戸川学園取手中・高校	70	C	0	1	新撰組と五兵衛新田—何故、新撰組は五兵衛新田に屯所を構えたのか—		
	東京都	普連土学園高校(女子校)	64	C	0	1	津田仙が本当に伝えなかったこと—明治時代の農業に関する仙の功績を中心に—		
	東京都	成城高校(男子校)	65	C	1	0	戦国期の東国における避難所の形態		

第4部 探究発表の場をひろげる

		東京都	日本大学櫻丘高校	60	C	1	0	吾妻鏡と地域の様子から見る幻の大寺院真慈悲寺と鎌倉幕府の関係性
		神奈川県	栄光学園高校(男子校)	75	A	6	0	インフラから見た横浜での関東大震災の復興
		兵庫県	灘高校(男子校)	78	A	15	0	酒造業の発展と物流—灘五郷の酒造業から見る近世と近現代の産業構造—
第16回 2022年	学長賞	東京都	成城高校(男子校)	65	C	1	0	甲斐国内の扇状地における居館と詰城の地理的關係
	知事賞	神奈川県	県立足柄高校	48	A	2	0	明治期における赤痢流行への対応—「伝染病赤痢仮離隔病舎日誌」から—
	優秀賞	東京都	東京大学教育学部付属中等教育学校	64	C	1	0	引越し大名の財政苦勞譚—藩日記から読み解く松平大和守家の窮乏財政—
		岐阜県	県立多治見高校	58	C	1	0	日本における男色文化の盛衰と伊達政宗—LGBTQ+に寛容な現代社会の形成につなげる古の失われし文化—
		長崎県	県立壱岐高校	40	A	2	1	「神宿る島」壱岐の信仰について—歴史の変遷と特異性—
	佳作	埼玉県	昌平高校	60	A	0	3	深輪村のれきし—「宗旨御改帳」にみる177年の記録—
		千葉県	千葉市立千葉高校	68	C	0	1	有吉城はどこにあるのか
		東京都	國學院高校	64	C	0	1	翻訳を通じた近代日本の西洋思想の受容の実態
		滋賀県	県立膳所高校	74	C	1	0	琵琶湖水上交通から考える大津城の豊臣政権における役割
		鳥取県	県立青谷高校	40	A	0	6	青谷上寺地遺跡出土人骨の考察—殺傷された少女人骨の問いかけるもの—
第17回 2023年	学長賞	埼玉県	昌平高校	60	B	1	0	「高野の施餓鬼」信仰の広がりとその起源—近隣都県の市区町村史から探る—
	知事賞	神奈川県	県立足柄高校	48	B	0	1	現代に伝わった人形芝居—班目人形芝居の歴史—
	優秀賞	埼玉県	県立川口北高校	65	C	1	0	川口市の縄文人は泥炭から土器を作ったのか
		神奈川県	県立足柄高校	48	B	1	0	関東大震災下の箱根地域の被害と復旧—残された史料・石碑から読み解く—
		岐阜県	県立関高校	64	A	4	0	地下軍需工場建設と本土決戦準備—東海軍管区の本土決戦構想を探る—
	佳作	神奈川県	逗子開成中学校・高校(男子校)	70	C	1	0	新資料から読み解く鎌倉食用蛙養殖場
		奈良県	奈良女子大学附属中等教育学校	67	C	1	0	なぜ巨大古墳の造営地は大阪に移るのか?—墳丘築造企画論から考える—
		鳥取県	県立青谷高校	40	A	2	4	青谷上寺地遺跡水田復元の試み(1)—弥生時代の水田から学ぶ持続可能な水田へのアプローチ—
		長崎県	県立壱岐高校	40	B	0	1	壱岐における神棚文化について
		長崎県	県立壱岐高校	40	C	1	0	壱岐勝本城跡の本丸虎口に関する研究
第18回 2024年	学長賞	東京都	駒場東邦中学校・高校(男子校)	76	C	1	0	新発見の山城「赤柴城」の存在意義—その立地と縄張りの比較分析—
	知事賞	長崎県	県立壱岐高校	40	A	4	0	興原古墳の石材運搬に関する研究—古墳時代社会解明への道しるべ—
	優秀賞	岐阜県	県立関高校	64	A	5	0	戦国・織豊期における飛騨川流域の製材と運材
		京都府	府立鴨沂高校	50	A	3	8	本校が所蔵する明治時代の西洋画の作者について
		愛媛県	県立松山北高校	62	A	3	3	松山市に伝わる小野小町伝承の謎を解く
	佳作	東京都	筑波大学附属中学	77	C	1	0	坂本龍馬秋山某宛書簡における「秋山先生」考
		東京都	世田谷学園中学校・高校(男子校)	69	C	1	0	下野薬師寺の戒壇設置について—氏寺からの官寺化として—
		静岡県	県立富士高校	68	C	1	0	富士郡における土族の地方行政進出—沼津勤番組員を中心に—
		静岡県	県立浜名高校	55	A	2	0	人と道と道の関係性—東海道、姫街道、そして犬くぐり道などからの考察—
		愛知県	県立五条高校	58	C	0	1	各務支考賛松尾芭蕉園の研究
長崎県		県立大村高校	59	C	1	0	大野遺跡や出津遺跡のキリタンが禁教令下の時代に発見されなかった理由について—大村氏・深堀氏との関係性・歴史や地理的環境から読み解く—	

第17章 九州国立博物館「全国高等学校歴史学フォーラム」の歩みとこれから 地脇 技（九州国立博物館）

九州国立博物館では教育普及事業の一環として、毎年8月に「全国高等学校歴史学フォーラム」を開催している。本フォーラムは、2014(平成26)年に開催された「全国高等学校考古名品展」の関連イベント「全国高等学校考古学フォーラム」としてスタートし、のちに現在の名称に変更しつつ、2025年度で11回目を迎えた。開催のきっかけとなった、トピック展示「全国高等学校考古名品展」は、全国の高等学校に所在する考古資料を紹介した展覧会である。高等学校に所在している考古資料そのものだけでなく、これらの資料が高等学校に集まった経緯や関係する高校生の研究活動についても紹介し、考古資料そのものの価値と考古資料が学校にあることの価値が広く認識されることを目的とするものであった。「名品展」では、全国13校から53件の考古資料をえりすぐって展示をおこなった。2016(平成28)年までは考古学のみを対象としていたが、参加する高校を集めるのに難航したこともあって、2017(平成29)年に名称を変更、対象とする研究の範囲を考古学だけでなく歴史学にも広げて現在に至っている。25年度は過去最高の18校23件の応募があり、徐々に知名度が上がって参加の高等学校も増えてきているが、さまざまな課題が見えてきている状況である。本稿では、「全国高等学校歴史学フォーラム」の概要と参加校・応募者の属性や広報活動を踏まえ、今後の課題についても整理していきたい。

1. 全国高等学校歴史学フォーラムの概要

本フォーラムは前述の通り、全国の高等学校に所在する考古資料と高校生による考古学研究活動を紹介した「全国高等学校考古名品展」の関連イベントとして、高校生の研究成果発表の場の提供、参加生徒相互の交流促進、博学連携の強化を目的に始まった。その後、フォーラムのプログラム構成については長らく試行錯誤が続いてきたが、新型コロナ禍での中断をはさみつつ、次第に開催の形式が整ってきた。毎年8月の第1土曜日に1日間、当館1階ミュージアムホールにて高校生が研究成果や活動状況を発表する、という枠組み自体は開始当初から変わっていないが、発表の形式や参加生徒相互の交流促進の場づくりには、博物館が主催する事業としての独自性を意識し、毎年実施状況を踏まえた変更を加えつつ、現在に至っている。

現在は次のような形で運営を行っている。まず募集については4月下旬頃にホームページで告知を行っている。福岡県内の県立高校・私立高校、および前年度の応募校には郵送等にて文書を送り募集をかけている。応募方法は、A4サイズの応募用紙に発表テーマ(タイトル)、発表の概要を400文字程度、発表のみどころ(PR)ポイントを30文字程度で

記入してFAXで応募、という形式をとっている。発表内容は、日本の考古学・歴史学諸分野に関する調査・研究としており、必ず未発表の内容を含むことを求めている。なお、既発表の内容を含んでいるかどうかについては、応募用紙で申告するようにしている。発表そのものではなく概要としていることで、応募から当日までの間に研究発表をブラッシュアップする期間を設けることができ、特に高校に入学したばかりの1年生でも応募しやすくなるというメリットが考えられる。実際、応募の段階で見込んでいた研究結果から、ブラッシュアップの間に想定しなかった方向へ変わっていった例もある。発表のみどころについては、本フォーラムのポスターやチラシに掲載するものとなるため、目を引くような文章に仕上げてくる学校があれば、シンプルに研究成果を説明する学校もあり多様である。

応募数が例年10～20件程度に収まるため、FAXによる応募という方式をとっているが、応募のハードルを下げるべくメールでの応募も可とすべきかとも考えるが、現状では本フォーラムへの応募は学校を介して、という建付けで実施しているため、生徒が個人の資格でより気軽に応募できる枠組みを設定するか否かについてはその影響も慎重に見ながら、検討してゆきたい。

6月の中旬に応募を締め切った後、応募された発表の概要を当館研究員がチェックし、当日発表する高校を最大10校まで選考している。選考の期間は概ね1週間程度とし、選考にはフォーラムの運営を担当している交流課の研究員2名のほか、当館学芸部部長と応募されたテーマに近い専門の研究員に協力をしてもらう、という体制をとっている。本フォーラムは「高校生による歴史学研究成果を対外的に発信する機会を設ける」という趣旨から、研究としての体裁が整っていることは必要としながらも、高校生ならではの独自性や当日の発表を聞いてみたいと思わせる内容かどうかにも重視して選考を行っている。選考の期間についてはやや短いように感じられるが、ポスターやチラシの制作スケジュールとの兼ね合いもあり、選考により多くの時間を費やすことは現状できていない。本フォーラムの知名度も上がり、年々応募が増えている状況を踏まえると選考期間を延ばすべきではあるが、その分応募締め切りを前倒しせざるを得ず、これが入学して間もない1年生の応募を制限する恐れがあり、非常に難しい課題である。また、10校という枠組みについては、ミュージアムホールに入ることのできる数の上限、として設定している。特に1校から何件応募するか、何件まで選出するかについて制限を行っていないが、前述の趣旨からより多くの高校に発表の機会を設けるため、研究員の選考結果が同等であった場合は1校から1件の発表とすることもある。

当日の発表であるが、調査・研究の成果をポスターにまとめ、それを160cm×90cmのパーテーション2枚に掲示、その前で発表と質疑応答を行うポスターセッション形式をとっている。2016(平成28)年まではホールの壇上で発表する形式でおこなっていたが、発表者・聴衆ともに距離感・緊張感があったためか質疑応答が活発にならないという課題が

あった。そのため、翌2017(平成29)年からは、ホールを10時半に開場した後1時間を各校生徒が来場者に研究内容を説明する「説明タイム」と銘打ってポスターセッション形式にしたことで、発表をおこなう生徒と聴衆の間の距離が縮まり質疑応答が活発に行われるという効果が得られた。2021(令和3)年からは、ポスターセッションは午前5校、午後5校に分かれて行うが、これは新型コロナ禍の際にソーシャルディスタンスを確保するための施策として始まったものである。また、午前・午後に分かれることで参加校の生徒同士が互いの研究発表を聞くことができるため、コロナ禍が明けた後も継続しておこなっている。発表当日はミュージアムホールを開放し、一般の来場者を迎えて「説明タイム」を自由に聴き質疑応答に参加してもらおう形式としている。近隣から当館を訪れる歴史に関心を持つ方や小さな子どもまでさまざまな質問がおこなわれ、発表生徒が真剣に質問に答えるというやりとりが見られ、発表する生徒にとっては非常に刺激になっていると感じる。

「説明タイム」の間は何度でも説明してよいため、本フォーラムではリハーサルの時間を設けておらず最初はぎこちない様子で発表をしていた生徒も次第に慣れてきて自信をもって発表する姿が見られた。

午後の説明タイムが終了した後、参加生徒の交流を促すための時間を約1時間確保している。この時間は2016(平成28)年に、来場者を増やし生徒相互の交流を深め、生徒に考古学という学問の一端に触れてもらうというねらいでワークショップの時間として設けられたものである。初年度となる2016年は、「古代衣装体験」「拓本体験」の2つのワークショップをホールで実施し、ポスター発表を終えて緊張の解けた参加生徒と来場者がともに体験をたのしむ様子が見られた。2017(平成29)年、2018(平成30)年はこの体験事業を「実験タイム」と名付けた実証実験の形で、参加した生徒と共同で実施した。17年は奈良県立橿原高等学校考古学研究部と共同で「高校生VSクロマニヨン人ー今晚のごちそうを狩れー」を実施、当時の特別展「世界遺産 ラスコー展」の会場に現れるクロマニヨン人が人気を博していたため、同校考古研部員扮する縄文人とクロマニヨン人が対決する形で、それぞれの狩りの道具、弓矢と槍の違いを実感できるイベントをおこなった。翌18年は「きゅーはく 石器 de クッキング!」と題して、長崎県立壱岐高等学校東アジア歴史・中国語コースと共同で、黒曜石の刃で実際にベーコンを切ってみるという実験イベントを実施した。これらの取り組みは来館者にも非常に好評であったが、6月中旬の参加校決定から8月第1土曜日までの短い期間で企画・準備を行わなければならない、職員・参加校の負担が大きいという点が課題であった。2019(令和元)年は、参加生徒によるディスカッションとして生徒を班に分け、各班に当館職員が1名ずつサポートについて、互いの研究発表に対する意見交換や日頃の活動に関する情報交換をおこないました。これは、前年に当館副館長による講評と参加生徒による意見交換の時間をとったものの、ポスター発表で他校の発表を聞く時間を確保できなかった生徒が多く、互いの発表について意見を述べ合うに至らなかったことを受けてのものである。ミュージアムホールの開場前にリハ

一サルという形で互いの発表を聞く時間を確保して臨んだものの、最後まで打ち解けることができなかつた班もあり、アイスブレイクをどうするかという点が課題となった。この参加生徒による意見交換は、2021(令和3)年から各生徒が発表アンケートを聞くことのできた発表に対して提出する、という形で継続している。21年以降は、収蔵庫等を見学するバックヤードツアーやレプリカの甕棺を体験する甕棺ワークショップを実施している。遠方から参加する高校も多いため、ポスター発表は1日のみの開催としていたが、2024(令和6)年からは、フォーラム終了後の約1ヶ月間、当館1階のエントランスホールにてポスター展を実施している。フォーラム当日に発表に使われたポスターを掲示することでより多くの来館者の目に触れることを目的としている。

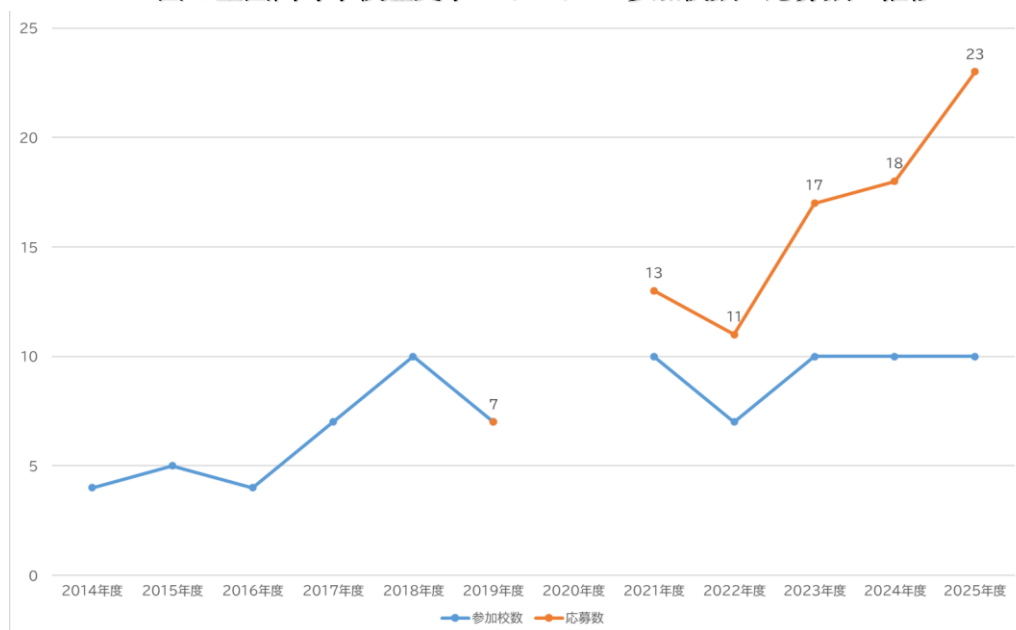
本フォーラムでは各校の発表に対して審査や表彰は行っていない。これは、本フォーラムは歴史を主体的に学ぶ高校生同士の意見交換、および交流の場としての機能を重視していることから審査・表彰は行わないとしており、この点に関しては開始当初から一貫して変えていない。

2. 全国高等学校歴史学フォーラムに参加する高等学校の傾向

本フォーラムの参加校数・応募件数は、当初考古学に特化した高校生による研究の場として始まったこともあり、参加校集めが難航した。第1回目は4校での開始で、その後数年は4~5校で推移したため、前述のとおり第4回目から名称を変更して応募対象の研究範囲を広げ、また知名度の向上のため各所に共催・後援をお願いし広報に力を入れてきた。その後7~10校に増え、特に2022年以降はさらに応募件数が増えてきており、高校生による研究成果を発表する場としても知名度が上がってきた。広報活動としては、福岡県内の全ての高等学校へ要項を配布しているほか、共催の公益財団法人九州国立博物館振興財団の支援のもと、ポスター・チラシを制作し都道府県教育委員会（加えて、東京都・大阪府は私立学校主管課にも）、福岡県内市町村教育委員会、当館のキャンパスメンバーズに参加している大学、九州島内の県立図書館などに配布し知名度の向上を図っている。こうした広報活動の成果によって、考古学・歴史学系の部活動以外に、生徒個人の探究活動の成果による応募も見られるようになっている。

都道府県別の参加高校数を見ると、当館が位置する福岡県がのべ11と最も多く、次いで福島県・神奈川県・千葉県の3、栃木県・群馬県・埼玉県の2と続いている。これまで発表をおこなった高校は16府県に及び、発表に至ってはいないものの佐賀県・大阪府・茨城県・兵庫県・宮崎県・鹿児島県からも応募があり、これらを含めると22府県となっている。参加回数の内訳は、1回が16校(47%)と約半数を占める一方で、4回以上参加している学校が8校あり約1/4を占めている。参加校の分布が九州地方と関東地方にやや偏っており、これまで応募がなかった都道府県にいかによりリーチするかが課題の一つであ

図1.全国高等学校歴史学フォーラム 参加校数・応募数の推移



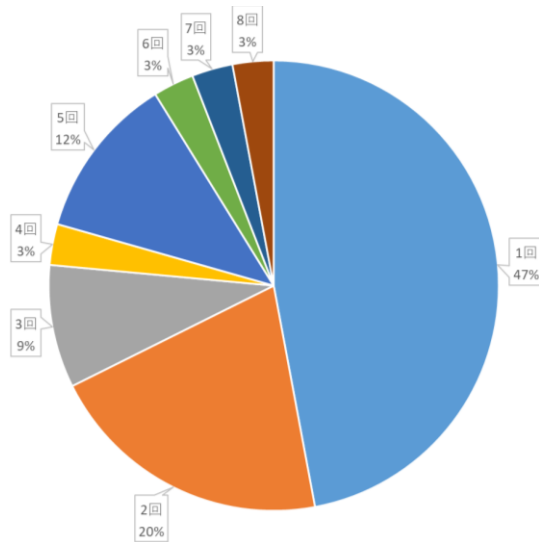
る。「歴史研究部」などの部活動名義での参加は、応募の際に「グループ名」を記載しているか否かで集計をおこなったため、参考程度の数字となるが約59%が部活動名義で参加している。高等学校学習指導要領の改訂によって、歴史系の教科として歴史総合・日本史探究・世界史探究が新たに始まったが、特に日本史探究の授業の一環としておこなわれた探究活動での応募も今後は多くなってくることが予想される。フォーラム当日の参加者の男女比であるが、年によって参加者名簿に性別を明記している場合とそうでない場合が混在するため、毎回撮影している集合写真から起こしたデータとなるが、男子生徒が56%、女子生徒が44%と、高校生による考古学・歴史学研究に女性の参加が少ないイメージに反して、男性がやや多いもののさほど男女比に大きな差はみられなかった。当館では過去に「きゅーはく女子考古部」といった取り組みも行っているが、高校生による考古学・歴史学研究の場に女子生徒の参加が見られることは、多様性の面からみて望ましい傾向と言える。

なお、これまでの本フォーラムでの発表校と研究タイトルについては別表を参照していただきたい。

図2.都道府県別参加校数



図3.参加回数の内訳



3. 今後に向けての課題

少しずつではあるが知名度の向上、応募数の増加が見られる本フォーラムであるが、最後に今後に向けての課題について述べる。一つ目の課題は、高校生の研究環境に関することである。福岡県内で歴史系部活動（史学部・考古学部・郷土研究部など）を持つ学校は、2014年時点で161校中22校と1割強に過ぎず、高校現場における歴史系部活動の地盤沈下は開始当初から変わっていない。本フォーラムに複数回参加している高校の部活動でも今年限り、といった声も聞かれ、高校生の考古・歴史研究の場の縮小は懸念される所である。また、高校生を対象とする事業であるにもかかわらず、会場に足を運ぶ高校生の数が少ない点も課題と言える。また、研究の指導ができる教員の存在や学校所在地、居住地域に考古・歴史資料に触れることができる施設の存在といった研究環境の差も、フォーラム運営者だけで解決できる問題ではないが、難しい課題の一つである。

二つ目の課題は、部活動以外の個人の参加の受け入れ、参加の負担に関することである。前述のとおり、考古・歴史系部活動の減少や授業における探究活動によって、今後参加者が部活動の部員から個人にシフトすることが予想される。本フォーラムでは、生徒2名・引率教員1名まで旅費の補助を行っている。そのため、応募後の連絡や旅費支弁等については原則として学校を通して行うこととしている。個人の資格での場合、学校所在地から当館までの引率を教員が行うことが難しい場合も考えられる。

三つ目の課題は、博物館で実施するイベントとしての性格も併せ持つため、ある程度は集客を考える必要がある点である。専門の歴史学者・考古学者の研究発表で300席近い

ホールを埋めることは難しく、加えて高校生の歴史学・考古学に関する研究発表というコンテンツでどの程度集客が見込めるかという課題がある。この点に関しては、現在のポスターセッション形式で来場者との活発な質疑応答が見られることから、近隣地域への告知や来場者をいかに巻き込むことができるかがポイントと考える。

四つ目の課題は、選考と評価に関する問題である。本フォーラムでは研究員による選考を経て参加校の選出を行っているが、選考期間が短い中で多忙な研究員に選考の負担をどこまで負わせるかという課題があり、特に近年は応募件数の増加があり速やかな選考体制の確立が必要となっている。また、前述のとおり当日の発表に対しての審査・表彰は第1回目から一貫して行っていない。研究員の立場からは、歴史・考古に興味関心を持つ高校生が増えてほしい、将来研究の道に踏み込む人が増えてほしいという願いが根底にあり、博物館は可能な限り発表の機会を広く提供すべきであるが、スペースや予算の制限、1日のみの開催という時間的な制限もあり、発表をする高校の選考自体は必要ではある。審査・表彰によって研究の主体である高校生の自主性や自由な発想が失われる可能性や、研究環境に恵まれない高校生を研究発表の場から締め出す可能性もはらんでいることから、本フォーラムではあえて審査・表彰しないことで少しでも多くの高校生が発表の場に登場できるようにし、研究の裾野を広げていくことをねらいとしている。一方で、審査・表彰をすることが高校生の研究に対するモチベーションを向上させるのではないかと、との意見もあり、この選考と評価の問題は発表の場を設ける運営主体がそれぞれのねらいや理念に基づいて行うことで、考古学・歴史学に興味を持って研究に取り組む高校生により多くの選択肢を与えることにつながると考える。

4. おわりに

本稿では、当館で実施している「全国高等学校歴史学フォーラム」の開催概要と参加校の傾向、およびこれからの課題について述べてきたが、現行の学習指導要領より日本史探究、世界史探究、総合的な探究の時間が設置され、「日本史探究」では「諸資料を活用して歴史を考察し表現する学習」を発展・継承し、歴史的事象の意味や意義、関係性を考察し、諸事象の解釈や歴史の画期を表現する学習活動の充実が求められている。こうした中、高校生が自ら学び、調べ、考察した結果を発表する場を設けることは意義のある取り組みである。予算や人的資源、外部環境の変化等さまざまな制約があるものの、研究活動を通じて一人でも多くの高校生が考古学・歴史学研究の道に進むことを期待したい。

参考文献

今井涼子・久保田和之「全国高等学校歴史学フォーラムの実施について」(『九州国立博物館研究紀要 東風西声第15号』、九州国立博物館、2020年)

第4部 探究発表の場をひろげる

別表. 参加校・発表内容一覧

開催回	開催日時	参加校	発表内容	
1	2014年8月16日(土) 13:00~16:00	福島県立磐城高等学校	史学部	天冠埴輪の発掘とその特色
		東邦大学付属東邦高等学校	東邦考古学研究会	東邦大学に残る騎兵連隊建物周辺調査
		福岡県立糸島高等学校	歴史部	火山の烽火台を探して
		熊本県立鹿本高等学校	考古学部	鹿本高校考古学部の歴史と現在の活動
2	2015年8月15日(土) 13:00~16:00	岩手県立一戸高等学校		御所の遺跡はなぜ中期で終わったか
		東邦大学付属東邦高等学校	東邦考古学研究会	地元の歴史を掘るー120年前の歴史に迫るー
		愛媛県立大洲高等学校		学校を学ぶ、学校から考える！ー学校設定科目「郷土研究」における実践ー
		福岡県立筑紫丘高等学校	郷土研究部	丘の上の郷土研究部
3	2016年8月6日(土) 13:00~16:00	埼玉県立伊奈学園総合高等学校	歴史研究会	さきたま古墳群出土の馬冑について
		岐阜県立関高等学校	SGH礼文島調査班	島しょ部と内陸部の縄文時代遺跡の比較
		奈良県立橿原高等学校	考古学研究部	謎の巨石 益田岩船に迫る
		福岡県立嘉穂高等学校	郷土部	資料台帳整理に関わる諸活動
4	2017年8月6日(日) 13:00~16:30	千葉県立千葉高等学校		銚子と『極東新聞』
		奈良県立橿原高等学校	考古学研究部	高校生、石で肉をさばきました！
		徳島文理高等学校	郷土研究部	なぜ高地蔵は徳島に造られたのか
		福岡県立筑紫丘高等学校		近世の日朝交流から普隣関係を学ぶ
		福岡県立朝倉高等学校	史学部	地元へ眠る、キリシタン橋／キリシタン禁教高札に関する調査報告
		長崎県立壱岐高等学校		大村家墓所の研究ー十六代当主純伊と十九代当主嘉前 <small>の没年と墓の造立年の不一致についてー</small>
5	2018年8月4日(土) 13:00~16:30	大分東明高等学校	郷土史研究部	現場で検証『御城下絵図』
		福島県立相馬高等学校	郷土部	土面と巨人伝説
		栃木県立学悠館高等学校	歴史研究部	『地誌編輯材料取調書』から読み解く皆川ハヶ村の信仰史
		群馬県立桐生高等学校	地歴部	江戸時代の信仰のあり方～墓石調査における「形式」と「戒名」の分析を通して～
		岐阜県立関高等学校	地域研究部	よみがえる渡辺三三旧蔵資料
		福岡県立宗像高等学校	歴史研究会	本校を例に見た戦時中の学生たちについて
		福岡県立筑紫丘高等学校		「幻の水城」を探る
		福岡県立糸島高等学校	歴史部	糸島地域における石工の基礎的研究
6	2019年8月4日(日) 13:00~15:30	福岡県立朝倉高等学校	史学部	為朝外伝～東峰村で発見した母の墓、そしてこれから～
		長崎県立壱岐高等学校	東アジア歴史・中国語コース	壱岐島の黒曜石～馬立海岸遺跡を中心に～
		大分東明高等学校		新聞で追う100年前の大分～戦争・暴動・疫病～
		福島県立相馬高等学校	郷土部	野間土手～相馬の「万里の長城」～
		群馬県立桐生高等学校	地歴部	目には見えない、人々の「祈り」を明らかにする～桐生市における文献調査とフィールドワーク～
		岐阜県立関高等学校	地域研究部・文芸部	雑誌『ひだびと』で江馬修は何をめざしたのか
		京都府立鴨沂高等学校	京都文化コース	鴨沂高校とその周辺から考える歴史～モノから史料に～
		奈良県立橿原高等学校	考古学研究部	土器の文様について～この線描けるかな～
7	2021年8月7日(土) 10:30~15:30	福岡県立糸島高等学校	歴史部	近代以降の紙幣の変遷とその背景を探る
		長崎県立壱岐高等学校	東アジア歴史・中国語コース	長崎県壱岐氏大久保遺跡の研究～縄文時代晩期貝殻粉混和土器に関する一考察～
		群馬県立高崎北高等学校	JRC部歴史研究班	現代における庚申信仰のあり方と課題～古墳、城から転用された祭場に着目して～
		福島県立相馬高等学校	郷土部	福島県相馬市の官軍墓地～戊辰戦争の記憶～
		奈良県立橿原高等学校	考古学研究部	現代人から見る弥生絵画～人物画をデータ化する～
		埼玉県立熊谷西高等学校		皇女和宮と口紅と將軍家茂
		福岡県立糸島高等学校	歴史部	江戸時代の疾病と考古資料～イトシマを舞台として～
		長崎県立壱岐高等学校	歴史研究会	中世壱岐の深江田原平野の衰退原因に関する一考察
		法政大学第二高等学校	社会科学・歴史研究部	甲斐武田氏の津久井侵攻と街道からみる深大寺城再興の目的
		栃木県立矢板東高等学校	リベラルアーツ同好会	栃木県北部における烽跡の推定
福岡県立八幡高等学校		歴史上における関門海峡の地理的重要性について		
九州産業大学付属九州産業高等学校	史跡探索研究部	九州最古！？あの夏目漱石も愛した！筑前国二日市温泉		

第4部 探究発表の場をひろげる

開催回	開催日時	参加校		発表内容
8	2022年8月6日(土) 10:30～15:30	福岡県立朝倉高等学校	史学部	「甘木紋」の魅力～失われかけた地域文化の再生に向けて～
		福岡県立糸島高等学校	歴史部	石鍾FISHING！？～弥生のおもりで魚釣り～
		九州産業大学付属九州産業高等学校	史跡探索研究部	『銚之記』にせまる！
		埼玉県立熊谷西高等学校		ダークツーリズムとしての熊谷空襲
		群馬県立高崎北高等学校		江戸時代の農村地帯における庚申信仰の広がりについて
		福岡県立八幡高等学校		九州北部の「道」の歴史推移について
		栃木県立矢板東高等学校	リベラルアーツ同好会	栃木県におけるサメ食文化に関する一考察
9	2023年8月5日(土) 10:30～15:30	福岡県立朝倉高等学校	史学部	天岩戸伝説が問いかける「秋月の乱」
		長崎県立壱岐高等学校	東アジア歴史・中国語コース	「神宿る島」壱岐の信仰について～歴史の変遷と特異性～
		福岡県立糸島高等学校	歴史部	僕らのキュートな象嵌鐙
		福岡県立香住丘高等学校		「決着作戦」下において篠栗町に設置された司令部と戦時中の篠栗町の調査
		九州産業大学付属九州産業高等学校	史跡探索研究部	東洋一！？大刀洗飛行場の謎にせまる！！
		埼玉県立熊谷西高等学校		密着！！工女・工女さんのカッポウ着とおやつ
		福島県立相馬高等学校		双龍文環頭太刀柄頭の謎
		群馬県立高崎北高等学校		養蚕信仰が現在の地域社会に与えている影響について
		福岡県立宗像高等学校	歴史研究会	山田棒ノ尾遺跡における須恵器窯採集資料の検討
栃木県立矢板東高等学校	リベラルアーツ同好会	栃木県における猫神信仰		
10	2024年8月3日(土) 10:30～15:30	福岡県立朝倉高等学校	史学部A	幻の小八郎様祭～日本唯一？為朝の息子を祀る謎～
		福岡県立朝倉高等学校	史学部B	雉と琴と神宮皇后～美しき伝承の裏を読み解く～
		神奈川県立足柄高等学校	歴史研究部	戦時下の神奈川第一抑留所と北足柄
		福岡県立小郡高等学校	郷土研究部	小郡の幻の鉄路を追って～鳥栖・小郡・三輪を結ぶ「中央軌道」はなぜ消えたのか～
		埼玉県立熊谷西高等学校		伝統産業と近代化～埼玉県行田の足袋産業の発展・衰退・復活～
		西南学院高等学校	社会調査研究部	能島村上氏と筑前かむり村～大名勢力への帰属と海賊の終焉～
		群馬県立高崎北高等学校		様々な姿で祀られる養蚕の神様たち～養蚕信仰の地域間格差について～
		常磐高等学校		海路の要塞～細川氏と門司城～
		日本大学東北高等学校		安場古墳から出土した大刀から日本刀の歴史を解く
		栃木県立矢板東高等学校	リベラルアーツ同好会	御前原秘匿飛行場建設の謎に迫る
11	2025年8月2日(土) 10:30～15:30	福岡県立朝倉高等学校	史学部A	ついに解読！八郎様祭を巡る祠の文字と思考の旅
		福岡県立朝倉高等学校	史学部B	甘木で見つけたレンガ式アーチ橋？謎の建造物を探るPart1
		長崎県立壱岐高等学校	東アジア歴史・中国語コース	興原古墳石材運搬の研究～古墳時代社会解明への道しるべ～
		福岡県立小郡高等学校	郷土研究部	とある水車の物語～『水車巡路道鮮覧図』から読み解く地域史
		埼玉県立熊谷西高等学校		「かわいい」は何時の時代でも個性の証～おしゃれ着物「簞仙」はなぜ大流行したのか～
		福島県立相馬高等学校	郷土部	相馬の「あんば様」とは～失われた海の記憶
		群馬県立高崎北高等学校	JRC部歴史研究班	庚申信仰の現状と、地域社会における現代的意義について
		千葉明德高等学校		千葉新聞から考察する東京裁判報道～広田弘毅を中心にして～
		常磐高等学校		考古学から探る細川期門司城
		栃木県立矢板東高等学校	リベラルアーツ同好会	御前原秘匿飛行場に関する口述歴史～滑走路の様相に迫る～

第18章 特別部会パネル「高校生の発表の場をいかに広げるか」へのコメント

～高校生と発表の場を提供する機関との有機的なつながりを目指して～

香川百合子（帝塚山学院高等学校）

はじめに

2025年夏、高大連携歴史教育研究会・特別部会のパネル「高校生の発表の場をいかに広げるか—歴史研究を中心に」へコメンテーターとして参加させていただいた。今回のパネルでは、高校生が歴史研究の発表をする「場」を提供されている、奈良大学の木下先生（「全国高校生歴史フォーラム」実施）、九州国立博物館の地脇先生（「全国高等学校歴史学フォーラム」実施）のご報告を聞かせていただき、僭越ながら研究発表会に参加する高校生を指導する部活顧問という立場でコメントをさせていただいた。本稿では、本年度の歴史研究部の活動にも触れつつ、パネルで述べさせていただいたコメントについてまとめていきたい。

1. 帝塚山学院中学校高等学校・歴史研究部について

本校は、大阪府にある中高一貫の女子校だ。歴史研究部（以下歴研と省略）は40あるクラブの中でも70年以上の歴史を誇り、かつては部員が個々に研究した成果を部誌にまとめ、学院祭（文化祭）で配布していたようだが、他のクラブと掛け持ちをする部員（ここ数年は中高で20～30名が所属）が増えてきた昨今、近畿圏のフィールドワークがメインの活動となっている。

フィールドワークと並んで活動の柱となっているのが、「日本と世界が出会うまち・堺」プロジェクトへの参加だ。このプロジェクトは、堺市博物館と大阪大学文学部、および高等学校・中学校が連携する「博学連携」の堺モデルの一環である。顧問の話聞くことがメインの「受動的」な活動だけではなく、堺という地域の歴史を「能動的」に自分たちで研究するこのプロジェクトに参加することで、歴史への好奇心を誘い、探究心を養うことを目的としている。このプロジェクトへの参加は任意で、部員全員が参加するわけではない。掛け持ちする生徒も多いため、中高で2～3チームが参加することが定着しつつある。

2014年度から参加を続け、2025年度は中学生が特別賞を、高校生が2年連続で最優秀賞を受賞することができた。パネルのコメントの前に、次項では本年度の歴研の奮闘について触れていく。

2. 2025年度 歴史研究部の活動について

2025年夏、高校2年生の歴研メンバーは「令和7（2025）年全国高等学校社会科学・郷土研究発表栃木大会」へ参加させていただいた。半年前の「日本と世界が出会うまち・堺2024」で最優秀賞を受賞したからである。ここで全国の高いレベルの発表に触れ、大きな刺激を得て、いよいよ「日本と世界がであうまち・堺2025」へ挑戦することとなった。

今年の参加メンバーは、非常に身近な存在である傘が堺と関係することに興味を持

ち、過去の先輩方もそうであったように、まずは「国史大辞典」の傘の項目を調べ、書籍を探すところからスタートした。また、夏休みには京都の和傘工房「日吉屋」さんを見学させていただき、和傘の仕組みや歴史について学んだ。

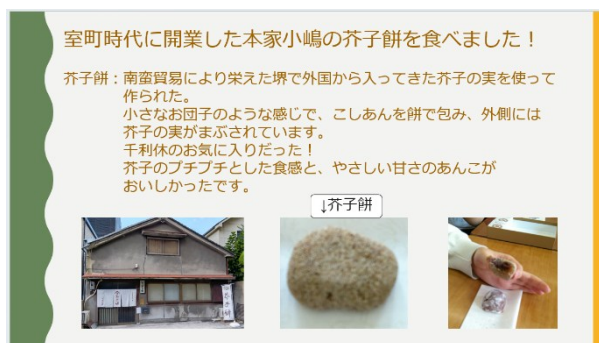
2学期に入り、大きな壁にぶつかることとなる。堺の観光協会サイトや堺市発行の『フェニックス堺』に記載されている「傘は堺の納屋助左衛門が伝えた」「明治時代に堺の河盛仁平という商人がレンタル雨傘を考え出した」という内容が史料で確認できず、誤りである可能性が出てきたのだ。このプロジェクトは「日本と世界がであうまち・堺」であるので、堺と傘のつながりがなくなれば、テーマの枠組みから大きく逸脱することになる。部員たちはめげそうになり、テーマを変えたいと筆者に申し出たが、最終的には観光協会サイトの記述に対して訂正文を提示する、という形で研究を進めていくこととなった。

発表当日、傘についての伝承を歴史学的に検証し、和傘と洋傘の比較だけでなく、日本と世界の比較や繋がりも探究することができたこと、訂正文の提示という形で文献に対して生じた疑問を探究した姿勢などが評価され、昨年度に続いて最優秀賞を受賞することができた。

また、特別賞を受賞した中学3年生についても触れておきたい。中学3年生のメンバーは、中学1年生の時からこの大会に参加している。過去2年間は受賞できず、3年目の参加をどうするか非常に悩んでいたが、「楽しく研究を進める」を今回の目標として「堺と和菓子」をテーマに研究を進めた。堺の老舗の和菓子屋さんを訪れ、和菓子を実食。さらに京都で和菓子作りを体験し、和菓子職人の方からお話を伺ったことも研究に生かすことができた。砂糖やお菓子の歴史を調査し、歴史を探究するだけではなく、未来の和菓子を提案した点が大きく評価され、初めての受賞となった。

今年度の活動を振り返ってみたとき、高校2年生も中学3年生も、メンバーが連続で出場しているで、作業の分担がスムーズにできており、研究の手際が良かったこと、さらに過去の経験を生かしてより広い視野で分析ができるようになっていたことが印象に残っている。これは、同じ研究発表会に同じメンバーで継続して出ているメリットといえる。また、「堺と世界と日本」というテーマで長年探究を続けているので、前年度の研究や過去の先輩たちの発表が活かされるパターンも多い。本校は中高一貫校でもあるので、中学生の発表で堺の歴史に関する大枠を学んだあと、高校生で深い探究をすることができ、それが最優秀賞につながった例もあった。同じ大会に参加し続ける最大のメリットといえるだろう。

部員にこの大会の感想を聞くと、「インプット」中心となる普通の授業と違い、「1つのテーマを深く調べて、自分たちなりの意見を作り上げていくことの面白さ」があげていた。時には楽しく、時には四苦八苦しながら、自分たちの探究を深めてそれを「アウトプット」することの楽しさに気づくと、気が付けば2年目、3年目の参加となっていることも多いようだ。授業ではなかなか実践が難しい探究を部活動で実践できているのではないかと部員を見ていて思う次第である。



3, コメントについて

1・2では筆者が顧問を務める歴研の活動について冗長に述べてきてしまった。ここでは、歴研での活動を踏まえた上で、パネルでどのようにコメントしたのか、という本題に入っていきたい。

本パネルでは、大きく3つの点に注目して聴講させていただいた。まず1つ目は評価の基準についてである。部活動での発表という観点だけではなく、「日本史探究」「世界史探究」「歴史総合」の「探究学習」での評価にも大きく参考になる点があると考えられる。2点目は部活動・授業の活動の一環として参加するか、個人で参加するかという点だ。教員が指導して深く研究を進めることができる部活動や授業と異なり、個人であればどのような形で参加しているのか、どのような発表であるのか、ということにも興味を抱いている。最後に、女子校で勤務していることもあり、「女子生徒への歴史への関心をどう高めていくか」という視点から、フォーラム参加の男女比や男女の研究姿勢の差、発表内容に差があるのかどうか、についても質問させていただいた。

パネルの報告を聴講させていただき、まず、フォーラムという「アウトプット」の場があること、参加することの大切さ・重要性を痛感した。授業や部活動でも、教員からの講義や博物館・史跡の見学といった「インプット」が中心となることが多い。しかし、フォーラムに参加することで、能動的に歴史を探究し、自身の考えを「アウトプット」することができる。さらに他校の生徒の発表を聞くことで、視野が広がり、大きな刺激を受けることもできるのである。クラス・学年・学校にとどまらず、外とのつながりを持つことは生徒の成長に大きく寄与することになると改めて感じた。

次に、注目していた評価の基準については、木下先生・地脇先生のお二人とも「調査・研究に高校生がどれだけ努力できているのか?という過程や発展性を重視している」とおっしゃっていたことが印象的だった。大学とは異なり、発展途上である高校生の新しい発想という点に重きが置かれているようだ。高校生が「論理的に物事をとらえることができているかどうか」という視点は非常に重要である。ただ歴史を暗記するだけではなく、歴史を論理的にとらえられるかどうか。部活動だけではなく、探究の授業でも実践できないか、今後の課題にしていきたい。

また、木下先生が「参考文献やタイトルで内容が見えてくる」とおっしゃっていたことも印象に残っている。フォーラムの分析によると、受賞している学校は指導する側(顧問や授業担当教員)がプロの研究者ないし大学・大学院などで歴史学を学んできた教員であることも多いようで、参考文献や史料分析の重要性を感じた。探究学習でも史料読解や分析は必須の要素となっており、教員の研鑽が求められるところである。

部活動や授業の一環で参加するか、個人で参加するか、について、地脇先生の「全国高等学校歴史学フォーラム」の分析によると、「個人の発表」でも部活や授業の一環で出していると思われるケースが散見されるとのことであった。授業を通じて、高校生が一人で研究し、その成果をフォーラムで発表するケースもあるのだろう。本校では歴研での活動でしか大会に参加したことがなく、「完全な個人」の歴史の研究はどのような形になるのか、非常に興味がある。

男女差については、私の個人的な興味関心にもかかわらず、両先生がそれぞれのフォーラムの分析をしてくださった。結果、受賞者や参加者に男女差はさほど見られず、「歴史学への興味関心」に男女差はないということがわかった。ただ、個人で発表するのは男子が多く、団体は女子が多いという傾向があるようだ。パネル発表後に歴研の指導や授業での指導を通じて、確かに女子生徒は「団体」で研究を進めることが得意、あるいは好む傾向がある(男女の行動に特性があるのか、もしくは女子生徒の方が個人で研究するガッツあふれる生徒が少ないのかもしれない)ことも感じた。

最初に選んだフォーラムや大会に出場し続けることのメリット・デメリットも痛感した。本校は「日本と世界がであうまち・堺」の研究発表会に参加し続けている。一方で今回のパネルで紹介していただいた「全国高等学校歴史学フォーラム」や「全国高校生歴史学フォーラム」のような魅力的な大会を知ると、どこに出場するのか？と贅沢な悩みを抱いてしまう。同じ大会に出続けることで「研究を継続する・深める」というメリットはある一方、参加校や場所が固定されてしまうというデメリットもある。また、最初にどのフォーラム・研究発表会に参加するのか、ということについては、そのときの顧問や大会を紹介する教員の意向・好みに左右されるため、3年間しかない高校生の研究時間を考えたときに教員の責任が大きいと感じる。研究発表会やフォーラムについて教員が興味関心を持っているかどうか、広い視野でもってそれらの情報を得ることができているかどうか、という点は、自分自身反省すべき点がある。連続でフォーラムに参加するメリットについては2, の歴研の活動、で述べた通りであり、本校はおそらく今後も堺の研究発表会に出ることになるだろう。しかし、デメリットも常に考える必要がある。

おわりに

今回の両先生のご報告で、2つの歴史学フォーラムの運営事情を垣間見ることができた。お忙しい中、フォーラム参加の男女差の分析などもお願いしてしまい、恐縮であったが、非常に参考になり、勉強になった。高校生が発表する場である研究発表会やフォーラムの実施は、貴重な「アウトプット」の場であり、外部とのつながりを持つという意味では高校生の大きな成長につながるありがたい機会である。一方で、パネルの質問タイムであがった「部活は今後縮小していく」というご意見は考えさせられるものがあつた。昨今の教育事情を鑑みたとき、部活動のみで歴史学を盛り上げていくことは限界があるのかもしれない。実際に、フォーラムや研究発表会でも、部活動での参加ではなく、探究授業の一環として参加するケースも増えてきたように感じる。しかし、歴研の顧問を務める中で、所属する専攻が異なる友人と1つのテーマについて切磋琢磨して探究を続ける部員を見ていると、部活動の良さも感じるころではある。また、定期試験や受験を念頭に置かなければならない授業内で、果たして部活動と同じだけの熱量で（指導する教員・探究する生徒とともに）この探究ができるのだろうか、と考えると、どうしても頭を抱えてしまう現状がある。部活動で得た指導法や技術を授業でも活用できないか、ということは常に考えているつもりではあるが、今まで以上に意識する必要があるのかもしれない。少ないコマ数と受験指導の狭間で、どのように授業内で探究を進め、歴研以外の生徒を「アウトプット」の場へとつなげていくのかについては、今後も自身の課題として考えていきたい。

コメンテーターとしては力不足であった感は否めないが、現場の声を少しでも届けることで、高校生と運営側の有機的なつながりに寄与することができれば幸いである。

参考資料 「歴史的な探究学習を広げるための事例集」執筆要項

2025年8月30日

高大連携歴史教育研究会特別部会

事例集 Ver.1 を発行いたしました。今後も、多くの事例を収録していきたいと考えています。ご執筆、ご紹介いただけるようでしたら、総合探究支援小委員（委員長：小川輝光 t-ogawa@tsuru.ac.jp）までご連絡ください。ご執筆の際は、下記の要領をご参考にお願いいたします。

1. 事例集の目的

総合探究を中心に、自主活動も視野に入れながら、歴史系探究学習のヒントになる視点や事例を紹介したいと思います。

2. 原稿文字数の様式

本文 1頁 40字×35行（1400字）×4～6頁程度＝5600字～8400字程度

本文とは別に図版・写真・表などを4頁超えない程度に入れていただいても構いません。

Wordにてご提出願います。

3. 構成

冒頭に「タイトル」と「お名前（ご所属）」をご記入ください。

「はじめに」「おわりに」を入れてください。中見出しとして「1.」など入れてください。

実践の「概要（対象、分野、内容）」と「分析（評価点と課題点）」などを盛り込んでください。

「情勢分析」や「発表会運営報告」などは、以上に準じて、書きやすい構成をお選びください。

4. 表記

文体は「である」調を基本にしてください。

写真や生徒の感想など公開が可能なものを選択ないし加工してください。

注は文末脚注で「1.」などご記入ください。

参考文献も文末に「参考文献」として一覧をご記入ください。

5. 締め切り

2025年12月末日（2026年前半に事例集 Ver.2 を発行予定です）